
赤眼の狼

如月 晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤眼の狼

【Nコード】

N6280X

【作者名】

如月 晃

【あらすじ】

ヘクセと呼称される吸血鬼。

その有り得ない存在を狩る為に結成された自衛隊少数精鋭の特殊部隊「HAWK」。

親がいなく、幼い時から自衛隊の訓練を受けた「赤眼の狼」と称される少年「直江幸成」と「HAWK」隊員はあるヘクセを追って「華景市」に潜入する。

幸成が潜入を命じられた場所は高校であった……

幸成を取り巻く隊員や高校生達による青春学園ダークファンタジー

序章：開幕

月夜の中の街。

街灯は無い。

その闇を照らすは月明かり。

雲一つ無い満月が照らす夜闇。

満月は青白く輝き、美しい。

昼とは違う澄んだ空気。

澄んだ空気は夜という物を形作る一つの事象であった。

その空気が不意に掻き乱されて風となる。

地面を叩く靴の濁いた音とそれに連なる呼吸の乱れた音が「静かな夜」という体系を崩していく。

その夜の中を転びそうになりながら脱兎の如く走っていく若い女性
がいた。

その後ろからは不規則で粘着室な吐息が聞こえてくる。

獲物を追い詰める猟犬のようにつかず離れずの距離で騁るように迫
るのは男だ。

若い女性の後ろには中年で肉付きのいい中年男性が迫って来ていた。
中年の男は太っている割には足が速く、女性に張り付く様は無気味
だ。

女性は助けを求めて悲鳴をあげるが、聞こえているのか聞こえてい
ないのか、誰も家の中から出て来ない。

日本人は事件に遭遇しないように極力厄介事から遠ざかるうとする。
他人の不幸よりも自らの身の安全だけを考えて……

月夜の光で影が伸び、既に女性の影は男に踏まれていた。

既に捕まったも同然の状態で、いつでも捕まえられるのだと物語っ
ている。

女性は月明かりの中を逃れるように大きな廃工場の中に飛び込んだ。
光よりも闇を……

闇を求めた女性は鉄の扉を慌てて開け、門錠かんばんぎを掛ける。

女性は広い空間の中、後退りをする。扉を凝視した。

数秒の沈黙の後に体をぶつける音が扉の向こうから聞こえてくる。

女性は屍餅を付くと、壁まで這う。

「誰か！誰か助けてえ！！」

その悲鳴は虚しく廃工場の広い空間に飪くだました。

元は何かの生産工場であった。た。今はそのような機械は無く、ひどく殺風景だ。

鉄の扉が軋む音と凄まじい轟音。

「もうすぐ僕の血肉になるんだよ？もつと喜んでよ、デュフフフ」

男の下劣な声が轟音に混じって聞こえてくる。

声音は下品で無気味、混じる息切れが澄んだ空気に絡み付く。

「誰かあ！！」

女性の悲鳴が響いた瞬間、扉が勢いよく開き、月明かりに照らされながら男が現れた。

男は口元を涎で濡らし、口元が異様に光っていた。

舌なめずりをする度に涎が口元を濡らして、月明かりで糸が引いているのが良く見える。

男は女性に歩み寄ると膝に手を当てて、先程擦りむいたであろう傷から流れ出た血を舐め取った。

「美味しい血だあ……デュフフフフフ」

男は下卑た笑いを浮かべて女性を抱き抱え、その鋭い歯を首筋に突き立てようと口を開いた……

「イヤアアアアッ！！誰かあ！助けてえ！！」

女性の絶叫が轟いたその時、男の腕から血が飛び散った。

男は思わず女性を取り落とすと、辺りを見渡し、怒鳴り散らす。

「誰だ！！何者だ！！」

「ヘクセ、ブラッド・ラスター。貴様を排除する」

廃工場の天窓から一人の少年が飛び降りてきた。

両手には先程、男の腕を撃ったであろう二丁拳銃が月明かりで光つ

ている。

右手にはスライド部分が黒い拳銃と左手にはスライド部分が白い拳銃が握られていた。

特異なのはその拳銃の銃口が二つ付いている事だ。

狩猟用の上下二連ショットガンの拳銃版のようなところか？

黒い軽装の防弾チョッキは非常に動き易そうだ。

右目には青く光るヘッドアップディスプレイ（HUD）が光っていた。

その格好は特殊部隊を彷彿とさせる。

しかし、闇夜で光るのは右目のHUDだけではなかった。

紅い左目。

月夜に照らされて顔は判然としないが、その光りを受ける左目の瞳は紅く光っている。

悪魔や化け物と形容するに相応しいその瞳は真っ直ぐと男を見つめていた。

「逃げて下さい」

少年は女性を僅かに一瞥しながら言い放ち、紅く光る瞳で扉に行くように促す。

女性は涙を流し、這いながら廃工場から逃げて行く。

男は女性を追い掛けようとしたがその間に少年が割り込み、銃を交差させつつ、引き金を引いた。

銃のスライド音だけが響き渡り、銃の発射と同時に発生する発砲炎「マズルフラッシュ」も、銃声も、弾丸が音速に達する時の音「ソニックブーム」も無い。

男の体から血が噴き出し、次々に放たれる弾丸が男を吹き飛ばした。少年は素早く銃の弾倉を交換する。

刹那、吹き飛ばされた男が人間では有り得ない跳躍力で飛び掛かってきた。

少年は素早い身のこなしでそれを避けたが男の目的は少年ではなく、女性だった。

逃げる女性に飛び掛かろうとしたその時、少年はワイヤーが巻き付けられた拳銃を構えて引き金を引く。

射出されたワイヤーの先端には銚のように尖ったフックがあり、ワイヤーはワイヤー同士、摩擦で擦れ合う音を鳴らし、男の足に絡まった。

「逃がすか!!」

少年はワイヤー付きの拳銃を引つ張ると男は女性に指一本届かず、後ろに引つ張られた。

凄まじい轟音とともに床が陥没し、コンクリートの破片が宙を舞う。少年はワイヤーを巻き取ると再び煙の中に銃口を向ける。

（こちらスカイアイ、被害者の保護を完了。心置きなくやっちゃっていいぜえ、狼さん!）

「ロメオ、了解した」

少年はヘッドセットから流れた無線に吹き込む。

刹那、男は土煙から飛び出し、少年に飛び掛かってきた。

咄嗟の事に反応出来なかった少年は男のタックルをまともに喰らい、宙を舞う。

同時に男は壁を蹴り、宙を舞っている少年まで跳び上がり、腹部に一撃を叩き込んだ。

凄まじい速度で落ちていった少年の体は地面に落下し、男同様に地面を陥没させた。

男は地面に降り立つと身動き一つしない少年に歩み寄る。

舌なめずりしながら歩み寄る様は先程の女性に対してのような下劣さは無いものの、やはり無気味だ。

男が少年を掴みあげようとしたその時、少年は目を開けて笑みを見せながら二丁拳銃を構えた。

「Spray with machine gun fire!!
（機銃掃射だぜ!!）」

二丁拳銃の上下二連装の銃口から同時に四発の弾丸が、フルオート射撃で次々と男に吐き出されていく。

近距離で使われて拳銃は初めて真価を発揮する。

それを理解しているからこそその不意打ちは非常に効果的だ。

拳銃弾で弾き飛ばされた男は穴だらけながらも生きていた。

拳銃弾を受けて生きている例は珍しく無いが、その多量の穴で生きていられるのは有り得ない。

少年は体を腹筋の反動で跳ね上げ、起き上がると同時に男も起き上がる。

拳銃で開けられた穴は塞がり、男は再び舌なめずりする。

「いい加減にくたばれよ、吸血鬼」

少年は舌打ちをしつつ、二丁拳銃の弾倉を交換した後、ホルスターに二丁拳銃を仕舞い、腰に差していた刃渡り30cmのナイフを鞘から引き抜いた。

少年はナイフを構えると左手で柄を逆手に持ち、柄の底に右手を沿え、切っ先を男に向ける。

月が雲の影に隠れ、周囲を消し去った。

紅い瞳がHUDの明かりに照らされて明るく光る。

数秒して雲の中から月が現れて周囲を照らし出した。

同時に二人は駆け出し、重く鈍い音が響き渡る。

月の明かりに照らされた二人の影は重なり合いながら静止していた。男の胸にはナイフの切っ先が刺さり、鮮やかな血を滴らせている。

二人の動きは止まったように動かない。

不意にナイフから青白い電光が男の体に流れ、肉が焦げた匂いが漂う。

数秒の後に電光は消えて、少年はナイフを引き抜き、男を蹴り倒した。

男は痙攣しながら地面に倒れ、地面を血で濡らす。

紅い絨毯は鉄臭い匂いを発しながら瞬く間に広がり、水溜まりを作った。

「こちらロメオ。任務完了だ。抹殺対象のヘクセは殺害した」

(了解。あゝあ、眠う……とっとと帰って来いよ?)

「分かってるよ」

少年は先程とは打って変わって柔らかな笑みを漏らすとHUDとヘッドセットが一体になった装置に手を当てつつ入口に歩いて行く。その時、男が拳を振り上げ少年に殴り掛かろうとする……が、それより早く少年は二丁拳銃を構えながら振り返った。

「Jack pot!! (大当り!!)」

吐き出された四発の弾丸は男の眉間を撃ち貫き、男を吹き飛ばす。同時に男の体は溶けていき、コンクリートに溶け込んでいった……

1 - 1 : 潜入調査（前書き）

第1話

1 - 1 : 潜入調査

吸血鬼……

誰もが一度は聞いた事はある単語だろう。

生命の根源と言われている血を吸う存在だ。

血を吸う存在などと笑う人もいるだろうが、実際、生物学的に利に適っている。

血液は高栄養の液体であり、ノミやシラミ、蚊等が良い例だろう。

その血を吸う人間は「ヘクセ」と呼称されている。

勿論、存在は極秘で知っているのは政府高官と一部の優秀な自衛官だけだ。

大々的に公表すればという意見も有るだろうがヘクセの特徴がそれを困難にしている。

一つ、ヘクセは人間と同じ姿で、目視で見分けが付かない。

結果、人々は疑心暗鬼に陥り、暴動に陥る可能性が出て来る。

一つ、ヘクセは特殊な能力や並外れた運動能力を持っている。

ヘクセはその通り、特殊能力、つまりは超自然的な力を操る事が出来たり、人間離れた身体能力を持っている。

前述の理由も加えると最悪の事態に陥ってしまう。

また、血を吸うという事はつまり、人間を必然的に襲うという事だ。さらに民間に伝えられないという事実を考慮した場合、被害者は何が何だか分からない内に捕食・吸血されるという事になる。

被害者は行方不明にするにしても、あまりに多過ぎる被害者に政府は特殊部隊を設立した。

「Hexe Annihilate Weapons and Killers」、通称「HAWK」は少数精鋭の特殊部隊だ。

階級は問わず、若く優秀な自衛官達を集めて設立されたHAWKは言ってしまうと不正規部隊だ。

自衛隊の英才教育を施した親がいない子供や天才的な自衛官だけを

集めたこの部隊には徽章を六つも持った化け物じみた自衛官さえいる始末。

どこの厨二病設定かと思うがそんな人物がいるのなら仕方ない。

そしてHAWKは、いや全世界の警察官や特殊部隊はある男を追っていた。

カズイクル・ベイ・ツエペシユ。

彼は謎が多いが、大胆でヘクセ史上主義を掲げる秘密結社「シュトレイゴイカバル」を率いている。

シュトレイゴイカバルは言ってしまうえばテロ組織だ。

人間は勿論、同胞のヘクセですら殺す集団であり、世界から極秘に狙われている。

様々な名前で呼ばれ、報道されている殆どのテロ組織がシュトレイゴイカバルなのだ。

そんな組織がある市に潜伏したとの情報を手に入れたHAWKは政府の特命を受けて、その市に潜入調査を開始した……

華景市。

80000人にも満たない人口の小さな市で430平方キロの面積のこの市に到着した一台の白いワゴン車。

「はい、御一行様、到着でございます」

口周りに無精髭を蓄え、体格はがっちりし、糸目の男性は柄にも無い声で運転席から出て来る。

181cmの巨体に厳つい印象に、始めてみた人は熊を連想するだろうその人物はノリノリで小さな荘、つまり、木造のアパートをツアーガイドのように紹介していた。

今年34歳の直江三村三等陸佐、それにしてもこの男、ノリノリで

ある。

「おっちゃん、何かキモいわ」

金髪のセミロングを後ろで結び、青い瞳の整った顔立ちの少年は頭
の後ろで両手を組みながら小声で呟いた。

その声に口を尖らせた三村は先程の少年に切り返す。

「うっせ！ほっとけ！」

三村は17歳の日系ハーフの少年、ロイ・カブラギ陸士長を睨む。

「あらあらあゝ、相変わらずですねえ、お二人さんはあゝ」

ロングヘアの流れる黒髪に垂れ目で大人びた顔立ちの女性はDカッ
プの胸の前で腕を組む。

微笑みを湛えるその20歳の女性、比叡彩花^{ひえい あやか}三等陸曹はいつもの光
景を温かく見守る。

「はいはい、そこまでですよ」

黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちのボーイッシュな少女は手を
叩きながら二人を諷める。

「全く、相変わらずなんだから！」

19歳の少女、氷川優一^{ひかわ ゆういち}等陸士は腰に手を当てながら嘆息を漏らす。

「と、そっぴや幸成は？」

ロイは周囲を見渡しながら呟くと、助手席で爆睡している少年を見
付け微かに笑う。

「寝てるよ……」

ロイは頭をポリポリと掻きながら助手席に向かって歩き、爆睡して
いる少年の頭に一撃を叩き込んだ。

「っいつた！」

少年は頭を押さえ、眠い目を開けながら、半ば憎らしそうにロイを
見上げる。

その見上げた切れ長の目の片方、左の瞳は紅く染まっていた。

紺色のセミショートに整った顔立ちの少年は大きな欠伸を漏らすと
助手席から降りた。

17歳の直江幸成^{なおえ ゆきなり}は六部屋ある荘を見て再び大きな欠伸を漏らす。

「着いたのか？」

「ああ。おつちゃん、説明をよろしく」

「おう！」

三村は咳ばらいをするとワゴン車の荷台からノートパソコンを取り出し、ディスプレイを指差す。

そこに映し出されていたのは華景市の航空写真だ。

「今回華景市に潜入したのは他でも無い。シュトレイゴイカバールの情報を掴んだ。自分達はそれを殲滅する。ここまではいつも通りだな？」

三村の声に全員が頷くと、画面が変わる。

「今回、シュトレイゴイカバールがある財閥と接触した形跡が見付かった」

「財閥ですかあ〜」

彩花は間延びした声で問い掛ける。

彩花が喋ると妙に気が抜けてしまうのはその口調が容姿か、判然としないがどちらにせよ和んでしまう。

「神宮寺財閥。華景市を拠点とする財閥で市の資金源とさえ言える財閥だ。生命工学に突出した財閥だけに、シュトレイゴイカバールがその財閥に接近したのは何故か調べる必要がある。自分達はそれを調べながら、ヘクセを狩る」

「潜入調査ですか？」

「簡単に言えばそういう事だ」

優の声に答えた三村はエンターキーを押すと画面が変わる。

映し出されたのはストレートヘアでセミロングのボブカット、可愛い顔立ちに赤縁の眼鏡の少女の写真が映し出された。

「神宮寺鳳寿じんぐうじほうじゆう、神宮寺財閥の御令嬢だ。現在、華景高校で一年生をやっている」

「成る程……ん？おつちゃん、さつき潜入とか言っただな？」

幸成は首を傾げながら苦笑いを浮かべると、三村はニヤニヤと笑って幸成の肩を数回叩いた。

「察しがいいじゃないか？流石、HAWKでエージェントを担当しているだけあるな。お前には華景高校に潜入してもらおう」

HAWKの隊員は五人。

その役職は五つあり、それぞれエージェント、オペレーター、メディック、メカニック、トランスポーターとなっている。

それぞれその名前の通りの仕事である為、察して頂くといい形で……
幸成はエージェント、ロイはオペレーター、彩花はメディック、優がメカニック、三村がトランスポーターを担当し、任務を行っている。

ここで話を戻そう。

「おつちゃん、それはおかしい！いや、確かに俺はエージェント担当だけど……俺、大学の過程修了してるし！」

「つべこべ言わない！お前は本来だったら高校生だ。学校を嫌がるとは引きこもりの前兆か？」

「いやいやいや！」

「はいはいい。まあ、青春を楽しめるのですからあいいじゃないですかあ？ウチはそんな余裕は無かったですよあ？」

彩花は幸成同様、大学の過程を修了し、医師免許を持っているが、高校での青春時代を送れなかった。

そんな人の言葉を無下に出来るはずもなかった。

「まあ、彩花さんがそういうなら……」

幸成は嘆息を漏らしながら呟くとロイが「羨ましいね」とほくそ笑む。

人の不幸でメシウマ、つまり「他人の不幸は蜜の味」という意味の笑いではないが、このロイの笑い顔、妙に腹立つ。

そんなロイに三村はこれこそメシウマという顔で言い放った。

「ロイ、お前もだ」

「俺もかよ！」

「当然だろう？エージェントの補佐をするのがオペレーターの役目だ。明日からは新学期。そこにお前達が転校というシナリオで二年

生に入ってもらおう」

「ボクも一歳若ければ入れたのに」

優は頬を膨らませながらそっぽを向く。

何か、不安になってきたな、ホント……

幸成は空を見上げると苦笑いを浮かべたのだった……

登場人物：HAWK（前書き）

登場人物：HAWK

登場人物：HAWK

直江 幸成 (17)

階級：陸士長

コードネーム

「ロメオ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では現地に赴く「エージェント」を担当している。大学の教育過程を修了している。紺色のショートヘアで切れ長、左目が赤い瞳のオツドアイ、身長は172cm、整った顔立ち。性格は平時は真面目で礼儀正しい好青年、有事は仇成す者は皆殺しにする冷徹な性格。ヘクセ秘密結社「シュトレイゴイカバール」を追って華景高校に潜入調査をする事となる。

ロイ・カブラギ (17)

階級：陸士長

コードネーム

「スカイアイ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントを補佐する「オペレーター」。金髪

のセミロングを後ろで結んでいる。身長は174cm、青い瞳に整った顔立ちの日系ハーフ。女垂らしな性格で女性を見たら声をかけずにはいられないが、作戦時には真面目に幸成をサポートし、監視カメラをハッキングするなどしてサポートする。共に華景高校に潜入する。

比叡 彩花 (20)

階級：三等陸曹

コードネーム
「アンビュランス」

一人称「ウチ」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では治療を担当する「メディック」。垂れ目で大人びた顔立ち。身長は165cm。Dカップ。おっとりとした口調で喋る。18歳で大学の卒業過程を終了しており、薬品の知識は医者と同等かそれ以上。

氷川 優 (19)

階級：一等陸士

コードネーム
「アーキテクト」

一人称「ボク」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントの武器を作る「メカニック」を担当している。黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちの為、美少年に間違われるがボーイッシュな少女。Aカップ。身長は168cm。可愛い物と銃が大好きと変わった趣味を持つ。意中の人には尽くす性格。家庭的で家事が得意。

直江 三村 (34)

階級：三等陸佐

コードネーム
「フリーユージェル」

一人称「自分」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」においてエージェントを輸送する「トランスポーター」を担当している。「HAWK」の中で最年長。口周りに無精髭を蓄えていて、体格はガツチリしており、目が細い。身長は181cm。面倒見がいい性格でノリがいい。部隊の仲間からは「おっちゃん」や「直江さん」と呼ばれている。

1 - 2 : 登校

晴れ渡る青空。

雲の無い青空の薄い青は人の心を落ち着かせる。

その薄い青に輝く太陽は街を明るく照らしていた。

小さなこの市は中心街も人通りが少なく、車の通りも少ない。

田舎とも言えるこの市の中心街に幸成とロイが潜入を命じられた「華景高校」がある。

華景高校は生徒数が450人程度の学校だ。

華景高校から幸成達が暮らすアパート「雫荘」は徒歩20分。

軽い運動には調度いい距離だ。

幸成は紺色のブレザーにネクタイ、淡い藍の鼠色がかつた色「湊鼠」のズボンに身を包み、カバンを肩に担ぎながら空を見上げた。

「晴れてるな……」

思わず呟いた幸成は左目に触れた。

流星に紅い瞳は隠さなければと、彩花が気を利かせて買ってきたのが黒のカラーコンタクトだ。

実際、カラーコンタクトで瞳は隠れたが、カラーコンタクトは目にあまり良くないと聞く。

多少目に違和感があり、早く馴れなければと溜息を漏らす。

その時、幸成の横でロイの声が聞こえ、幸成は溜息を漏らして、ロイを見遣った。

単純に言おう。

ロイはナンパをしていたのだ。

ロイがナンパしていたのは墨を流したような美しい黒髪を肩まで伸ばし、左右前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている少女だ。身長は162cm、二重瞼で目鼻が整い、唇も潤い、綺麗なピンク色をしている。

HAWKの巨乳担当の彩花よりも大振りの胸が思わず目に入った幸

成は反射的に目を逸らしつつ、道の反対側にいるロイに歩み寄った。
「君って華景高校の生徒？何年生？」

「あの……えっと……」
返答に困っている、白く典型的なセーラー服を着た少女は怯えたように周囲を見渡している。

田舎だからナンパの経験が無いようだが、このプロポーションと容姿なら間違いなく東京等の都会でナンパかモデルスカウトに捕まりそうであった。

ロイが返答に困っている少女に、答えを待たずに次の質問をしようと口を開いたその時、幸成の拳がロイの頭に直撃する。

頭を押さえたロイが口を開くより早く、幸成は「すみません」と少女に一礼し、ロイの襟を掴んで足早に学校に向かって行った。

「何だったのかしら？」

少女はキョトンとしながら、ロイを引きずって行く幸成を見送った。

「サヤ、おはよう」

サヤと呼ばれた少女は振り返ると、駆け寄ってくる小柄な少女に挨拶を返し、学校に歩いて行った……

先程の少女から離れた事を確認した幸成はロイの襟から手を離し、溜息混じりに呟いた。

「お前は何なんだ？」

「何なんだとは、何だ！」

幸成に毅然とした態度で返したロイはやたらと堂々としている。

本当に何なんだ、コイツは？

「仮にも潜入だ！！朝っぱらから堂々とナンパする奴が何処にいる！？」

「ハツハツハー！ここに居ますぜ」

ロイは悪びれずに自らを親指で差す。

……ダメだ、コイツ……

幸成は紺色の髪を掻き上げると面倒臭そうに、苛々しながら多少声を荒げ、ロイに言う。

「おっちゃんに目立つなつて言われてるんだから少しは自重しろ！

！ナンパは悪い事とは言わない……いや、悪い事だが……登校初日でアホな事をやらかすな、アホ！」

「……幸成、声大きい」

ロイの言葉にハツとした幸成は周囲を見渡す。

学生や通勤者の視線が幸成に集まり、周りの視線を独り占めとはまさにこの事だった。

幸成は声のボリュームを落とし、続ける。

「とにかく、だ。目立つな！」

「はいはい」

ナンパしてた時より目立つてたんだが、とツツコミたい衝動を喉の奥で飲み下したロイは頭の後ろで手を組んだ。

なんだかんだ、気が付いたら既に学校の前、二人は校門の中に入った。

華景高校は木造で、四階建ての学校だ。

木造と言っても、昭和をモデルにしたドラマで見るような風情がある学校ではなく、真新しい学校だ。

元々は古い学校だったが、神宮寺財閥が資金を出して、今の学校のような木の学校に新しく建て替えたという訳だ。

木の温かい雰囲気醸し出す華景高校に入ると、木の心地の良い香りが二人を包み込む。

杉の柔らかく、温かい香りを二人は肺一杯吸い込むと、幸成は昇降口前の校内の案内地図を見る。

昇降口から右に曲がれば職員室、左は教室棟だ。

取り敢えず転校初日の挨拶にと、幸成とロイは上履きに履き換えて、

職員室に向かう。

「しかし、その監視対象者が一年生なら、一年生に編入させればいいだろうに……」

手を頭の後ろで組んだロイが呟くと、幸成がロイを一瞥して答える。「いくら潜入調査って言っても、年齢的な外見はごまかせない。しかも、学費は払わなきゃいけないだろう？学費が二人合わせて二年分しか出なかったそうだ……」

流石、貧乏部隊と二人は同時に溜息を付いた。

HAWKは民間に極秘で吸血鬼と戦っている少数精鋭の部隊、と聞けば最強と誉れ高い特殊部隊の「SAS」や映画等でも有名な「デルタフォース」といった特殊部隊を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、HAWKは吸血鬼^{ヘクセ}という非日常を相手に、しかも極秘で戦うという理由で防衛費は少ししかもらえていない。

何故なら、政府高官や一部の自衛官しか知らないヘクセという存在に防衛費を多く出したら、それこそ金の流れを辿って最終的にHAWKにたどり着いてしまう。

貧乏とは言っても、最低限の弾薬の補給や武器の支給も行われているが、それもやはり最低限。

支給される弾薬は「9mmパラベラム弾」と言われる威力が低い拳銃に使用する弾丸と、武器は米軍が使用する「M9」ことベレッタ社の拳銃「M92FS」のエリートモデル「M92FS-エリートIA」が数丁。

極秘部隊なら映画で暗殺に用いられる「サプレッサー」という弾丸の発砲音を抑制する装備も使うと想像するだろうが、実際サプレッサーは消耗品であり、用いる事が出来ない。

その為、わざわざ部隊に武器を改造する整備士^{メカニック}という職業が設けられているのだ。

そして今回の潜入の拠点も木造六部屋の小さなアパートという訳だ。唯一、ヘクセは創作上の吸血鬼とは違い、心臓に杭を打ち込む事をして、銀の弾丸でなければ倒せないという訳ではない事が救いだ

ろう。

それでも大量の弾丸が必要だが……

「貧乏って辛いな……」

二人は同時に呟くと、校長室の扉を開ける。

二人が挨拶をするより早く、学校長「佐藤正臣」さとう まさおみは二人に笑顔を見せた。

「君達か、転校生は？」

「直江幸成です」

「ロイ・カブラギです」

「二人ともそう硬くならず、気楽に構えて下さい。そこに掛けて下さい」

「失礼します」

二人は同時に答えると、黒いソファに腰掛け、佐藤も腰掛ける。

「君達には二年生のBクラスに入ってもらおう。この学校の事で分からない事があつたら、Bクラスの学級委員長に頼むといい」

「学級委員長？」

幸成が小さく呟くと、扉が開く音が聞こえ、優しい声で入室の挨拶が聞こえてきた。

佐藤はゆつくりと立ち上がると声の主を見ながら「彼女が学級委員長みかみ さやなの三神沙耶那さんです」

二人がソファから立ち上がり、後ろの校長室の扉を見ると同時に素っ頓狂な声を漏らした。

狐につままれたような、所謂ポカンとした顔で少女を見る。

少女は、朝にロイがナンパしていた少女だ。

「貴方達は朝の……」

沙耶那は口を掌で隠し、驚いている。

第一印象は最悪だろう……

幸成は恨めしそうにロイを見るが、ロイは運命の出会いといった表情で喜んでいる。

誰のせいで胃が痛んでいると思っただ、このスタイリッシュな能天

気野郎？

幸成は軽く胃を押さえつつ、少女に会釈すると少女……沙耶那は満面の笑みで返した。

「直江さん、カブラギさん、校長先生からお話は伺っております。

ようこそ、華景高校へ」

沙耶那は天使のような温かい笑みで二人を迎え入れたのだった……

1 - 3 : 初日

職員室を出て、昇降口を通った三人は奇妙な雰囲気だった。

初対面という事も有るだろうが、それよりも最大の原因は朝のナンパだろう。

いくら三神沙耶那が学級委員長で、寛大な人物でも流石にナンパは

……

幸成は深い嘆息を漏らすと、「三神さん」と沙耶那の名前を呼び、歩みを止めた。

「朝は本当にすいませんでした」

取り敢えず今は謝るしかない。

失礼したのはこつちなだから……

「この馬鹿が失礼な事を……」

「馬鹿野郎！可愛い女の子を見たら声をかける。基本だろう」

何の基本だよ？

幸成は素早くロイの後頭部を押して、無理矢理謝らせた。

まるで犯罪を犯しても、悪びれない息子を謝らせる親の気分だ。

沙耶那は数回目をしばたかせると笑みを見せた。

「朝の事は気にしないで下さい。ビックリはしましたけど、気にはしてませんから」

鈴の音のように済んだ笑い声を試みせる。

つくづく良い人で良かったと思つた幸成は顔を上げて笑みを返した。

「教育棟の三階が二年生の教室です」

沙耶那は階段を上がりながら続けた。

「二階は三年生、四階は一年生です」

「一階は何の教室ですか？」

「一階は補習の教室ですよ。テストで赤点を取ったらその教室で放課後、一ヶ月の間勉強をして、その後追テストを行って八割の点数を取ったら晴れて自由の身となります。とは言っても内容は難しく

なりますので、中々自由には成れないですが……お二人共、気を付けて下さいね？」

「だってさ、ロイ」

幸成はロイを肘で小突くと「俺!？」と素っ頓狂な声を漏らす。大学を修了している幸成はともかく、高校を修了していないロイには少なからず関係のある話だろう。

その時、二人の様子を見ていた沙耶那は口に手を当てて笑った。

「お二人は仲が良いんですね？」

「まあ、仕事の都合ですから……」

「仕事？」

幸成の「仕事」という単語に沙耶那は小首を傾げた。

やってしまったという後悔よりも先にごまかす言葉が幸成の口から飛び出す。

「はい。身内の仕事の都合です。俺とロイの身内の人、同じ仕事場で働いているので転勤したら毎回一緒に学校の学校に転校になるんですよ」
少なくとも嘘は言っていない。

HAWKのメンバーは身内同然だし、ヘクセを狩るという「仕事」には変わり無いからだ。

言葉とは少し変えれば真実にも偽りにも変わり、解釈の仕方でのようにも捉えられる。

結局、言葉とはそういう物だ。

幼い時から話術を仕込まれた幸成には造作も無い。

「だからそんなに仲が良いんですね」

沙耶那はニコリと微笑み、階段を上り切る。

しかし、よく笑う人だと思い、幸成は沙耶那の後ろ姿を一瞥した。揺れる黒髪が窓から漏れる光を浴びて光り、その美しい色を際立たせる。

モデルのようなプロポーションに見とれているうちに、教室の前にとどり着いた。

一クラス約30人の男女共学の教室からは転校生が来るという事に

浮かれている為か、妙に騒がしい。

たいていの場合、男子は女子が、女子は男子が来たらテンションが上がるものだと聞く。

悪いな、二人とも男で……

幸成が自嘲的な笑みを見せると同時に沙耶那が教室の扉を開け、中に招き入れる。

二人は一礼しながら入室すると女子の黄色い声が響き渡り、幸成は思わず気圧された。

ロイはというと何故か英雄気取り(?)で手を振っている。

能天気でいいよな……

いや、俺が気負い過ぎ?

幸成は苦笑いを浮かべるとクラス全員を見渡す。

「自己紹介をお願いします」

沙耶那が二人を見ると、ロイから口を開いた。

「ロイ・カブラギ。よろしく頼むわ。ちなみに女性なら可愛ければ誰でもOKだ」

相変わらずだ……

とは言っても、こんな馬鹿が国の密命を受けた者だとは誰も思わないだろう。

「直江幸成です。早く馴染めるように努力します。よろしくお願いします」

同時に女子の黄色い声が教室中を揺るがし、幸成は苦笑した。

何なんだ、この空気は……!?

正午になり、栗荘で待機していた優が昼食のチャーハンを作っていると、挨拶に廻っていた三村と彩花が帰ってきた。

二人は同時に居間に大の字に倒れる。

粟荘の一部屋の広さは居間が8畳、お風呂、トイレ付きでキッチン完備、と聞けば良いだろうがやはり貧乏部隊。

かなり古い建物であり、ゴキブリは勿論、蛇や蜥蜴も入って来る始末。

しかも、元は幽霊屋敷と言われていた為、優とロイから猛反対された。

ちなみに彩花は大賛成であった……

結局、三村のゴリ押しと予算の都合でこの粟荘となったのだ。

「お疲れ様」

優はフライパンのチャーハンを三等分に皿に盛り、両手で器用に運び、中央のちゃぶ台に置いた。

「どうだった？」

優は蓮華をそれぞれのチャーハンに差しながら問い掛ける。

挨拶、というのは実際の所は建前であり、この街の噂を収集する為だ。

噂には都市伝説も含まれる。

つまりは口裂け女や人面犬等の話だ。

火の無い所からは煙りがたたないとは言ったものだが、実際はその通りである。

口裂け女も、紐解けば様々な事件が、まるで伝言ゲームのように口頭で語られるうちに変化していったのがよく分かる。

ましてやヘクセ自体が殆ど都市伝説のような物であり、噂として語られるならまさしく、口裂け女のように語られているだろう。

そう踏んだ三村は情報、つまり噂を収集していたのだ。

「収穫有り、だ」

三村はチャーハンの蓮華を掴むと一口食べてから続けた。

「最近、この街で変死体が多発しているらしい。血を吸われた死体が、な」

「ヘクセですねえ」

彩花はのほほんと応えと、三村はチャーハンを掻き込む。

作った本人としてはすっかり味わって欲しいと思うだろうが、任務の時はさして気にしていなかった。

「学生達の間には流布していた『血吸い人』の話に酷似している」

「血吸い人？」

「夜、帰りを急いでいた女性が血吸い人に襲われて、血を吸われるという話だ。現代版吸血鬼伝説みたいな都市伝説だがそれが現代に蘇ったと住民達は噂している」

「噂って凄いですねえ」

彩花はいつの間にかチャーハンを食べ終え、そしていつ煎れたか分からない紅茶を啜っている。

彩花って凄いと優は苦笑いを浮かべた。

「今回、シュトレイゴイカバールを相手にするという事情から、政府から偵察衛星を買った。アメリカ軍のお下がりだから、旧式だが

……」

やっぱり貧乏部隊……

が、偵察衛星を買えただけ良しとしよう。

三村はチャーハンを食べ終えた皿に蓮華を置き、白いワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえた。

そして、煙草に火を点して、肺に紫煙を吸い込むと一気に吐き出し、小声で呟く。

「幸成、楽しくやってるかな？」

「心配なんですかあ？」

彩花は新しい紅茶にミルクを入れて、スプーンで掻き混ぜると口に運ぶ。

飲む前に香りを味わうその姿は優雅で上品なお嬢様そのものだ。

「まあ……あまり人と触れ合う事が無かったからな、幸成は……」

「レンジャー 徽章乙、空挺徽章、格闘徽章、体力徽章、射撃徽章を保有でしたっけ、彼？」

「特殊作戦徽章もだ」

徽章きしょうとは優秀な自衛官に送られる、言わば勲章と思つて貰えればいい。

それは様々な物があるが、陸上自衛隊は15種類有り、そのうちの6種類を幸成が有している。

「幸成は小さな時から訓練を受けていたから、無理は無い。化け物じみた体力と回復力、そして瞬発力にあの瞳……自分だつて、最初はヘクセを疑つたさ」

三村は眉間に皺を寄せながら煙草を吐き出す。

過去を思い出しているようなその顔には深い皺が刻まれていた。

「ヘクセのフェロモン反応は陰性の為、人間という結果が出た。しかし細胞活性速度は通常の二倍。まるでヘクセと戦う事を運命付けられ、この世に生を受けたとしか思えないんだよ、幸成は……」

「だから捨てられていたのかもしれないねえ」

彩花は小さく呟くと、紅茶のカップを置いて溜息をついた。

「だが、自分が幸成を拾つた以上は最後まで育てるのは当然。そりゃ育ての親なら心配するだろう？」

三村は灰皿に煙草の灰を落とすと、優はチャーハンの器を片付け始めた。

「とにかく、大丈夫ですよ。イジメとかも対処出来そうですから」

「いや、自分が心配しているのはそこじゃない……幸成に彼女が出来るかだ」

「そこですか！？いや、初日に出来たら凄いですけど……出来ないでほしい……」優は聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、

彩花は口に手を当て、声音に笑いを含んで優に呟いた。

「頑張つて下さいねえ」

優は動きを止めると、顔を引き攣らせた。

優の呟きが聞こえなかった三村はというと理解出来ずに、二人を交互に見遣る。

と、不意に三村は思い出したように口を開く。

「そっぴや、偵察衛星とパソコンとのリンクつてどうやるんだ？」

「そういうのはロイ君の担当ですからあ、ウチ達にはあ分かりませ
んよお〜?」

「仕方ない。あいつらが帰ってくるまで自由時間だ。偵察衛星が使
えなきゃ、ヘクセを探すにも探せないからな」

三村はそう言つと、灰皿に煙草を押し付けた……

1 - 4 : 昼休み

一方、三村達が昼食を取っていた頃、幸成とロイも昼休みとなっていた。

高校の休み時間は基本的に10分だが、昼休みだけは昼食を食べる時間も含めて30分の休みだ。

それぞれが思い思いの時間を過ごす昼休みは生徒達には憩いの時間に等しい。

その中で幸成とロイはそれぞれ購買で買った焼きそばパンとタマゴサラダのサンドイッチを手にながら屋上に出た。

屋上は中央に数個ベンチがある簡素な所で落下防止用の金網が張つてある程度だ。

二人はベンチに座るとパンの袋を開ける。

食欲をそそる香りが二人の胃袋の虫を唸らせた。

「腹減つてたんだな」

幸成は小さく呟くと、焼きそばパンを咀嚼する。

「お前は良いよな、ホント」

「ロイ、どうした？」

「お前、女にチャホヤされ過ぎだぜ？」

「そうなのか？」

幸成は素っ頓狂な声を漏らすと再び、パンを咀嚼した。

ぼくねんじん 朴念仁、とうへんぼく 唐変木を体現する幸成はと言うと、女子に黄色い声をあげ

られ、女子が周りを取り囲み、昼食に誘われるという男子なら憧れるであろうハーレム状態となっていた。

そしてそれを全て蹴るといふ愚行を犯した幸成は今に至る。

ロイはというと逆に女子からではなく男子に受けていた。

男子はお調子者や目立つ者を囁し立てる傾向が有るが、ロイはそれに当て嵌まり、一躍男子の人気者となったのだ。

最も彼にとっては不本意であり、幸成のような行為は恨み節の対象

になる。

「どうして幸成だけモテるんだ!？」

ロイの魂の叫びに幸成は冷静に突っ込んだ。

「その性分だろう?」

「マジで返されると返答に困るんだが……」

「顔は良いのだから、考えられるのはそれだけだろうからな」

「つまり、黙ってればイケメンって事か?」

「そういう事になるだろうな」

幸成はそう答えると紙パックの小さな牛乳にストローを差しした。

「モテてる奴に本気で返された時の破壊力半端ねえ!」

しかし、今日はよく喋る、と幸成は横で騒ぐロイを一瞥し、牛乳を吸う。

と、その時、屋上のドアが開き、見知った顔が現れた。

「あれ?先客がいた」

沙耶那は二人を見付けると微かに微笑む。

手には女の子らしい可愛い風呂敷に包まれた弁当箱がある。

そしてその沙耶那の後ろには別にもう一人、小柄な少女がいた。

薄い茶髪に右側のサイドテール、前髪は自然な感じで童顔な少女は、外見だけでは高校生とは分ならず、小学生に見紛う程に小柄だ。

「サヤ、この人達が転校生?」

「そうだよ、ナツ」

沙耶那はナツと呼んだ少女を一瞥すると二人に紹介する。

「こちらは私の友達の藤宮菜月ちゃん。Aクラスだからあまり交流ないだろうけど、仲良くしてあげてね」

「サヤ、子供扱いしないでよ!取り敢えずよろしくね」

菜月が笑い、その口元から八重歯が零れた。

その八重歯が彼女の幼さを強調している。

流石にこの幼女と言える少女にロイは手を出さないだろうと幸成はロイを一瞥した。

が、その考えは甘かったと打ちのめされる。

「俺はロイ・カブラギ。可愛い女の子なら誰でもいい！ストライクゾーンしかない男だ！」

「……つまりは変態さんって事だよな？」

菜月の一言はロイの熱い魂を木っ端みじんに粉碎するには十分であった。

アイデンティティをクラッシュされたロイは呆然と、真っ白に燃え尽きる。

そう、真っ白に……

「いつもここで昼食を食べてるんですか？」

「うん。そうだよ」

菜月は笑みを浮かべて頷くと向かいのベンチに腰を下ろした。

ベンチにギリギリ足が届く程度の身長の子は足をパタパタと動かす様子はどう頑張っても子供にしか見えない。

「女子は皆騒いでたよ？王子様が現れたってさ」

菜月は風呂敷を開けて弁当箱の蓋を開ける。

「王子様って俺か？」

ロイの一言に菜月は笑みを掻き消し、不穏な笑みで切り返す。

「変態さんな訳無いじゃん、馬鹿なの？」

この子、おつかねえ……

幸成が苦笑いを浮かべると、沙耶那は弁当を口に運ぶ。

菜月はと言うと、幸成をまじまじと眺めている。

「カツコイイよねえ？え〜っど……」

「直江幸成です」

「ユキ君だね？芸能事務所に所属してたりする？」

「いや……」

「勿体ないよ、絶対売れるだろうに……」

「俺はそついうの興味ないから……」

「釣れないなあ」

菜月は頬を膨らませると水筒の蓋をコップの代わりに、少し濁った水のような液体を注ぎ、口に運ぶ。

スポーツドリンクのような液体を口に運んだ菜月は一息つく。

「またそれ飲んでるの？」

「美味しいよ？サヤもどう？」

「私は遠慮するよ」

「その飲み物は？」

幸成の問い掛けに菜月は飲むかと目で問い掛けるが、幸成は「いい」と答える。

「そう言えば、夜に外に出ちゃ駄目だよ」

菜月は水筒に蓋を取り付けながら首傾げながら上目で幸成を見る。

「どういふ事ですか？」

「最近、無差別殺人が起こってるんですよ」

「三神さん、無差別殺人とは一体？」

「沙耶那でいいですよ」

沙耶那は柔らかい笑みで答える。

幸成は咳ばらいをし、「分かりました、沙耶那さん」と訂正した。

「夜に歩いていたら人が血を吸われるという事件です。現在、警察が捜査していますが危険な為、市民には夜間の外出禁止令が出ています」

成る程、政府の手回しが既に完了していたか……

「その犯人ただけだね？運よく逃げ延びた人の話によると白い狐の御面を付けた、刀を持った白い着物の人なんだって」

「白い狐？」

「この市の伝承に白狐びゃっしの伝説があつて、鬼を退治して神様になつたつて話だよ。でも、その狐とは違うね」

菜月は笑い声を漏らすと、沙耶那は真面目な顔で切り返す。

「しかし、生き残った人が錯乱して犯人を見間違えたかもしれないですよ？」

「可能性としてはなくは無いが、そのような出で立ちをしているなら犯人と考えられなくはないですね」

幸成は牛乳パックを握り潰す。

白狐なんて今まで聞いた事がない。

刀を持っていると言っていたが、ヘクセにも武器を持っている者はいないが、御面は見たことがない。

シュトレイゴイカバールの儀式か何かか？

幸成が思考を巡らせていると同時にチャイムが鳴り響いた。

「……俺達はもう行くわ」

「分かりました」

「おい、行くぞ」

真っ白に燃え尽きたロイを無理矢理立たせると幸成は歩いて行く。

アイデンティティを完全破壊されたロイは力無く幸成に引つ張られて行った……

古い教会……

錆びた十字架と寂れたステンドグラスとアイコン画。

そこには多数の老若男女が集まっていた。

中央の蝋燭が立てられた台座の前に立つのは若い男性だ。

男性は旗が括り付けられた槍を掲げている。

旗には紅い月をバツクに髑髏どくろがあり、その髑髏に交差する鎌が描かれた悍ましい物だ。

「我々、シュトレイゴイカバールは計画の第一歩を歩き出す。今日が最初の一步だ。この世の下等な人間は奴隷と食料に……そして我々、ヘクセが世界を築き上げる」

男の声に多くの者が歓喜の声をあげる。

「下等な人間供に死を！！」

彼らの輪唱が周囲を揺るがし、教会に訝する。

「人間は我々を化け物として扱ったが、二度の大戦を引き起こした

人間は我々以上の化け物だ。このままでは人類が滅びる。我々が愚かな人間に代わり、世界を支配する」
輪唱が結託の声に変わる。

古いプロパガンダのような演説を終えた男は片手を高く振り上げた。
「さあ、ゲームの始まりだ！！」

設定（前書き）

1 - 4 までの設定です

設定

HAWK

正式名：Hexe Annihilate Weapons and Killers

吸血鬼を殲滅する為に作られた特殊部隊。管轄は陸上自衛隊。少数精鋭の為、隊員は5名。存在は民間には極秘とされている。資金の流れから足取りを掴ませない為に防衛費は少ししか貰っていない。

担当

・エージェント

現地に赴き、ヘクセの殲滅を担当する隊員。殲滅以外にも潜入調査やヘクセに捕まった人間の救助等もある。

・オペレーター

エージェントに無線で指示を出す隊員。リーダーや偵察衛星を用いてエージェントに指示を出したり、潜入調査の補佐を行う。

・メディック

エージェントの治療を行う隊員。身体的治療から精神的治療等を行う。また、エージェントを安心させる為に隊員は女性が選ばれる。

・メカニック

エージェントの使う武器や道具を作る隊員。エージェントやオペレーター等の使う武器や機器を作る事が主な任務。

・トランスポーター

エージェントを現地まで輸送する隊員。車の他にヘリコプターを操縦し、現地に向かう為、エージェントの次に危険な担当と言える。

ヘクセ

人間と同じ姿だが、化け物じみた身体能力や特殊な能力を扱う事が出来る人間の総称。所謂「吸血鬼」で人を襲い、血を吸う。「朝に活動出来ない」や「ニンニクの匂いに弱い」、「十字架や銀の弾丸を受ければ体が消滅する」、「心臓に杭を刺せば死ぬ」という事は無く、弾丸等で倒せる。しかし、生命力は当然のように高く、頭を撃ち抜いたり、心臓を串刺した程度では死なない。前述の特殊能力からドイツ語で「魔女」という名前が与えられている。

神宮寺財閥

神宮寺龍一郎が率いる財閥。薬品・生物産業に秀でている。ヘクセと何らかの繋がりがあると思われるが具体的な証拠がなく、財閥という理由で警察も手出し出来ないのが現状。

シュトレイゴイカバール

ヘクセ史上主義の秘密結社。創設者はカズイクル・B・ツエペシユ。目的は不明。エンブレムは紅い月に髑髏、それに重なる交差した鎌が特徴。人間を夜な夜な拉致して血を吸うという悪業を行っている。人間は勿論、裏切り者のヘクセですら問答無用で殺害する。

華景市

某県にある市。市では行方不明事件（ヘクセに殺された）が多発している。人口約80000人、面積は430平方キロ。

華景高校

華景市にある最も大きい木造の高校。男女共学。学力は平均レベル。全校450人の学校。運営しているのは神宮寺財閥。

栗荘

HAWKメンバーが住んでいる木造のアパート。家主は直江三村という事になっている。部屋数は六つ。一部屋は空き部屋。

101号室

・直江三村宅

102号室

・比叡彩花宅

103号室

・会議室兼反省会会場

201号室

・直江幸成宅

202号室

・氷川優宅

203号室

・ロイ・カブラギ宅

血吸い人

帰宅を急ぐ少女が血吸い人に襲われて血を吸われたという都市伝説。

白狐

華景市に伝わる民間伝承。鬼を退治した白狐の話。白い狐の御面に白い着物の姿に刀を持った出で立ち。血吸い人から逃げ延びた人物の証言から明らかになった存在で不確定。また、ヘクセ、シュトレイゴイカバールとの関連性も不明。

1 - 5 : 放課後

ホームルームの終わりとともに高校の授業は終わった。

授業が終わり、帰れるという瞬間が高校生のみならず、全ての学生達には学校生活で最も幸せな瞬間ではないだろうか？

担任の話が終わり、挨拶を終えた幸成とロイはカバンを掴んだ。

言ってしまうえば彼らにとってここからが仕事であり、学校生活は夕ーゲットである「神宮寺鳳寿」と接触しなければ意味が無い。

しかも学年が違うから会う確率は有っても、会話する確率は圧倒的に低い為、下手をすれば三年生に突入し、さらに下手をすれば卒業で、潜入の意味が無くなる。

なら、こちらから声を掛ければと思うかもしれないが、いきなり訳の分からない人物が声をかけたならそれこそ目立つ。

自然に、かつ確実に探りを掛けるなら、最終的に効率がいいのは「何かきっかけを手に入れてから接触し、信頼を勝ち取る」という事になる。

つまり、運任せ……

エージェントが聞いて呆れるが、現状は仕方ない為、接触出来るまではヘクセを狩るしかない。

「さて、帰るか」

幸成はカバンを掴み、肩に担ぐとロイは「ああ」と答える。

菜月の「変態さん」の一言が相当効いたらしい。

(そりゃ、あれだけストレートに言われれば無理は無いな)

ロイには悪いが良い薬にはなっただろう。

「幸成君、ロイ君、一緒に帰りませんか？」

そう声をかけたのは沙耶那だ。

沙耶那は相変わらず優しいな笑みを湛えている。

どんな事をすれば怒りますか、と聞きたくなる程、笑顔が絶えない。それに容姿も合わさって、完璧な美少女だ。

そんな沙耶那の後ろにはロイの天敵に成り得る可能性を秘めた菜月が隠れていた。

まるで姉妹のような構図に思わず幸成も頬を緩ませる。

「幸成君達のお家って、確か雫荘ですよね？」

「ええ」

「私の住んでる神社は雫荘の近くですから一緒に帰りましょう？」

「それなら是非」

幸成は笑みを見せると、不意に女子の視線が冷たくなった。

いつかの任務の時に、複数のヘクセに狙われた事があったのだが、その時感じた殺気に似ている。

(こ、ここは戦場か……?)

「行きましようか？」

「そうですね」

幸成は居心地の悪い殺気に身震いをするとうとう教室を出た……

イヤホンから洩れる音楽に合わせて鼻唄を唄う優は弾薬を作っていた。

正確には改造していた。

机には拳銃弾が分解されている。

彼女のモットーは「古い技術を転用し、最新の物に」であり、今もそのモットーでHAWK専用弾薬を作っていた。

HAWK専用弾薬「9mmシャルデンプファー亜音速弾」は通常の拳銃弾「9mmパラベラム弾」を改造した優特製の弾薬だ。

HAWKは貧乏部隊。

その特性上、消耗品である「サプレッサー」は使えないのが現実。かと言って、隠密作戦を行う部隊が銃声を漏らす訳にもいかない。

実際、銃声は「発射ガスの爆発音」だけではない。

自動拳銃を例にとると、前述の爆発音に加えて、「スライドが動く機械音」と「発射された弾丸が音速に到達する時の衝撃音」^{ソニックブーム}が有る。スライドの機械音を消すにはスライドを手動にしなければならぬ。為、ヘクセ相手の火力不足は否めず、それは出来ない。

しかし、衝撃音と爆発音は消そうと思えば消せると優が豪語し、作ったのが「9mmシャルデンプファー亜音速弾」だ。

一般的に爆発音を消すのはサプレッサー、衝撃音は火薬を減らした亜音速弾の役割だが、それを弾薬に搭載したのがこの弾薬である。

そこで優が参考にしたのは旧ソ連が開発した消音弾薬「SP-4弾」だ。

この弾薬は弾丸の下にピストンが有り、そのピストンが無色火薬で撃ち出し、ピストンが弾丸を撃ち出す。

その時にピストンが薬莖に蓋をし、発射ガスを閉じ込めて音を消すという代物だ。

それを9mmパラベラム弾に仕込んだ物が9mmシャルデンプファー亜音速弾である。

無論、射程は落ちるがヘクセとの交戦は室内の、それも広くない空間が多い為、十分に通用する。

「よし、出来た！」

優はイヤホンを外し、音楽プレイヤーの電源を切ると作った弾薬を予め並べていた弾薬の列に並べた。

彼女はこの弾薬の他にも、古くなったコンピューターを再利用して様々な機器を作るといった事を成し得ている。

弾薬を一通り作り終えた優は背伸びをすると、弾薬を片付けながら時計を見た。

「もう4時過ぎたんだ。夕食を作らないと……」

夜間任務の為、夕食は早めに取り、胃を馴らすというのがHAWKの慣例である。

優はゆっくりと立ち上がると自分の部屋から出て、一階の空き部屋

……作戦室兼集会場に向かって階段を下りた。
と、道路に幸成とロイが歩いて来るのが見え、優が帰宅の挨拶をしようとして言葉を止める。

幸成とロイの後ろに女の子が二人。

それもとびつきりの美少女だ。

不意に三村の「彼女」という単語がリピートされた。

「優さん、ただいま」

幸成の声に優は棒読みで挨拶を返し、美少女を見る。

「この女の子達は？」

「初めまして、三神沙耶那です。こちらは友達の藤宮菜月ちゃんです」

「初めまして」

沙耶那と菜月は優に一礼すると笑顔を見せた。

菜月は優をまじまじと見ると口を開く。

「ユキ君のお兄さん？」

「幸成の『お姉さん』の氷川優です」

優は引き攣った笑いを見せると、「家の幸成とはどういった関係で？」と繋げる。

（家のつて、いつからあんたの実姉になった？）

幸成は苦笑いを浮かべると、沙耶那は動じず、笑顔で返した。

「私は幸成君のクラスの学級委員長で、二人がクラスに馴染めるように協力してあげています」

「そんな感じ。沙耶那さん、菜月さん、今日はありがとうございました」

幸成は一礼すると「どういたしまして」と返す。

これでは圧倒的に大人げないのが優で、大人の対応をしたのが沙耶那になってしまった。

「私達は今日はこれで失礼します」

沙耶那は一礼し、笑顔を見せると「また、明日」と付け足して歩いて行った。

その背中を幸成とロイが見送ると幸成は優を見る。

「優さん、さつきのはいくら何でも大人げないから」

「何で？」

「全体的に……」

幸成は溜息を漏らすと髪を掻きあげた。

この人は何故か女性絡みになると妙に大人げなくなる。

向きになるといつか、美少女なら険悪なムードに成り兼ねない。

自分が女の子に見られないから気にしているのか、と幸成は聞いた事があるが、「歌劇団みたいでカッコイイじゃん」と返した為、それは違うという事が分かった。

しかし、その向きになる理由が分からない。

ロイや彩花、三村は知っているらしいが教えてくれないから尚更もどかしい。

幸成は深い嘆息を漏らす。

「優さん、夕食を作る為に下りてきたんじゃないですか？」

「そうだった」

優は思い出したように呟くと、空き部屋に駆け込む。

「本当に何だろ？」

「お前って本当に鈍いな」

「何？」

「何でもねえよ」

ロイは呆れたように言い、部屋に向かって行く。

幸成は首を傾げると部屋に歩いて行った……

時計の針が19時を指した頃、パソコンのキーボードを叩いていたロイが背伸びをした。

パソコンの画面には「リンク完了」の文字が踊り、ロイは三村を呼ぶ。

「おっちゃん、衛星とのリンク終わったぜ」

「おう！」

三村は答えるとコーヒーを嚙りながら、提供された偵察衛星「G A^ガ R U D A^{ルダ}」のリンク画面を見る。

「今回、よく偵察衛星を米軍が貸してくれたものだ」

「それほど、米軍もシュトレイゴイカバールを危険視しているのだろう。ルーマニアに潜伏していたカズィクルを捕らえようとアジトに踏み込んだタスクフォースが皆殺しにあつたからな。どの部隊でもシュトレイゴイカバールを消してくれればいいんだろう？」

三村はコーヒーを一気に飲み干し、流し台で食器を洗っている優にマグカップを手渡した。

優はマグカップを洗いながら自慢げに口を開く。

「まあ、ボクのエロモンを視覚化する装置を米軍に提供したからって事もあるかもね」

その声に食後の紅茶を優雅に飲んでいた彩花が嘯く。

「でもお、ヘクセがエロモンを使って仲間を認識するというのを突き止めたのはあ、ウチなんですよけどねえ」

まさにその通りであった。

比叡彩花はヘクセ研究においての第一人者であり、ヘクセがエロモンを使い、仲間を見分けると突き止めたのは紛れも無い彼女の御蔭だ。

「とにかく、これで俺達はヘクセを楽に見付ける事が出来る。願ったり叶ったりじゃねえか？」

黒のカラーコンタクトを外し、紅い瞳を見せる幸成がロイのパソコンを覗き込む。

この紅い左の瞳は不気味な光を放つ。

ロイはそんな幸成を一瞥すると、エンターキーを押して衛星の映像を映し出す。

華景市の上空を映し出すその映像は鮮明とは言い難いが地上の人間をハッキリと捉えている。

「お下がりに言っても意外に使えんじゃないか」

幸成が感心すると、ロイは苦笑いを浮かべ、嘆息を漏らす。

「アメリカ軍の偵察衛星の解析力はこんなもんじゃねえぞ？地面に置いたタバコの銘柄をも読み取れるからな」

「……完全に旧式だな」

幸成は頭を掻きながら、深い溜息をつき、近くにあつた銀色のアタッシュケースを開けた。

アタッシュケースには四丁の拳銃とヘッドセット、刃渡り30cmのナイフが納められている。

それぞれの拳銃は二丁が銃口が二つ有るM92FS - エリートIA、もう一丁が銃口に話のようなフックが取り付けられたM1911A1、もう一丁がグロック26だ。

それぞれが任務に必要な不可欠な物であり、対ヘクセ用拳銃、フックシヨット、麻酔銃となっている。

「調整は終わっているよ」

「相変わらず良い仕事してるよ」

幸成は手を手ぬぐいで拭いている優の肩をポンと叩く。

三村はその様子を見ると、声高に叫んだ。

「さて、搜索と参りますか。スカイアイ、フェロモン探索」

スカイアイ（ロイ）は文字通り空からの目を用いる。

フェロモン探索とはヘクセの出すフェロモンを視覚化し、人間とヘクセを区別する映像だ。

熱探知「サーマルビジョン」にも似ているその青い画像は人間はオ

レンジ色に表示されるが、ヘクセは緑色に表示される。さらにヘクセの通った後に残留したフェロモンも探知する事が出来る為、ヘクセが通った跡が一目瞭然となるという訳だ。

このサーマルビジョンならぬ「Hexe Search Visison」、通称「HSV」はヘクセを探す部隊には必要不可欠なものである。

ロイは上空から映し出されるHSVを見ながら、驚嘆の声を漏らした。

「流石、夜間外出禁止令が出てるだけあるな。パトカーらしき車が沢山有る」

「ヘクセを狩るにもパトカーを避ける必要があるな……」

「そうですねえ。警察にもヘクセは極秘ですからあ、鉢合わせたら面倒ですものねえ」

彩花は人事のように呟きながら紅茶を啜り、それを飲み干す。

「しかし、奴らが動き出すとしたらあ、今日ですよお？」

「彩花さん、その根拠は？」

幸成は優雅に紅茶を嗜んでいる彩花に問い掛ける。

「敵はこちらの存在にまだ気付いていませんよねえ？と、言うことはですよお？人間の能力を凌駕しているヘクセが大胆不適になるのは必然ですよねえ？」

「確かに噂に成る程だからそれは有りえる。だが、夜間外出禁止令が出てる以上、獲物は……」

三村が目を細めると、ロイが怒鳴った。

「ヘクセを確認！！警察官が襲われている！？」

彩花は新しい紅茶にミルクとガムシロップを入れると、軽く首を傾げ、笑みを湛えつつ紅茶を飲む。

「場所を指定しろ！！」

「ポイントA3エックスレイ、ここから約4キロの地点ですよ！！」

ロイは華景市の地図と偵察衛星を照らし合わせながら怒鳴る。

「了解！！ロメオ、準備だ。自分は先に車を準備する。急げ！！」

「分かった」

幸成のコードネームであるロメオを口にした三村は部屋から飛び出し、幸成も黒い夜型迷彩を着込み、次々とホルスターを装着していく。

両腿のレッグホルスターに銃口が二つ着いたスライドがそれぞれ白と黒の拳銃、通称「スコトス&フォース」を仕舞い、ヒップホルスターにフックショット「ドルヒボレン」、脇に仕舞うシヨルダーホルスターには麻醉銃「ミューデトラウム」、腰にナイフを指し、最後にヘッドセットを右耳に取り付けた。

「さあ、ミッションスターだ」

装備：HAWK（前書き）

HAWKの装備。

お粗末ながら使われた武器を解説。

クリス・スーパード

反動を後ろではなく下に逃がす事で銃の跳ね上がりを軽くしたサブマシンガン。

M90tWO

「ベレッタ M92FS」の最新型。弾倉のバネをショート化する事により、装弾数を従来の15発から17発に増やした拳銃。

グロツク 17

強化プラスチックを用いる事で軽量化に成功した、映画にも度々登

場する有名な拳銃。

装備：HAWK

HAWK - EYE

通称

「フューラー」

ヘッドセットに右目に掛かるヘッドアップディスプレイ（HUD）を装着した戦略情報機器。HUDには敵対者の情報を映し出す。また、微妙な筋肉の動きから次の行動を予測してそこから予想される動きも投影される。さらに、フェロモンの視覚化、暗視機能、望遠機能が搭載されている。意味はドイツ語で「探知器」

M92 - HAWK DUAL

装弾数：18+2

使用弾：9mmシャルデンプファアー亜音速弾

愛称：スコトス&フォース

対ヘクセ用主力火器。外観は「M92FS - エリートIA」だが性能は上位互換とも言える銃。装弾数は弾倉のバネをショート化するという「M90two」を参考にして、反動はサブマシンガン「クリス・スーパード」と同様のスライダーで相殺する事で両手でも通常に扱えるように、さらに銃身長を伸ばし、競技用の拳銃並の高い命中率を誇る等の高性能を有している。また、グロツク17同様ポ

リマーで出来ている為、弾丸抜きで900gと軽い。銃口は上下二連装となり、射撃と同時に二発の弾丸を発射し、対象に対して致命的な「流体性力学的ショック」を引き起こしやすい。また、マウントレールも搭載され、HAWK-EYEに連動する特殊なレーザーサイトも搭載している。フルオート射撃も可能で前述の反動相殺機構に加え、発射間隔を抑えており、操作しやすくしている。右手に黒い拳銃「スコトス」、左手に白い拳銃「フォース」を使う。スコトス&フォースはギリシャ語で「闇と光」を意味する。

HAWK - NAIL

刃渡り：35cm

通称

「メツサードルヒ」

HAWK正式採用のコンバットナイフ。長さから鉈や小太刀に近い。刺突や切り付けの両方に特化しており、刺突時には強力な電流を流す。ドイツ語で「短剣+ダガー」を意味する。

HAWK - BILL

ワイヤー：30m
限界重量：120kg

通称

「ドルヒボーレン」

小型のフックショット。先端が鋭利な鉤のようになっており、紐は強靱で蜘蛛の糸を参考にし、少しの事では切れない。移動用や敵を引き寄せる等、用途は多様。ドイツ語で「貫通する」を意味する。

9mmシャルデンプファー 亜音速弾

9mmパラベラム弾自体にSP-4弾のようなガス密閉構造を設け、火薬を減らして亜音速弾にした物。射程距離は多少落ちるものの、高い消音効果を発揮し、その音は45デシベル程度（電話機のベル）
。サブレッサーが使えないHAWKで重宝されている。

GARUDA

読みは「ガルダ」。HAWKが使用する軍事偵察衛星。アメリカ軍からのお下がりであり、旧式の物。カメラにはヘクセの発するフエロモンを視覚化する機能が搭載されている。

9mmパラライズ弾

世界初の対人麻酔弾。弾頭は蚊の針を参考にした小さい針でそこから成分がサクシニルコリンに似た薬品を注入する。また、通常の弾薬より少ない火薬が特徴。刺さった標的は筋弛緩を引き起こし、体を麻痺させる。対人麻酔は薬品の量で死に至る為に使われていなかったが、致死量の直前になると成分が体内分解する薬品が使われている。

グロツク26 - HAWK

装弾数：10+1

使用弾：9mmパラライズ弾

愛称：ミューデトラウム

「グロツク26」のHAWKモデル。外観はグロツク26だが、使用弾薬は9mmパラライズ弾を使用し、民間人の排除やヘクセの捕獲・保護に用いられる。サプレッサーを取り付けられ、ヒップホルスターに仕舞われる。愛称の「ミューデトラウム」はドイツ語で「眠い夢」を意味する。

アルムブレスト

装弾数：1

ワイヤー：75 m

限界重量：180 kg

クロスボウ。矢にワイヤーが取り付けられている。理由としては貧乏部隊であり、矢を無駄にしない為という理由とヘクセの足を止めるという理由。6倍率スコープが取り付けられ、逃げるヘクセに対して用いられる。基本的に車に積まれている。意味はドイツ語で「石弓」

1 - 7 : 追撃

街灯のオレンジ色の光とパトカーの赤い光が周囲を照らす。
まだ日が短いこの地域の夜は早い。

この時間には闇に包まれる。

東京等とは違い、田舎であり、さらに夜間外出禁止令が出ている為、
20時に成らずともスーパーは閉まり、24時間営業を売りにして
いるコンビニすらも閉まっていた。

市民は家の中に逃げ込み、本当の化け物 - - 現に化け物ではある
のだが - - に怯え、家の明かりは消えている。

まるで昭和の、第二次大戦中の空襲から避ける様子に似ていた。

警官達はパトロールを行い、「血吸い人」を警戒しているのは19
79年に流布した有名な都市伝説「口裂け女」以来だろう。

「しかし、何もありませんね、金田さん」

若い警官は金田と呼んだ中年の警官に呟くと、助手席で背もたれに
寄り掛かっていた金田がハハッと笑った。

「つたく、警官をこんな事で使わないで欲しいな。お前もそう思う
だろ、木村」

「そうですね」

パトカーを運転していた木村が車を商店街の方に向けると、背中を
向けた黒いローブの男が目の前にいた。

それに気付いた木村は慌ててブレーキを踏み、車を急停止させる。

金田は血相を変えて、助手席から飛び出し怒鳴った。

「おい、君！！旅行者か！？今は夜間外出禁止令が出ている」
男はこちらを振り向かない。

ただ、背を向けて遠くを眺めている。

「聞いているのか、君！？」

金田が男の肩を掴むと、腹に……

金田の腹に鋭い激痛が走った。

激痛というにはあまりにも複雑で、内臓を掻き乱されるというにはあまりにも安直で……

「……っあ……っはかあ……」

「痛い？痛いよね？内臓を刃物で掻き乱されて、骨を砕かれて……」
男は体を前屈みにして呻く金田の耳元に呟き、問い掛けると金田の腹から滝のように溢れてくる血を飲み込む。

「うわああああ……」

木村は絶叫すると車をバツクさせた。

彼の本能が逃げると叫ぶ。

その本能に素直に従った木村はアクセルを踏み込み、商店街から遠ざかる。

あれが血吸い人？

だとしたら、自分も……

「死にたくない……死にたくない、死にたくない！死にたくない！

！死ぬのは嫌だ……」

木村は絶叫し、アクセルを踏みつづける。

スピードメーターは100キロをゆうに超えていた。

赤信号を無視してでも逃げなければならない。

……しかし……

バックミラーには先程の男が映っていた。

100キロを超えるパトカーに人間が着いて来れるはずはない。

だが……

パトカーの上に何かが乗る音が響き渡り、バックミラーから男が消えた。

「嘘だろ！？おい、嘘だ……」

屋根の上から刃が下り、木村の延髄から突き刺さったその刃が、木村の声を途中で途切れさせた。

100キロを越えたパトカーは凄まじい勢いでスリップし、パトカーはガードレールに衝突し、停止する……

路上を走る黒いワゴンの電気自動車。

無音のそれは闇に紛れて、街を走る。

黒いワゴン車の中の助手席に座っていた幸成のHAWK専用のヘッドセット「HAWK-EYE フューラー」からロイの声が聞こえてきた。

（こちらスカイアイ！新たに警官一人が殺害された。目標は近接戦に特化している模様、オーバー）

ヘクセの戦闘系統はそれぞれは三種類ある。

近距離特化型、遠距離戦特化型、特殊能力特化型の三種類だ。

ヘクセとは言っても武器を使う者もいる。

剣や槍、拳銃や突撃銃等を使うヘクセもいるのだ。

今回はロイの報告から近距離特化と言っているが、実際、特殊能力特化型かもしれない。

と、言うのも特殊能力特化型は超自然的な能力、例えば雷等を操るが、常にそれらを操る訳ではなく、何かしら武器を交えた戦闘を展開する。

つまり、警官を殺害する際に能力を使わなかった可能性も考えられる。

「こちらロメオ、了解した。敵との距離を教えてください、オーバー」

（次の角を左に曲がればすぐ見えるはずだ、オーバー）

「了解。何か有り次第、随時、敵の情報を入れてくれ、オーバー」（分かった。スカイアイ、アウト）

ロイからの無線が切れると幸成は車の後部席に置いていたクロスボウを掴んだ。

クロスボウの矢にはワイヤーが括り付けられている。

どちらかと言えばクロスボウと言うには遠く、鯨の捕獲に使われる

ハーブーンに近いそれはHAWK隊員からは「アルムブレスト」と呼ばれていた。

アルムブレストはワイヤーで敵の動きを止めるばかりか、銃痕が付けられない屋外の戦闘に用いられる。

アルムブレストに6倍率スコープを取り付けると、ワゴン車の天窓から身を乗り出した。

「One shot one kill」、一撃必殺を意味する狙撃手の金言は、クロスボウにも当て嵌まる。

実際、クロスボウは1970年代、銃が高性能の消音装置を得るまで特殊部隊で使われていた。

貧乏部隊には持つてこいの武器だ。

「It's show time!! (ショーの時間だぜ)」

幸成ほくそ笑むと右目に掛かるHUDを「Hexe Search

Vision」、通称「HSV」に切り替え、赤眼を閉じ、右目に集中する。

サーマルビジョンに似た風景がHUDに映し出され、同時に車が角を曲がった。

パトカーの上に乗っている緑色に映し出される人間がHUDに捉えられ、幸成は赤眼を開ける。

普通の光景とサーマルビジョンが合わさり、奇妙な風景になった。

例えるなら、昔の青と赤のフィルムが取り付けられた3D眼鏡をかけているのに似ている混ざり方だ。

左目でアルムブレストのスコープを覗き込み、ヘクセと思われる男を中心に捉える。

男の両手には、インドのマラータ族が使っていた、箆手の先から70cm程の剣が伸びた防具「パタ」が握られていた。

幸成はゆっくりと引き金を絞ると、男に向かって矢を放つ。

矢が真っ直ぐと男に向かい、ワイヤーが擦れる音が響き渡る。

唯一、消音性を欠く要素がこのワイヤーだ。

が、しかし、矢を現場に残す訳にいかず、ましてや撃った矢をこ丁

寧に回収していたらヘクセに逃げられるから仕方ない。
矢が男に当たる瞬間、男は矢に気付き、それを弾いた。
空中に弾かれた矢はワイヤーの限界の長さを越えてアルムブレスト
に巻き取られる。

男はこちらに睨むと、パトカーからパタを引き抜き、駆け出して行
く。

幸成は巻き取られて戻ってきた矢を掴むと三村に叫ぶ。

「おっちゃん！！早くしろ！！」

「分かってるよ！」

三村はアクセルを踏み込み、男の後ろを追跡する。

幸成はHUDを通常のモードである「Lock&Load」に切り
替えた。

このモードは「敵を捉える(Lock)」と、敵の筋肉の微妙な動
きから次の動きを導き出し、「HUDに映し出す(Load)」と
いうビジョンであり、通称「LAV」と呼ばれている。

風を切って走る男をHUDに捉えた幸成は再びアルムブレストの弦
を引っ張り、そこに矢を装填した。

「おっちゃん、奴の後ろに張り付いてくれ」

「分かってる！」

三村が怒鳴るのを聞き、幸成はスコープを覗く。

手ブレと車の揺れ、さらに男の不規則かつ俊敏な動きはHUDに映
し出される予想された動きと一緒にではあるのだが、矢が直撃するま
での時間を考えれば間に合わない。

スナイパーライフルでもあればまだマシだったかもしれないと幸成
は舌打ちをし、一射目で弾かれた事を憎む。

男が人間には有り得ない速度で街の角を曲がり、車もドリフトしな
がら曲がった。

タイヤから白煙が巻き上がる。

(こちらスカイアイ！ロメオ、聞こえるか？まずいぞ！！)

「どうした!？」

(次の角に警官がいる!!何とかして止める!)

「簡単に言うな!」

(方向を変えるだけでいい!)

「……分かった、やってみる。ロメオ、アウト」

幸成はアルムブレストからホルスターの拳銃型フックショット「HAWK - BILLY ドルヒボレン」に持ち替える。

次の角まで約100m……

「おっちゃん、奴の100mまで近付いてくれ」

「分かった!」

三村はアクセルを一気に踏み込むと、男の後ろの手前、15mまで近付いた。

もう少し……

残り5m……4……3……2……1……

幸成はフックショット「ドルヒボレン」を構えると、男の数メートル手前に撃ち込み、ワイヤーの巻き取りでそこに引っ張られる。移動用のフックショットであるドルヒボレンには自分を移動させる程の力をモーターに出させる「ハイパワー」と物を引き寄せる程の力の「ノーマル」があり、この強靱で有名な蜘蛛の糸を参考に作られたワイヤーは幸成の体を支えるには充分だった。

刹那、空中を舞う幸成の目の端に何か白い物が映り、そちらの方を見た幸成は言葉を失う。

路地の建物と建物の隙間に、白い着物と太刀を持ち、白い狐の面を付けた人物が立っているのだ……

その一瞬の出来事がスローモーションのように思えた瞬間、幸成の時間が元に戻り、ワイヤーに引っ張られる。

幸成はすぐに集中すると、ワイヤーが巻き取りを終えて男のすぐ手前に幸成は立つ。

即座にナイフ「HAWK - NAIL メッサードルヒ」を構えると、男は大型のスーパーの方を向くとその屋上に跳んだ。

その高さは約25m、ドルヒボレンでギリギリ届く距離だ。

幸成はドルヒボレーンの銃口を屋上に向けると、ワイヤーを発射し、手摺りに巻き付け、ワイヤーに引っ張られる。ワイヤーが巻き取られて、その長さが限界まで短くなるより早く幸成は手摺りを掴み、屋上に降り立った……

1 - 8 : 赤眼の狼

対峙する二人。

まだ薄い月明かりで照らされる二人の姿は片方は人間に見えず、逆に片方は人間にしか見えない。

紅い瞳の少年と黒いローブの男はそれぞれの武器を手に持っていた。少年は上下二連装の二丁拳銃と男はパタを持っている。

一陣の風が吹き、男のローブが脱げた。

男は痩せ型で目が細く、髪は無い。

パタを下に下ろした男は口を開いた

「君の名前を聞かせてもらおうか？」

幸成は無表情になりながら小さく「ロメオ」とだけ答えた。

「コードネームか？まあ、いい。僕はディック・チャンバー。シュトレイゴイカバールのヘクセだ」

シュトレイゴイカバールのヘクセの文字を聞いた幸成は眉をピクリと動かす。

「今まではぐれヘクセを狩ってきたが、シュトレイゴイカバールのヘクセと対峙するのは初めてだ」

「そうか……なら、これが初めて最後だっ！！」

チャンバーはパタを両手に凄まじい速度で幸成に駆ける。

風を切る音が響き渡り、幸成はチャンバーの頭を飛び越えてそれを避けた。

「凄い身体能力だ」

チャンバーが笑うと、幸成はスコトス&フォースの引き金を引いた。放たれる9mmSD弾をチャンバーが、まるで漫画かアニメにあるような動きで弾丸を自分から逸らしていく。

「あまいー！！」

チャンバーは怒鳴ると、パタを交差させながら幸成に向かっていき、振り下ろす。

同時に金属の澄んだ音が響き渡り、幸成はナイフ「メッサードルヒ」でその二本を受け止めた。

飛び散る火花が二人の顔を照らす。

二つの手を添えたナイフで受け止めたパタの重圧は凄まじい。

「これは刺さると痛いよ？」

チャンバーはニヤリと笑い、片方のパタでナイフをpushしながら、もう片方を後ろに引く。

この後、刺突が来ると分かっているがナイフに添えている手を離し、片方で拳銃を使うにしても、ヘクセの力を片手で支えられるとは思わない。

幸成は舌打ちをすると顔面に突き出された刃を顔を横にして避ける。鮮やかな血が幸成の頬とパタを濡らした。

幸成の血をパタから舐め取り、不気味な笑みを見せる。

今度は横に振りかぶり、パタが一閃された。

幸成はナイフから力を抜き、逆にpushえ付けられる事で横に一閃されたパタを避ける。

パタは幸成の髪の毛の先を少し切り、それとは別に空を切った。

先程のpushえ付けられた反動を利用し、上手くかい潜った幸成は再び拳銃を構える。

微かな銃声と同時に放たれる弾丸はまたしてもチャンバーのパタで弾く……

「無駄だよ？無駄、無駄！！」

チャンバーは怒鳴ると、冷静な幸成に問い掛ける。

「君は何でそんなに冷静なの？今から死ぬのが分かっているからかな？」

「逆だ」

幸成は鼻で笑うと二丁拳銃の弾倉を交換し、銃を交差させる。

「どうやって？」

「お前は致命的な事に気付いていない」

「何が？」

チャンバーが問い掛けると幸成は弾丸を発射した。

三度、次々放たれる弾丸を弾いたチャンバーは腕に走る激痛に顔を歪める。

チャンバーの腕からは真紅の血液がパタの付け根から滴り落ちてきた。

「何だ！？何なんだ、一体！？」

「お前は馬鹿だな。その武器は戦場で落とす事は無いが、同時に離す事も出来ない。つまり、下手をすれば自分の腕を痛めるという事だ。そんな武器で弾丸を弾けば常識的にそうなるだろ？ Reach
！！」

幸成は怒鳴ると、二丁拳銃を連射しながら距離を詰める。

チャンバーは無謀にも血の滴るパタで応戦するが、数発防ぎ切れず、体に弾丸が届く。

幸成が弾倉を交換すると同時にチャンバーはヤケクソに切り掛かるが、腕を痛め、速度が落ちたパタを避けるには容易で、ましてやHUDの予測された動きの通りのチャンバーは遊ばれている状況だった。

「この下等な人間が！！」

「下等な人間にやられてるお前は何だ？」

幸成はほくそ笑むと二丁拳銃をチャンバーの体に押し付けた。

「Bingo！！」

フルオートで吐き出された弾丸は一瞬でチャンバーの体を蜂の巣に変え、弾き飛ばされた。

弾かれたチャンバーに銃口を突き付ける幸成の姿は月光に照らされ、不気味な赤を醸し出している。

「化け物め……」

「吸血鬼に言われるとは心外だぜ」

幸成は右手で拳銃を構えながら、左手で先程、頬に付いた傷痕を擦る。

傷は既に塞がり、ただ、固まっていない血液が手を濡らしたただけだ。

った。

「ああ、確かに俺は化け物かもしれねえな」

幸成は自嘲すると、幸成は「良いことを教えてやるよ」と呟く。

「古来、吸血鬼を滅ぼすには六つの方法がある」

そう言つと、幸成は左手の指を広げていく。

「一つ、遺体を火葬する。二つ、水に沈める。三つ、心臓を取り出す。四つ、心臓に杭を打ち込む。五つ、首を切り落とす……」

そこまて言つと、五つ目で開いた手を握った。

「六つ目は狼に襲わせる。名前を知りたがつていたな？俺は赤眼の狼。貴様ら吸血鬼は俺が全員喰らつてやる！！」

幸成はその冷たく、残酷な赤い瞳で男を見下ろすと、ゆっくりと引き金を数回引いた。

静かな弾丸は男の頭を粉々に粉碎し、周囲に赤黒いミンチを撒き散らす。

同時に男は衣服や武器を残し、その男がこの世にいた全てを消し去った……

登場人物：華景高校（前書き）

登場人物：華景高校

登場人物：華景高校

三神 沙耶那 (17)

一人称「私」。華景高校二年生。容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀の万能美少女。うなじが隠れる程のセミショートで、墨を流したような美しい黒髪、前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている。身長は162cm、二重瞼で目鼻が整い、唇もみずみずしい。Eカップとスタイルも良く完璧とも言える美少女。天然ボケだが、基本的に面倒見のいい女の子。三神神社に住んでいる。

藤宮 菜月 (17)

一人称「ナツ」。華景高校二年生。薄い茶髪に右側のサイドテールに、前髪は自然な感じ、童顔で149cmと背が低く、よく子供に間違われる。Bカップ。笑うと口から八重歯が覗く。明るい性格で子供っぽい。ロイとの仲は最悪。沙耶那とは「サヤ」と「ナツ」と呼び合う仲。趣味は園芸で花を育てる事が好き。毎日スポーツドリンクを飲んでいる。

神宮寺 鳳寿 (16)

一人称「アタシ」。華景高校一年生。褐色のストレートヘアでセミロングのボブカットに右の前髪部分に髪留め、可愛い顔立ちで赤縁の眼鏡をかけている。Cカップ。身長は158cm。HAWKの監視対象者。

2・1・二日目(前書き)

第2話

カーテンから零れ出る太陽の光が幸成の顔に触れる。

その優しい光が幸成の顔を照らし、幸成はゆっくりと目を開けた。目を開けて初めて実感出来る、生きているという実感。

ヘクセという有り得ない存在と戦ってから朝を迎えると、いつもこの実感に苛まれる。

幸成は髪を掻き上げると布団から出て、洗面台に立つ。

夜に付いた、あの傷は跡が残らずに消えていた。

掠ったとは言っても、一日で消えるような浅い物ではない。

化け物……

チャンバーの言葉が頭の中で響き渡り、幸成は舌打ちをした。

皮肉にも化け物に言われるとはな……

自嘲した幸成は紅い瞳にコンタクトレンズを入れた。

この瞳が無くなれば、俺は……

「起きてるか？」

朝から元気なロイの声が部屋に響き渡り、「ああ」と答えて顔を覗かせる。

「二日目だな……彼女出来るかな……」

「……諦める、お前には無理だ」

幸成がまさに諦めるといった風に肩を叩く。

「な、えっ！？何、その宣言！余命宣告？それとも死刑宣告なのか！？」

「冗談だよ、冗談」

幸成は呆然とするロイに笑いかけると、不意に昨日の夜のある出来事が甦った。

フックショット「ドルヒボレン」のワイヤーで移動している時に見た、沙耶那と菜月から語られた「白狐」。

白い着物に太刀、白狐の御面の人物。

あれは？

「ロイ……」

「どうした？」

「……昨日、俺とおっちゃんを追跡している時に他にヘクセがいなかったか？」

「それは無い。あんな開けた所に別のヘクセがいたら、いくら素人でも気付くだろ？」

「いや、例えば路地裏とかは？」

「路地裏か……ただでさえ解析力が低いGARUDAなのにHSVじゃ、ますます探せねえよ」

ロイの言う通りだった。

サーマルビジョンに酷似した視界では路地裏等を探すには難しい。

青く染まり、さらに路地裏は深い青に染まったその視界から探すのは不可能という物だ。

「何があつた、幸成？」

「信じねえかもしれないが……白狐を見た」

「白狐って……冗談だろ？」

「俺だつて冗談だと思つから聞いてんだ。伝承の存在が見えたんだから……」

「一応、録画はしているから後で確認だ」

「悪いな」

幸成は感謝すると、下から彩花の気の抜けた声が聞こえ、朝食だと告げた……

食後は何故か紅茶と決められたHAWK隊員。
無論、決めたのは彩花だ。

実際、このメンバーで力関係図を構築した場合、彩花が頂点となる。HAWK隊員の見解は一定しており、「彩花を怒らせたら毒を盛られそう」や「恐竜の絶滅の原因は実はこの人を怒らせたから」、さらには「人類が全滅する可能性はこの人を怒らせない限り皆無」とまで言われている人物だ。

五人はそれぞれ思い思いに紅茶を飲み、朝を満喫する。

「それにしてもお、いきなりシュトレイゴイカバル所属のヘクセを倒せるとは運が良かったですよねえ」

彩花は薄紅色の紅茶の香りを楽しみながら微笑む。

その様子はやはりお嬢様にしか見えない。

あのような事を言われているとは思えない優雅な様子は、ギャップが有りすぎてこちらが困る。

「だが、何か誘っている感じがしたな……あそこまで大胆にシュトレイゴイカバルが動くとは思えないしなあ」

三村はレモンティーを啜りながら呟くと、つくづくコーヒーが飲みたいと思う。

幸成もコーヒーに、ではなく先程の呟きに同意した。

「確かにそうだな。まだ、はぐれヘクセ供の方がしつかりと隠れていたからな」

「何らかの組織の意図を感じられるというか、そんな感じだよね？」

ボクは雑魚を囮にしてこちらの戦力を観察したって感じたな」

戦力の観察？

という事は白狐はシュトレイゴイカバルのヘクセか？

幸成が白狐を頭の中で反芻させていたその時、扉をノックする音が聞こえ思考を止めた。

「はい、今出ます」

三村はレモンティーを一気に飲み干すと扉に向かって歩き、ドアノブを回した。

ドアの向こうに立っていたのはセーラー服に身を包んだ可憐な美少女と小柄で可愛い少女だ。

「あれ？可愛らしいお嬢さん方だ」

その覚えのある声を聞いて幸成は三村の隙間から顔を覗かせる。やはり、とでも言うべきだろうか？

沙耶那と菜月がドアの前に立っていた。

向こうもこちらに気付き、軽く会釈する。

「初めまして、三神沙耶那、こちらは友人の藤宮菜月です」

「こりやまた、ご丁寧に……自分は幸成の保護者の直江三村。よろしく」

三村は頭に手を当てると頭を下げると、ニヤニヤしながら幸成を一瞥する。

「何だ、幸成？もう彼女が出来たのか？」

「違うよ」

幸成は即座に否定すると紅茶を飲み干し、立ち上がる。

「沙耶那さん、菜月さん。紅茶でも飲んでゆつくりして行って下さい。俺は今から歯を磨きますから」

「では、お言葉に甘えて休ませてもらいます」

「そうだね！モーニングティーって言うの？憧れてたんだよね」

「どちらかと言えばあ、アフターディナーティーですねえ。アーリーモーニングティーは朝食前の寝覚めのお茶、そして本当のモーニングティーのイレブンシスはあ、その名の通り11時前の飲みますう。初めましてえ、比叡彩花ですう。二人の姉とも思ってくださいいねえ」

彩花はマグカップに二人の飲む紅茶を入れながら間の抜けた声で笑う。

相変わらずというべきか、手際がいい。

「ゆつくりしてってくださいいねえ」

彩花はそう言って二人にお茶を差し出した……

2 - 2 : 学校へ

ブレザーに着替え終えた二人はそれぞれの部屋の鍵を閉めると零荘の階段を下り、HAWK隊員の集会所として使われている「103号室」の扉を開けて挨拶をした。

「行ってくる」

幸成の声に三村は「行つてらっしゃい」と答えた。

傍目から見れば仲の良い住人達にしか見えない。

仕事仲間と伝えているからそれも違和感無いだろう。

四人が学校へ歩いていけると沙耶那が口を開いた。

沙耶那からほのかにアールグレイの独特の心地の良い香りが漂い、

幸成は頬を緩ませる。

「最初、幸成君のお父さん見た時ビックリしましたよ。幸成君達の声が聞こえるからノックしたら凄く大きな人が出て来たんですから」

「そうだね。でも、何か全然似てないね？幸成君ってお母さん似？」
返答に困る質問だ、と幸成は苦笑いを浮かべてしまう。

HAWK隊員の素性はそれぞれが殆ど知らない。

軽口をたたき合う二人でさえ、何故HAWKに入ったのか分からないのだ。

「……俺には母親と過ごした記憶が無いんだ」

元々捨て子で施設にいたとは言えなかった幸成は自嘲しながら呟いた。

無論、二人は申し訳なさそうに表情を歪ませる。

それを見た幸成は「気にしなくていいから」と笑って見せる。

二人は分かったと笑みを見せるもやはり申し訳なさそうだという表情は変わらない。

「それよりさあ」と切り出したのはロイだ。

こういう時には非常に役に立つ……もっとも任務の時は今以上に役に立つのではあるのだが……ロイは話の転換には最適な人物だ。

「ここってどんな祭りがあるんだ？」

大方、飛び出すのは女の子の話かと思っていた幸成は、肩透かしとでも言うべきか、僅かに感心する。

「華景市には二つの祭りが有ります。明日の三日間の連休にこの街で桜祭りという物が開かれます」

桜祭りと言っても、桜の木には芽しか生えていないが……

幸成は季節外れだと思ったのが聞こえたのか分らなかったが、沙耶那は笑みを浮かべながら続ける。

「桜祭りと言っても花見のような物ではなく、桜の花が咲く事を願う為の祭りです。昔の風習と言いますか、儀式のような物ですね。

勿論、一日目は私の神社で舞が披露され、二日目からは露店が並びます」

「サヤの踊りって凄いなだよ？優雅って言うのかな？巫女装束着てさ！時代劇のお姫様か巫女さんがやるような踊りをサヤがやるんだよ」

「それは凄いな。明日が楽しみだよ」

幸成は沙耶那に笑いかけると、沙耶那は恥ずかしそうに顔を赤くした。

その可愛らしい様子に幸成は思わずときめく。

(何か、可愛いな……)

沙耶那はスタイルもいいし、アイドルのようで美少女というに相応しい。

そもそも、幸成は同年代の女性と触れ合った事がなく、恋という経験をしたことが無い。

それもあり、初めての感情に幸成は戸惑う。

「それでももう一つのお祭りというのが夏祭りです。これは盆踊りが行われ、露店並びます。これは街全体が一丸となりますのでとにかく面白いお祭りですよ」

沙耶那は優しく微笑むと幸成は空を見上げた。

この街はこんなに良い街なのに……

古い教会に集まった6人の男女。

男女はそれぞれ机に向かい、話し合っていた。

会議の張り詰めた雰囲気や談笑といった空気ではなく、緊迫した空気がだ。

「……やはり、ディック・チャンバーは死んだか」

「所詮、奴はこの程度だったのよ」

「御蔭で敵の戦力を知る事が出来ました」

「へっ！たかがガキが一人だろ！？俺が片付けてやるうか？」

「……焦る……駄目……」

「そうですわよ。私の放った『虫』も動いてますわ」

「チッ！」

男は舌打ちをし、机に足を乗せた。

「我々にはまだまだ時間がある。焦る事はないさ」

リーダー格の男は引き攣った不気味な笑みを見せる。

「それぞれの力を私は信用している。勝利をこの手に！」

男は教会に響く大きな声で怒鳴ると、それぞれが立ち上がった。

「全ては貴方の為に、ツエペシユ様！」

男女はリーダー格の男の名前を呼ぶと一礼したのだった……

2 - 3 : 接触

学校に着いた幸成達は昇降口の下駄箱に向かった。

それぞれの下駄箱は三年間使う下駄箱であり、変わる事はない。

幸成とロイは上履きを履くと、靴を入れる為に下駄箱を開けた。

「じゃ、行こう！」

菜月が子供のように無邪気な笑みを見せると沙耶那も笑みで答える。靴を入れたロイが何故か固まっている幸成を見る。

「どうした、幸成？」

「……これなんだが……」

固まり、困惑する幸成は下駄箱から三枚の手紙を取り出し、ロイに見せた。

ハート形のシールで封をしているものやピンクの手紙、ルーズリーフを折り畳んでペンで装飾した手紙と様々だ。

「何だ……これは？不幸の手紙か？」

「貴様！モテやがって！！何なんだ！！？」

「知らねえよ！！！」

騒いでいた幸成とロイに気付き、沙耶那と菜月が二人に駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「コイツ、いきなりラブレターもらってやがる！畜生！！羨ましいぜ」

「変態さんには無縁だもんね」

菜月は相変わらずのアイデンティティクラッシュ技術でロイを撃沈させる。

この子に一級アイデンティティ破壊師の称号を与えてあげたい。

幸成は苦笑いを浮かべると手っ取り早いルーズリーフを開き、読み上げた。

「いきなり手紙を書いてごめんなさい。私、直江先輩と手紙交換し

たいの……一年C組米山麗奈か……困るな、こづいづの……」

「……お前、露骨に酷いな」

「は？」

「普通、そういうのはこつそり読む物だぞ？」

「そうなのか？それは可哀相な事をしたな……」

どちらかというと天然だが、犯した自分の非は認めるのが彼の良い所だ。

幸成はカバンにラブレターを仕舞うと深い溜息を漏らす。

正直、馴れない物だと幸成は自嘲を浮かべる。

「幸成、その返事はどうするんだ？」

「そつだな……」

幸成が考えようとしたその時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「一先ず行きましょう？」

「そつですわね」

沙耶那の声に幸成は答え、歩き出し、角を曲がったその時だった。

凄まじい勢いで弾かれ、幸成は地面に尻餅を着く。

いくら訓練をした彼でも咄嗟の衝撃に耐える術は無い。

幸成が顔を上げると倒れていた少女も顔を上げた。

ストレートヘアのセミロングの髪をボブカットにし、右の前髪の部分を髪留めで止めている。

また、少女の顔は愛らしく、赤縁の眼鏡がアクセントになり、非常に可愛い。

この子は……

「君は……」

「……」

少女は謝るでも無く、廊下を駆けて行った。

と、少女が倒れていた場所には学生証が落ちている。

幸成は埃の付いたズボンを払うと学生証を拾い、開いた。

やはり、とでも言うべきだろうか。

二日目にして早くも接触が出来たのは非常に運が良かったとも言え

るだろう。

1年C組、神宮寺鳳寿。

HAWKの監視対象者である鳳寿と接触する機会が与えられた事は久しぶりに嬉しい事だとも言えた。

「危ないなあ！廊下は走っちゃいけないのに！！」
菜月は子供のように怒る。

本当に子供らしいその様子は非常に心和み、とても高校生とは思えない。

「何か急いでいたのでしょうか？幸成君、大丈夫ですか？」

「はい。取り敢えず、一時限目が終わったら返しに行こうかと……」

「あれ？言いませんでしたか？今日は二年生全クラス合同で体力テストが行われるので昼休みまで暇は有りませんよ？」

言っていないですよ、沙耶那さん……

この人はしつかりしているようで、時折何処か抜けている。

そして、やはりタイミングが悪いのはお約束なのか？

タイミングが悪い以前に、お世辞にも運動神経があまり良くないロイはそれこそ死刑宣告を受けたようだった。

学生の方に経験が有る人がいるだろうが、シャトルランや反復横跳び等の体力を著しく使う競技は鬱だろう。

しかも新学期早々、ましてや午前中全てとなると、運動神経の悪いロイには絶望だ。

「腹痛くなってきた」

「急に何言ってたんだ、ロイ？」

「授業が無いだけいいじゃないですか？」

沙耶那はのほほんと笑うと、ロイもいつも程ではないが嬉しそうな笑みを見せた。

「おい！お前達！もうすぐ本鈴が鳴るぞ！！教室に入れ」

職員室から歩いてきた職員が騒いでいた四人に注意をすると、本鈴が鳴り響く。

それを聞いた四人は慌てて教室に駆けて行った……

2 - 4 : 体力テスト

時計の針が11時を周り、小腹を空かせ始める時間帯。

その時間帯は早弁をして空腹を満たす人が多いだろうが、今日の華景高校は違った。

学生達が空腹さえも忘れる出来事が起きていたのだ。学生達は体育館に集まり、一人の生徒に注目していた。

その一人の生徒は言うまでもない幸成だ。

幸成は華景高校で行われた体力テスト行った全ての種目の記録を大幅に塗り替え、その様子を見ようと生徒達が集まっていた。

元々自衛隊の訓練で体を鍛え、体力徽章を有する幸成にとって、この程度の事はハッキリ言って造作もない。

そして今は20mシャトルランの最中だ。

20mシャトルランは、20mを特定の音楽が鳴り終わるまでにたどり着き、それを体力が続くまで繰り返す競技だ。

二回連続でミスをしたらその場で終了となり、さらに回数が増える事に音楽の速さが増す。

正直、体力の無い人物には厳しいであろう種目を幸成は涼しい顔で、180回近くまでやっていた。

そこまでいくと既にやっている人はいなく、体力自慢のバスケット部や野球部、陸上部らは幸成を何者だ、といった風に眺めながらも戦力に欲しいと思っている。

女子は容姿が完璧で他の男子がへたれ込む中、全く息を切らしていない幸成は注目の的だ。

100回付近で撃沈したロイは長々と続く、幸成のシャトルランを眺めていた。

不意にロイの後ろから沙耶那と菜月

「ユキ君って、何かスポーツでもやってた？」

「いいや、何も？」

スポーツじゃなく、自衛隊やってます、彼。

「私も160回が限界なので尊敬します」

沙耶那は汗を拭きながら微笑む。

女子で、しかも160回って十分凄いなだがと100回前後のロイは苦笑する。

ちなみに女子一位、総合二位の彼女も十分に化け物と言えた。

勿論、胸的な意味も含めてである。

彼女の大きな胸は体操服にはキツイ為、殊更胸を強調し、止めと言わんばかりに走る度に上下に揺れる胸の前に、男子はテント設置者と出血多量者多数という状況だった。

ちなみにロイは前者である……

ついでに言うと、大きなお友達は菜月のぶかぶかの体操服という緩ロリな格好に全滅したのだった……

200回を越えた辺りで先生は時間の尺という物で終わってしまった。

同時に体育館には幸成を讃える拍手が鳴り響く。

「まだ行けるんだがな」と小さく呟いた幸成は流れ出る汗を拭き取った。

「余裕だな」

ロイは幸成にスポーツドリンクを投げて寄越し、幸成はそれを一気に飲み干す。

500mlのスポーツドリンクはあっという間に空のペットボトルに変わった。

「沢山飲むんだね。足りなかったら有るよ？」

菜月は水筒を差し出すが、幸成は首を振る。

他の大きなお友達は幸成に嫉妬の眼差しを見せ、他の女子も菜月が断られた事で各所でガッツポーズを見せた。

「幸成君は凄いです。まだ行けそうですね？」

「正直、まだ余裕です」

幸成は笑うと、最後の種目であるハンドボール投げが行われた……

「あゝ、疲れたあ!!」

ロイは屋上で青空を見上げて叫び、サンドイッチを口に運ぶ。

「疲れてるな、ロイ」

「お前は疲れなさ過ぎだ」

ロイは人差し指を幸成に突き付け、サンドイッチを食らう。

「そう言えば、忘れていたな」

幸成は胸ポケットから鳳寿の学生証を取り出した。

「返して来る」

「そうですね。持ち主の方も困っているかもしれませんからね」

沙耶那は弁当箱の蓋を閉めると、手ぬぐいで口を拭く。

「悪い、ロイ!ゴミを捨ててくれ!」

幸成は結んだパンの袋をロイに投げて、階段を駆け降りて行った。

その背中を見送った沙耶那と菜月は今までに見ない張り切りように、目を白黒させる。

「何であんなに張り切ってるのですか?」

「……さあね」

ロイはいかにも知らないという口調で二人に呟くと、幸成の駆けて行った階段を一瞥した。

「幸成君は今朝の人が好みという事ですか?」

「それは違うと思うぜ、沙耶那さん」

「確かに変態さんみたいに誰彼構わずって、訳じゃなさそうだからね」

「うつせえよ!!この小学生!」

「しょ……屈辱だ!!抗議を申し立てるっ!!」

腕をちぎれんばかりに振る菜月はまさに小学生だった……

2 - 5 : コンタクト

屋上を下りてすぐ、教室棟の四階である一年生の教室だ。

一年生は先程の幸成の体力テストの結果で持ち切りだった。

そこに幸成が来れば盛り上がりが最高潮に達するのは必然。

C組に向かう幸成に気付いた女子は教室から顔を出して黄色い声を上げる。

無論、幸成は何を騒いでいるのか分かっていない。

幸成は髪を掻き上げるとC組に入った。

言うまでもなく、とんでもない歓声が上がリ、幸成は困惑した表情になる。

「直江先輩、あんたに話があるんじゃない？」という声が聞こえてきた。

本人に自覚有りか？

幸成は話が早いと小声で呟くと「ここに……」と切り出した。

「はい！！」

幸成が言うより早く手を上げたのは目的の人ではなく、今時のギャルといった感じの女性だ。

幸成は困ったように苦笑いを浮かべると「ここに鳳寿って人いるはずなんだが……」という声に周囲がざわつき、手を挙げた少女は笑みをゆつくりと消して手を下げていく。

「神宮寺ならそこに……」と人だかりを指差すと同時に人だかりが割れる。

その先にはこちらに見向きもせず、頼杖を付き、ただ外を眺めている鳳寿の姿があった。

鳳寿は世の中を悲観するような、或いは何かを諦めたような目で外を眺めている。

暗い影を落としている鳳寿に幸成は歩み寄ると学生証を差し出す。

「朝にぶつかったよね？その時に落としたよ。学年を調べる為に中

を見させてもらいました」

「……」

鳳寿は幸成を見向きもせず外を眺めている。

苦笑いを浮かべた幸成は困ったように後ろ髪を搔くと机の上に学生証を乗せた。

「ここに置くからね」

「……ん……」

鳳寿は短く答える。

暗い、暗過ぎる……

幸成は困ったように監視対象者である鳳寿を見る。

幸成にとって監視対象者と親しくなる事が任務で有り、今回の接触はまたとない機会であった。

が、しかしこのような事態になるとは……

「じゃ、行くね」

接触失敗、と考えるに相応しい結果だろう。

が、不意に幸成はある事実を思い出した。

「そうそう。明日、祭りが開かれると聞いたんだけど、一緒に行かないかな？」

我ながら、ロイみたいに必死だ。

馴れない台詞を言った事で全身が粟立ち、軽く身震いする。

あの馬鹿はこれ以上の事をよくもまあ、恥じらいも無く言えるものだと感じてしまう。

幸成が顔を引き攣らせていると窓を見ていた鳳寿がこちらを一瞥した。

すぐに窓に目を戻したが、小さな声で「……ん」とだけ答える。

「ありがとう」

祭りの存在を教えてくれた沙耶那への感謝の気持ちと今日の運の良さに感謝だ。

幸成は教室の出口に向かいながら、嬉しさを隠したその時、裾を掴まれ、幸成は歩みを止めた。

軽く一瞥すると、後ろには先程、手を挙げた少女がこちらを見上げている。

不安そうにこちらを見上げている少女は「手紙の返事は？」と問い掛けた。

「手紙？」

そこまできて、初めて幸成は貰った手紙の一人が1年C組だったことを思い出す。

確か米山麗奈とか言ったか？

「悪いが付き合うつもりは無いんだ。ゴメン」

あっさりと言で返した幸成は我ながら酷いなど内心呟く。

しかし、少女の返答はある意味で幸成よりも残酷だった。

「は？私よりもあのブスを選ぶ訳？」

その一言に幸成は眉を潜める。

何様だ、コイツ……

人をブス呼ばわりするこの少女は、女性絡みに疎い幸成の目から見てもそれなりに可愛い部類には入るだろう。

だが、白黒ハッキリ付けるなら彼女よりも鳳寿の方が可愛いと、幸成は思った。

そもそも、本人を目の前にそういう心ない事を言う時点で人として問題外である。

「最低だな……」

幸成は小さく呟くと、思わずへくせに向ける時のような冷酷な視線を向けた。

仮にコイツがへくせだったら、幸成は問答無用で撃ち殺していただろう。

そこまで、幸成はこの少女に殺意にも似た感情を抱いていた。

幸成はすぐに前を向くと教室を出て行く。

早足で三人が待つ屋上に向かう幸成のその後ろではヒステリックに喚き散らす少女の声が響き渡り、その一言に幸成は歩みを止めた。ヒステリックだけだったら別段相手にするつもりは無いが、混じっ

て聞こえた一言が問題だったのだ。

「ブス！！放課後、いつもの場所に来いよ」

幸成は舌打ちしたその時、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。

確実にヤバイ……

しかも俺の一言のせいでは……

幸成は自分の任務を優先した軽率な行動を恨む。

拳を強く握り、引き返そうと後ろを振り返ったその時、ロイ達の姿が見えた。

「幸成、どうした？もう昼休み終わるぞ？」

「……ああ」

幸成は拳を緩めると足早に三人に駆けて行く。

「どうしたの、ユキ君。顔が引き攣ってるけど？」

菜月は幸成の顔を覗き込むと、首を傾げる。

いつもだったらこのような動作に頬を緩ませるが、今はそんな気になれない。

「幸成君、どうかしましたか？具合でも……」

「いや、大丈夫だよ。何とも無い」

幸成は笑みを作ると否定する。

責任は俺が取らなければならぬ。

幸成は緩めた拳をにぎりしめると自分の教室に歩いて行った……

2 - 6 : 責任

一日の日程が終わりホームルームが終わって、担任教師が出て行ったのを確認した米山麗奈は外を眺めている鳳寿に歩み寄った。

麗奈の目は冷たく鳳寿を見下ろし、顎でしゃくる。

鳳寿は無言で立ち上がると麗奈の後ろを歩いていった……

「幸成、帰るぞ」

ロイは幸成に笑いかける肩に腕を廻すが、幸成はその腕を払いながら立ち上がる。

「悪い、ちよつと忘れ物したから先に帰ってくれ」

幸成はそう言くと、カバンを片手に教室から飛び出して行った。

「ロイ君、幸成君はどうしましたか？」

「さあ？何か忘れ物したとかで……教科書とかは机の中だったので……」

「どうしたんでしょうか？」

「そんな事より沙耶那さん！私と一緒に恋という忘れ物を探しに行きませんか？」

「え〜つと……ごめんなさいね」

沙耶那に当たって碎けたロイは呆然としていた。

「私は明日の祭りの事で校長先生にお話が、ナツも園芸部の仕事がありますから……それにしても幸成君はどうしたのでしょうか？」

沙耶那は小首を傾げた……

飛び交う罵声と体にかけられる水。
ただ、濡れてそれに耐えるだけ……
ただ、それに耐えていればいい……
奴らが気が済むまでただ耐えればいい……
鳳寿は手首を針金で縛られて、まるで捨てられた人形のように転がされていた。

麗奈とその他に髪を茶髪に染めた男やいかにも不良といった男達五人が蛇口に付けたホースで鳳寿に水をかける。

「美少女が可哀相じゃん」

「美少女にこういう事するのって良いよな！そそられる」

「美少女、美少女ってブスじゃん」

麗奈は煙草を口に運ぶと紫煙を吐き出す。

このような所を見られれば停学、悪くて退学だがここは人通りの無い学校の奥のトイレだ。

昔、ここで煙草を吸う生徒がいた為、人気の無いこのトイレは鍵が掛けられている。

しかし、針金でも簡単に開く鍵の為、このように使われていた。

鳳寿は濡れた顔が無表情に、横たわっている。

ただ何かに悲観したように……

「何だよ、その目は？ああん！？」

鳳寿の腹に蹴りが叩き込まれ、鈍痛に顔を歪める。

口が切れて、撒き散らされた水が染みる。

口から垂れてきた血が水に混じり、赤ではなく、茶色に変色した。

「おい。コイツ、ヤッチまわねえか？」

「いいねえ」

男達は下卑た笑みを見せるとベルトに手を掛けた。

……アタシ、今から犯されるんだ……

ただその認識だけをした鳳寿はただ水浸しになった床を見つめる。
ただ耐えるだけ……

男が鳳寿のセーラー服に手を伸ばそうとしたその時だった。

「そこら辺にしとけ」

「そこら辺にしとけ」

五人の男と麗奈が振り返ると、そこにはカバンを肩に担ぎ、壁に寄り掛かっている幸成はネクタイを緩めながら片目を閉じて、赤眼・
・カラーコンタクトで隠しているが・・・で男を睨む。

「ああ？お前、誰だよ？」

「あれだろ？王子様だろ？」

「白馬の王子様ってか？ギャハハ！！」

「馬鹿らしいよな。王子様とかハーレムとか……ハッキリ言っ
てうぜえと思ってるぜ？」

幸成はカバンを放り投げると、ネクタイを解いた。

「だけど、テメエらみてえなクズはもつと嫌いだ」

「ふざけんな、ガキが！！」

男は怒鳴り、幸成に拳を振るうが幸成はそれを受け止め、思い切り握る。

男は怒鳴りの代わりに悲鳴を上げ、掴まれた指の骨が軋む。

「喧嘩つてのは相手を見極めてやるもんだぜ？」

幸成は耳元で囁くと悲鳴を上げる男の頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。
悲鳴を上げる男を一瞥すると、口元を歪ませた。

「次は誰だ？」

「なめやがって……！！」

今度は二人が幸成に駆け寄って来た。

幸成はリーチの長い足で、男の一人の顔面に回し蹴りを叩き込んだ。男は鼻血を噴き出すと濡れた地面に卒倒する。

続けてその反動を利用した右フックがもう一人を弾き飛ばす。半目になると笑う。

「おいおい？また立ってくるとかないのかよ？二人でこれじゃ、まだ泣きながら腕を振り回すガキの方が強いぞ？」

幸成が嘯いたその時、最初に倒した男が幸成を羽交い締めにする。この機を逃さんとばかりに駆け寄る男がギリギリまで迫った刹那、幸成は壁を蹴る要領で、迫った男の腹を蹴って宙返りし、羽交い締めから逃れ、羽交い締めしていた男の後ろを取る。

男が慌てて振り返るが、それと同時に幸成のアップパーカットが顎に決まり、吹き飛ばされた男はもう一人を巻き込みながら床に転がった。

「いい加減に気付けよ。お前達は俺には勝てない」

10歳の時に三村に拾われて、自衛隊の訓練受けて、今は吸血鬼を相手にしてんだ、年期が違うよ。

幸成は内心笑うと目配せをして行けと促す。

それと同時に無傷の男は気絶した男に肩を貸すと慌てて立ち去り、その後ろを残りの男達が着いて行く。

取り残された麗奈を見下ろした幸成は深い嘆息を漏らした。

「……このやり口からいつて常習犯なんだろ？いい加減こんな馬鹿らしい事はやめておけ」

幸成が言い終わるより早く、麗奈は鍔を取り出し、刃を開きながら幸成に切り掛かる。

今の若い人はキレやすい等と聞いた事があるが、まさか刃物まで持ち出すとは想定外の事態だった。

しかも少女が……

幸成の脇腹に鋭い痛みが走るが、HAWKにおいては日常茶飯事。その馴れた痛み顔に顔を歪めると、ニツと笑った。

「馬鹿な事してるな！」

幸成は怒鳴ると麗奈の手に手を掛けながら鉄を引き抜いた。

血濡れの鉄を片手に、無表情で駆けて行った麗奈の背中を見送ると、幸成は腹に手を当てる。

日常茶飯事とは言えども痛いものは痛い。

貴方も殺して私も死ぬ……

そんな事にならなければ良いがと幸成は溢れ出る血を右手で押さえると苦笑いを浮かべる。

(死のうとしても簡単には死ねないからなあ……)

それが彼の特異体質とでも言うべき事であり、この年齢で自衛隊の特殊訓練を受けてHAWKに抜擢された理由であるから、利点ではあるが、血生臭い事はここまで来て御免である。

幸成は腹から溢れる血を押さえながら床に倒れている鳳寿に歩み寄った。

「……大丈夫か？」

「……ん……」

鳳寿の縛られた針金を解くと、手を差し出した。

「立てるか？」

「……ん……」

鳳寿は短く答えると、幸成の手を握り返した。

「……何故来た……？」

初めての鳳寿の問い掛けに幸成は驚いたように目を見開いた。

「ああ、祭りに誘っておきながら待ち合わせ場所とか伝えてなかったから、伝えに来た……明日、9時に三神神社でいいよな？」

「……うん……」

鳳寿はそれを聞くと、無表情だがハッキリと答え、びしょ濡れのセーラー服のままトイレから出て行き、幸成は苦笑いを浮かべながらその背中を見送った……

2 - 7 : 痛苦

夕日に向かつて鳴く鳥。

これほど虚しい事は有るだろうか？

脇腹は傷が塞がったが、まだ疼く。

流石に回復力は高くても痛覚という物は残っている為、疼くという訳だ。

「畜生……女の方が露骨にえげつないぜ」

幸成は血で濡れたブレザーとワイシャツ姿で歩いて行く。

人目に触れにくい学校の裏門から出た。

「あれ？ユキ君、どうしたの？」

その声に振り返った幸成の目に、八重歯を覗かせて笑っている菜月が映った。

菜月の手にはジョウロがあり、近くには花壇がある。

「酷いね？どうしたの？ブレザーとかワイシャツが血で濡れたようになってるよ？」

「あ……」

久しぶりに返答に困る質問だ。

そう言えば、自動販売機にトマトジュースが売っていたような……

「さっきトマトジュース飲んでたら嘔せて、零してしまっ……」

「見掛けによらずユキ君はドジだね」

菜月は笑つと花を見て、水をかける。

花はまだ芽が出ていない。

「その花は？」

「アケイレギア・ブルガリス。キンポウゲ科オダマキ属の花」

「詳しいね。花が好きなんだね」

「うん。花は……植物は嘘をつかないから」

その一言に幸成は菜月を凝視する。

菜月は何処か淋しそうで、今の彼女はロイに毒舌を吐く彼女とは違

う。

何時もなら小学生と見紛うが、今は小学生にも高校生にも見えない。哀愁の漂う女性の、独特の色香を醸し出していた。

「植物は注いだ愛情の分だけ答えてくれる。信用を裏切らない。私利私欲に走る人間とは違うね」

信用を勝ち取る為には平気で嘘をつくエージェントやスパイ。

まるで自分の事を言われているようだった……

いや、見透かされていた？

「ところで明日のお祭り、待ち合わせますか？」

「あれ？何？誘ってる？」

「いや、別にそういう訳じゃ……」

「きゃ〜！男は狼だ〜！！」

頬に手を当て、身をもじもじと動かす。

狼の単語に幸成は顔を引き攣らせた。

こつも連続で心臓に悪い単語を出されると幸成も気が気ではない。

「焦ってるの？可愛い……」

可愛いと、しかも小学生のような可愛い女の子に言われたのは初めてで、自嘲してしまうのは必至……

「そうか……」

「釣れないなあ！で、そつちの都合は？」

「こつちは鳳寿さんと9時に沙耶那さんの神社で待ち合わせてます。そこに合流するという形に出来ませんか？」

「鳳寿さんって、神宮寺家財閥のお嬢様の？」

「はい」

「もしかして玉の輿狙い？」

「違いますから。ぶつかったから、そのお詫びに……！」

「分かってるよ！やだなあ、本気にしちゃって」

菜月のはほとんど手を振り、花の葉を撫でながら優しく微笑んだ……

「ふざけやがって!!」

男の怒鳴り声が響き渡り、鉄パイプの音が古い教会に轟く。今だに癒えぬ傷からは血が垂れてくる。

「直江とか言ったか？あの新参者！」

「麗奈、テメエが鳳寿に一泡吹かせたいって言ったからだぞ」

「何よ！私が悪い訳!？」

「人刺して何言ってるんだよ！」

男は煙草を吹かしている麗奈に怒鳴り、麗奈は気まずそうに目を逸らす。

その時……

「妾達のテリトリーで内輪揉めとはなんと低脳な」

その声に、幸成に叩きのめされた五人と麗奈は古いステンドグラスを見上げた。

六人の目に梁の上に座る金髪のロングヘアを靡かせた妖艶な女性が映る。

女性は赤いゴシックドレスに身を包み、手を口に当てて優雅な笑みを浮かべていた。

「誰だよ、おばさん!!」

その一言に女性は梁から降り、歪んだ笑みを見せた。

「シュトレイゴイカバールの痛苦のミラルダにおばさんとは失礼ね、下等生物が!!」

女性は穏やかではない叫び声をあげると、右手を掲げた。

同時に六人は悍ましい物を見て悲鳴をあげる。

誰もが嫌悪を示す「それ」は六人の体を一気に包み込み、確実に喰らっていく。

悲鳴と断末魔を、心地の良いクラシックかオーケストラのように聞く女性の目に映るは自分の僕達……

その光景は傷を負った牛が血の匂いで凶暴化したピラニア・ナツテリーに襲われる様子に似ていた。

瞬間に皮膚を食い破り、内臓を食い破り、心臓を食いつぶす。

普通の人なら直視出来ない光景を眺め、興奮したように頬を朱に染めるこの女性は明らかに異常であった。

僅か30秒の時間でその場に残ったのは、先程まで生きていたとは思えない、深紅の血液に濡れた六つの人骨だけだ。

その光景を見た女性は教会に響き渡る狂笑を口から発したのだった

……

2 - 8 : 謝礼

30分程菜月と世間話をし、20分の通学路を歩き、帰路に着く幸成。

幸成は夕と夜が混ざり合い、赤黒い色を映し出している空を見上げて溜息を付く。

もし、自分に普通に親がいたら、沙耶那や菜月、鳳寿のように――
- 鳳寿は孤立しているが――普通に学校の生活を楽しめていたのだろうか？

10歳の時にヘクセと関わって三村に拾われてから人生が変わったのは分からないし、関わってなかったら逆に最悪の人生だったかもしれない。

その時には名前すら無かったし、帰る家も無かった。

喋る言葉も無かったし、書く言葉も有りはしなかった。
それを三村が拾ってくれて、今の自分が有る。

自衛隊の訓練は辛かったし、勉強もやりたくはなかったが居場所が有ると思えばこそ成し遂げられた。

16歳の時にHAWKに配属されてからは毎日ヘクセを狩って……
もしかしたら、今回の事態は運が良かったのかもしれない。

学校という場が与えられたのだから……

幸成が空から目線を外し、栗荘を見た。

と、そこには黒塗りのバンがある。

見たことが無いその車から出て来たのは黒のスーツにサングラスを付けた男だ。

手にはアタッシュケース。

仮にこの男がシュトレイゴイカバールの所属だとしたらアタッシュケースには可能性としてMP-5Kが納められているだろう。

MP-5KのKは「kurz^{クルツ}」、ドイツ語で短いを意味し、「H&K社」を代表するサブマシンガン「MP-5」シリーズの

小型にした銃だ。

MP-5Kは小型であり、専用のアタッシュケースに入れればそのまま運用する事も可能だ。

見知らぬ男がアタッシュケース、そしてシュトレイゴイカバールのヘクセと交戦した時に見た白狐……

白狐がシュトレイゴイカバールに仇成す者の監視をしていたヘクセだとしたら、つじつまが合う……

「直江幸成君だね？」

男は笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

アタッシュケースに入れたMP-5Kは狙い難い為、近距離で使うのが普通だ。

調度、このように近寄って必中射程に入ったら持ち手に付いた引き金を引けば……

いくら幸成でも近距離で、多数の弾丸を撃ち込まれて生きていられる自信は無い。

幸成が唾を飲み下したその時、男がアタッシュケースを持ち上げて開いた。

そのアタッシュケースの中には札束が詰まっている。

それも諭吉である。

ザツと100万以上あるだろう。

取り越し苦労よりもこの諭吉の束に幸成は激しく狼狽する。

「なっ……はあ!？」

「龍一郎様の御命令です。鳳寿様を助けて頂いた御礼の500万円です。どうか、お受け取り下さい」

「いや……は?ええ!？」

龍一郎……

確か神宮寺財閥の当主の名前だ。

てか、御礼に500万円つてスケールでか過ぎだろ、神宮寺財閥!!

「あの……流石にお受け取りは……」

「しかし、主は是非、鳳寿様に良くして下さい下さった幸成様に受け取っ

て欲しいとおっしゃっています」

部隊の資金には調度良いというのが本音である。

(そもそもHAWKの予算の倍以上どころか、完全に凌駕してやがる……)

H&K社の狙撃銃「SL-8」のサブレッサー標準装備モデルの「SL-9SD」や同じく同社のサブマシンガン「MP-5SD6」を購入すれば武装が大幅アップとなる。

もつとも、対ヘクセ用拳銃「スコトス&フォース」も敵に対して、流体性力学的ショック、簡単に言うとな体内の神経を伝播し、対象に即死並の威力を与える攻撃力を持っているのだが、要はリスクの問題だ。

流石にガンカタ宜しく二丁拳銃を接射で叩き込むのはリスクが高い。

目の前の大金を前に幸成は心が揺らぎそうになるが幸成は首を振る。

「流石に受け取れません。それに俺の一存で貰う訳にもいきません」

「なら親御さんにお話をしましょう」

そう言うと、男は栗荘の一室に歩いていく。

(しかし、まずいな)

目立つなと言われて目立ちまくりだ。

オマケに監視対象者の方からまさかの資金提供。

失態か、幸運かは別にして色々まずい。

半ば諦めたように幸成は頭を掻くと、男はドアをノックし、数秒して三村が顔を出す。

ブレザーに血が付いた幸成とアタッシュケースを持った男に、やはりと言うべきか、三村も同じ結論に達して身構えるが、男もそれより早く口を開く。

「神宮寺財閥の者です。幸成君の保護者様で間違い有りませんね？」

「え、ええ……」

三村は何をやらかした、と目で訴えている。

(そりゃそうなるわな)

幸成は自嘲すると歩み寄る。

「お嬢様である鳳寿様を助けて頂いた御礼でございます」

その声と同時に開けられたアタツシユケースを見た三村は間抜けに口を開けて、何が何だか分からないといった風に500枚の諭吉と男を交互に見る。

「あの……はい!？」

誰だって動揺する額だ。

想像してほしい。

女の子を助けて、満身創痍で帰ったら500万円が家にある。

ハッキリ言つて現実味が無さ過ぎて今の状況すら把握出来ないだろう。

正直、まだヘクセの方が現実味がある。

「ほんの御礼です。どうぞ、お受け取り下さい」

「流石に無理です!！」

三村はアタツシユケースを突き返すと男は笑みを浮かべた。

「流石、鳳寿様を御救い下さった方のお父様だ。ですが、せめて50万円だけでも受けとつて下さい」

諭吉が50枚でも相当だぞ、と突っ込みたい衝動を抑えていると三村は「50万なら」と受け取った。

(可笑しいだろ!！)

幸成は驚くと男は「ありがとうございます。これで私もお叱りを受けないに済みます」と笑い、アタツシユケースを閉めた。

そして男は三村に一礼すると車に乗り込んだ。

黒塗りのバンを呆然と見送る幸成は車の影が小さくなったのを確認して、三村を見た。

「おっちゃん!！可笑しいって!！」

「流石に受け取りたくなかったが、少しは受け取らないとお兄さんが気の毒だろう」

一理あるが、少しが50万だと!？

幸成が内心叫んだその時、三村の太い腕が幸成の頭を鷲掴みにした。

「それより、聞きたい事があるんだ。幸成君」
三村は笑顔で言つと凄まじい力で幸成を中に引きずり込んだのだっ
た……

2 - 9 : 被害者

中に引きずり込まれた幸成が三村に事情を話し終わると深い嘆息を漏らした。

事情が事情であったし、むしろ信用を勝ち取れた可能性がある。

が、しかし、殺傷沙汰 - - 幸成はびんぴんしているが - - であるのもまた事実。

停学は確実、退学の可能性も十分有り得る。

「最悪だ……」

三村は頭を抱えると頭を掻いた。

「過ぎた事をクヨクヨ言っても……」

「仕方ないが、転校二日目でやらかしやがって……」

幸成の最後の一言を遮り、三村は再び深い嘆息を漏らした。

その時、ドアが開く音が響き渡り、「大丈夫じゃないですかあ？」と彩花が入って来る。

「立ち聞きさせてもらいましたけどお、その心配は無いと思いますよお」

彩花はそう言つと部屋に上がり込んだ。

「だってえ、相手はランチをしたうえにい、犯そうとしたんですよ？それを考えたらあ、そいつらが密告する可能性は無いと言えます。それに幸成も刺されてますからあ、間違いなく非はあちらですよお？」

確かにその通りだったが、奴らが密告したとして、果たして本当の事を言うだろうか？

そもそもこちらも手を出している為、正当防衛が適用されるかさえ怪しい。

「まあ、その時にならなきゃ分からんだろう」

「そうですねえ。そういえば貰った500万円は何処ですかあ？一人100万円の山分けで調度良いですからあ……」

やはりこの人は金が目当てだったか……

「50万円しか貰ってないから……」

「丸が一つ少なくなっても十分ですよ？ 貰えるお金は貰います」

「いや、これは防衛省にしっかり報告して、今後どう扱うか検討する必要がある。下手をすりゃ賄賂に成り兼ねないからな」

「えええ！？ 別にあちらが気持ちと言っているんだからいいじゃないですかあ！」

彩花はいかにも不満です、と主張しながら頬を膨らませる。

三村の対応は当然なのだから仕方ないが、またとない資金調達の機会であり、逃すのは勿体ない。

上手く、優にやらせれば改造武器が新たに作られるのだから……

「勿体ないですよお？」

「とにかく、今は防衛省に掛け合ってみる。勿論、直に、だ。下手をすりゃエシユロンに探知されて、米軍がでしゃばって来るかもしれないからな」

エシユロンとは簡単に言えばアメリカのNSAが保有する、電話やメール、インターネットを監視する大規模な盗聴器なるものだと思っ
て欲しい。

日本には無いと言われているものの、どこまで信用出来るか疑われる。

今回の事で揚げ足を取られたらそれこそ面倒だ。

「という訳で、俺は今から防衛省に向かう。四人はしっかりとヘクセの監視をするように！」

三村本人も、やはりこの50万円が欲しいらしい。

流石、貧乏部隊と幸成は笑った……

長い石段に並ぶ桜並木。

まだ芽しか出ていないこの木も春が本番になったら綺麗な花を咲かせ、薄い桃色の花びらを風に舞わせるだろう。

その石段には紅白の提灯が並び、明日にはお祭りが始まるのだと告げる。

沙耶那は最後の調整に見回りをしていた。

不備が有ったら申し訳が立たない上、楽しみにしている人達の期待を裏切る事になる。

その最後の見回りを行っている沙耶那の姿は典型的な巫女服で、巫女さん属性を持つている人は狂喜乱舞してしまう程に映えた。

明日の舞の練習も終わり、これが終われば、今日は何も無い。

昨日の夜は家の仕事の為に外出禁止令を破って外に出たが、今日はそれが無いのが嬉しい限りだ。

「明日が本番……凄く楽しみ」

沙耶那は微かに笑うと空を見上げた……

三村が防衛省に出向いている間、幸成達、HAWK隊員にもう一つ事件が発生していた。

「GARUDAが使えない!？」

幸成と優は同時にロイに迫ると、ロイは「落ち着け」と弁明する。

「そもそも偵察衛星が同じ場所に留まると思ってるのか!？」

「違うんですかあ？」

彩花は食後の紅茶を啜ると片目を開けてロイを見る。

ロイはやれやれと金髪の髪を靡かせながら首を振った。

「偵察衛星は低軌道を取って、一日一回から数回、同じ時間に同じ場所に現れる。その時間に固定しないと使うタイミング逃す。使用

出来る時間は19時から24時の間。つまり、まだ使えないんだよ！！」

ロイは時計を差す。

時計は18時を半分回った程度だ。

「しかも、華景市の上空にいない場合は米軍の管理下に置かれて使用出来ない」と契約書に書かれていただろう」

ロイの一言に三人は華景市に行く前に書かされた契約書の一文を思い出してそれぞれ納得する。

本当に特殊部隊の面子かと疑うが、改めて申し上げるが彼らは「その道」のエキスパートだ。

あくまで「その道」のであるが……

「という事は、その監視タイミングをシュトレイゴイカバールにバシたら悲惨じゃないか」

優の一言にロイは「だから言いたくなかったんだ」と苛立ち混じりに呟く。

「考えて見る！仮にここに盗聴器が有ったらさっきの情報が筒抜けだ。ここに来て俺達しか出入りしてないから良い物を……」

確かにロイの言う通りだ。

偵察衛星の監視時間は一定である為、その監視時間を避けて行動すれば空からの目をかい潜れる。

つまり、偵察衛星が形骸化しかねないという事だ。

「それで思い出したんだがロイ。昨日の衛星の写真を頼む」

「どうかしたの？」

「コイツが都市伝説の白狐を見たんだと」

「白狐ですかあ？」

「ああ。ヘクセを追跡中に偶然確認した。路地裏だったから衛星で確認出来るかは分からないけど……」

「それを今から確認すればいいだろ？」

ロイは嘯くとパソコンのキーボードを叩き、昨日の衛星の録画映像を出す。

録画映像は青で彩られ、幸成達は赤で、熱を発する移動物は白で映し出され、肝心のヘクセは緑で移される。

「何処で見たんだっけ？」

「ワイヤーでの移動中」

「ワイヤーでの移動中つと……これだ」

ロイは手早く映し出すが青く染められた路地裏には何も映っていない。

「何も映ってねえぞ？」

「確かに見たんだが……」

幸成は小首を傾げると何も映っていないHSVの映像を凝視した。

「まあ、そのうち分かるんじゃない？」

優は楽観的に笑うとテレビを付けた。

「おいおい、任務中にテレビを見るな……」

幸成が諫めたその時、テレビの向こう側で血相を変えた女性キャスターがマイクに言葉を吹き込んでいた。

（先程、山林で見付かった六人の死体の身元が判明しました。死体は華景高校の生徒で米山麗奈さんと……）

「嘘だろ！？」

「どうかしましたかあ？」

「コイツらだよ！！例の六人！」

幸成は映し出された六人の写真を見て怒鳴る。

その六人は間違いなく米山麗奈とあの男達五人組だ。

狐につままれたような顔の幸成は「何で……」と呟く。

仮にヘクセだとしたら複数か？

ヘクセは襲う相手の前提として、血を吸う相手が異性である場合が多い。

これは実際の吸血鬼伝承にも多く見られる事だ。

また、血を吸う事で、血を吸われた相手は性的快感を得る。

これも吸血鬼伝承に見られる事だ。

つまり、卑猥ではあるが結論から言くと吸血鬼の吸血というのは人

間で言うところの性交である。

ディック・チャンバーの時も、首に歯を突き立てて飲むのではなく、刃に付いた物を舐め取る程度であったのは記憶に新しい。

男のヘクセは女性を、女のヘクセは男性を襲うのが普通なのだが……

「恐らく逆鱗に触れたんでしょうかねえ？可能性としてはヘクセが複数かあ、ブチ切られたとしたか考えられませんからねえ」

彩花は人事のように咳くと紅茶を啜る。

逆鱗に触れたとなれば、話は早い。

（たった今情報が入りました！死体は白骨化していたと警察から発表がありました！）

血を吸われて縮んでも白骨化する事は有り得ない。

「やはりですかあ。言ってしまうえば想定範囲内ですねえ」

彩花はそう言うと、テレビのチャンネルをニュースからドキュメンタリーへと変えた……

3 - 1 : 祭り (前書き)

第3話

3 - 1 : 祭り

春風が吹く華景市はいつも以上に賑わっていた。祭りというだけに多くの人達が華景市に訪れている。

「何を着ればいいかな……」

幸成は布団の上に並べられた私服の数は非常に少ない。

（無難にワイシャツとズボンという出で立ちでいいかな？）

単にブレザーが無い学生服だと突っ込むのは無しだ。

幸成はワイシャツにネクタイを緩めに締める。

「まあ……大丈夫だろ」

幸成は笑うと財布と携帯電話をポケットに仕舞うとドアを開けた。

目的は鳳寿の信用を勝ち取る事と沙耶那、菜月の素性を正確に洗う事だ。

鳳寿の信用を勝ち取り、神宮寺財閥の事を聞き出すのが目的だが、

沙耶那と菜月の素性は知っておきたい。

沙耶那と菜月は親しいようで実際の所は何も分かっていないのだ。

沙耶那は三神神社の娘、菜月は華景高校の園芸部、知っているはその程度であり、情報と言える情報ではない。

この機会に何らかの情報を掴み、何らかの形で使えるように、要は協力出来るように出来れば最高だ。

幸成はドアノブを掴むと大きく深呼吸をした。

「Take the field!!（出勤だ）」

「お父様、舞踊の為の禊は終わりました」

白い小袖に緋袴の装束の沙耶那は笑顔で父親の三神翼みかみつばしに笑いかける。

「あゝ」

翼はやる気ない返事で答えた。

彼にとつて、寝ると食べると娘が唯一、やる気が出る話題だ。祭りの事は彼にはやる気が出ない話題の一つである。

毎年、準備をして色々大変であり、無気力な彼には苦痛以外の何物でもない。

ただし、娘である沙耶那の舞踊は別である。

「あなた？もつとやる気を出して上げて下さい」

「それなりに、な」

それを諫めたのは沙耶那の母親の三神望みかみのぞみは腕を組み、子供のように頬を膨らませた。

父親の翼は切れ長の瞳に端正な顔立ち、母親は可愛い端麗な顔立ち、そんな美男美女のカップルから生まれたのが沙耶那のような女の子だというのが頷ける。

「お母様、今日は良い天気ですね。お祭りには良い日和でございます」

「そうですね。とっても良い日和ですね、沙耶那」

望は優しく微笑むと空を仰ぎ見た。

参拝客の姿はちらほら見え、祭りが始まるのだと告げている。

「今日を楽しい日にしましょうね、沙耶那」

望は娘の沙耶那に優しく微笑み、沙耶那も微笑みを返した……

つくづく、自分はオシャレに向いていないな、と苦笑する幸成は三神神社に歩いていった。

多くの参拝客しかり見物客で狭い道が人で埋め尽くさされている。

(予想以上に人が多いな)

三神神社から零荘までは地図から見る限り、徒歩で約10分程度の距離だがこの人混みでは少し掛かりそうだ。

「ユキく〜ん!!!」

幸成を呼ぶ、元気な呼び声に気付き、向こう側から駆けて来る菜月を見付けた。

菜月はオシャレなフリルの付いた白いワンピースを着ている。

「……可愛いな……」と言って、幸成はポーチだと思っていた紐を見て、水筒だと知り、吹き出した。

「小学生の遠足か!？」

「何か言った？」

菜月は上目で幸成を見上げる。

いたいけな様子の菜月の可愛い仕草に幸成は頬を緩ませた。

「わざわざ向かえに来てくれてありがとうって言ったんです」

幸成は菜月の頭を優しく撫でた。

故意というよりは無意識といった感じで、菜月が小学生のような風貌だったからという事もあっただろう。

頭を撫でられた菜月は狼狽しながらも、主人に甘える猫のように気持ち良さそうに甘える。

「菜月「猫」の式が今、幸成の中で成り立った。

「ほええ〜、ユキ君の撫で撫で、とつても気持ち良いよ〜」

うつとりと目を細める菜月は愛嬌のある声で幸成にじゃれつく。

不意に冷静になって気付くと周りの視線が突き刺さり、幸成は頭を撫でるのを止めた。

冷静に考えたら幸成が小学生にちよっかいをしているようにしか見え、事情を知らない人が見たらロリコンやペドフェリアに成り兼ねない。

子供を恋愛対象に見たり、幼女で欲情したら犯罪者、現在の状況では言い逃れは出来ないだろう。

幸成は慌てて手を引っ込めると歩き出した。

「えっ?ちよつとユキ君!何で止めちゃうの!?!?ねえ」

菜月も幸成の背中を慌てて追い掛けた……

「チツ！幸成の野郎！三回爆発してエロゲの世界に転生すりゃいいんだ！」

憎らしいと言わんばかりに爪を噛むロイは二回の自室から楽しげに歩く幸成と菜月を双眼鏡で見つめる。

横で見ていた優も小さく呟いた。

「何で小学生と付き合ってるの！？横のロリ……M134で蜂の巣にしてやりたい……」

「なっ！？」

「M134 ミニガン」とは手っ取り早く言えばガトリングである。7.62×51mm NATO弾という高威力のライフル弾を使用するその重機関銃は毎分2000〜4000発で弾丸を発射する為、ヘリコプターはおろか人間なら木っ端みじんだ。

蜂の巣どころの話ではない。

「物騒な事を言うなよ、おっかねえ」

ロイは軽く震えながら恐怖しつつ、優を見る。

彼女ならやり兼ねないから恐ろしい。

「あらあらあ、嫉妬は恐いですねえ？お二人さんは少しは落ち着いて下さいねえ」

「彩花さん、こんなの見ても胸糞悪いですよ」

ロイは頭を掻きながら彩花に言うが、彩花は優雅に紅茶を飲む。

「それは貴方がお相手を見付けられなかっただけですよねえ？優の方も大好きで仕方ない幸成を誘えなかったからですよねえ？」

「それを言われると言い返せない……」

ロイと優は言い返せない歯痒さに溜息を漏らす。

元よりこの彩花という人物に勝とうという事が無謀である。

「さてさてえ？望遠レンズも取り付けてしっかり弱みを握りましようねえ？」

魔王か、この人は……

二人は抗えない歯痒さと幸成の弱みを握れる絶好の機会を逃さん為に望遠レンズを取り付ける。

ロイが望遠レンズを覗くと、意外にも二人はもう三神神社の石段の手前まで来ていたのだった……

3 - 2 : 選択

人混みの中を歩き、三神社社にたどり着いた幸成と菜月の前に黒塗りのバンが止まっていた。

見覚えのあるナンバープレートの車に幸成は歩み寄ると後部座席から白いセーラー服姿の鳳寿が出て来る。

鳳寿は相変わらずの無表情で幸成と合流すると、菜月を一瞥した。「待ちましたか？」

その問い掛けに鳳寿は首を振る。

正直、拍子抜けしたというのが感想であった。

鳳寿は財閥のお嬢様なのだから何かオシヤレな服を着てくると思っていたのだが……

「鳳寿さん。何で学生服？」

「……先輩も……」

そういえばそうだったな……

(それにしたって、貧乏人もとい貧乏部隊の俺はともかくお嬢様の鳳寿がセーラー服か……)

幸成は怪訝な表情で眉を潜めると「あれ？皆、お揃いでお出ですか？」と笑いながら沙耶那が石段を降りてくる。

沙耶那の大振りの胸のせいで神聖な巫女服が目のやり場に困る服装に変わってしまう。

幸成は沙耶那の胸をチラと見ると申し訳なさそうに空を見上げた。しかし、再び見てしまうのは男の性だろう。

「もう少しで舞踊が始まります。上でゆっくりして行って下さい。上には少しですが露店が並んでいますよ」

「サヤ、わたあめ有った？」

「ええ」

「やった！ちよっと買ってくる！ユキ君、先に行ってるね」

「私も舞踊の準備がありますので先に行きますね」

「分かりました」

二人の背中を見送った幸成は鳳寿を一瞥する。

鳳寿は笑うという事もなく、ただ無表情に俯いていた。

何かふさぎ込んだような鳳寿を一瞥した幸成は笑いかける。

「え〜つと、良い天気だね？」

「……………」

「傷、大丈夫？」

「……………」

「あ……………」

「……………無理しなくていい……………アタシに関わった人は皆死ぬから……………」
鳳寿はそう言っていると駐車させていた黒塗りのバンに向かって歩き出した。

それを幸成は腕を掴んで制止するが鳳寿は負けじと怒鳴る。

「何で皆がアタシを避けているか分かるか!？」

「……………」

「アタシに関わった人が皆死んでるからだ!!アタシは運命に呪われてるんだ!!」

「何を言ってる……………」

「昨日、アタシにちよつかいを出した奴が死んだし、先輩だって刺された!!アタシに関われれば死ぬんだ!アタシは死神だから……………」

「……………お前、馬鹿じゃねえの?」

幸成は面倒臭そうに髪を掻き上げる。

「この世に死神なんていねえよ」

吸血鬼はいるけど……………」

「あいつらは何かの事件に巻き込まれて死んだ。俺だって昨日刺されても、今日はぴんぴんしてる。お前が死神な訳あるかよ!!」

幸成は大声で怒鳴り返すと周りの参拝客が何事かと凝視した。

しかし、幸成はそれを無視して続ける。

「お前が何でそんなに暗いのかは知らない。だが、お前と関わっても俺は死なない」

お前と関わっても俺は死なない……お前と関わっても自分は死なない……かつて三村に言われた言葉。

10歳の時に三村に会った時に言われた言葉だ……

鳳寿は昔の俺みたいに何かを背負ってる。

重い十字架のような何かを……

「一人で抱えるな。俺は死なない。約束するよ」

幸成は俯く鳳寿に優しく笑いかけるとその手を離れた。

信用してくれるかは彼女次第だ。

今は任務の為ではない。

彼女の為だ。

彼女が一步步み出るか、今のままか、それは彼女次第であり、幸成もした選択肢であった。

どちらを選ぶかは彼女次第だが、前者は何が有るかは分からない、そして後者は安定しているが今のままだ。

俺は前者を選んだが、彼女は……

幸成は鳳寿を見つめると、鳳寿は車の中に入った。

無理強いではないのだから、彼女の選択にどうこう言いつもりは無い。

ただ残念ではある……

幸成はゆっくりと目を閉じ、髪を掻き上げながら溜息を漏らしたその時だった。

「……先に返って下さい……帰りは徒歩で帰ります」

「しかしっ!!」

「……聞こえなかった？」

鳳寿はそう言うのと有無を言わさないといいた風に車の扉を閉め、車から出て来た。

拍子抜けし、口をあんぐり開けた幸成に初めて笑って見せる。

「これから何処に行く？先輩？」

「あ……取り敢えず神社に行こう」

「……うん」

笑えば可愛い、と幸成は鳳寿を見て思う。

二人は黒塗りのバンを見送ると石段を上っていった……

3 - 3 : 舞

石段を上り終えた二人は改めて神社の人混みの多さに驚いた。神社は石段を上った場所が広い空間となっており、そこに屋台や露店が並んでいる。

そして沙耶那の舞踊が行われる場所は広場の奥にある古い建造物だ。その建造物は一般的な劇場の舞台のような構成で、その隣に本殿となっていた。

その本殿の後ろが沙耶那自宅である。

「人、結構多いな」

「……うん」

こりや菜月を探すのも一苦労だな、と思った矢先、幸成の名前を呼ぶ声が聞こえ、人混みを掻き分けてやって来る菜月の姿が見えた。

菜月の手には屋台の戦利品であろう、わたあめやリンゴアメ、シェイクが握られている。

それを抱える姿は殆ど元気な小学生だ。

菜月が合流すると幸成は笑いを堪えて言う。

「随分買ったな。お金、大丈夫か？」

「うん」

菜月は元気良く答えるとわたあめを口に運ぶ。

わたあめを小さな口で精一杯頬張る姿は愛らしく、思わず笑いが零れる。

「そんなに慌てて食べなくてもいいだろ！」

それを聞いた菜月は上目で幸成を見ると、わたあめを食べながら口を開く。

「だって美味しいんだもん！ユキ君も食べる？」

「いや、俺はいらない」

菜月はその答えを聞くと口を尖らせるが、すぐに鳳寿にリンゴアメを差し出した。

「はい。奢りだよ」

「……ありがとう……」

鳳寿は躊躇いながらもリンゴアメを受け取り、リンゴアメを舌先で舐める。

同時に鳳寿は目を見開き、「美味しい」と呟く。

「ところで沙耶那さんの舞踊はいつ頃始まるんですか？」

「あと少しかな？」

菜月はわたあめを頬張り、飲み込むいつもの水筒から飲み物を出す。

相変わらず同じスポーツドリンクで幸成は苦笑する。

ましてや、シエイクを買っておきながらそれを飲むかというツッコミもわかり。

幸成達は舞踊が行われる場所まで行くと、間もなくして笛の音が響き渡った。

見物客は一斉に建物に近付き、舞台の上を注目する。

そんな中、幸成は近くにあったパンフレット置場からパンフレットを取り、それを開くとその舞踊の解説を見る。

この舞踊はかつて人々に暴力を振るっていた鬼を退治する白狐の伝説を元にした物だ。

人々に狼藉を働き、沙耶那の先祖の巫女をさらった鬼は華景市の桜を咲かせないように呪いをかけた。

その鬼を退治する為に、華景市の守り神であった白狐が立ち上がり、白狐は鬼と相打ちになりながらも鬼を退治し、巫女を助け出す。

その白狐の死体を燃やした灰を巫女が撒くことで桜の花が咲き、白狐を神として崇め、巫女を「神子^{みこ}」として崇めた。

そして、毎年桜が咲くようにと祈願するようになったのがこの祭りである。

（まるで花咲か爺さんだな）

幸成はパンフレットを畳むと始まった舞踊を見た。

横笛の音色と和太鼓の音とともに般若の面を付けた男性が入場して

くる。

般若、つまり女の鬼が刀を振るい、舞を見せた。激しいその舞は鬼の恐ろしさを醸し出し、刃が太陽に照らされて煌めく。

その様に泣く小さな子供を見ると、秋田のナマハゲがやって来た時の子供の反応を思い出させる。

笛の音と和太鼓の音の調和が佳境に入ったその時、巫女役の沙耶那が綺麗な扇を持ち、舞を踊りながら舞台に入場した。刀と扇が舞い、巫女が捕らえられる場面が行われる。

鬼は巫女の首に刀を突き付け、沙耶那の後ろに鬼が回り込み、刀を突き付けながら奥に消えていく。

それと同時に白狐の面を付けた女性が現れた。

女性は巫女が連れ去られた事を嘆くと同時に笛の音が響き渡る。

それはまるで狐の鳴き声であるかのように……

狐の鳴き声が響き渡ると般若と沙耶那が現れ、和太鼓の音が響き渡り、テンポが激しくなる。

白狐と般若が刀で舞いながら交差し、演舞が数分行われた。

そして、和太鼓と笛の音色が落ち着くと、般若と白狐が退場し、残された沙耶那が自分を助けてくれた白狐の為に舞を踊る。

舞いはどこか儂げだが、優雅で……

菜月が語った通り、綺麗で美しいその舞いは見物客や参拝客の目を引き、幸成さえも見取れてしまう。

舞が激しさを増したと同時に桃色の紙吹雪が舞い上がり、一斉に拍手が鳴り響いた。

舞い散る紙吹雪の中で踊る沙耶那は非常に美しく、まるで本当に桜の中で踊っているようだ。

拍手が鳴り響く中、沙耶那は優雅な舞いを踊り続けたのだった……

3 - 4 : 合流

靴がコンクリートを叩く音が二つ。

片方はスポーツシューズともう片方がハイヒールだ。

「助けてくれ！！誰か！！」

男は大声で叫びを求めるが、今日は祭りの日で路地裏の人通りは無い。

転びそうになりながら逃げる男は深淵の中に向かって逃げていているようだ。

その後ろを追い掛けるハイヒールの女性はトンプソンM1928サブマシンガンの銃口を上に向けながら速足で追い掛ける。

M1928はギャング映画に必ずと言っていい程出てくるサブマシンガンで、シカゴマフィアに好んで使われ、独特の発射音から「シカゴタイプライター」や「シカゴピアノ」とも呼ばれていた銃だ。

「どこに逃げるのかしら？」

女は円形の50発入りドラムマガジンを取り付けたシカゴタイプライターを構えると引き金を引いた。

その名の通り、タイプライターを叩いた時のような銃声と同時に逃げていた男は地面に倒れる。

シカゴタイプライターが使用する・45ACP弾は拳銃弾としては強力な部類に入り、それで足を撃たれば転倒は必至。

男は転倒しながらも両手を交互に出して這うが、女の速さよりも遅く、逃げるのは不可能だ。

「誰か……」

血を右足の太股から滴らせ、力無く助けを求める男の足に、女はハイヒールを上げ、男の傷口に思い切り下ろした。

「ギヤアアアアアア！！」

男の絶叫が轟くと、ハイヒールが傷に食い込み、男の悲鳴がさらに凄みを増す。

「すぐに気持ち良くなるわよ？ 激痛の後の快楽程、良いものは無いわ」
そう言うと、女は失禁した男の髪を掴み、持ち上げると首に噛み付いた。
飛び散る鮮血が路地裏と女の服を濡らし、男の目は白目を向く。
涎れをだらし無く口から垂らす男は小刻みに痙攣させると、その男は意識を霧散させていった……

舞いが終わり、三人は沙耶那の家に向かった。

昨日のうちに菜月が沙耶那と連絡を取り、舞踊が終わったら合流する手筈を整えてくれたのだ。

本殿の裏手の一階建ての家に挨拶をして入った三人を迎え入れたのは白狐役をしていた沙耶那の母、望だった。

長い黒髪を後ろで束ねた美しい女性だ。

望は三人を見ると頬を緩ませる。

「菜月ちゃん、いらっしやい。それと、失礼ながらこちらの方達は？」

「転校生の直江幸成君と神宮寺鳳寿さん」

「初めまして、沙耶那の母の望です。娘がお世話になってます」

望は深々と一礼し、幸成も慌てて一礼する。

「いえいえ！！自分の方が沙耶那さんにはお世話になってます」

幸成は頭を上げ、何気なく前を見るとむっちりとした二つの丘があった。

ゆったりとした着物が沙耶那に負けない大きな胸で窮屈となり、幸成は天井を見上げ、その場しのぎでごまかす。

その時、奥の方から沙耶那の声が聞こえ、沙耶那は顔を覗かせる。

「すみません。待ちましたか？」

「ううん。待つてないよ」

菜月は笑顔を見せると、明るい赤の着物を着た沙耶那が出てくる。大和撫子を体言するような彼女は男性なら思わず溜息を漏らすような美しさが有り、可憐だ。

「ところで沙耶那？」

「どうしたの、お母様？」

「誰が幸成君と付き合ってるの？」

その問い掛けに幸成と沙耶那が顔を紅潮させて口を開ける。

「お母様！！」

「あれ？もしかして誰も付き合ってるの？幸成君はイケメンだから皆狙ってるでしょ？」

「……別に」

「ナツも恋愛対象としてはみてないな」

(露骨に傷付くな、その発言……まあ、そりやそうか)

幸成はばつが悪そうに頭を掻くと奥から男性が飛び出してくる。

「沙耶那が付き合ってるだー！？」

セミシヨートに白い着物を着た男性は日本刀を引き抜くと沙耶那と望の間に割って入り、幸成に刀を振り下ろした。

どうやら鬼の役をやった人物のようだ。

男性は左足を前にし、上段に構えた刀を斜めにした構え「左上段」で幸成まで、駆け寄る。

左上段で構えられた刀が振り下ろされ、空を斬る音が響き、刃が閃く。

慌てた幸成はその刃を眼前で受け止めると、男性は幸成を斬るべく切っ先近くの峰を押さえながら怒鳴る。

「娘を誑かしやがって！！」

「何の事だよ！？」

幸成は歯を食いしばり、その力に対抗する。

人生で初めて白刃取りを成功させたはいいが、後にも前にも引けな

いからにはどうしようもない。

驚いた菜月と鳳寿は玄關の壁に取り付き、助けは望めない。

「あなた！！真剣で切り掛かるのは止めて下さい！！」

真剣って普通に危ねえじゃねえか！？」

望の声を聞き、条件反射で受け止めて良かったとつくづく思う。

刹那、男性は望に頭を叩かれて刀の柄から手を離して頭を押さえる。

「つつ〜！！何をする、望！！天誅の邪魔をするな！！」

「あなたを天誅してやるわよ！」

望は腕を捲り、男らしく怒鳴ると、幸成を見て再び深々と頭を下げ
る。

「家の主人がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

幸成は真剣を地面に置くと深く嘆息を漏らし、白い刀身を一瞥する。
いくら回復力が高くても刀で頭をかち割られれば死んでいただろう。

流石に知り合いの家で、その父親に斬り捨てられるのは御免だ……

「こちらが夫の翼です。見ての通り親バカです……」

「ごめんなさい。怪我は無いですか？」

「あ、ああ……奇跡的に大丈夫……」

本当に奇跡的に……

「お父様も謝って下さい」

「笑えねえ……娘に纏わり付く虫を払うのは父親の役割だろ？」

「「謝りなさい！！」」

沙耶那と望はまるで母親か姉のような口調で翼に怒鳴り、翼は面白
くなさそうに口を尖らせる。

「……申し訳ありませんでした……一つ言っておく！！沙耶那を泣
かしたり、付き合うようなら斬って捨てる！！」

胸を張って堂々と宣言する翼は再度頭を叩かれ、よろめく。

下手をすればヘクセよりもこの人に、勘違いで殺されかねないと幸
成は苦笑する。

「では、行ってきます」

沙耶那が言っていると両親はゆっくり頷き、手を振った。

その見送りを背に沙耶那の家を出た四人は広場の屋台に向かう。楽しいはずの美少女との祭りだが、幸成はある意味で肩身が狭かった。

美少女三人と一緒にいる幸成に刺さる視線が痛い、痛すぎる。

(殺意すら感じるぞ、おい……)

幸成は紺色の髪を掻き上げると深い嘆息を漏らした。

「どうしたのですか？」

「いや、敵は一つだけじゃないって思ってたさあ」

沙耶那の問い掛けに幸成は苦笑いを浮かべ、三人は首を傾げる。

「そのモテモテの兄ちゃん！」

不意に肩を叩かれた幸成は条件反射で身構えるがそこには中年の男性が立っていた。

男性は煙草を口にくわえ、満面の笑みで近くの屋台を指差す。

「彼女達のプレゼントに射的でぬいぐるみを取らないかい、兄ちゃん？」

男性は射的の屋台の人らしい。

見ると可愛らしいぬいぐるみが並べられている。

「うわあ！！可愛い！！」

「幸成君、お願い出来ますか？」

「はい。一回何円ですか？」

幸成は財布を開きながら男性に問い掛ける。

「弾が3発で300円！6発で500円だ」

「じゃあ、3発分で」

幸成は100円玉を3枚取り出し、男性に手渡した。

「3発では取れないと思うよ、兄ちゃん？」

「やらなきゃ分かりませんよ」

幸成は笑って見せると射的台に立ち、射的用のおもちゃのライフルを掴む。

ボルトアクションを模したライフルのバネを後退させて、プラスチックの皿に乗せられたコンクをライフルの先端に詰める。

「それぞれ何のぬいぐるみがほしい？」

「ウサギのぬいぐるみをお願いします」と沙耶那。

「猫さん！」と菜月。

「……熊」と鳳寿。

ある意味それぞれ動物に例えたらそうなりそうだ。

「了解」

幸成はリアサイトの間フロントサイトが見え、目標に銃口が重なるようにライフルを構える。

そして、ゆっくりと力まずに引き金を引くと、レバーが前身してコルクが発射された。

コルクはウサギの額に当たり、台から落とす。

シガレットやラムネ等は簡単だが、ぬいぐるみとなると倒すのは難しい。

幸成はそれをたった一発でやってのけたのだ。

男性もまさか一発で倒すとは思っていなかったらしく、啞然とし、口にくわえていた煙草を取り落とす。

「まずは一個目な？」

幸成はレバーを引きながらニツと笑い、コルクを詰める。

「次！！」

狙撃の要領と同じだ。

目標のバランスが悪い場所にコルクをピンポイントで叩き込んで倒す。

ましてやヘクセのような速く動く相手に拳銃を使うのと違い、全く動かないぬいぐるみを照準の固定がし易いライフルで狙うのは非常に簡単だ。

しかも幸成は射撃能力が高い自衛官に贈られる射撃徽章を持っている為、二メートルの距離の射的は造作も無い。

二つ目の猫も易々と倒した幸成は最後の熊のぬいぐるみに銃口を向ける。

そして案の定、簡単に熊のぬいぐるみを撃ち倒した幸成は悔しがる

男性からぬいぐるみを受け取り、三人に配る。

「ユキ君凄い！射的のプロ？」

「一応、初めてやった」

幸成は頭に手を当てて笑う。

「……ありがとう」

鳳寿は熊のぬいぐるみを満足げに見ながら呟く。

「幸成君は何をやらせても得意そうですね？何か苦手な物とかありますか？」

「苦手な物が……」

ロイの女癖の悪さとへクセ、と答えられる訳もなく幸成は考え込む。冷静に考えたら苦手な物はあまり無いかもしれない。

基本的に自衛隊の訓練は何かあったし、炊事や洗濯等の家事も人並みに出来る。

「正直、思い当たらない……」

幸成は難しい顔で唸りながら答えると、沙耶那は「それは凄いですね」と笑いかけた。

と、同時に菜月は近くにあった金魚掬いに駆け寄る。

「皆で金魚掬いやろ！こうなったらユキ君の苦手分野を洗いざらい見つけ出してやる」

菜月は無邪気に笑うと、三人は金魚掬いの屋台に歩み寄った……

3 - 5 : 謎掛け

デジタル時計が17時のアラームを鳴らした。

任務の都合上、この時刻には切り上げなければならない。

腹が減っては戦は出来ぬとはよく言った物だ。

実際の所、任務の一時間前に夕食を食べ、尚且つ腹ごなしをしないと力を発揮出来ない。

つまり、偵察衛星が固定される19時の一時間前には帰る必要があるのだ……

「俺、そろそろ帰ります。血吸い人が恐いですし」

幸成は冗談混じりに笑うと鳳寿も「……アタシも」と呟く。

「じゃあ、今日はお開きにしましょうか」

沙耶那は優しく微笑むと、全員から貰った金魚を見ながら大きな声で言う。

「じゃあ、明日も皆で遊ぼう？せつかくの三連休なんだしね!!」

菜月はそう言うと、携帯電話を取り出した。

「連絡を取りやすいように皆の連絡先を交換しようよ」

正直、あまり連絡先を教えたくはないが、これを断る道理も無い。

皆がそれぞれ携帯電話を取り出し、幸成も折り畳み式の深い青色の携帯電話を取り出す。

一人ずつ赤外線アドレスを交換していった……

望遠鏡の隣に散乱した潰れた多くのアルミ缶。

ロイは半ばふて腐れながらシガレットを口にくわえていた。

遠くから見れば髪を金髪に染めた不良少年が煙草を吸っているよう

にしか見えない。

「あゝ、畜生……何で幸成だけなんだろ？」

「少なくとも顔はいいよね？『顔』は……」

優はオレンジジュースを煽りながらつまらなそうにロイに八つ当たりをする。

その様子を面白そうに見ていた彩花は口を開く。

「今回は自業自得ですよねえ？まあ、仕方ありませんねえ。だって彼は任務優先だからあ、優の相手はしないと申しますしい、ロイももつと誠実にならないと彼女は無理ですよねえ？」

「本当の事を言われると辛い……」

優は体育座りで隅に座るといじける。

子供かと突っ込みたいロイを見て、彩花は目を細めて問い掛けた。

「貴方は堪えてないんですねえ？もしかしたらですけどあ、実は女たらしは狂言でえ、彼女なんて要らないか思っているんじゃないですかあ？」

彩花の一言にロイは視線を落とし、深い溜息をついて肩を竦めた。

「さあて、どうかな？」

ロイは何でもないように笑うと近くにあつた飲みかけの炭酸飲料を一気に飲み干し、缶を潰す。

「誰だつて嘘を言う。だが、それが事実かどうかは本人にしか分からない。彩花さんの予想は正解でもあり、誤答でもある。これはいかに？」

ロイは謎掛けのような口調で答えると、彩花は「成る程、良く分かりました」と呟く。

「どういう事？ボクにはさっぱり分からないんだけど……」

「彼はしっかりヒントを言ってますよあ？そして答えもですから、ゆっくりと考えてみて下さいねえ？」

彩花は首を傾げながら優に笑うとティーポットから紅茶を注ぐ。

紅茶はティーカップの半分程でティーポットから出るのを止めた。

「あらあらあ？お茶が無くなってしまいましたねえ？そろそろ切り

上げましょうかねえ。時間も時間ですからあ、幸成も帰って来ますからねえ？」

「ヤバイ！！夕食の支度してないよお……」

優は頬に手を当てながらムンクの叫ぶ宜しく、絶望的に湿った声で呟く。

「幸成関連になると周りが見えなくなるな」

ロイは指を差しながらクツクツと笑いを堪えながら言う。

優は憎らしげにロイを見ると立ち上がると、ロイを見下ろしながら口を開く。

「ロイには夕食を作つてやらないから！！」

「ちよつ！！それは無い！」

ロイは部屋を退出する優にすぎり、彩花だけが夕日が注す部屋に残された。

冷めきつた紅茶の匂いを堪能しながら彩花は小さく呟く。

「謎掛けの答えはあ……誰だつて嘘をつき、事実かどうかは本人にしか分からないですよねえ？つまり、自分でも分からないという事だえ、正誤は無いという事ですよねえ、ロイ？」

彩花はそう言うのと紅茶を飲み干した。

（何が在ったんでしょかねえ、彼は……）

彩花は外を眺めながらティーカップを机に置き、声に出して笑った

……

3 - 6 : 敵対者

幸成が帰宅してから約四時間経った。

青いHSVの映像を眺めていたロイは不意に声を荒げた。

「ポイントC9ジュリエットにヘクセを確認！」

その声には三人は画面を凝視した。

上空からの目が緑色に映し出すヘクセを捉え、その動きを監視する。敵は広い路地裏を歩き回り、獲物を探しているようだ。

狭い路地裏だったから白狐を確認出来なかったが、今回は広い路地裏だったのがこのヘクセの運の尽き。

「現地への移動手段はどうする？」

ロイの問い掛けに幸成は立ち上がりながら「飛んで行かさ」と嘯く。

「指示は任せた」

「しかし、おっちゃんには連絡しなくていいのか？」

「臨機応変が常の部隊だ。仕方ないだろう」

幸成は黒の戦闘服に着替えながら答えるとホルスターに二丁拳銃を入れる。

「分かった」

「彩花さんはいざという時の医薬品の準備を、優さんは弾薬の補充の準備を頼む」

二人はゆっくりと頷くとすぐに準備に取り掛かった。

HAWKにおいて作戦の指揮は階級ではなくエージェントの判断となる。

エージェントは作戦において現地に行く為、彼の判断で各々の隊員に指示が下されるのだ。

「さてと、敵はシュトレイゴイカバルか、はたまたはぐれヘクセか……」

装備を整えた幸成はフックショット「HAWK - BILDL」ヒボ「レン」を構え、外に飛び出すと50m先の建物に放ち、移動を開

始した……

闇夜の中を駆けて行く白い影。

闇を切り裂くその影は長い髪に白狐の面を付け、左手には刀。
白狐は真っ直ぐ目標に向かって行った……

建物の屋上に降り立ってはドルヒボレンで別の建物に跳びを繰り返して目的地に向かっていた。

不意にヘッドセット「HAWK-EYE フューラー」からロイの
声が聞こえてくる。

（こちらスカイアイ。敵はポイントC9インディオにある廃工場に
移動した、オーバー）

「ロメオ、了解。オーバー」

幸成は指定されたポイントの近くにあるビルに立つとフューラーを
ナイトビジョンに切り替える。

（敵は銃のような物を持っている。気をつける。スカイアイ、アウ
ト）

ロイの無線が終わると同時に廃工場の窓にシカゴタイプライターを
持った女性の後ろ姿が見えた。

女性は赤いハイヒールに赤いドレス、茶色のセミショートの出で立
ちだ。

幸成はHUDのナイトビジョンをHSVに切り替える。

女性の色は緑、間違いない。

「こちらロメオ。何度も済まない。敵を確認した。武器はドラムマガジンのシカゴタイプライターだ、オーバー」

(M1928かあ……鹵獲ろかくしたいな)

優の声に幸成は「貧乏部隊には要らないだろ」と突っ込む。

シカゴタイプライターの使用する弾薬は・45ACP弾で、HAWKの使用する装備は9mmパラベラム弾を改造した9mmシャルデンプファー亜音速弾を使用する。

・45をセンチ換算に直すと約1・14cm。

つまり、9mmSD弾とは別に・45ACP弾を必要とし、貧乏まつしぐらという事だ。

「これより交戦する。シカゴタイプライターは取れるようなら取るだが、期待はするなよ？ロメオ、アウト」

幸成はそう言うと、HUDを再びナイトビジョンに切り替え、左手にドルヒポーレン、右手にナイフ「HAWK・NAIL　メッサードルヒ」を構え、窓の上にドルヒポーレンを撃ち込んだ。

体が一気に引っ張られ、凄まじい速度で窓に向かって行く。

窓にぶつかる直前でドルヒポーレンの先端を壁から引き抜き、足から突入するように態勢を整える。

凄まじい速度を窓を割る事で抑えた幸成はシカゴタイプライターを持ったヘクセの首元にナイフを突き立てるが、一瞬速く幸成に気付いた女ヘクセは横に移動してナイフを躲す。

勢いで地面に落ちた幸成は転がりながらも受け身を取りつつドルヒポーレンとメッサードルヒを仕舞い、スコトス&フォースを中腰の姿勢で構える。

「あらあら、闇討ちですか？匹夫がやる所業ですね」

女はシカゴタイプライターを構えると幸成に不敵な笑みを見せる。

「紅い瞳にその異形の二丁拳銃……報告通り。私はミリア・サディール。貴方が追っているシュトレイゴイカバールのヘクセですよ」「俺達の存在がバレている!？」

幸成は眉を潜めると白狐を思い出す。

やはりアレはシュトレイゴイカバールのヘクセか？

「デイツクを殺して舞い上がっていたら貴方は死にます」

「何故だ？」

「あいつは単なる敵対者をおびき出す捨て駒にしか過ぎないのだから。尤も、貴方をおびき出す為ではなかったんだけど……」

姿を晒したのはこっちだったって訳だ……

抜かった！！

幸成は歯をギリと鳴らすと、左手の銃を構えながらHUDでミリアを捕捉する。

「それにしても、私は貴方を殺す為に差し向けられたのですけど……
…貴方は美しい顔立ちをしているわ。きっと血も美味なんでしょうね」

ミリアがうつとりとした口調で呟くのを聞き、幸成は鼻で笑った。

「少なくとも飲めないと思うぜ？」

「何故？」

「俺がお前の頭を破壊してお前は口無しになるからな！！Come and get me（捕まえてみやがれ）！！」

幸成は怒鳴ると二人は同時に引き金を引いた。

窓からは蛾が中に入り、その窓からシカゴタイプライターの銃声が小さく漏れるのだった……

3 - 7 : 跳弾

響き渡った銃声。

響き渡ると言っても微かで殆ど聞こえなかった。

しかし、白狐は歩みを止めると周囲を見渡す。

そしてすぐに銃声のした方向に駆けて行った……

最初の射撃は共に足元の地面に直撃し、弾痕を残す。

幸成は壊れた機械に、ミリアは柱の後ろに隠れる。

(遠距離特化か……どう仕留める?)

幸成はスコトス&フォースを構えながら舌打ちをする。

実際の所、ハンドガン サブマシンガン拳銃と短機関銃では分が悪い。

スコトス&フォースをフルオートが使えるが、下手に乱射すれば弾の無駄になる。

「どうしたの?かくれんぼのつもり?」

ミリアの声とハイヒールが地面を叩く音が響き渡る。

柱から出たのが運の尽き、と言いたいが下手に場所を露見させる訳にもいかない。

幸成はスコトスのマウントレールにHUDに連動する小型のカメラを取り付けた。

カメラはHUDに随時映像を送り、壁越しからの射撃を助ける物だ。生憎、一つしかないのが痛い。

幸成は機械から腕だけを出して拳銃を水平にゆっくりと動かす。

しかし、ミリアらしき影は確認出来ない。

幸成が眉を潜めたその時、スコトスから送られてくる映像が途絶え、

凄まじい衝撃が掌に伝わる。

拳銃は弾け飛び、幸成の足元に転がった。

「見いつけたあ」

上から聞こえてきた声にハツとした幸成は梁を見上げる。

そこにはシカゴタイプライターの銃口を向けてほくそ笑むミリアの姿があった。

幸成はスコトスを蹴り上げながら柱の影に走るとシカゴタイプライターから・45ACP弾が吐き出され、地面を刳る。

間一髪、柱の後ろに駆け込んだ幸成は舌打ちをした。

梁の上は柱以外の遮蔽物である機械を全てマーク出来る。

同時にこちらが何処に隠れているかさえ分かってしまう。

武器はおろか、地の利も奴にある。

「いつまで隠れてるつもり？」

ミリアは幸成の近くにあつた機械に向かつて一射した。

刹那、・45ACP弾は機械の曲がった部分を利用して弾道を変えて、幸成の正面の壁に反射、幸成の頬に傷を作る。

「跳弾か！」

通常、室内戦においてライフルではなくサブマシンガンやハンドガンを使うのは跳弾を避けるためだ。

室内で使われる弾丸はライフルリングの影響で貫通しなかった場合は殆ど跳弾になる。

その為、跳弾防止に射程が短く、威力の低い拳銃弾を使用したサブマシンガンが使われるのが主流だ。

しかし、サブマシンガンでも跳弾が起きるのもまた事実。

跳弾で変形した弾丸は形が異質に変形する為、腕でも致命傷に成り兼ねない。

ほんの数ミリの差で致命傷を免れたが、敵は狙って跳弾を撃つてきた。

と、言うことは遮蔽物は意味など無い。

幸成は思い切つて飛び出すと二丁拳銃をフルオートで撃ち込む。

ミリアは梁から飛び降りながらシカゴタイプライターの銃口を乱射し、幸成は走る事で弾丸を避ける。

サブマシンガンに地の利で勝つ方法はただ一つだ。

幸成は機械の後ろに飛び込み、弾倉を交換した直後無数の跳弾が幸成を襲う。

腕や足を掠める弾丸に舌打ちをすると、幸成は二丁拳銃の薬室に弾丸を送る。

チャンスは一瞬。

奴が弾倉を交換する瞬間だ。

シカゴタイプライターのドラムマガジンは大量に弾丸が装填されているが故の欠点もある。

跳弾が止み、頬から血が滴り落ちてきたと同時に幸成は一気にミリアに駆け出した。

案の定、ミリアはドラムマガジンを交換している。

地の利を得るチャンス、それは接近戦だ。

ハンドガンは弾倉を差し込んだらスライド・ストップを押し下げて装填すればいいが、サブマシンガンはそうはいかない。

弾倉を交換し、初弾を装填するにはコッキングレバーを引かなければ成らず必然的に装填に時間がかかる。

しかも旧式のサブマシンガンであるシカゴタイプライターは約5・2kgと重く、近距離戦では取り回しが難しい。

さらにドラムマガジンに加え、50発の・45ACP弾により580gも重くなっている。

装填の際に接近して、弾丸によって重くなった取り回しの悪いシカゴタイプライターの苦手な接近戦に持ち込み、接射で片付けるのが幸成の狙いだ。

幸成はフォースで牽制しながら接近し、ミリアの周りに近付く。

ミリアは慌てて幸成に銃口を向けるが、幸成はミリアの死角に回り込む。

虚しくシカゴタイプライターの銃声とマズルフラッシュを閃かせた

ミリアの背後に回り込んだ幸成はフォースの残った弾丸とスコトスの弾丸を有りつたけミリアに叩き込んだ。

多数の弾丸がミリアの体を撃ち貫き、ミリアを弾くが、倒すまでには至らなかった。

「クソ！やり損ねた！！」

幸成は距離を離されたミリアを見て舌打ちをした。

ミリアも体に開けられた傷から血を流し、憤怒の表情で幸成を睨む。

「計画変更よ！！殺してあげる」

ミリアは口から出る血を舐め取るとシカゴタイプライターの銃口を向ける。

その時だった。

幸成が突入した窓から白い影が飛び込んだ。

緋色があせたような色である緋褪色ひさめの刀が月光で反射する。

ミリアは反射的にその影を向くと白い影はシカゴタイプライターの銃身を真つ二つにした。

「鉄をも切り裂く」とは良く言うが、実際にそれを見せられると思わず恐怖する。

白狐は続けてミリアの体を斜めに斬った。

臓物をばらまき、死に絶えるミリア。

ヘクセが死ぬ時に起こる細胞自殺によってミリアが溶ける。

刹那、白狐は幸成にも緋褪色の刀の切っ先を向けたのだった……

3 - 8 : 狼と狐

(こちらロメオ。スカイアイ、聞こえるか？オーバー)

幸成の声にロイはヘッドセットに耳を当てながら「聞こえる、オーバー」と答える。

(ヘクセと交戦中に白狐が出現した。オーバー)

「何だと！？映像を送れ！」

数秒して幸成のHUDからパソコンに送られてきたのは、ナイトビジョンで捉えられた緋褪色の刀身の刀を突き付ける白狐の姿だった。白狐は白い着物にその名の通り白い狐の面を付けた髪の高い人物だ。「これか？お前が見たのは？」

(間違いない。コイツだ)

「間違いない。コイツだ」

幸成はヘッドセットを押さえながら、白狐に聞こえないように小声で吹き込む。

ヘクセか、コイツ？

幸成はHSVを起動させると言葉を失った。

反応はオレンジ、つまり人間。

シュトレイゴイカバールのヘクセを殺し、こちらに敵意を向けている白狐が人間となれば、先程ミアアが述べた「敵対者」なのだろう。しかし、シュトレイゴイカバールが囷を使ってまで敵対者である白狐をおびき出すという事は相当の手練れだ。

しかも人間となれば幸成と同じ存在か？

幸成が思考を巡らせていると白狐が刀を右脇に取り、切っ先を下に

構える「脇構え」で対峙する。

人間と分かった以上、実弾で相手にする訳にはいかず、麻醉銃「グロック26 - HAWK ミューデトラウム」を右手に構えた。

ドイツ語で「眠い夢」を意味するミューデトラウムは世界初の対人麻醉銃だ。

あらゆるメデイアで対人麻醉銃なる物が存在するが、現実にそんな物は存在しない。

麻醉は分量を間違えたら死に至る。

さらに薬品の方が弾薬よりも高額になり、実用的ではないからだ。

しかし、このミューデトラウムは優と彩花の二人の天才によって実用化に成功した。

弾薬は9mmパラベラム弾を改造したものだが、弾頭部が蚊の針のように小さい。

弾丸が貫通しないように火薬も少なめに調整されている。

特筆すべきは使用されている薬品だ。

筋弛緩剤の「サクシニルコリン」の成分に似た新型麻醉薬を採用し、致死量に至る直前に致死量分の薬が麻醉と反応した血液に分解されるようになっていた。

さらに開発者が彩花の為、資金等は安い。

欠点は火薬が少ない為、シャルデンプファー仕様になると弾頭が発射されない事で、銃本体にサプレッサーが使われる事だ。

幸成は左手でドルヒポレンを逆手に持つと白狐をHUDに捉えた。刹那、白狐が駆け寄ってくる。

幸成はミューデトラウムを構えて引き金を引くが、白狐は機械を蹴って飛び上がる事で麻醉弾を避け、そのまま幸成に刀を振り下ろす。彼が即座に離れた瞬間、幸成が隠れていた機械が真つ二つに切れた。その鮮やかな様子ではメツサードルヒで受けるのは無謀らしい。

幸成は舌打ちをするとメツサードルヒを鞘に仕舞い、ミューデトラウムだけを構える。

しかし、白狐は幸成に反撃の際を与えないとばかりに激しい攻撃で

幸成を壁に追い詰めた。

が、幸成も壁を蹴って白狐の後ろに回り込むとミューデトラウムの引き金を引く。

同時に白狐は振り返りながら刀の鎬でそれを弾いた。

弾丸が刀に当たって火花を散らし、ナイトビジョンが無ければ何も見えない闇を一瞬だけ照らす。

恐らく敵はこちらのHUDの光で攻撃を仕掛けている。

かと言ってHUDを切ってしまうとただでさえ速い斬撃を暗闇の中、手探りで避けるしかなくなってしまう。

成る程、シュトレイゴイカバールがわざわざ倒す為の手回しをする訳だ。

幸成が思考を巡らせていると刀が斜めに振り下ろされ、幸成の左手の静脈を切り裂く。

左手からはどす黒い血が流れた。

鋭い痛みと静脈を切られた事で左手が使い物に成らなず、回復力が高いと言っても深い傷ならすぐには治らない。

幸成は右手だけでミューデトラウムを構える。

(畜生!!ヘクセ並だぞ、コイツ……)

スコトス&フォースなら同時二連射による計四発の弾丸で弾幕を張れる。

ましてや、フルオートならその軽機関銃並の弾幕により瞬殺が出来るのだが……

相手が人間となれば非正規部隊と言えども対ヘクセの部隊である為、たとえ敵対している一般人であっても傷付ければ処分される。

片手両足を縛った戦いとはベトナム戦争期の米軍人の言葉であるが、今がまさにその状態だ。

白狐はバツティングフォームに似た構えである八双の構えをしながら距離を詰める。

幸成が一步退いたその時、白狐が切り掛かってきた。

八双の構えから剣道の技で言う右の脇腹に胴を叩き込む「逆胴」へ

の移行速度は速い。

幸成はHUDのLAVの機能ですら捉えられなかった逆胴でボディ
アーマーごと腹部に切り傷を負わされる。

多少距離が離れていたから良かったものの、まともに当たれば上半
身と下半身が離れて妖怪「テケテケ」状態だった。

(冗談抜きで笑えねえ……)

幸成は苦笑いを浮かべたその時、逆胴の反動を利用しながら一回転
をし、幸成の頭に刀を振り下ろす。

横に回避した幸成の立っていた地面が割れ、コンクリートが空中に
舞い上がる。

幸成の額に弾け飛んだコンクリート片が当たり、傷を付けた。

防戦一方の状態となるが、幸成は負けじとミューデトラウムの引き
金を引く。

が、やはり刀で容易に防がれる。

もはや、人間かすら怪しい拳動だ。

幸成が震える左手でミューデトラウムの弾倉を交換する。

刹那、白狐は刀を幸成の頭上に振り上げた。

幸成は反射的にミューデトラウムを投げ捨てると白狐の振るった緋
褪色の刀の刃を両手で受け止める。

白刃取り……

まさか一日で二回もやるとは幸成は自嘲するが笑っていられる状
態ではない。

斬られた部分からは血が滴り、跳弾と刀で付いた傷が疼く。

刃を押さえている左手からは血が垂れ、地面を濡らした。

白狐は刀の鞘を押さえ、幸成を切り裂こうとする。

掌が刀で少しずつだが削られ、緋褪色の刃を血が伝う。

窓から零れ出る月明かりが二人を照らし、幸成の顔と白狐の面を照
らした。

その時、白狐は力を緩めると幸成から離れる。

まるで何かに驚いたように……

幸成は怪訝な表情で白狐を見ると、白狐は慌てて入って来た窓から飛び出して行く。

「何なんだ……畜生……」

幸成は小声で呟くと多量の出血で出来た水溜まりに倒れ、気を失った……

4 - 1 : 病室 (前書き)

第4話

4 - 1 : 病室

柔らかいベッド。

いつもの煎餅布団とは違う柔らかかなベッドだが馴れ親しんだ匂いとは違う、消毒液と漂白剤の混ざった匂いだ。

喉が渴いた……

乾き過ぎて不快だ……

幸成は体を起こそうとしたその時、体中の激痛に呻き声を上げた。

「……つてえ……」

「よお、起きたか」

激痛に呻いた幸成の横で聞こえてきたロイが笑みを見せた。

「ここは？」

「病院だ。ひでえ様だな？ここまでやられたのは初めてだな」

「悪い……」

疼く傷に耐えながら幸成は謝った。

良く見れば体にはソルタT3号、またはリンゲル液3号と呼ばれる輸液の袋が点滴の針で繋がっている。

「お前がやられるって、白狐はどれだけ強いヘクセだったんだ？」

「ヘクセじゃない……人間だ」

「人間ねえ……人間!？」

「ヘクセみたいに速くて強い……ハッキリ言って麻酔銃じゃ無力化出来なかった……」

幸成は天井を見上げながら小さく呟く。

ヘクセという存在に苦戦しても人間にここまでやられたのは初めてだ。

悔しさよりも驚きの方が大きく、幸成は疼く両掌を握る。

あの身体能力は人間に有り得るのか？

「はいはい？目覚めましたねえ？幸成の戦闘を解析してえ、一つの仮説にたどり着いたのでえ、報告に来ましたよお？」

不意に入ってきた彩花の声に幸成とロイが注目する。

「仮説ですか？」

「白狐はあ、潜在能力を自由に外せる人間と考えられますう」

「潜在能力？」

「潜在能力とはあ、一般的に火事場の馬鹿力と呼ばれていますう」

「こつても一般的な名前と言われると呆気に取られて、言葉も出ない。」

しかし、言っても聞いたのはこちらなのだが……

その様子を察した彩花は口を尖らせ、つまらなそうに呟く。

「火事場の馬鹿力を嘗めてるんじゃないですかあ？火事場の馬鹿力は人間の可能性を高める最高の研究材料ですよあ？」

その一言に幸成は「聞きますか」と呟き、疼く体に鞭打って体を起こす。

「そもそも人間の体はあ、過剰な筋出力を出した場合に自壊してしまいますう。その為、平時は脳が自壊を起こさないようにリミッターをかけていますねえ？」

「「ねえ？」って言われても知らねえよ」「」

幸成とロイは苦笑いを浮かべて顔を見合わせる。

その様子を見ていた彩花は深い溜息を漏らし、椅子に座って足を組む。

色っぽい大人の色香にロイならず幸成も心の臓が高鳴ってしまふ。

その様子を見て頬を緩ませた彩花は続ける。

「恐らく白狐はそのリミッターを外す訓練か何かを受けて任意で身体能力を向上させる事が出来るのでしようねえ？」

「そんな事が有り得るのかよ？」

「とにかく現状ではその説が一番可能性がありそうです。しかし、白狐の正体が分かりませんねえ」

それに二人も同調する。

白狐の正体が分からないのが異常だ。

肩まで掛かる髪の毛の長さから男性とは考えにくい。

だが、胸が普通の女性よりも無い為、女性の可能性も低い。

幸成は顎に手を当てて考えているとメールの着信音が病室に鳴り響いた。

「あらあらあ？彼女さん達からですかあ？」

「彼女じゃねえよ」

幸成は目を細めて口を尖らせると指だけで携帯電話を支えて、開いた。

着信には沙耶那の名前が踊っている。

幸成は暗証番号を入力してメールを開くと可愛い絵文字がふんだんに使われた、幸成を心配する内容のメールであった。

簡単に説明すると幸成が階段から落ちた事を心配する内容だ。

「……俺、階段から落ちたのかよ？」

幸成は苦笑いを浮かべ、携帯電話から視線を外すと彩花が満面の笑みで微笑んだ。

「何かあ、幸成はドジキャラで定着させたかったんですよ。ウチのこだわりって奴ですねえ？」

何だ、このよく分からないこだわりは？

不意に新たな着信音が鳴り響いた。

今度は菜月だ。

菜月は今から沙耶那とお見舞いに行ってもいいかとのメールだった。

「この色男が！！畜生、出血多量で爆発しやがれ！！」

「何の話だよ？」

幸成は溜息を漏らすとロイと彩花が椅子から立ち上がった。

「お邪魔しちゃいけないのでえ、ウチ達はおいとましますねえ」

「そういう訳だ。明日には退院出来るだろうからその時に来るわ」

ロイはそう言うくと手荷物を纏めだす。

二人の口調から沙耶那と菜月を呼べと言わんばかりの口調だ。

二人が退出したのを見送った幸成は疼く手で携帯電話に返信を打ち込むのだった……

4 - 2 : 動揺

傷もおおよそ塞がり、痛みも引いてきたがしばらく跡は残るだろう。今回の白狐襲来には煮え湯を飲まされたが、次は何とか沈める必要がある。

今後の任務も奴に邪魔されるとなれば、最悪、実弾で沈める可能性も出て来るからだ。

人に対へクセ用武器を向けたくないというのが幸成の本音だったが、甘えた事を言つてられない。

幸成が嘆息を付いたその時、病室の扉が開き、元気な声が聞こえてきた。

「ユキ君、来たよ」

「大丈夫ですか？」

元気な菜月と心配する沙耶那が病室に入り、頭に包帯を巻いた幸成が微笑みで答える。

沙耶那は額に包帯を巻き、両腕にも包帯が巻かれている幸成を見て、言葉を失った。

「階段から落ちて……このように……なつたのですか？」

「ええ、まあ……」

幸成が頭を掻くと沙耶那は顔を青さめながら問い掛ける。

「何処を傷付けたのですか？」

「両掌と左腕、左脇腹が酷かったかな？」

その声を聞いた沙耶那はさらに顔を青さめさせていく。

まるで化け物と出会った人のように恐怖で顔を歪めさせる。

「どうしたんですか？」

幸成が問い掛けると沙耶那は一步後退り、ゆっくりと首を振った。

「何でもないです……私、急用を思い出しました」

「えっ！？ サヤ、何も無いって言ってなかった？」

「その……ごめんなさい！！」

沙耶那はそう言うと、幸成の病室から飛び出していった。

何かに脅えるようなその表情に二人は首を傾げる。

「ユキ君、何かやったの？例えばセクハラとか？」

「ロイじゃあるまいし……」

「そつだよね、ユキ君は変態さんじゃなくてドジさんだよね」

…… ドジキャラに定着してたよ、彩花さん……

幸成はげんなりとしていると窓の外に目をやる。

俺の仮説が正しければ、白狐への勝機が見えた！

幸成は拳をきつく握りしめると包帯を解き、菜月に笑いかけた……

その頃の零荘は三村の帰宅で賑わっていた。

要約すると上は今回の事態は感知しないが、もし必要ならば手を回すという事だ。

つまり、50万円の範囲で好きな装備を整えるという通達だった。

「やりいー!!」

優は跳び上がりながらガッツポーズをすると、彩花も嬉しそうな表情で紅茶を啜る。

「どう分配するんですかあ？」

「優には30万と彩花には20万でいいだろうな」

「あつ……俺と幸成が忘れられてる……」

胡座で座りながら壁に寄り掛かっていたロイが小さく呟くが三村は「お前にはもうおもちゃが有るだろ？」と笑う。

「じゃあ、おっちゃん!!キヤリコム900が二丁とヘリコプターのラジコンを二つ頼む!!」

優は父親に服や靴をねだる娘のように自動小銃（短機関銃？）とヘリコプターのラジコンをねだる。

年頃の女の子らしからぬ頼み事に三村は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

しかし、ラジコンは何に使うんだ？

「私はあ、オオスズメバチを大量にお願いしますねえ」

「……それこそ何に使うんだ……？」

気に入らない相手の部屋にスズメバチでも仕込んで完全犯罪でも謀っているのか、と三村は訝しげに彩花を見るが下手に突っ込むと自分がその対象に成り兼ねない為黙っていた。

「これで戦力の増強は問題無いな……ラジコンとスズメバチとは別として……」

「何か言いましたあ？」

「いや、何も言っていない」

三村は否定すると時計を見ながら口を開く。

「幸成の所に行つてくるかな。任務の事はメールじゃ駄目だからな」

「今は止めた方がいいぜ、おっちゃん」

「どうした、ロイ？」

「幸成の所にこの前来たあの女の子達が、ね？」

「ほほう？幸成にモテ期到来か？結構結構！」

三村は大きな声で笑うと何気なく外を眺めた。

その時、道路を慌てて駆けて行く沙耶那の姿を見付けて眉を潜める。

ロイがさつき幸成の所に沙耶那と菜月が行ったと言ったばかりだが

……

三村は窓を開けるとそこから顔を出した。

「沙耶那さん、だったよね？どうしたの、そんなに慌てて……」

三村の声に気付いた沙耶那は体をビクリと動かし、窓に目をやった。

「三村……さん？」

沙耶那は顔を青ざめさせながら、涙を溢れさせていた。

目は真つ赤に腫れて痛々しい。

「どうした？幸成に酷い事言われたか？あの野郎……こんな可愛い女の子を泣かせるたあ、いい度胸だ！！」

「違う……違うんです!」

沙耶那は顔を手で覆い、泣き崩れた。

掌から溢れ出た涙がアスファルトを濡らし、沙耶那は嗚咽を漏らす。何が何だか分からないその状況に三村は頭を掻くと明後日の方向を見る。

「すいません……今日は……」

沙耶那はそう言うと神社の方角に駆けて行く。

もはや、訳が分からないを通り越して拍子抜けした三村は空を仰ぎ見て深い嘆息を漏らした……

4 - 3 : 悪夢

暗い路地裏……

周りの壁も足元の地面も赤、紅、朱……

空が紫紺色に染まり、何も照らさない……

足元に転がる肉片はつい数分までは動いていた人間と呼ばれる肉の塊……

動いていても動いていなくても肉は肉……

それ以上でもそれ以下でもない……

死ねばそれまでだ……

肉に成る下がる……

血に濡れた体は鉄臭く……

目の前が深紅に染まり……

止まらない……

理性が止まれと叫んでも体が言うことを聞かない……

銀髪の髪が深紅の視界で揺れる……

駄目だ……

止まれ……

止まってくれ!!

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」

幸成は白い病室のベッドから起き上がると紺色の髪を掻き上げる。

毎回、痛手を負った時に見る悪夢に幸成は舌打ちをした。

悪夢というよりは過去と言った方がいいだろう。

忘れたい過去……

二度と思い出したくない過去だ。

これが俺の罪なのか……

幸成は嘆息を漏らすと枕の上に頭を落とした……

私は、罪を犯した……

友人を殺しかけた……

でも、何故あの場に幸成君が？

まさか幸成君が血吸い人なの？

GARUDAが上空に固定されてから三時間経った頃、監視していたロイが声をあげた。

「ヘクセ確認!!」

ロイの怒鳴り声にコーヒーを飲んでいた三村が笑う。

「ここはヘクセの宝庫だな。はぐれヘクセの時の搜索とは大違いだ」

「コイツ、どうします？幸成がいらないからスルーしますか？」

「今から彩花と優を連れて幸成を連行する」

「連行つて……まあ、そこはどうでもいいとして、白狐はどうする？下手をすりゃ奴も現れるだろう？」

その声に沈黙が流れる。

が、三村は鼻で笑うと立ち上がった。

「幸成なら何とかやるさ。ところで優、お前に預けていたアレは調

「整終わっているか？」

三村の問い掛けに優は頷き、部屋の隅に置いていた大きめのアタツシユケースを持ってきた。

黒塗りのアタツシユケースを机の上に置くと鍵を開ける。

そのアタツシユケースにはカービンライフルとして最も有名とも言える「M4A1」とその他アクセサリーが入れられていた。

「何で貧乏部隊がそんなもん持ってんだ？」

ロイの問い掛けに三村はニツと笑う。

「特戦時代からの相棒だ」

三村はそう言うと、M4A1のグリップを握り、銃床を肩に付ける。特戦――特殊作戦群は陸上自衛隊に所属している陸自初の、公式の唯一の特殊部隊だ。

対テロ及び対ゲリラ作戦が主な任務であり、非公式ながらHAWKが創設されるまでヘクセと戦っていたが、ある人物との接触と同時に特殊作戦群が壊滅した。

現在は再編成をしている最中だ。

また、特殊作戦群が使用する武器は陸自正式採用銃の「89式小銃」他にこの米軍でも使われている「M4A1」も使用されている。

そのM4A1を構えると三村は安全装置を外し、弾丸が入っていない銃の引き金を引く。

「最初からそれを使えよ。何でわざわざ拳銃だよ」

「馬鹿野郎、ヘクセ相手に5・56mm弾で勝てると本気で思っているのか？」

「ん？違うのか？拳銃弾でも倒せてるんだし……」

「馬鹿だなあ。今まではあの銃の特性があるからこそ勝ってたんだぞ？」

「無い胸を張るな！」

ロイが優に毒づくこと優は「煩い、煩い！」と喚き散らす。

そんな優の額に三村はデコピンを喰らわせると「お前が煩い」と諷める。

「とくに〜か〜く〜！！簡単に説明すると初弾が体に突入し、次弾が速度を落とした初弾に当たった衝撃で神経にダメージを与える。さらに次弾が初弾にぶつかった事で跳弾となり、体の中で暴れる。普通の人間だったら即死だからヘクセにもダメージを与えられるんだ。分かる？」

「何と無く……」

「言っちゃえば、ライフルで倒したければ頭をフルオートで吹っ飛ばすしかねえってこつた」

三村はそう言いながら北大西洋条約機構（NATO）標準規格の弾丸「5.56×45NATO弾」を弾倉に挿入していく。

「それにあくまで支給されるのは9mmパラベラム弾、5.56mm弾なんて支給されねえから、自腹で取り寄せなきゃならんからな。コイツもこの90発の弾丸と2発のグレネードと15発のショットシェルが無くなったら鉄の棒だからな」

三村はM4A1のアクセサリウェポンのグレネードランチャー「コルト M203」とショットガン「XM26 LSS」を一瞥する。

様々なアクセサリの中からフォアグリップとACOGスコープ、ナイトビジョンのみに見えるレーザーサイト、そしてサブレッサーを装着した三村は暗視装置「JGV5-V8」を掴んだ。

「あくまで自分は三つ巴の乱戦になった時だけに出る。弾を無駄遣いしたくないからな」

「白状すねえ」

「当然だ。自分は奴を信用しているからな。さ、出掛けた」

三村はベルトに二本の弾倉を挟込むと、もう一本を銃に装填する。そして肩にM4A1を肩に担ぎ、JGV5-V8を掴むとドアを開けるのだった……

4 - 4 : 使命

あの悪夢から眠れずかれこれ一時間が経った。

幸成は痛みの無くなつた傷に巻いていた包帯を取る。

白みを帯びた肌に付いた傷が非常に痛々しい。

「階段から落ちたにしては痛々しいだろ、コレ……」

幸成は嘆息を漏らし、両手で髪を掻き上げる。

その時、病室の向こう側の廊下から足音が聞こえてきた。

ハイヒールの踵が床を叩く音だ。

この時間は消灯時刻である為、面会は無い。

患者もナースもハイヒールを履かないから違う。

病院での最悪の解答が思い付き、幸成はみるみる顔を青ざめさせる。

「おいおい、待って待って！俺はお経なんて知らないし、十字架とか聖水を持っていない！やべえ……」

ヘクセ相手には冷徹に振る舞う幸成だが実態が無く、正体が分からない相手は恐ろしい。

幸成は慌てふためいていると、案の定ハイヒールが幸成の病室の手前で止まった。

(マジかよ……)

ハイヒールときたら女だろうが、女の幽霊程恐ろしい物はない。

赤いハイヒールに赤いドレス、顔が隠れる程の長い髪的女を想像してしまった幸成は身震いした。

江戸時代には女性の嫉妬や恨みを描いた怪談が多く誕生し、「四大女幽霊」と言われる有名な怪談群が誕生するまでに至り、今も様々なメディアで女性の幽霊が登場している。

言ってしまうえば男の幽霊は様にならないのだ。

ドアノブがゆつくりと回る音が聞こえ、幸成は息を飲む。

廊下の僅かな蛍光灯の明かりが暗い病室の中に入り込み、僅かに病

室を明るく照らす。

幸成は慌ててベッドから飛び出すと拳を身構える。

ゆっくりとハイヒールの音が近付き、幸成が拳を構えて飛び出すとそこには拍子抜けしたようにキョトンとしている彩花が立っていた。「どうしたんですかあ？まるで幽霊でも見たような顔をしちゃってえ」

幽霊よりも恐い物を見たような気がするんだが……

「貴女こそどうしたんですか？」

「任務ですよあ？」

「またか……こつちも連続して起きちゃ、こつちの身がもたねえよ」

「むしろこつち有るべきですよあ？さあ、いきましようかあ？」

「ちよつと待つてください！退院は明日じゃ……」

「既に話は付けていますからご安心下さいねえ？」

どうやったら夜中に退院出来る話が出るんだとツツコミたかったが幸成はゆっくりと頷く。

「優が戦闘服を準備して待ってますう。さあ、行きましようねえ」

彩花は微笑むと幸成の手を掴み病室から飛び出して行った……

血吸い人を狩る……

それが私の使命……

私の運命……

それが友達でも恋人でも親でも血吸い人は狩る……

それが私の使命……

少女は白狐の面を付けると駆け出して行く……

奴らの血の匂いを辿り、闇の中へ……

目的地に向かう車の助手席に乗る幸成はスコトスとフォー스에弾丸を装填する。

フューラーを耳に装着し起動すると同時に三村が思い出したような口調で問い掛けた。

「お前、今日沙耶那さんと何があった？」

「何だよ、急に……何もねえよ」

「嘘付け！！沙耶那さんは泣いていたぞ！？」

「って、言われても急に泣き出したからな……」

幸成は左手で顔の左半分を覆う。

身に覚えの無い罪とはこのような事を言うのだろうか。

それに確証が持てない事は言えない……

「この話しは後で家族会議だ」

そんな重大な問題なんですね？

（まあ、女の子はどんな形であれ泣かしちゃ駄目だからな）

幸成は左手で髪を掻き上げる。

困る度についやってしまうその癖に苦笑した幸成はフューラーに手を当て、吹き込んだ。

「こちらロメオ。スカイアイ、感度良好か？オーバー」

（こちらスカイアイ、良好。オーバー）

「空からの目で敵の指示を頼む。オーバー」

（敵は現在C9インディオにいる。前回の廃工場だ）

「……了解した。ロメオ、アウト」

幸成は無線を切ると眉を潜めた。

敵はこちらを誘い込む意図である事は間違いないが、何故前回の場所なんだ？

敵は何を企んでいるんだ？

恐らく罨である事は間違いないがそこに飛び込まなければ何も出来ない。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず、か……」

幸成は小さく呟くと背もたれに寄り掛かり、闇の中に目を見遣った。その時、不意に三村が口を開く。

「言い忘れたが、今回はバックアップに武器を持ってきた。援護を要請すれば攻撃を行う」

「分かった」

幸成は短く答えると二丁拳銃に初弾を装填して弾倉を引き抜くと、それぞれの弾倉の隙間に9mmシャルデンプファー亜音速弾を挿入したのだった……

4 - 5 : 問答

約15分後、廃工場に到着した黒塗りのバンが止まって、車から幸成が降りる。

廃工場の錆びて重い扉を右手で開けつつ、左手の拳銃を構えながら慎重に中に入り、やはり慎重に扉を閉めた。

ナイトビジョンの緑色の世界と肉眼の暗闇の世界が混ざり合う。

その世界は普通の視界であるはずなのに、まるで違う世界であるかのような異質さを醸し出す。

目標は確認出来ない……

幸成はナイトビジョンをHSVに切り替える。

緑色の人間は見当たらない。

本当にいるのか？

幸成が周囲を見渡したその時だった……

幸成が中に入った直後、三村は後部座席の優に口を開く。

「優、M4A1を取ってくれ。それとアルムブレスト」

「アイアイサー、大将！」

優は軽く敬礼をするとM4A1の入ったアタッシュケースとクロスボウ「アルムブレスト」を投げて寄越す。

予め準備をしていたM4A1に弾倉を込めるとチャージング・ハンドルを引き、それを離して初弾を装填する。

そしてセレクターをSEMI（単射）に切り替え、ACOGスコープを覗き込む。

赤い光で作られた十字の照準が暗闇を照らした。

本来、5・56mm NATO弾を使う銃は狙撃には向かない。
中・近距離戦を意識したこの弾薬は200m以上になると殺傷能力が低下する。

一般的な狙撃銃に使われるのは7・62mm×51 NATO弾や対物ライフル「バレット M82」が使用する・58BMG弾等だ。
某漫画の主人公はM16を狙撃に使っているが利に適っていない為、ファンの間でも議論されていると聞く。

しかし、今回はあくまで狙撃ではなく援護。

幸成の後方支援が目的であり、当てる必要性は無い。

三村は再びSAFE（安全）に切り替えると助手席に置いた。

その時、車の屋根の上からトンという音が聞こえてくる。

刹那、助手席に銃を置いた三村の視界に、廃工場の窓から中に飛び込む白い影が映った……

幸成が周囲に目を配っていると、後ろに気配を感じて二丁拳銃の銃口を向ける。

そこに立っていたのはヘクセではなく刀を手に持った白狐であった。
月明かりに影を浮かび上がらせる白狐は微動だにしない。

幸成はスコトスとフォースをホルスターに仕舞い、フューラーを外すと深く息を吸い口を開いた。

「答え合わせといこうじゃないか、白狐……いや、こう呼んだ方がいいか？」

幸成は白狐を真っ直ぐ見ると、一度目を閉じる。

そしてゆっくりと開けると月が雲に隠れ、白狐の姿を隠した。

白狐は白い面を外したようだが顔は暗がりだ判別出来ない。

幸成は半ば怒鳴るような大声でその名を呼んだ。

「三神沙耶那！」

幸成が怒鳴ると同時に雲が晴れて白狐……沙耶那を照らした。

「やはり、幸成君だったのですね？」

「今から問答だ、沙耶那さん。まずはこちらから質問する。あなたは何者だ？」

「私は三神神社の神子。この街の魔を払う存在です」

「現実には小説よりも奇なりってか……」

幸成が髪を掻き上げると深い溜息を漏らす。

「が、その間を与えないかのように毅然とした態度と口調で沙耶那が口を開く。

「私からの質問です。幸成君は何者ですか？」

「……」

HAWKの規定において、秘密保持を最優先としているが唯一特例として語れる場合がある。

それは相手がヘクセと継続的に戦っている人物である場合だ。

たいていが軍人であり、民間人に使う機会は無いと揶揄されていたが、使われた事が無い物が皮肉にも民間人に最初に使うとは……

「俺は陸上自衛隊管轄、対吸血鬼殲滅火器殺害部隊、通称『HAWK』所属、直江幸成陸士長だ」

「自衛隊……？そんな歳で自衛隊に入れる訳が……」

「ちよつと訳ありだね」

幸成は沙耶那の言葉を遮ると真顔になる。

「二つ目だ。その身体能力の高さは？」

「私は幼い時から高い力を発揮する訓練を受けていました。これは一子相伝だから一般には知られて無いけど……脳科学では潜在能力と言われているらしいです。夜限定に任意で発動する能力で、吸血人を探す時も匂いを辿り、探しています」

成る程、彩花さんの当たりだ……

匂いというのも、恐らくヘクセが発するフェロモンの事だろう。

「問います。何故、傷がもう癒えているのですか？その目は？」

「これは俺も知らない。目も生れつきだ。昼はカラーコンタクトで隠している。問うが、どうして俺を攻撃した？」

「匂いが血吸い人だったからです。しかし、今は何も……」

多分、近距離で奴らの血を浴びたからだろう。

「これが私からの最後の問いです。何故、私に銃を向けましたか？」

「麻醉銃で眠らせる為だ。人間を撃つ趣味は俺には無い」

幸成がそう言うとしばしの間、沈黙が流れた。

数秒して沙耶那は吹き出し、声を出して笑い出す。

幸成は驚いたように目を見開くと沙耶那が笑いを堪えながら口を開いた。

「ごめんなさい！フフフ……幸成君、何か印象と違って……」

そこまで言った瞬間、沙耶那は笑みを消していく。

それこそ、何か恐ろしい物を見ているかのように……

その様子に気付いた幸成が振り返ったそこには20mにも及ぶ巨大な蛇アナコンダがいた。

巨大な蛇は創作だけと思われがちだが、ブラジルのブタナン大学には10m強に成長した標本が保存され、さらには黄金郷エル・ドラドを求めてアマゾンに入り行方不明になった著名な冒険家「パーシー・フォーセツト」の記述には体調18mのアナコンダを射殺したという記述がある。

そんな馬鹿なと笑う人がいるだろうが、水の中で暮らす生物は重量の影響を陸程受けない為、クジラを筆頭に大きくなる傾向にあるのだ。

その馬鹿デカイ蛇が目の前で鎌首をもたげている。

近くの天井には穴の開いたためのパイプがあり、そこから出たのだと物語っていた。

アナコンダは幸成の目を真っ直ぐ見る。

蛇に睨まれたら動けないというが、20m近くになるとまるで体が石になったように固くなってしまふ。

その時、アナコンダが首を後ろに引く。

「幸成君！！」

沙耶那の声が響くと同時に、幸成の体に戻る。

刹那、蛇は頭を投石器のように勢いを付けて幸成に飛び掛かった。

幸成は素早く避ける。

そこで幸成はある事に気付いた。

蛇は俺を狙ってるんじゃない……

幸成が叫ぶより早く蛇の丸太のように太い胴が幸成を弾く。

「キヤアアアツ！！」

その瞬間、沙耶那の悲鳴が響き、アナコンダは沙耶那を足から飲み込む。

「んっ！！んんんー！！」

沙耶那のくぐもった悲鳴が大蛇の中に消える。

沙耶那の体は一瞬にして大蛇に飲み込まれ、蛇の体の中に納まってしまったのだ……

体が肉壁に沈んでいく。

ゆっくりと、ゆっくりと中に沈んでいく……

「いやっ！！出して！！」

沙耶那は粘液質の不快感を発する肉壁の中で叫ぶが声はその厚い肉壁に遮られる。

不快な音と吐き気を催す程の匂いが沙耶那を深淵へと引きずり込んでいく。

布団を何枚も重ねたように柔らかい肉壁は沙耶那の体を包み、ゆっくりと奥へと誘う。

動きが止まったかと思うと肉壁から匂いの元と思われる液体が滲み出て沙耶那の体を濡らしていく。

これは胃液？

だとしたら私はこのまま蛇の肉に……

「そんなのって……」

沙耶那の体を包んでいる暗い肉壁の中で涙を滲ませた。

これは神子として人を傷付けた罰？

このまま蛇の血肉になっていくのが私の報い？

そんなの嫌！！

沙耶那は精一杯体を動かして抵抗するが肉壁は沙耶那の抵抗を嘲笑うかのように激しく動き、沙耶那の体力を削っていく。

衣服が少しずつ溶けていくのが分かる。

このままでは……

「幸成君……助けて……死にたく……ない……幸成……君……」

沙耶那は蛇の腹の中で助けを求めたが、それが外に聞こえる事は無かった。

「んっ……く……やあっ……苦し……い……幸成……く……」

沙耶那は肉壁の圧迫による息苦しさに耐え切れず、意識を霧散させ

ていった……

沙耶那を飲み込んだ蛇は細く長い舌を出すと幸成を黄色い目で見つめる。

フューラーを装着した幸成は二丁拳銃を構えて対峙した。

沙耶那がいるであろう部位が大きく膨らんだ場所が時折痙攣している。

恐らく沙耶那が中で抵抗しているのだろう。

(クソツタレ！！)

幸成は舌打ちをすると二丁拳銃を睨む。

この銃の特性である次弾が体の中で暴れる事が蛇への攻撃を難しくしていた。

下手に次弾が暴れたら中に捕われている沙耶那に対して跳弾によって変形した弾丸で致命傷を与えかねないからだ。

しかも、麻酔銃「ミューデトラウム」でこの20mの化け物を眠らせるには弾薬が足りな過ぎる。

その時、足元に弾丸が当たり、幸成は思わず周囲を見渡す。

「こつちだよ」

無邪気な子供のような声のする見上げなければ視界には入らないその高さに目線を持っていくと天井の上のパイプに座った女性がいた。幸成は即座にHSVに切り替えると色は緑。

ヘクセだ。

この蛇から考えると特殊能力に特化しているヘクセで蛇を操っているのはコイツだろう。

幸成は女性に二丁拳銃の銃口を向けるとフルオートで、弾が尽きるまで連射した。

40発にも及ぶ多数の弾丸は軽機関銃よりも瞬間的に濃い弾幕を張る。

が、しかし、女性はパイプを蹴って空中に逃げ、そのまま地面に降り立つ。

多数の弾丸は先程女性がいたパイプを一瞬にして蜂の巣に変え、それが落下する。

幸成は一步前にながら弾倉を交換すると、数秒して落下したパイプが地面に突き刺さり、工場内に轟音を響かせた。

「うわ！凄いい火力だ！！」

「何なら頭もこのパイプみたいにしてやろうか？」

幸成はドスの利いた声で女性を睨むとフフと笑い、リボルバーを取り出した。

リボルバーは迷彩柄に倍率スコープが取り付けられた「コルト・アナコンダ」だ。

・44マグナム弾を使用し、命中率が高い事でも知られるこのアナコンダはリボルバーと言っても侮れない。

女性はアナコンダを満足そうに眺めると微笑む。

「この銃の弾丸にはマムシの出血毒が塗られてるんだ。マムシの毒って実はハブより危険なんだよ？」

出血毒は酵素の作用によってフィブリンと呼ばれる血液凝固に関わるタンパク質を分解する事で血液の凝固を阻害し、血管系の細胞を破壊する事で出血を起こさせる毒だ。

それは非常に危険な毒であるというのはマムシの被害を考えてもらえば分かるだろう。

「掠ったらアウトか……」

幸成は蛇と女性にそれぞれ拳銃を向けながら小さく呟いた。

「ああ、女の子が心配だよな？大丈夫。私が君の血を吸うまではこの蛇も女の子を消化しないよ？そう躡てるからね」

女性は短い茶髪の髪を自ら撫で、ラフなジーパンの腰に巻いていたポシエットから・44マグナム弾を取り出し、シリンダーから先程

使った薬莖を抜いて一発を挿入する。

「しかし、可愛い女の子じゃなきゃ、コイツも食べてくれないんだ。飼い主に似たんだよね。私も良い男じゃなきゃ食べられないからね」
女性はそう言うと言で口の周りを舐める。

「シユトレイゴイカバルはそんな変態しかいねえのかよ!？」

「高尚な嗜好と言つて欲しいね。私はサーシャ・サクレイン。シユトレイゴイカバルではズメヤー・サーシャと呼ばれているわ。一対二、貴方には勝ち目は無いわよ」

「ズメヤー……蛇のサーシャか」

蛇を使役し、蛇の毒を使い、蛇の名前の拳銃を使う。

悪趣味な女め……

蛇とサーシャを睨み、幸成はスコトスとフォースを構えるのだった

……

4 - 7 : 攻防

工場から何かが落ちる音が轟いた。

「何事だ!？」

三村は眉を潜めながら口を開く。

先程の悲鳴と言い、何かが工場内で起きている。

「ちよつと行つてくる」

「分かりましたあ」

「気をつけて」

彩花と優が笑いかけると三村は頷いてM4A1とアルムブレストを掴み、車から飛び出す。

そして近くの10m程の建物の屋上にアルムブレストの矢を放ち、屋上の手摺りに引つ掛かったのを確認する。

「これを登るのかよ……」

アルムブレストのワイヤーの限界重量は180kgだが、ワイヤーの巻き取りはドルヒボレンに劣る。

これをラペリングで登るのか……

いや、やらないといけないんだ……

三村は頬を叩くとアルムブレストを地面に置き、壁を垂直に登って行った……

下手に動けないというのが本音だ。

幸成はサーシャと蛇を交互に見遣る。

フューラーの敵を捕捉する機能「LAV」は一人しか捉えられない。

「蛇に巻き付かれられたら逃げられないよ」

サーシャは銃口を向けて、引き金を引く。
重い銃声と毒が塗られた弾丸が吐き出された。

銃口に反応して何とか先回りをして避けていた幸成の顔のすぐ横で
初速約410kmに達する・44マグナム弾が通過していく。

同時に幸成は二丁拳銃をサーシャに向けるが、蛇がサーシャの前に
飛び出して引き金が引けない。

蛇の大きく膨らんだ胴体には沙耶那が捕らえられている。

歯ぎしりをし、幸成は柱の影に隠れると二丁拳銃を仕舞い、ナイフ
「メッサードルヒ」を取り出す。

逆手に持ったナイフを構えると、蛇に向かって駆け出して行く。

コイツなら確実に標的を仕留められる。

問題は蛇を操るヘクセを殺した事による蛇の暴走だ。

蛇の力は非常に強く、アナコンダに巻き付かれれば骨が粉碎する。

しかも抑制していた主がいなくなった事で沙耶那を消化してしまう
かもしれない。

先に何らかの形で蛇を仕留める。

「無謀にも程があるよ」

サーシャは蛇の後ろから飛び出すと幸成の間合いに迫る。

意表を突かれたその時にはサーシャの牙が幸成の首筋に突き刺さっ
ていた。

痛みよりも快樂が体を貫き、幸成の思考が遮断されていく。

しかし、条件反射で突き出されたメッサードルヒがサーシャの体を
引きはがし、幸成はサーシャに電流を流す。

メッサードルヒから流される電圧はスタンガンの100万ボルトと
同じだが、電流は100アンペアと感電死を引き起こせる程高い。

が、ヘクセを殺すには些か頼りない威力だ。

案の定、サーシャはナイフから逃れるとコルト・アナコンダを乱射
し、幸成を威嚇する。

幸成も伏せて弾丸を避け、やり過ごしたと思ったその時、アナコン
ダが長い尾を振って幸成を吹き飛ばす。

その強い尾の一撃は幸成を吹き飛ばすには十分な威力で、幸成は壁に叩き付けられて血反吐を地面に吐き出した。

「だらし無いな。でも、美味しいね、君の血。病み付きになりそう」サーシャは赤く染まる歯を見せながら微笑む。

これがシュトレイゴイカバールのヘクセか……

はぐれヘクセや囷とは比に成らない強さだ。

しかもあちらには人質がいる。

不利な要素しかない。

幸成は口から垂れてくる血を手の甲で拭き取ると再びメツサードルヒを構える。

その時、ナイトビジョンにしていたフューラーに線が映った。

これは……レーザー？

三村はM4A1のフォアグリップを握り、ACOGスコープにサーシャを捉える。

ACOGのサイトの他にレーザーもサーシャを捉えている為、外すことはへまをしない限り無い。

暗視装置「JGV5-V8」の他に装着したヘッドセットに三村は吹き込む。

「こちらフリューゲル。ロメオ、聞こえるか？オーバー」

(……ロメオ、聞こえている。オーバー)

「援護要請が無かったが忘れていたか？オーバー」

(沙耶那さんが大蛇に丸呑みにされて、救出の方法を考えていてそれどころではなかった。オーバー)

「沙耶那？どういう事だ？」

(白狐の正体は彼女だ。大蛇に飲み込まれて今は手が出せない。何

とかしてほしい。オーバー)

「……了解した。援護する。フリーゲル、アウト」

三村は無線を切るとサーシャの頭部に向かってセミオートで数回引き金を引く。

超音速弾ではない為、衝撃音が周囲に微かに響いた。

そして放たれた弾丸はサーシャの頭に直撃とまではいかなかったがダメージを与える。

サーシャは額に付いた傷を触ると、三村を見て口元を歪ませた。

「仲間がいたんだ」

サーシャはそう呟くとスコープを覗き込み、三村に向かってリボルバーを連射する。

しかし、精度が良いと言っても拳銃は狙撃用の武器ではない。

弾丸は三村に当たらず、手摺りや壁に直撃する。

弾を撃ち切ったサーシャは舌打ちをするとコルト・アナコンダに弾丸を装填していく。

そのリボルバーの時間の掛かる装填のタイミングを見計らって、幸成はフォー스だけを構える。

蛇がサーシャの前に出ようとすると、蛇の左目を三村のライフルから放たれた5.56mm NATO弾が射抜く。

凄まじい鮮血に大蛇は悲鳴をあげると、幸成は大蛇に向かってメツサードルヒを投げ付けた。

投げナイフは実際には刃を掴んで投げる物で、投擲後に回転しながら対象に突き刺さる。

幸成の訓練された手のスナップで回転が付けられたメツサードルヒが大蛇の頭に突き刺さり、大蛇が昏倒した。

その隙を付いて幸成はドルヒボーレンも取り出しサーシャに接近する。

装填を終えたサーシャはコルト・アナコンダを構えるがそれより速く幸成の放った9mmシャルデンプファー亜音速弾がコルト・アナコンダを手から弾く。

舌打ちをしたサーシャは先程と同じように突進し、幸成の首元に噛み付こうとする。

しかし、それを見越していた幸成は全身を捻ると片足で跳び上がり、空中で別の片方の足で蹴りを決める中国武術の技「旋風脚」をサーシャの顔面に叩き込んだ。

自分が突っ込んで来ていた事の勢いと蹴りの勢いの相乗効果により、サーシャは凄まじい速さで壁に叩き付けられる。

幸成はそれに追い撃ちを掛けるようにドルヒボーレンの銛のように尖った先端を撃ち込んだ。

心臓付近に刺さった瞬間、ワイヤーが巻き取られて一瞬で距離が詰められる。

「Jack pot」

幸成はサーシャの耳元で囁くとフォースを頭に突き付け、フルオートで連射した。

次々放たれる弾丸はサーシャの頭を柘榴のように粉碎し、辺りに血をばらまく。

「終わったか……」

幸成が呟いたその時、蛇の凄まじい体当たりが幸成を弾く。

頭にナイフが刺さりながらも向かってくる生命力の高さだからこそここまで成長出来たのだろう。

が、しかし、主を失った蛇はただの猛獣でしかない。

幸成は冷静に二丁拳銃を構えると照準の少し下に蛇の頭を捉え、連射した。

蛇の頭上を初弾だけが貫通し、上部に付けられた銃口から放たれた弾丸は蛇の頭上を通過していく。

大蛇と言え生き物、流体性力学的ショックを起こせば即死だ。

案の定、大蛇は弾倉が空になる頃には昏倒し、死に絶えた。

幸成は二丁拳銃を仕舞うと蛇からナイフを引き抜く。

そして蛇の胴体を引き裂き、中から生臭い匂いが漂う液体が溢れだし、その液体に濡れた沙耶那の腕が見えた。

幸成は滑らないようにハンカチで沙耶那の腕を拭き、引つ張り出すと幸成は狼狽する。

俯せだったから良かったものの、沙耶那の着ていた着物は溶けて完全に無くなり胸に巻いていた溶けかかったさらしと白い下着だけだった。

「ちよつ！！誰か来てくれ！！」

幸成は大声で叫ぶと取り敢えず半裸の沙耶那を中から引つ張り出す。その姿を直視する事が出来ない幸成は顔を真っ赤にしつつ、目線を逸らす。

苛々と足を踏み鳴らすか誰も来ない。

フューラーに手を当てた幸成はその苛立ちを隠さない口調で無線に怒鳴った。

「状況が終了したんだ！目の前に女の子の半裸が横たわってちゃほつとけねえから誰か来てくれよ！」

（自分は無理だ。降りなければならん）

（ふ〜んだ！自分で何とかしろ！！）

（学校で王子様呼ばわりならあ、最後までお姫様を守らなきゃいけませんよねえ？）

（お前、女の子の半裸見てんのかよ！！フューラーから画像を………三村以外問題外だ………）

幸成は深い溜息を漏らすと沙耶那の脈を測り、生存している事を確認する。

問題はこの状況だ。

抱えれば流石に問題だろうし、背負うしか………

幸成は目を閉じながら沙耶那を仰向けにして背中に背負う。

「ひい！」

沙耶那のさらしを巻いていてもボリユームのある胸が幸成の背中に当たり、幸成は軽く悲鳴をあげる。

初めて感じる女性の胸の柔らかさに幸成はうろたえた。

（やべえ、やべえ、やべえ！何か変な気持ちになってきた……）

幸成は頭が沸騰して思考回路が飛びそうになり、首を大きく左右に降る。

「落ち着け……俺……」

幸成は小さく呟くと廃工場の扉を開けて黒塗りのバンに向かって行った……

古い教会の中に集まった人々。

その中にいた一人の少女が歩み出ると口を開いた。

「ズメヤー・サーシャは死亡。狼と狐を殺し合わせる作戦は失敗しました。ミラルダ様……」

「それはどうでもいい、ルーナ・ヴェルドウーラ。貴女は引き続き監視をなさい」

「仰せのままに」

「分かっていると思うけど……もし、監視の途中で奴らに気付かれたら……」

痛苦のミラルダが指を鳴らすと同時に教会のありとあらゆる隙間から成人男性の親指程もある幼虫が湧きだしてくる。

幼虫は赤黒く、小さな牙のある顔を少女に向けて奇声をあげた。

その悍ましい外見に少女は恐怖する。

「貴女はこの子達の餌になるから」

「分かっております」

少女はそう言うのと立ち上がり、ステンドグラスから漏れた月に照らされた……

三神神社に車を走らせていた幸成は痛い視線に耐える為、外を眺めていた。

ふと幸成は外から視線を外し、後部座席に寝かされた沙耶那と彼女の血圧を計る彩花を一瞥する。

それにしても彩花の先程の発言は……

(どっから王子様とか言われてると聞いたんだ、彩花さんは……)

「幸成！変な事をしてないだろうね！」

優は幸成の座っている座席に腕を回しながら怒鳴る。

「やってないよ！やる訳が無い」

万に一つ変な事をしないにしても、仮にしたならば例の親父さんに
ずたずたに切り裂かれそうだ。

この姿で送り届ける事すら鬱だ……

幸成は髪を掻き上げると視線を落とす。

同時に車は三神神社の前に止まり、三村は幸成の頭をぐしゃぐしゃ
に掻き乱す。

「行つてこい。HAWKの事は規則に基づいて言っても構わん」

それは彼女が協力者に成り得るだろうという事に基づいての事だろ
うが、これじゃ協力は無理だろう。

てか、殺される……

それを汲み取った三村は笑ってみせた。

「安心しろ。お前はそう簡単に死なないだろ」

「死ぬ死なないの問題じゃねえだろ！」

幸成は怒鳴ると同時に笑顔の三村は幸成の眉間にカービンライフル
の銃口を突き付ける。

「行くよね？」

安全装置を外し、満面の笑みで笑いかける。

「い、行きます……」

「ゆっくりして……」

「……はい……」

幸成は顔を引き攣らせながら答えると助手席を降り、後部ドアに手
を掛けて沙耶那を背負った。

無心のまま背中当たる魔性の存在に耐えつつ、幸成は石段を登っ
て行く。

まるで拘首台に登る死刑囚の気分だ。

もつとも首を括られるのではなく、首を斬られるのだからギロチン台になるのか？

いずれにせよ、ジョークにすらならない。

石段の登りきった幸成は苦笑すると広場の隣にある沙耶那の家に向かった。

「おつかねえ……」

幸成は小さく呟くと玄関の扉を二回叩く。

ガラスが揺れる音が響き、「はい」という穏やかな声が聞こえてくる。

数秒して玄関が開くと望が「お帰りなさい」と笑いかけたが、幸成の姿を見て目をしばたかせた。

「幸成君……だったわよね……どういう事なの？」

「自分は陸上自衛隊の特殊部隊で、貴女達が血吸い人と呼ぶ存在を狩る任務を帯びています。血吸い人の操る蛇に飲み込まれたのを助けました」

「そう……中に入って」

「お邪魔します」

沙耶那を降ろして幸成はゆっくりと一礼する。

「沙耶那、帰ったか？」

居間の扉を開けて陽気な声で問う翼が幸成とその傍らにいる気絶した娘を見た瞬間、表情を見る見る内に強張らせる。

「貴様あ！！沙耶那に何をしたあ！！」

翼が怒鳴ると同時に望は翼を諫める。

「彼は沙耶那を助けたのですよ！恩人に無礼はやめて下さい！！」

「……………」

翼は目線を落とすと「入れ」と呟き、沙耶那を抱き抱える。

「望、沙耶那を風呂場に運んだら身体を洗ってあげてくれ」

「分かりました。幸成君はこちらにどうぞ」

幸成は靴を脱ぎ揃えると望の後ろに続き、客間に通される。八畳程の畳の部屋に漆塗りの大きめの机が置かれ、窓際にはガラス

ケースに入った日本人形が置かれた和室だ。

幸成は望が置いた座布団に正座すると翼が早足でやって来て望の肩を叩く。

望はゆっくりと頷き、退出すると翼は右足は胡座に、左足は立て、そして左手を左足の膝に乗せると翼は幸成を睨んだ。

「お前、何者だ？」

「陸上自衛隊所属の隊員です。自分は血吸い人を狩る任務を帯びています」

幸成はそう言うと言と身分証明書を取り出し、机の上に置いた。

翼はそれを一瞥すると、煙草を掴んだ。

「お前の見舞いに行ってから沙耶那の元気が無かったんだが何があったんだ？」

翼は煙草のフィルターをくわえてマッチで火を点けると、マッチの火を消しながら幸成を睨む。

「俺が入院する前日、俺を血吸い人と勘違いした白狐、いや沙耶那さんと交戦しました。沙耶那さんはきつと俺に怪我をさせた事を気に病んだんでしょう」

「そうか」

翼は紫煙を吐き出すと短く呟く。

彼は親バカとでも言うべき程、沙耶那を愛している。

無論、娘が危険な目にあつて怒りを感じない親はいないだろうが、その感情は些か矛盾しているとも言えた。

そこまで愛していて何故彼は沙耶那を白狐として送り出すのか……

その意を感じたのか、翼は口を開いた。

「三神神社の伝説は貴様も知っているな？」

「ああ」

「あの白狐というのは、神子の伴侶となるべき存在だ」

幸成は眉を潜めた。

「どういう事です？」

「連れ去られた巫女を助ける為に力を尽くしたのは巫女の許婚だっ

たという訳だ。それが伝説の真相だ。三神の家系は沙耶那も俺もその白狐の避けられない使命を帯びていると思ってくれ。それとコイツには一つジンクスがある」

「ジンクス？」

「この伝説に近い事をした場合、その男女は結ばれる。俺もそれと望と結ばれているし、俺の母親も親父と結ばれている」

伝説に近い形？

確か伝説は鬼に捕われた巫女が白狐に助けられて……

「あつ……」

謀らずもその形になっている。

蛇……地方によつては鬼と同一視する例がある……に捕らえられた沙耶那を助けて……

「言つておくが娘はやらんぞ、小僧！」

「いやいや……もらう気は……」

「娘がいらんだと！？沙耶那は器量も性格もいいのにか！？」
どっちなんだよ、コイツは……

馬鹿なのか、阿呆なのか、天然なのか？

恐らく、沙耶那の天然成分はこの人から受け継いだのだろう……

「あなた！！落ち着いて下さい！！」

流石しつかり者の沙耶那母、と幸成が頬を緩ませるととんでもない発言をする。

「沙耶那は寝かせて来ました。それよりあなた！！来年でなければ結婚は出来ませんよ！！」

結婚させる気満々ですか、お母さん……

「いや、その……取り敢えず今日は帰ります。あと、俺が自衛官とというのは内密にお願いします。それと場合によつては協力を申し出るかもしれませんがそのつもりでお願いします」

「大丈夫です。私達も同じ立場ですし、何より沙耶那のお嬢さんになる人の頼み事は断れませんから、任務の時は必ずお供させます」
望は笑顔を見せ、もはや幸成が養子に入る事が確定の勢いだ。

前言撤回、この家の人達全員が天然……

胃が痛くなってきた……

「とにかく、沙耶那さんにはよろしく言うておいて下さい……婿養子の事じゃ無いですよ？」

幸成は釘を刺すが聞いてなさそうだ。

しかもフューラーの向こう側からHAWK隊員の笑い声が微かに聞こえてくる。

（良かったな、許婚が出来てなあ。これで結婚相手には困らないな）
三村の笑いを含んだ口調からどんな顔をしているか目に浮かぶ。
いくら美少女でも、流石にこれは勘弁してくれと思う幸成であった

……

障子の向こう側で賑やかな客間の様子を聞いていた少女は頬を緩めながら囁いた。

「……………ありがとう……………幸成君」

少女はそう言うと、自分を助けてくれた少年の名前に心の高鳴りを覚え、頬を赤らめるのだった……

5 - 1 : 春終(前書き)

第5話

桜の薄桃色の花が舞い散り、春の終わりを告げながらも花に代わって夏への新緑の蕾が枝に現れる。

澄み渡る青空を見上げていた幸成は大きな欠伸をし、目を閉じた。サーシャを最後にシュトレイゴイカバールのヘクセは途絶え、一切の手掛かりが無くなり、監視対象者の鳳寿とも学年の違いから接触する機会も無くなってしまった。

メールも特に無く、こちらからも話題が無い為、完全に手詰まりだ。「びつくりする程、対処の仕様が無いな……これからどうしようか……」

幸成が小さく呟くと「ここにいたんですか？」と沙耶那の声が聞こえ、屋上のベンチに座っていた幸成は顔を沙耶那に向ける。

「あゝ」

幸成は力無く答えると、再び空を見上げた。

「八方塞がりってこういう事を言うのかな？」

「血吸い人……ヘクセの情報が入って来ませんから、進展無しですね」

沙耶那は幸成の隣に座ると神妙な面持ちで呟く。

進展があったと言えば沙耶那がHAWKに所属したという事くらいか？

三神一家の希望では非HAWKに参加したいと願い出てくれたのだ。三村も正規の手続きを踏み、参加通達を上に取り付けて、上からも許可が下りた。

そして沙耶那は幸成の補佐としてHAWKに新たに設けられた「アシスタンス（補佐）」のポジションに配置され、コードネーム「フオックスロット」が与えられた。

「フオックスロット」は国際的な頭文字の規則の通称である「NATOフォネティックコード」での「F」に当たる。

勿論、「F」は白狐の「FOX」から来ているのは言うまでもない。ちなみに幸成の「ロメオ」も「R」を意味するNATOフォネティックコードであり、「赤眼の狼」が由来である。

なお、沙耶那がコードネーム「フォックスロット」になる際、「単純にフォックスでいいんじゃない……」という意見があったが「カッコイイからいいだろ」という事で「フォックスロット」に安定した。幸成は空から目線を外すと沙耶那を見ながら微笑む。

「沙耶那もよくまあ、こんな貧乏部隊に入ろうと思ったよなあ」
二つ目の進展は沙耶那を呼び捨てに出来るようになった事だ。任務にはさっぱり関係無いのだが……

「それは……その……」
沙耶那はもじもじと体を動かすと頬を真っ赤に染めている。

いつもは堂々としている沙耶那が口ごもっているのを見て幸成は小首を傾げた。

「どうした？どこが悪いのか？」
「だ、大丈夫れふ」

噛み噛みで呂律が回っていない沙耶那は恥ずかしさのあまり遂にはベンチから立ち上がり、深く深呼吸した。

（幸成君と一緒にいたいからなんて言えないですよー！！）
敵の体内に捕らえられ、それを助けて結ばれるとかはよくある「それ、何てエロゲ」だが、沙耶那にしてみれば両家公認……無線越しで隊員達が爆笑を公認というかは別にして……とも言える関係だ。

つまり、言ってしまうえば幸成は沙耶那の伴侶になる存在である。それが嬉しくもあり恥ずかしい。

そもそも今まで異性に告白された事はあっても異性を好きになった事は初めてでその感情への戸惑いもあった。

当の幸成は許婚の話は完全にネタか冗談だと思っているのだろうか

……
「ええっと……コホン」

沙耶那が一回咳ばらいをして意を決したその時、屋上の扉が開き、菜月とロイが顔を覗かせた。

「こんな所にいたか、幸成」

「サヤもユキ君も二人で何やってたの？もしかして乳繰合い？キャ！」

頬に手を当て一人で舞い上がる菜月に二人は苦笑いを浮かべる。

「違いますよ！」

幸成は大声で怒鳴ると菜月は悪戯な笑みを浮かべ、幸成の隣に座り、幸成は両手に花という状態だ。

「二人で何の話しをしたの？それとも噂は本当だったり？」

「「噂？」」

菜月の問いに二人は素っ頓狂な声をあげる。

「二人が最近一緒に行動しているから付き合ってるって、学校中凄い噂だよ？」

「別に付き合っつては無いから」

「そうですよ！私と幸成君はいい……」

そこまで言いかけた沙耶那の口を幸成は押さえて作り笑いを見せる。許婚なんて言ったらそれこそ学校中の噂になっちまう。

事情を知っているロイは笑いを噛み殺し、ニヤニヤ笑っている。後で見ているよ、と幸成はロイを睨む。

ロイにとっては今回の事態は憎たらしく羨ましいだろうが、幸成の弱みを握られたのだからプライマイゼ口だ。

「三人ともナツに隠し事？」

「違う違う。沙耶那の口に埃が入りそうだったから防いだんですよ」

「几帳面だなあ。もしかしてA型？」

「A型でもないし、血液型と性格の因果関係は無いんだよ？」

幸成が諷めるように言くと菜月は「夢が無いなあ」と笑う。

四人の間を風が通り抜け、桜が周囲に舞い散る。

談笑をする四人はチャイムが鳴るその時まで他愛の無い話で盛り上がるのだった……

5 - 2 : 洋館

夜桜が月夜に映える春の終わり。

白い乗用車が古い洋館の前に停車した。

二組の男女が乗用車から出てくると長髪の男が懐中電灯を取り出す。

「ここかあ、心霊スポットは？」

「春なのに心霊スポットとか無いってえ〜」

ポニーテールの女性が笑いながら長髪の男の肩を叩く。

「昔は鉱山の事務所だったんでしょ？観光名所にすれば良かったんじゃない？」

「こんな山の中に誰も来ないって!!!」

もう一人の眼鏡をかけた女性は陽気に笑うとルネサンス様式の外観を残す建物を見て笑う。

この建物は華景市で鉱山業をしていた時代に、労働者が暮らしていた場所だ。

不釣り合いなルネサンス様式の洋館はかつては美しかっただろうが、現在は寂れてしまいその面影は一切無い。

「さて、幽霊さんの自宅に突撃と行きますか」

もう一人の男性が懐中電灯を取り出し、それぞれが女性と手を繋いで洋館に歩いていく。

人々は心霊スポットに惹かれるのかと問えば、度胸試しと答えるだろう。

しかし、実は心霊スポットは日常と非日常の境だからという事を心の奥底で感じているのだ。

何故なら現実にはホラー映画のような恐怖は有り得ないし、ファンタジーのような奇想天外な冒険活劇は万に一つ有り得ない。

その唯一の可能性を作ってくれるのが心霊スポットなる境目であり、若者にとっては度胸試しの場だが同時に日常から逸脱させてくれる場所なのだ。

四人は木製の扉を開けると暗闇の中に進み、懐中電灯のオレンジ色の光で洋館の広間を照らす。

深紅のカーペットと両脇の階段、目の前の木製の扉、そして多数の真新しい蝋燭が立てられた燭台。

その燭台の蝋燭はまるでさつき取り替えたかのように真新しい。

「誰かいますか〜!」

長髪の男が叫んだその時、手を繋いでいたポニーテールの女性が「やめてえ〜」と男性を小突く。

その時、入って来た扉に鉄格子が下りて来て入口を塞いだ。

四人は体を硬直させると表情を強張らせ、鉄格子を掴む。

「ちよつと何よ、これ!!」

「ふざけんなよ!!」

四人が口々に怒鳴ったその時、燭台の蝋燭に火がつき、洋館を淡く照らした。

淡い光に照らされて、十字に伸びる蝋燭が地面に伸びる。

その時、階段の踊り場から影が伸び、笑い声が響き渡った。

「ようこそ、私の居城へ」

黒のモーニングスーツに痩せ形の美形の男が声高に言うとウィングラスに入った液体を傾ける。

ワインよりも濃い赤色の、粘り気のある液体は……

「実に美味しいよ。君達よりも先に来た先客の物でね?」

その瞬間、眼鏡をかけた女性の頬に生暖かい液体が落ちてきた。

女性は震える手でそれに触れて、恐る恐るみると手が真っ赤に染まっている。

四人は同じ考えにたどり着き、ゆっくりと見上げると絶叫した。

そこにあつたのは体中に傷を付けられ、そこから滴り落ちてくる血で赤く濡れた男女の死体だ。

絞められた二ワトリのように両足を縛られた死体からは傷からだけでなく、逆さにされた事で重力に引かれた血液が口や目という穴から滴っていた。

その数は六体もあり、滴り落ちた血が固まって深紅のカーペットを作っていたのだ。

絶叫に合わせて中央の扉が開き、15世紀から17世紀頃に使われていた大剣「クレイモア」を肩に担いだ屈強な顔立ちで筋肉質の男が現れる。

さらにその後ろには銃が戦場の主力になるまでヨーロッパ全土で主力武器として使われていた槍と斧を合わせたような外見の「ハルベルト」を持った銀色の甲冑達が重々しい音を響かせて男に続いていた。

「男は殺せ、女は私の部屋に連れて来い」

「分かってますぜ、旦那」

屈強な男がそういうと大剣を四人に突き付けた。

男は不敵な笑みを見せると体に見合わぬ凄まじい速度で四人に突っ込んだ。

それと同時に洋館の中から絶叫が轟き、窓の外に漏れていた蠟燭の火が消える。

そして彼らは日常から吸血鬼という非日常の力を借りて、この何も無い世界から逸脱する事に成功したのだ……

5 - 3 : 賭け事

時計の長針が一回転し、短針が22時を指し示す。零荘の103号室でロイを除く全員がトランプでババ抜きに興じていた。

あまりにもヘクセの姿が確認出来ず、情報も入らない事で暇を持って余すHAWK隊員と沙耶那は三村が提案した「トランプでビリだった人がGARUDAを監視」というゲーム(?)により、正々堂々の戦いが行われたのだ。

果たして偶然か必然か、言い出しっぺの三村と本来の監視役のロイが交互に監視という状況がかれこれ20回近く。現在、三村と幸成の一騎打ちの途中だ。

三村がハートの10を、幸成がスペードの10を先に取ったら勝ちで幸成がババを持っている状況となっている。

三村は幸成が右親指と人差し指で挟んだ二枚のトランプの一枚、三村から見て上手のトランプを叩いた。

「ババ、ババ、ババ」

三村はトランプを叩きながら幸成の反応を見る。

幸成は「ババ」の声に頷きながら笑う。

つまり、下手の方がハートの10だ。

三村の人差し指がゆっくりと下手の一枚に向かった瞬間、三村は声高に「と、見せ掛けてえ」とノリノリで先程ババ宣言をしたトランプを抜き取る。

その絵柄はハートではなく黒い道化師のカード、つまりはババだった。

「俺、頷いてたじゃん」

幸成は含み笑いを浮かべながら三村に指を差す。

三村も豆鉄砲を喰らった鳩のように目を数回しばたたかせる。

その場にいた女性陣も三村の滑稽な様子に爆笑していた。

「アハハハ！おっちゃん馬鹿だ〜」

優は腹を抱えながら、堪えられんとばかりに床を叩く。

「お気の毒です、三村さん」

慰める沙耶那も笑いを堪えられず、声のトーンが少し高い。

「というかあ、交互に20回近くも五人のババ抜きでビリになるなんてえ、ロトや宝くじの一等を取るよりも難しいんじゃないですかあ？」

彩花は紅茶を飲みながら、ティーカップを持っていないもう片方の手で人差し指を立てる。

「ロイとおっちゃんが今宝くじを買えば貧乏部隊から脱却出来そうだな」

幸成はシャッフルしている三村に言つと「うるせえ」と口を尖らせる。

シャッフルして出されたカードを迷う事なく抜いた幸成はほくそ笑む。

「Bingo!!」

幸成はランプの束に二枚のランプを放ると三村の肩を叩く。

「頼むな、おっちゃん！」

「……はい」

三村は何故こんな事を提案したんだと左手で顔を覆いながら思う。

「そろそろ飽きたし、やめないか？」

ロイはまさに企んでいましたと言わんばかりのタイミングで提案する。

「ロイ！」

「まあ、そうだね」

幸成の声に彩花と優は頷き、三村はいい年して半ベソになっていた。それ程までに、ヘクセが映らない映像は詰まらないのだ。

「じゃあ、今日はあと二時間はおっちゃん担当な〜」

「ロイ！そもそもお前がやるべき仕事だろー!!」

「だって提案したのはおっちゃんだし……」

幸成とロイ、優が声を揃えて呟くと、彩花が懐からオオズメバチが入ったビンを取り出す。

「部屋に放ってみましようかあ？」

「分かった、分かりました！」

直江三村、34歳。

この歳でトランプに負けて青年達にこき使われる。

「まあ、夜食でも作るからへソ曲げないでよ」

優は立ち上がりながら台所に向かうと、沙耶那は着物の裾を正しながら「私も手伝います」と笑ってみせたが優は仏頂面で首を振った。しかし、HAWKに沙耶那が入ってから優の態度がおかしい。

やたらと沙耶那に突っ掛かり、沙耶那の申し出を断るのだ。

三村とロイ、彩花は事情を知っているらしいが幸成にそれは教えてくれない。

ロイ曰「胸に手を当てて考えた後爆発しろ」との事だった。

優に断られた沙耶那は座布団に座ると同時に思い出したように口を開く。

「ところで幸成君とロイ君は中間テストの勉強をやっていますか？」

「そういや、あつたな……5月の17日だけか？」

「何それ……聞いてないぜ、そんなもん」

啞然とするロイは顔面を青くさせていく。

それもそのはず、今日は5月14日の金曜日。

既にテストまで三日前となり、しかも教科数が9教科と多い。

「だいぶ前から担任は言ってたが、お前は近くの男子と喋っていたからな」

「やべえじゃねえか！でも、幸成も勉強してなかったしな」

「……俺は大学の過程が終わっているんだが……」

「そうだった……」

ロイは膝と手をついて撃沈していると沙耶那が笑った。

「明日から私のお父様とお母様が共通の御友人の結婚式で家を空けるので私の家で勉強会を行いませんか？」

「流石、沙耶那樣！！仏様、いや女神様だ！！ああ、沙耶那樣が輝いて見える！！」

ロイは両手を合わせて沙耶那を拜むと幸成は髪を掻きながら問い掛ける。

「沙耶那はいいとしても、親父さんが許さないんじゃないか？この馬の骨か知らない奴らが二人も泊まるんだぜ？」

「お父様には許可を貰っています。特に幸成君は是非、とおっしゃっていました」

あくまで許婚という訳か……

幸成は髪を掻き上げると深い嘆息を漏らし、沙耶那から目を逸らす。

「鳳寿さんも呼んでみませんか？彼女は監視対象者なんですから良い機会じゃありませんか？」

確かにその通りだが、問題は彼女が来てくれるかだ。

彼女は何か闇を背負っている。

その闇を取り払わない限りは何ともならない。

「三村さんは許可を下さいますか？」

沙耶那が問い掛けると優は「駄目に決まってるじゃん」と怒鳴り、

沙耶那を睨む。

「優！」

三村は目を細めて優を諫めると沙耶那に微笑んだ。

「鳳寿が確保出来たら許可を出そう」

「分かりました。少しお待ち下さい」

沙耶那はニツコリと微笑み、目にも留まらぬ速さで携帯電話のボタンを押していき、指が止まったかと思うと「送信しました」と笑う。所用時間は30秒、女の子のメールを打つのは早いがここまで早いとはと幸成は感心する。

その僅か10秒の間に落ち着いた和やかな着信音が鳴り響き、沙耶那は優しく微笑んだ。

「『分かった』だそうですよ」

「よし！今から準備をしろ、馬鹿二人」

「今から!?」

幸成とロイが三村に問い掛けると二人に同時にデコピンを叩き込む。
「沙耶那さんがもぎ取った千載一遇のチャンスなんだぞ!! 貴様等
デクの棒とは大違いだ!! 命令だ、とつとと行け!!」

「了解!!」

三等陸佐、つまりは少佐の階級に位置する三村は実際、兵長の階級
とも言える陸士長とは、士、曹、尉、佐と、とんでもない差がある。
「命令」と言われて条件反射的に動くのは性とも言えた。

二人は慌てて103号室から飛び出すと、その背中を見送った三村
は頬を緩ませながらと沙耶那を見た。

「沙耶那さん、幸成に近距離戦を仕込んでやってくれないか?あの
馬鹿、格闘徽章を持っているんだが、ヘクセ戦では殆ど拳銃の接射
で対処している。バランスを取るにはナイフをもっと上達させにや
ならんからね」

「私が役に立てますか?それに接射とは?」

「銃口からの距離が零の距離で射撃するのが接射です」

「それって零距离射撃って言うんじゃない?」

三村は指を振ると「零距离射撃とは……」と口を開いた。

「大砲の仰角が零度で射撃をする事を言うんだ。決して零の距離か
らの射撃ではない。最近はおボットアニメやらで零距离ビーム何と
かやらがあるが、しっかり調べてから使いなさいと言いたいね。あ
あ、ここテストに出るから」

三村はそう言う白い歯を見せて笑った……

5 - 4 : 夜道

暗い夜道を歩く三人。

時計は既に1時を差し、街灯の少ない華景市の路地は暗い。しかし、その少ない街灯によって星が非常に良く見えた。

青黒い夜空に瞬く青白い星は非常に美しい。

その下を歩く三人の内二人は大きめのバツクに洗顔や入浴用の道具、他にも着替え等も揃い、まるで夜逃げのようであった。

「いやあ、こういうのを満天の星空とか言っただろうな。河川敷で野原に寝そべりながら彼女と一緒に……」

「ロイ、さつきから煩い」

バツクを肩に担いだ幸成は片目を閉じながらロイを諷める。

「お前は浪漫が無いなあ。いいか？こんなに綺麗に星が見れる街なんて滅多に無いぞ！！」

「星か。確かに綺麗だからな」

「この街は見る場所は少ないですが、星は本当に綺麗ですからね」
沙耶那は優しく微笑むと右手に持っていた刀を左手に持ち替えた。

「沙耶那。その刀、重いなら俺が持つか？」

「大丈夫です。それにこの神緋かみひさめ褪やよい夜宵は代々神子が持つもので
す……」

「何か、刀って感じの名前だな」

「ロイ、それは刀だから当たり前だ」

幸成は突っ込むと沙耶那は右手を口に当てながら鈴のように澄んだ
笑い声をあげた。

「面白いですね、二人とも」

「名前には何か由来があるのか？」

「初代当主であり、神子の夜宵様が作った緋褪色の刀という意味
です。古来、赤には厄除けの力があると言われていたので緋褪色にし
たと言われていますが、どのように色を付けたかは分かっています

ん

「何か国宝に成り得そうな刀だな」

「大袈裟ですよ」

沙耶那は微笑むと刀を抜いてみせた。

鞘と刃が擦れ、月光に緋褪色の刀が照らされる。

かつて対峙した時にはこの刀の切れ味と沙耶那の身体能力に苦戦させられた。

沙耶那は刀を鞘にゆっくりと納めると、思い出したように優しく微笑んだ。

「そういえば、三村さんから幸成君に稽古を付けるように仰せ付けられました。明日の朝から行いますので覚悟してくださいね」

「……分かりました」

幸成は蚊の鳴くような声で答えた。

幸成にとって敵対したくないという意味で沙耶那が最も恐ろしい。

彼自身、自分はナイフによる白兵戦ではなく二丁拳銃を使用した近距離から至近距離の高速戦に特化していると自覚していた。

無論、それが自分の弱点であることも……

拳銃は距離が近くなる程回避は難しく、威力も上がる。

そもそも拳銃で30m先の目標に弾丸を当てる事が出来れば名手と言っても過言ではない。

何故ならライフルによる射撃は銃床等の三ヶ所で支えられるが、拳銃は二カ所ドガンでしか支えられないのだ。

そのうえ、手首で反動を逃がさなければならぬ為、跳ね上がりによって弾が逸れる可能性がある。

その為、拳銃での撃ち合いは10mから7mが最も多いとされており、間合いとしては近距離からの射撃は「理論としては」間違っていない。

しかし、対ヘクセとなれば話は別である。

対ヘクセでも拳銃での撃ち合いは間違っていないが、そこで問題になるのはヘクセの強靱な力と人間離れた体力だ。

そして倒しきれなかったら、銃の弱点「弾切れ」が引き起こされる。対ミリア戦でも接射で倒しきれず、白狐……沙耶那……の乱入により難は逃れた。

あの時、沙耶那が乱入しなければメツサードルヒで交戦しなければならなかっただろう。

だが、近くなれば近くなる程へクセにより吸血される可能性が高くなる。

それを防ぐだけの実力が無い事を対サーシャ戦で思い知らされた。

「俺は剣道は知らないぞ？」

「いえ、私は刀を模した木刀を使いますが、幸成君は脇差程度の大さきの木刀を使ってください。勿論、本気のやり合いです」

「……本気でやるんですか？」

「はい。ハッキリ言いますと、幸成君の白兵戦の実力は私よりも劣っています。本気でやらないと殺してしまうので、真面目にやりましょうね？」

その声に幸成は深い嘆息を漏らすと髪を掻き上げる。

良い機会ではあるが死んだら笑えない。

勘弁して下さいと言えず、幸成は星空を見上げたのだった……

5 - 5 : 過去

深夜に入る風呂は格別に気持ちが良い。

檜木の浴槽と木の桶が心地の良い香りが入浴剤の匂いが混ざり合い、幸成は鼻でその香りを吸い込む。

「気持ち良いなあ」

幸成は広い浴槽に足を伸ばしながら呟く。

沙耶那の家は平家とは言ってもかなり広い。

木造の平家と聞けば質素なイメージをする人が多いだろうが、沙耶那の家は真新しい綺麗な家だ。

切ったばかりの木の薄茶色の家は華景高校と同様に温かみがある。

「幽霊屋敷とは大違いだ」

幸成は苦笑すると曇りガラスの向こう側に人影が見えた。

「タオル、置いておきますね」

沙耶那の声が扉の向こうから聞こえ、幸成は「ありがとう」と答えた。

幸成の声が風呂場のタイルに反響する。

「幸成君？」

「どうした、沙耶那？」

「HAWKの人達はどうして賞賛されもしない事に命を賭けてるのですか？」

「HAWKは、俺達はそれぞれが理由を持ってここにいる。だが、その理由はそれぞれ基本的には知らない。死んだ時や非情な決断をする時に少しでも未練を残さない為だ」

数秒の沈黙。

「……………どうして……………どうして幸成君はHAWKに入ったんですか？」
その声に幸成はゆっくり目を閉じ、入浴剤で緑色に染まった水の中に潜る。

勢い良く潜った為、発生した水泡が水の中で轟音となり幸成の鼓膜

を揺らした。

幸成は数秒して水から出ると髪を掻き上げ、天井を眺めながら口を開く。

「俺にはおっちゃんの周り以外に居場所が無かったんだ。俺は10歳の時におっちゃんに拾われるまでは児童養護施設で暮らしていた」

「孤児……だったんですか？」

「ああ……おっちゃんに拾われたあの日の出来事は忘れもしない」
幸成は目を閉じると口を開いた。

「それは8月20日……寝苦しい夏の夜の事だった。俺が寝付けずにいると物音が聞こえてきた。俺がそこに行くと夕方まで生きていた皆の死体だった。職員は殺され、泣き叫ぶ子供も問答無用に……四人組の強盗だ。誰だろうと見境は無かった……そして俺が最後の一人だった」

幸成はそこまで言う息を大きく吸い込み、一拍置いた。

「俺の胸にナイフが突き刺さった。胸からは血が溢れ出し、声に成らない悲鳴をあげながら死ぬだと思って思った……いや、俺はそこで死んだ方が良かったんだ」

「どうして？」

「ナイフが抜かれたその時、目の前が赤く染まった。そこからは分からない。俺は気が付いたら路地裏にいて強盗の死体に囲まれていた……意識はあったがどうしても止められなかった……そこで俺は通り掛かったおっちゃんに飛び掛かった。だけど、おっちゃんはそんな俺を止めてくれた。」

「幸成君……」

幸成の声に沙耶那が小さく呟くと幸成は左目に触れた。

「その日から俺の左目は紅く染まり、人間じゃなくなった。死んでも死に切れず、強盗とは言っても人を殺したんだ。俺は死んだ方が……」

「それは違います!!」

沙耶那は家の中に響くような大声で怒鳴ると勢いよく扉を開けた。

「人は生きてこそ意味があります！どんな過ちを犯しても死ぬなんて言っちゃ駄目です！！それに幸成君がいなかったら私は……」

「なっ！！えっ！？沙耶那！！」

幸成の焦る声に沙耶那はやっと我に返った。

透き通った緑色のお湯に半身が漬かった幸成を見た沙耶那は見る見る顔を赤くしていく。

口をぱくぱく動かし、茹蛸のように顔面を赤くした沙耶那は大きな悲鳴をあげた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！！」

「分かった。分かったから落ち着け！叫ぶな！！」

「どうした！？」

その悲鳴を聞き付けたロイはスコトス&フォースの元になったHAWK隊員の護身用であるピエトロ・ベレッタ社が開発した拳銃「M92FS エリートIA」を構えながらやって来る。

しかし、幸成と沙耶那の様子から察したロイは舌打ちをすると舌打ちをし、去って行く。

「幸成君の破廉恥！！」

「俺が悪いのかよ！！」

「で、でもいずれ夜には……」

「何を想像してるんだあ〜！！」

幸成は怒鳴ると水の中に潜る。

あまりの恥ずかしさとやり切れなさで幸成はお湯の中でありながら、毛穴から汗が噴き出す感覚に苛まれたのだった……

5 - 6 : 獲物

丑三つ時、草木も眠る時刻。

魔が動き出すその時間に洋館の窓からは淡い光が漏れていた。

古風なテーブルを照らす燭台が辺りを照らす。

テーブルには青いバラが生けられた花瓶と黒ずんだソーセージが大量に盛られた皿がある。

黒のモーニングスーツを着た男は皿に盛られたソーセージを切り分けるとフォークでそれを口に運ぶ。

その横にはクレイモアを持った男性が控えていた。

モーニングスーツの男がソーセージを口にすると重い鉄の扉が開き、一人の少女が入ってくる。

「親にノックを習わなかったのか、ルーナ・ヴェルドウーラ？」

「格は私が上だよ。ヴァインキリウス・サンジェルマン郷」

少女は悪戯に笑うと、モーニングスーツの男……ヴァインキリウス・サンジェルマンは舌打ちをし、ソーセージを咀嚼する。

「見たよ、あの死体。随分悪趣味な事をするんだね」

「御蔭でブラッドソーセージが出来たさ」

ヴァインキリウスはブラッドソーセージの一本にフォークを刺すと少女に差し出す。

ブラッドソーセージはその名の通り血で出来たソーセージだ。

血液以外に内臓や舌、皮、脂肪で出来たそのソーセージは血液の独特の癖がある事で知られている。

家畜の体を余す事なく使われるソーセージだが、このソーセージに使われている肉は……

「私は知らない」

「ヘクセなのに血が嫌い、変わった者が私の上司とははたはた泣けてくるよ。なあ、アーサー」

ヴァインキリウスはクレイモアを持った男……アーサー・ウィー

バーに語りかける。

アーサーはゆっくり頷くと少女を一瞥した。

「それで手筈はこの前と同じで？」

「そうだよ、ヴァインキリウス郷。各自分担して狼と狐を狩ってね。それと私は手を貸さないから」

少女の言葉にヴァインキリウスは目を細め、深紅のワインを口に運ぶ。

「それはどうしてだ？」

「貴方達が失敗しない補償が一体何処にあるのかな？ 奴らに正体が露見したら私が痛苦のミラルダの飼う蟲の餌になるの。そんな危ない橋を渡る馬鹿は何処にいるの？」

少女は口に手を当てて、彼らが失敗するかのような口調で笑うとヴァインキリウスは無表情のままマウザー社の拳銃「モーゼルC96」を構えた。

弾倉が銃把の前にある独特の姿をしたモーゼルC96は20世紀前半で最も知られた自動拳銃とも言われ、様々なメディアでも露出が有る。

そのクラシックな銃を向けられた少女は一瞬目をしばたかさせたがすぐに笑みを見せた。

「先程の発言は撤回していただくか、ルーナ・ヴェルドウーラ？」「貴方、誰に銃を向けているのかな？」

ルーナが微笑むとヴァインキリウスの持っていたC96に青いバラの茎が絡まっていた。

バラの棘がヴァインキリウスの腕に刺さり、C96を取り上げると銃口をヴァインキリウスに向ける。

「実力の差を弁えた方が賢明だよ？」

少女はそう言くと、バラを元の長さに戻す。

「流石、ルーナ・ヴェルドウーラ。植物を操る能力は伊達ではないようだ」

「分かったら歯向かうのはやめなさいね。それと、仮に奴らの前で

私の名前を呼ぼう物なら、殺すから」

少女はそう言うとブラッドソーセージによって血生臭い匂いが充満する部屋から出ていく。

その背中を見送ったヴァインキリウスはブラッドソーセージを噛みちぎると舌打ちをした。

「小娘が……アーサー、ヘクセの中で至高の存在は誰だ？」

「ヴァインキリウス郷、ただ一人だ」

「そうだろ、アーサー。私こそがシュトレイゴイカバールの幹部に相応しい」

ヴァインキリウスはワイングラスを揺らしながらほくそ笑むとグラスを傾ける。

そしてヴァインキリウスは壁に立て掛けられたダーツを見て不敵な笑みを浮かべた。

そこにはダーツの矢で留められた幸成と沙耶那の写真が貼られている。

「私は……」

C96を構えると二人の写真に銃口を向けた。

同時に屋敷の中に銃声が轟き、二人の写真に穴が開く。

弾丸は二人の眉間に穴を開け、その穴の周りを黒く焦がしていた。

「狙った獲物は逃さない」

ヴァインキリウスはC96から出てくる硝煙を吹き消すのだった…

…

雀が囀り、太陽の光がまだ白い早朝。

三神神社の広い石畳に立った幸成と沙耶那はそれぞれ木刀を持ち、それを構える。

「参ります！」

沙耶那は神緋褪夜宵を模した木刀を正眼に構えると、脇差程度のメツサードルヒを模した木刀を逆手に持った幸成を見る。

「いざ！！」

幸成が笑いながら答えると、それより速く沙耶那の踏み込んだ一撃が幸成の頭に振り下ろされた。

即座に脇差で防ぐと鈍い音が空気を揺るがす。

それを舞台に座って見ていたロイが驚嘆の声を漏らした。

それを尻目に幸成は沙耶那の頬目掛けて上段回し蹴りを行うが沙耶那はそれを少し体をのけ反らす事で避け、幸成に中段回し蹴りを叩き込む。

そのまま吹き飛ばされた幸成を一瞥した沙耶那は木刀を攻めの構えである上段に構えながら言う。

「攻撃の動作の隙が威力を重視するあまり大きくなっています。上段回し蹴りの判断は利に適っていますですが逆に意表を突けていません」女の子に戦闘の説教をされるのが始めての幸成は苦笑いを浮かべながら立ち上がる。

その瞬間、沙耶那は上段の構えを保ちながら幸成に迫ってきた。

沙耶那が飛び込んできたと同時に振り下ろされるのを見越して頭の上で脇差を構えた幸成だったがその予想は外れ、沙耶那は剣道の技「抜き胴」で幸成の腹部を殴打して後ろに抜ける。

鈍い音と同時に幸成の脇腹に鈍痛が走り、幸成は崩れ落ちた。

抜き胴は剣道における面のカウンター的な技だ。

面を避けるか防ぎながら相手の胴を打ち、擦れ違うこの技は振り上

げてから相手の右の胸を打つ。

つまり、上段ならば面同様に振り上げる動作が必要無い。

そうとも知らずに振り上げた木刀を受け止めようと腹部を空けた幸成の完全なミスだ。

呻く幸成に歩み寄った沙耶那は手を差し出す。

「いくらなんでもやられるのが早過ぎます」

「ハハ……格好悪いな、俺」

幸成は自嘲するとTシャツをめくる。

沙耶那の一撃が決まった場所が青く腫れていた。

「容赦無いな、沙耶那は……」

「お父様とはこのように稽古を行っていましたから」

沙耶那は優しく微笑むと着物の裾から塗り薬を取り出し、幸成の傷に塗っていく。

「いつつう〜」

皮膚が軽く裂けているのだろう、非常に染みる。

回復力が高くても痛覚はしばらく残るのが色々な意味で痛い。

「しかし、最初に私と戦った時はもう少し動きが良かったと思いましたが……」

「あの目に付けてる奴の御蔭だよ。肉眼じゃ人並みより少し速く動くのが精一杯……もしかして今の沙耶那さんは潜在能力を上げてたりする？」

「いえ、お務めの時以外は使いません」

「それであんだけ動けるって、化け物だ」

幸成は嘆息を漏らすと白みかかった空を見上げた。

ハッキリ言ってHUD無しで沙耶那には勝てない。

ヘクセ相手に銃器を使わず、神緋褪夜宵と自分の実力だけ戦っているのだからそれこそ沙耶那に勝てる道理が無いのだ。

「幸成君は二丁拳銃を使うという事情から足技を多用するのですから、ナイフよりもそちらを研いた方が良いでしょう。ナイフは暗殺や敵の攻撃を防ぐ為に使用した方が効率的でしょう」

「防ぐ、か……」

確かに咄嗟に攻撃を防ぐとなれば小回りが利くナイフは適任だ。しかし、攻撃用に使うのではなく防御用にナイフを？

沙耶那は薬を仕舞いながら俯く幸成に、子供に言い聞かせるような口調で言う。

「幸成君の『剣』が二丁拳銃ならば、『盾』はナイフ。必ずしも盾が防ぐ物とは限りませんよ。私の場合は神緋褪が『剣』であり、『盾』は神緋褪とその鞘。その特性を理解した時に本質が掴めると思います」

「沙耶那さん、徒手格闘の教官に向いてるかもな」

「これはお父様の受け売りですよ。幸成君はどちらかと言えば攻撃に集中し過ぎて、防御に徹するとどうしても集中力が途切れて弱くなる傾向になります。これは口で説明しても難しいので実戦あるのみです！」

そう言うと沙耶那は木刀を構えた。

「まだやるのか!？」

「当たり前です!さあ、行きますよ!！」

沙耶那による地獄の稽古は、沙耶那の体力が持つまで行われたのだ
つた……

朝食を食べ終えてから一時間が経過したが、沙耶那の攻撃によって生まれた傷が今だに疼いていた。

回復力は高くても痛みがしばらく残るのは痛いのが本音だ。畳に横たわっていた幸成は鈍痛に顔を歪めた。

「容赦無いなあ、沙耶那は……」

普段なら自分は一步引いて相手を立てる彼女だが、稽古となれば命のやり取りに繋がる為、容赦が無い。

幸成はさつきまで青痣があった場所を摩ると深い嘆息を漏らす。

盾が防ぐ物とは限らないとはどういう事だ？

幸成は腕で目を覆うと小さく「分からねえ」と呟く。

その時、玄関の扉を叩く音が聞こえ、幸成は返事をしながら玄関に向かう。

扉を開けるとそこには鳳寿と菜月が立っていた。

二人の手には学生カバンが握られている。

「来ちゃった！」

「……よろしく」

二人は頬を緩めると玄関に入る。

菜月は幸成が出て、沙耶那から両親がいないと聞いていたのだろう、その状況を理解し、口元を三日月に歪めた。

「あれえ〜？ユキ君はお泊り？もしかして夜も……キャ〜!!」

菜月は頬に手を当てて体をくねらせる。

幸成は髪を掻き上げると怒鳴った。

「違うっての!!」

「……不潔」

「鳳寿さんまで……」

流石、アイデンティティクラッシャーの資格一級保有者の菜月、どうしてなかなか容赦が無い。

下手をすれば地位はロイと同じ所まで落ちそうだ。

そんな事を言つとロイには非常に悪いのだが……

「とにかく入つて」

「サヤと変態さんは？」

「シャワーを浴びてるよ。ロイは俺の親父に用事があつて雲荘に戻つてるよ」

「そつかあ、残念」

「残念？」

「変態さんをおちよくつて遊ぼうかなと思つてたのに」

「あんまりロイを虐めるなよ？あれで自称ガラスのハートの持ち主なんだから」

「自分でガラスのハートとか有り得ないよ」

からからと笑う菜月は腹を抱え、目に涙を浮かべている。

彼女は笑い上戸なのか、息を切らしながら笑い転げた。

「鳳寿さんもよく来たね」

「……アタシは先輩が勉強を教えてくれるつて聞いたから」

「えっ？」

幸成は素つ頓狂な声を出した。

冷静に考えたらふさぎ込んだ鳳寿が殆ど面識が無い沙耶那に誘われ
て来る可能性は低い。

しかし、仮に沙耶那が自分をダシに使つたなら可能性はある。

一応、鳳寿は『闇』の面影を自分には晒してくれているから、自分
自身で弱み(?)を握る幸成を『監視』という目的があるのだろう。

こちらも監視しているとも知らずに……

(しかし、おっちゃんも何だつてんだ？このタイミングに……)

幸成は髪を掻き上げると眉を潜めるのだつた……

数枚の英語と日本語の混ぜった資料を見て三村は頭を抱えた。

「厄介な事になってきやがったなあ」

三村が見ている資料には英語と日本語で「PMCの介入について」と書かれていた。

その時、扉が開き、面倒臭そうにロイが入ってきた。

いつも結ばれている金髪の髪は結ばれておらず、三村は最初にそれに突っ込んだ。

「その髪はどうした？」

ロイはさらさらの後ろ髪を撫でると片方の手で半分に切れたヘアゴムを見せた。

「切れちまってよ。ったく、縁起でもねえぜ」

「お前、髪を下ろせば涼しい美人って感じだな」

三村は笑つとロイは口を尖らせた。

「こつちは赤点の危機なんだ。くだらない事だったら帰るぞ？」

「帰るって、今のお前の家はここだろ？何時から沙耶那さんの家がお前の家になったんだ？」

「うっせえ！！冗談抜きで戻るぞ！」

「まあ、待て」

三村はそう言うつと先程見ていた資料をロイに投げ、ロイはそれを受け取ると目を通していく。

「PMCの介入？PMCって？」

「民間軍事会社だ」

「Private Military Company」、通称「PMC」。

軍隊や特定の武装勢力等に戦闘員を派遣する会社と思って頂きたい。それは新しい形態の傭兵組織とも言える。

「それが何でまた……」

「神宮寺財閥に雇われたらしいと政府から通達が入った。有り得ない金の流れを辿ったら民間軍事会社にたどり着いたんだ。問題は、

その会社だ。アメリカ海兵隊の廃棄された海上プラントに本社を構える『シャドー・サーベラス・カンパニー』だ」

「随分と厨二病な名前だな。アレか？日本のオタク文化に乗ろうとして空回りしたアメリカ人が創設者とかそういう組織なんだろう？」

「本当にそう思うか？」

三村はシャドー・サーベラス・カンパニーの武器一覧の資料を手渡し、ロイはふざけた笑みを消した。

彼らの武器リストはハッキリ言って凄まじいの一言だ。

米軍の正式拳銃のトライアルで「M92F」と戦って敗北するも性能的に勝っていたと言われた、自衛隊の使用する「9mm拳銃」を複列弾倉化した「SIG P226」。

ライフル弾を使用するサブマシンガンとして米軍でも試験中の個人携帯武器（PDW）「MP-7」。

他にもSD仕様の武器や精度の高い狙撃銃等も配備されている。

民間軍事会社は基本的に退役した軍人等で構成される為、その実力を考慮すればかなり厄介な相手だ。

「奴らが神宮寺財閥に着いたとなればシュトレイゴイカバールの他にもシャドー・サーベラス・カンパニーとも相手をしなければならなくなってくる。自分達是对ヘクセの装備はあっても傭兵に使う装備は麻醉銃以外に無い。最悪だ……」

「何で奴らは神宮寺財閥に着くんだ？」

三村はコーヒートを啜ると深い溜息を漏らす。

「シュトレイゴイカバールは分かんが、シャドー・サーベラス・カンパニーは簡単だ。金だ」

「やっぱり、か」

ロイは苦笑する。

「神宮寺財閥はヘクセを仲間に行っているだろうが、信用はしていない。その抑止力にPMC、綺麗に三竦みが出来ているだろう？」

「だ〜っ！！分かんねえ！！」

ロイは金髪をぐしゃぐしゃに掻き乱すと「お前は専門分野以外は駄

目だな」と三村。

「神宮寺財閥はシュトレイゴイカバールが怖いが私兵にPMCがいるから安心、シュトレイゴイカバールは神宮寺財閥を裏切ってもいいがPMCがいるから手出し出来ない、PMCは神宮寺財閥から金を貰っているからシュトレイゴイカバールの牽制をしなければならぬ。綺麗に抑止力が出来ているだろう？財閥は吸血鬼に弱くて、軍人は吸血鬼に強い。しかし、軍人は財閥には弱いつて訳だ」

「成る程。何となく分かった。それで、俺に何をしろと？」

「お前には神宮寺財閥の監視カメラをハッキングして配置や警備ルートを割り出してもらいたい」

三村の言葉にロイは深い溜息を漏らす。

「買い被り過ぎだ。俺はそんな能力は持っていない……」

「本当にそうか？」

三村はロイの言葉を遮るとドスの利いた声でロイを睨む。

沈黙は肌を刺すような緊張感のある空気に変わっていく。

「お前の素性は知っている。HAWKに入った理由も……」

「おいおい、素性は誰も知らないんじゃないか？」

「一応、三佐だからな。貴様らの素性はだいたい知っている」

それを聞いたロイは苦笑いを浮かべた。

「おっちゃん、実は相当の狸なんだな……分かったよ」

ロイは手を挙げて観念したように笑うと「ただし！」と人差し指を差す。

「テストが終わってからだ！赤点を取ったら笑えないだろ？」

「分かってるよ。話は以上だ、陸士長」

三村はそう言うときコーヒーを飲み干した。

ロイは敬礼をして退出し、その背中を見送った三村はタバコを吹かす。

「シャドー・サーベラス・カンパニーか……懐柔された犬が……」

三村はサーベラス……ケルベロスの意味を持つPMCのエンブレムを一瞥する。

そこには闇に覆われた門の前に立つ黒い三つの頭を犬の絵があるの
だった……

5 - 9 : 男の娘

客間に集まった四人。

幸成を除く三人はそれぞれが苦手な教科に熱を入れている。

幸成はと言うと勉強の教鞭を握っていた。

「ユキ君、この公式ってどういう時に使うの？」

菜月の問い掛けに幸成は問題と公式を見比べてながら説明する。

「……先輩、これ……」

「今行くから待って」

幸成は菜月に説明を終えると鳳寿の隣に座って目を疑った。

鳳寿がやっているのは二年生の勉強なのだ。

「自分の勉強は？」

「……今回の試験で全教科を80点以上取れば飛び級」

「何それ!？」

勉強をしながらも二人の会話を聞いていた沙耶那と菜月は驚き、顔をあげる。

二人が驚くのも無理は無い。

日本における飛び級はあくまでフィクションの世界だけであり、現実の日本の法制度では飛び級は有り得ないのだ。

もともと、幸成は政府の計らいで大学の課程を修了しているのだが

……

「……お父さんの御蔭」

鳳寿はどこか嬉しそうに頬を緩ませた。

彼女の笑みを見れば天変地異が襲うんじゃないかと思うくらい希少とも言える。

「二年生に進級か。その時はよろしく」

「……うん」

鳳寿が答えたその時、玄関が開く音が聞こえ、しばらくして金髪を靡かせたロイが入ってきた。

それを見た全員が声を揃える。

「誰!?」

その場にいた全員がセミロングの金髪を靡かせた美人を見て驚きの声を漏らした。

「俺だよ！ロイだ！！つてか、幸成！お前、俺のこの姿を見た事があるだろ!?」

「ロイか。いやあ、あまりにも久しぶりに見たからな」

幸成は申し訳ないと言わんばかりに笑うと、沙耶那が机に突っ伏した。

「どうした、沙耶那!?」

「何でもありません」

敵が同性だけだと思っていた沙耶那は髪を下ろすと美少女に様変わりするロイに完全敗北したと自覚した。

ロイは幸成に「黙っていればモテる」と評される人物だ。

さらに日系ハーフの為、容姿は日本人離れた金髪のセミロングに青い瞳ときている。

もはやライトノベルのキャラクターを具現化したらこうなる、と存在で語るのが髪を下ろしたロイだ。

髪を結んで黙っていれば美少年、髪を下ろして黙っていれば男の娘。沙耶那が撃沈するのも無理は無い。

「変態さん……凄く可愛い……」

「だ〜っ！可愛いか言うな！こっちは結構気にしてるんだぞ！」ロイは髪をぐしゃぐしゃにしながら大声で怒鳴る。

彼が髪を結ぶようになったのは、それこそ女の子に間違えられたからだ。

HAWKの結成からしばらくして、買い出しに出掛けた二人はカッブルに間違えられた。

それだけなら良かったが彼が『男』にナンパされた事が、髪を結ぶ事を決定づけたのだ。

だったら髪を切ればと言いたいたるうが、髪は切りたくないとの事

であった。

他人の事だったら爆笑で済むのだが、自分の事になると虫ずが走るだろう。

「ゴムが切れたんだよ……まったく、どうして髪を結んでないと女の子に見えるんだよ!? 訳分かんねえ……」

ロイは深い嘆息を漏らすと髪を撫でる。

「うわぁ……凄く可愛い……素で男の娘っているんだ」

「記念に写真を一枚撮っていいですか?」

「……綺麗」

「お願い! これ以上、俺を辱めないで!!」

ロイは泣きそうになりながら腕に顔を埋める。

これ以上は本当に泣きそうなので勘弁してやろう、と幸成は目で三人に訴えた。

鳳寿はすんなり応じたが、沙耶那と菜月はつまらなそうに頬を膨らませる。

「それはそうとお前は勉強しなくていいのか?」

「そうだ」とロイ。

ロイは慌てて教科書を取り出すが、問題集は空白で新品同様とも言える。

「ああ……気が滅入る」

ロイは前髪を両手で掻き上げ、机に倒れ込む。

今日は土曜日でテストは月曜日。

これは致命的だ。

「どうしろって言うんだ……」

「私も手伝いますよ」

「そうだね! 良いものを見せて貰ったし、他人に勉強を教えられるって事は自分も理解してるって事だから」

「……アタシも手伝う」

「仕方ないな。友人の誼みだ、手伝うよ」

四人はロイを慰めると半ベソのロイが嬉しそうに「持つべき物は友

達だ」と顔をあげる。

「じゃあさ、じゃあさ！皆が無事に赤点回避したら心霊スポット行かない？」

「心霊スポット？」

幸成が怪訝な様子で提案者の菜月を見ると、菜月は微笑む。

「華景市の山の中に洋館があるのは知ってるよね？」

「ええ」

沙耶那はゆつくりと頷くと菜月は悪戯な笑みを見せた。

「あの洋館で神隠しがあつて、生き残った人も証言してるんだよ？」

甲冑が動いたつて！！ねえ、皆で探検しようよ」

「行かない！」

その場にいた全員が否定すると壁に掛けられていた古めかしい振り子時計が10時を告げた。

それを見た幸成は立ち上がりながら手を叩く。

「さあ、勉強するぞ！」

幸成の声とともに全員が二日後に控えるテストの為の勉強に励むのだった……

6 - 1 : 宣言 (前書き)

第6話

6 - 1 : 宣言

夕焼けが赤々と神社を照らし、趣のある様子を見せる。

そんな落ち着いた外の様子とは裏腹に神社の中は盛り上がっていた。

「これよりカレーライスを作ります!!」

沙耶那は皆の前に立ちながら右手の人差し指を天井に掲げた。

同時に鳳寿を除く全員から拍手があがる。

「……カレー?」

鳳寿は素っ頓狂な声で小さく呟く。

財閥の一人娘の鳳寿にとつてはカレーライスという庶民の食べ物は無縁の食べ物なのかもしれない。

「取り敢えず食べれば分かるよ」と幸成。

「……ん」

小さく会釈した鳳寿を見た沙耶那はいつもの雰囲気ではなく妙にノリノリに口を開いた。

「ただし!スパイスから作ります!!」

「な、なんだってー!!」

幸成とロイが驚愕した。

それはかつてのトラウマが絡んでいたからだ。

それは一年前の夏の事……

三村が急に、今の沙耶那のような宣言を行い、スパイスからカレーを作る事になった。

結果は二人の様子から察して欲しい……

「スパイスから作るとそれは人の食べ物じゃなくなりますから!」

「そうだけ!それこそ神懸かってまずくて、夜には脱水症状を引き起こす程トイレにお世話に……」

二人は顔を青ざめさせているが、沙耶那は「それが面白いんじゃないですか」と微笑む。

((この人は勇者か!?))

二人には沙耶那が今まさに魔王かドラゴンに立ち向かう勇者のよう
に見えた。

「取り敢えず食材集めだよな？何かあるの、サヤ？」

「基本的な食材はあります。買うのはスパイスの類だけです」

「本当にやるんですか？」

幸成は恐る恐る聞くと、沙耶那はウインクしながら親指を立てる。

もはや逃れる術はなさそうだ。

「よし！腹括るか！俺が買いに行きます」

「ユキ君、男らしい！」

「私も同行します」

「……アタシも行きたい」

沙耶那と鳳寿が同時に口を開くと菜月は口を尖らせた。

「え〜！？ナツだけのけ者？変態さんと二人きりって何か身の危険
が……」

「俺は小学生には興味ない！」

きつぱりと言い切ったロイの言葉を聞いた菜月は手をばたつかせた。

「ナツは小学生じゃないよ！」

手をばたつかせるその様子は彼女の言葉とは真逆に小学生にしか見
えない。

「もう！ナツも行く！」

菜月は頬を膨らませると立ち上がった。

「じゃあロイは留守番を頼む」

「そのつもりだ。この髪じゃ女に間違えられかねないからな」

そう言うとロイはさらさらの髪を撫でる。

「ああ、ついでにヘアゴムも買ってきてくれ」

「分かってるよ」

しかし、ロイは気の毒だ。

スパイスカレーと言い、男の娘と言い、ロイにとって今日はトラウ
マの連続の厄日だろう。

幸成はロイを同情の目で見ると菜月が口を開いた。

「一人500円で2500円、間に合うね」

「それはお父様とお母様がお金を用意しているので大丈夫です」

沙耶那は樋口一葉をひらひら動かす。

貧乏部隊という事からお金を出さなくていいという状況に安堵する。何か悲しいな、男として、人として……

幸成は苦笑いを浮かべる。

学校に通わなければならないという事情からバイトをすると夜になる。

しかし、夜は対ヘクセの活動により不可能。

弾薬の作成や銃の調整を行う優と薬品の調合を行う彩花はともかく、問題は働かない三村だ。

三村曰「俺達は極秘部隊。決して目立つてはならないのだ」と働く気は皆無だ。

そもそも三村は幸成を現地に輸送するのが担当であり、優や彩花のような事はない。

働きたくないだけの言い訳だろうに……

「それでは近くのスーパーに行きましようか？」

「スパイスだけを買いに？」

「はい」

幸成の問いに沙耶那は笑う。

それにしてもスーパーでスパイスを買うだけというのも珍しい、と
うかいるのだろうか？

幸成は内心呟くと髪を掻き上げるのだった……

6 - 2 : 友達

一階建てのスーパーマーケットの自動ドアがゆっくりと開いた。幸成は手近なカゴを掴むと再び自動ドアに歩み寄り店内に入る。

「で、沙耶那？本当にスパイスだけ？」

「はい」

沙耶那は幸成に笑みを見せると真っ直ぐ調味料の場所に向かって行く。

菜月もノリノリで沙耶那の後ろに着いて行き、それを見た幸成は苦笑いを浮かべた。

「恐くないのか……？」

鳳寿は首を横に振るて口を開いた。

「……先輩は楽しくないの？」

不意の鳳寿の声に幸成は目をしばたかせながら鳳寿を見る。

鳳寿は何処か自嘲的な笑みを浮かべていた。

「俺は楽しいけど……どうしたの？」

「……別に」

鳳寿は何処か寂しそうに呟く。

横目で鳳寿を見ていた幸成はゆっくりと目を閉じると、微笑んだ。

「何かあったら言えよ？」

「……どうして？」

「どうしても何も、友達だろ？」

「……友達？」

鳳寿は眼鏡の下で眉を潜めると幸成を凝視する。

幸成は鳳寿のセミロングの髪を優しく撫で、笑って見せた。

「そ、友達だ」

鳳寿が小首を傾げると幸成は撫でていた手を止めて頭を優しく叩く。同時に二人は沙耶那と菜月が待つ調味料売り場にたどり着く。

「遅いです！」

沙耶那は子供が怒る時のように頬を風船のように膨らませた。

しかし、すぐに沙耶那は顔をほころばせると沢山の調味料を幸成が持つカゴに次々入れる。

「オールスパイスにカレー粉に、クミン、コリアンダー、チリペッパー……」

「ちよ、沙耶那!？」

次々と入れられるスパイスの類には明らかに必要無いであろう物が含まれている。

「最後にハバネロです」

蘇^{すお}芳^{ほう}香^{こう}という蘇^{すお}芳^{ほう}の赤^{あか}に黄^{わう}を加えた褐色をしたスパイスはとても辛そうには見えないが、周知の事実、かなり辛い。

2007年にハバネロの2倍から3倍の辛さを持つ唐辛子「ブート・ジエロキア」が見付かってからはギネスブックから除外されたが十分辛い事には変わり無い。

「さあて、会計ですよ!」

沙耶那はそう言うと、幸成に5000円札を手渡した……

窓から入ってくる紅い光が部屋の中を照らしていた。

その中で優はキャリコ社の自動小銃「M900」を改造している。

M900はヘリカル・フィールド・マガジンを備えている事が最大の特徴だ。

ヘリカル・フィールド・マガジンは螺旋状に弾丸を収納し、コンパクトながら装弾数を増加させたマガジンであり、その装弾数は50〜100発にもなる。

しかし、マガジン内の弾薬が少なくなるにつれて銃全体のバランスが悪くなるという欠点を持ち、商業的には成功しなかった。

その銃が置かれた机には他にもカメラやラジコンカー、様々な配線の類が置かれている。

元々は例の50万円で買った代物だ。

訳あってヘリコプターのラジコンからラジコンカーから変更されたが、むしろそっちの方が好都合である。

前回のズメヤー・サーシャとの戦闘においての火力不足……火力不足と言うのも些か語弊ではあるが……が問題となり、さらに民間軍事企業（PMC）「シャドー・サーベラス・カンパニー」の介入により危ぶまれる戦闘が危険視されたのだ。

一対多の銃撃戦に発展した場合、様々な装備を使用するPMCと、拳銃を使用する幸成と白兵戦に特化した沙耶那ではPMCに勝てる訳がない。

例え幸成が様々な徽章を有し、回復力に優れていても、だ。

昨今のメディアでは主人公が軍隊の中隊を単身撃破する等があるが、現実的に幸成であろうと分隊規模相手ですら難しい。

アメリカ軍のライフル分隊の編成から見ればそれは良く分かる。

分隊長が1名、それぞれ射撃班長、SAW手、擲弾筒手、小銃手が2名、計9名の編成だが、彼らの武器はアサルトライフルと軽機関銃、グレネードランチャー付属アサルトライフル、ハンドガンだ。

仮に彼等の弾倉が一つだと計算してもやり過ぎさなければならぬ弾丸はその数なんと745発とグレネードが2発になる。

常識的に考えて単独で、二丁拳銃では勝てない。

さらに小隊ならこのライフル分隊を三隊まとめるのだ。

そんな部隊の相手をするとなれば火力不足は必至、早急な対策が急がれていた。

「ん、いい感じっ！」

優は片目を閉じてM900を見ると小型のカメラをヘリカル・フィールド・マガジンの前部に取り付け、M900を予め作っていたラジコンの窪みに嵌めてネジで固定する。

その姿はまるで日本を代表する特撮に出てくる映画オリジナルの戦

車にも似ていた……

レジ袋が擦れる音と調味料の箱がぶつかる鈍い音が混ざる音が響き渡る。

「「ただいま」」

四人が帰宅の挨拶をし、家の中に入る。

「おかえり」

返事をしたロイは居間でテレビを見ながら適当な輪ゴムで髪を結んでいる最中だった。

金髪の髪を元々は違うゴムで結ぼうとしているロイは妙に滑稽だ。

「何やってんだ、お前」

「うるせえ。俺だってやりたかねえよ！」

ロイは口を尖らせると結べなかつた輪ゴムを指に引つ掛け、幸成に発射する。

幸成の眉間に直撃した輪ゴムは独特の濁いた音を響かせて地面に落ちた。

幸成の眉間は赤く跡が付き、幸成は額を押さえる。

「何する！いつてえな」

幸成は眉を潜めると黒いヘアゴムを取り出すと人差し指に引つ掛けて回す。

「これはいらんのか？」

「す、すいませんでした！」

ロイはソファから飛び降りると土下座をする。

彼にとってヘアゴムはそれほどまで大切な物らしい。

「顔を上げるよ」

幸成の優しい声を聞いたロイは顔をあげた。

その瞬間、凄まじい速度でロイの額にヘアゴムが直撃する。

「これでお相子だ」

幸成はニツと笑うと同時に沙耶那が手を叩く。

「それではカレーを作りましょう。幸成君とロイ君はスパイスの調合を私達は材料を切りましょう」
沙耶那は微笑むと全員がゆっくり頷いた……

建設途中で廃棄されたビルの上に人影があつた。

三村はマグニファイアと呼ばれる拡大鏡を取り付けたドットサイト付きM4A1に豪邸を捉える。

絵に書いたような豪邸を見下ろし、三村はマグニファイアの倍率を拡大した。

目に映るのは豪邸を警備するスーツを着た男達。

手にはH & amp; K社の突撃銃であり、ドイツ国防軍正式突撃銃やアメリカの警察特殊部隊「SWAT」の突入装備として配備が進んでいる「G36」のコンパクトモデル「G36C」が見える。

他にも消音サブマシンガン「MP-5SD6」、「Personal Defense Weapon」通称「PDW」と呼称されるライフル弾を使用する「MP-7」等を持っている兵士が見えた。

「野郎……情報は正しかったか」

日本で武装しているという事は恐らく警察関係や政府にも手を回しているのだろう。

「そこまでして何を守りたい？」

三村は小さく呟くと、マグニファイアから目を離す。

恐らくシュトレイゴイカバルから身を守るだけが目的ではないだろう。

そこまでして守りたい何かがあるんだ。

「こちらフリーゲル。アンビュランス、聞こえているか？オーバ
ー」

(はいはい。聞こえていますよお？どうしましたあ？)

彩花は相変わらぬマイペースな口調で応えると三村はどこか嘆息が混ざった口調で無線に吹き込む。

「シャドー・サーベラス・カンパニーの介入は間違いなかった。奴ら、敷地内で堂々と武装してやがる。外の警備は監視出来るが、中は無理だ。スカイアイ(ロイ)に頼むしかない……これより撤退する。オーバー」

(分かりましたあ。気をつけて下さいねえ)

彩花の心配する声が聞こえたその瞬間、凄まじい風とともに三村の頭上を自衛隊等の各国軍が採用している多目的ヘリコプター「UH-60 ブラックホーク」が頭上を通過していった。

ブラックホークは兵員の輸送の他にもガトリングやロケットランチャー、さらに対戦車ミサイルを搭載出来、用途が広い。

その黒い機体は豪邸に向かうとゆっくりと降下していく。

ヘリが有るといふ事は彼らはヘリボーンと呼ばれる強襲作戦も可能で、さらに高い機動性を有している事になる。

特殊部隊と同様とも言えるその装備からかなり危険な相手と推測された。

さらに問題はそのヘリを落とす装備が無いことだ。

自衛隊には91式携帯地对空誘導弾、通称「携SAM」と呼ばれる個人携帯式の対空ミサイルが配備されているが、言うまでもなく高い為、必要の無い貧乏部隊には無縁の武器だ。

「今回の任務……シュトレイゴイカバル討伐はかなりややこしいようだ……」

三村は舌打ちをするとアタッシュケースにM4A1を仕舞い、それを背負うとビルを後にするのだった……

6 - 4 : 清算

スパイスを混ぜ合わせながら幸成。

「ロイ、舐めてみる」

様々なスパイスを混ぜ合わせ、乾燥させたニンニクの断片やらパセリをすり潰した小皿をロイに手渡す。

色はどこことなくカレールーを薄くした感じだ。

「色は普通じゃねえか」

ロイは小指にそれを付けて一舐めした。

「あつ！意外に風味が良いな……のおあああつ！ぐおお……げふつ！！」

不意に悶絶するロイを見て幸成は一言。

「あゝ、ハバネロ多かつたか。カレー粉とオールスパイス以外、全部同じ割合で入れたんだが……やつぱりハバネロはまずかつたなあ」
へらへらと笑う幸成は後頭部に手を当てながら人事のように言う。

そんな幸成をロイは腫れた舌を出しながら怒鳴る。

「ちえめえ！やつひやりひやねえりよ！！」

「あゝ、何言ってるか分からない」

幸成はそう言う野菜を切っている沙耶那の横の蛇口まで歩き、コップに水を入れるとロイに差し出す。

ロイはそれを一気に飲み干すとがなった。

「てめえ！やつぱりじゃねえよ！！ふざけやがって……あゝ、舌いてえ。沙耶那さん、氷貰うよ」

「分かりました。どうぞ、腫れが引くまでお使い下さい」

沙耶那は野菜を切りながら笑うとロイは足速に冷蔵庫に取り付くと氷を2、3個口の中に放る。

「ふおお〜！生き返るう〜」

ロイは目をギョツと閉じながら台形の氷を舌で遊ぶ。

経験がある人は分かるだろうが辛過ぎる物を食べた時は「辛い」で

はなく「痛い」だ。

冷水なんて物では痛みは引かない為、氷で痛みを和らげるしかない。「ちよつとハバネ口を減らすか……ってか、カレーに関係ないスパイスでも何とかなるんだな」

幸成が小さく呟くと「つつ！」と鳳寿。

幸成はその声を聞き、包丁で玉ねぎを切っていた鳳寿に駆け寄る。

鳳寿の人差し指からは血が出てきていた。

傷は浅いようだが赤々とした血はまな板を濡らしている。

「大丈夫か？」

「……大丈夫」

鳳寿は無表情に呟くと幸成はポケットティッシュを取り出し、鳳寿の人差し指を押さえる。

「大丈夫じゃないだろ」

幸成は鳳寿を諫めると鳳寿は不思議そうに幸成を見る。

その横で沙耶那はまな板に付いた血を洗うとエプロンのポケットから絆創膏ばんそうこうと消毒液を取り出した。

「ちよつと離して下さいね」

沙耶那は幸成の押さえていたティッシュを離すとシンクの上で消毒を行う。

片目を閉じて染みるのを堪えると沙耶那は消毒液を幸成のポケットティッシュで拭き取る。

そして傷が早く治る絆創膏として知られる白く濁った絆創膏を傷に貼った。

「何かサヤ、お母さんみたい！サヤ、絶対に良いお母さんになれるよ」

その「お母さん」の単語を聞いた沙耶那は頬に手を当てて朱に染めた。

何を想像しているかは明白。

(……何を想像してるんだ？この天然巫女姫は……)

幸成は髪を掻き上げると苦笑いを浮かべると沙耶那を一瞥しながら

ポケットの中に先程のティッシュを入れた。

「では炒めましょうか」

沙耶那は切り揃えた玉ねぎや牛肉、挽き肉をフライパンに入れて炒め始めるのだった……

昔の過ち……

それはもう清算されない。

でも、それを清算出来るかもと思うからこそ今、ここにいる。

過去は変えられない。

だが、未来は変えられるかもしれない。

不確定で曖昧な事柄だからこそ、そんな淡い期待を抱いてしまう。

それは今も昔も変わらない。

結局は過去と同じ結果になってしまっても……

ロングヘアに垂れ目の女性は沈み行く太陽と、それによって沈む暗くなつていく街を見る。

そう、それが覆せない過去であつても、覆せると信じて……

だからこそ此処にいる。

この死と隣り合わせの部隊に……

「過去は清算出来るんですかねえ……」

女性はそう言うと、部屋のカーテンを閉めたのだった……

6 - 5 : 夜空

夕食を食べ終えてから五時間が経っていた。

田舎の夜は更けるのが早く、既に辺りは真っ暗だ。

着物姿の幸成は縁側に座り、夜空を見上げた。

こんなに穏やかに空を見上げたのは何年ぶりだろうか？

スパイスだけで作ったカレーも思ったより美味しかった。

普通のカレーとスープカレーの中間のようなカレーで、専門店のカレーのような味だ。

沙耶那曰「今日は当たり」だそうである。

鳳寿も初めてカレーという物を食べ、かなり気に入った様子であった。

いつもは静かな様子からは想像が出来ない程に彼女は大食漢であり、大盛りのカレーを5杯、軽く平らげる程だった。

そんな食事の時の喧騒は嘘のように今は静まりかえっている。

飯にヘクセを補足した場合には携帯電話に三回のワン切りを行うという事を決めているが、GARUDAの捕捉時間を越えても携帯電話が鳴る様子は無い。

起きているのは幸成だけであり、家の中に明かりは灯っていないかった。

幸成は大きな欠伸をすると携帯電話を開き、時間を確認する。

「30分、か……そろそろ寝るかな？」

幸成は髪を掻き上げると床が軋む音が響き渡り、幸成は体を強張らせる。

ゆっくりと、ゆっくりと振り返ると小柄な体が目に入った。

「ユキ君？まだ起きてたの？」

「菜月……さん？」

「もう一ヶ月になるんだから菜月でいいよ。サヤも呼び捨てにしてるんだからさ」

「分かりました。それで、どうしたんですか？」

「ナツ、眠れなくて……」

「俺もです」

「少し話をしよう？」

菜月は小首を傾げると微笑んだ。

いつもは小学生と笑うが年相応の色香があり、夜に彼女の姿を見ると何処か妖艶な美しさが感じられた。

華奢なその姿も非常に美しく、まるで精巧に造られた人形のように愛らしい。

「ああ」

幸成は微笑みを返すと菜月は幸成の隣に座った。

菜月は縁側に座りながら足を上下に動かす。

やはりどこか子供らしい。

「ユキ君って、お父さんと仲良いよね？」

「まあ、どちらかと言えば……どうしたんです？急に……」

幸成は苦笑いを浮かべながら問い掛けると菜月は自嘲的に呟いた。

「あのね？ユキ君だから言うんだよ？」

そう言つと、菜月は視線を地面に落とす。

「ナツはね？小さい時にお父さんとお母さんから虐待されて育つたの」

「えっ!？」

幸成は驚きのあまり素っ頓狂な声を漏らした。

それには気にせず、菜月は言葉を続ける。

「ナツは毎日毎日、蹴られて、殴られて、叩き付けられて……酷い日々だったよあ……」

菜月は目に涙を浮かべながら震える声で小さく呟いた。

「今はお父さんもお母さんも死んで、一人で暮らしているんだ……」

「死んだ……のか」

幸成はゆっくりと目を閉じると眉間に皺を寄せる。

思わず呟いてしまい、幸成は歯を食いしばったが、菜月はやはり気

にしなかった。

「そう……死んだんだよ……血を全部吸い取られて……死んだの……血を……」

菜月は拳を握り絞めると膝に涙を落とした。

虐待を受けていたとしても両親という訳だろう。

だが、彼女もヘクセ被害者だったのか……

幸成は菜月を一瞥すると歯を食いしばり、深い溜め息を漏らした。

「でもね？サヤもユキ君も変態さん、鳳寿ちゃんもいるから、毎日が楽しいよ」

菜月は手の甲で目を拭くと頬を緩ませる。

満面の笑みで笑うと、菜月は夜空を眺めた。

「綺麗だね」

「ああ」

幸成は優しく微笑むと夜空を見上げながら同調する。

夜空には満天の星が輝き、周囲を淡く照らす。

「ねえ、ユキ君？」

「うん？」

「ユキ君は好きな人はいる？」

「好きな人啊あ」

幸成は困ったように髪を掻き上げる。

沙耶那は友人であり、許婚という扱いだが、本人はその事を知らない……はず……

優も彩花さんも隊員であり、恋愛対象ではない。

ついで菜月も友達であり、鳳寿に至っては監視対象者だ。

故に恋愛対象はいない。

「ゴメン……」

幸成は後ろ髪を掻きながら頭を下げる。

「つまらない！何ならナツが彼女になってあげようか？」

「この前、興味ないって言ってませんでしたか？」

「女の心は秋の空とか言うじゃん！」

「随分と気ままな心ですね」と幸成。

「さあて……」

菜月は背伸びをすると欠伸をし、口から八重歯が零れ出た。

「そろそろ寝ようかな？」

「そうですね……俺も寝ますか」

幸成は髪を掻き上げると立ち上がった。

同時に菜月も立ち上がり、再び大きな欠伸をし、廊下の奥に歩いて行く。

菜月は微かに後ろを向くと眠そうに目を細める。

一言「おやすみ」と呟いた菜月は幸成の返事を待つことなく、廊下の闇の中に消えて行くのだった……

7 - 1 : 哀れ (前書き)

第7話

7-1:哀れ

学校中に響く終業のチャイムの音。

学生達なら誰もが億劫に感じるであろうテストという試練が終わるといふチャイムの音だ。

学生達は肩の荷を下ろしたように笑う者と勉強しておけば良かったと撃沈する者で完全に二分されていた。

「終わったな」

「そうですね」

二分の前者に当て嵌まる幸成と沙耶那は笑いながら談笑していたが、ロイはというと後者に分けられた。

ロイ曰「赤点はみんなの御蔭で無い」そうだが、分からない箇所が多々あつたらしい。

しかし、二日の勉強で赤点回避をしたのなら上々だ。

しばらくして担任が教室に入り、ホームルームが始まる。

生徒達が姿勢を正し、担任の話を聞く。

三分程で話が終わり、挨拶が終わる。

同時に生徒達が机を下げて掃除が始まった。

掃除当番ではない幸成と沙耶那、ロイはカバンを掴むとA組に向かう。

A組の教室からは多くの生徒が談笑しながら出て来ている。

その中に混ざつて菜月が顔を出し、こちらに気付いて駆け寄ってきた。

「ユキ君、サヤ〜！それと男の娘〜！お疲れ様〜」

「男の娘はやめてくれ！それに『それと』ってなんだ！！」

「変態」から「男の娘」へと名前が変わつたロイは眉を潜めながら怒鳴る。

昇格か降格か、結局は名前で呼んではもらえないロイであった。

「テストはどうだった？」

笑みを見せる菜月は相変わらず水筒を肌身離さず持っていた。その様子を見ていた幸成は菜月の幼い小学生のような姿に微笑みを湛える。

「俺は大丈夫でした。全教科90点は堅いでしょ」

「凄いなあ。ユキ君は頭良いんだね」

昇降口に歩いていた菜月は幸成に無邪気な笑みを見せる。

「サヤは？」

「私は大丈夫ですよ。ナツはどうでしたか？」

「ナツはちよつと危なかつたな。鳳寿ちゃんはどうだったかな？」

「鳳寿は大丈夫ですよ？ロイに勉強を教える程なんですから」

そう言つと幸成はロイを一瞥する。

ロイは口を尖らせると「うるせえ」と毒づく。

と、不意に菜月が切り出した。

「じゃあ、今日はこのメンバーで心霊スポットに……」

「行かないよ！」

階段を下りた幸成は菜月を諷めた。

菜月は口を尖らせるといかにもつまらないといった風に歩く。

「ナツだけでも行つてみようかな？」

「やめた方がいいぜ？化け物に喰われるぞ。例えば……そう！血吸

い人とか！」

ロイの声に菜月は一瞬だけ無表情になり、「血吸い人かあ……」と

呟く。

「そう言えば最近、聞かないよね、血吸い人と白狐の噂」

「そ、そうだね……」

「そう言えばそうですね」

顔を引き攣らせた幸成と沙耶那はそれぞれ目配せをした。

それもそのはず、血吸い人を狩る幸成と白狐本人が沙耶那。

そのような状況に陥つたら誰だつて焦るだろう。

「あ、あれじゃないですかね？噂に飽きたからとかじゃないですかね？」

幸成は取り繕うと靴箱の靴を掴むのだった……

華景市の中央にある巨大な豪邸。

周囲は先端が槍のように尖った鉄格子に覆われていた。

正門には舗装された道とその中央には丸い噴水があり、道路以外は青々とした芝生が繁っている。

絵に書いたような豪邸の正門に二人の黒服の男が立っていた。

彼らは黒いスーツに上着の下に着用する「ターミナル・ベロシテイ」と呼ばれるボディ・アーマーとショルダーホルスターが微かに覗くショルダーホルスターには24時間の戦いを描いたドラマの主人公が愛用する拳銃「SIG P226」が収められていた。

高価ながらも高い信頼性と精度を誇るこの拳銃は特殊部隊にも採用されている。

その拳銃をホルスターに収める彼らは紛れも無く神宮寺財閥の私兵であった。

彼ら、シャドー・サーベラス・カンパニーの人間はサングラスを付けながら微動だにしない。

不意に遠くから曲がり角を曲がって黒い乗用車が現れると化石のように動かなかつた男達が門の扉を開ける。

門が軋む音が響き、それに合わせて車が豪邸の中に入った。

黒く塗られたガラスからは一瞬だったが鳳寿の姿が微かに見える。

その姿が見えた一人の男は鼻で笑い、英語で呟く。

「哀れな娘だ……」

「全くだ」

もう一人の男が応える。

「神宮寺の爺もとんだ狸だ。金の為ならなんだってやるからな」

「俺達も人の事を言えんだろ？」

「違うない」

男は口元を歪ませると門を閉じる。

「しかし、シュトレイゴイカバールはグリーンベレー時代から知っていたが、財閥と手を結ぶとはな」

「ああ。だが、俺達はシュトレイゴイカバールから奴らを守り、金を貰う事には違いない。どんなに汚い事をしてもだ」

男はサングラスの隙間から隣の男を一瞥する。

「奴らが我々に情報を入れないのも眉唾だがな」

「それに何故シュトレイゴイカバールが財閥と手を組んだんだ？」

「俺が知るかよ」

男はそういうと再び門の前に戻るのだった……

夕焼けを掻き消す黒い雲が空を覆い尽くし、雷鳴が鳴り響く。暗雲からは大粒の雨が降り出し、地面に当たって砕ける。

その音は轟音となり、辺りを揺るがす。

幸成は自室の窓を濡らす雨を見ながら溜め息を漏らした。

「酷い雨だ……」

携帯電話のテロップを見ると「明日の天気『雨』」と書かれ、この雨は今日は止まないのだと告げる。

旧式の偵察衛星であるHAWK所有の「GARUDA」は雨天での使用は不可能であり、今日のヘクセの捕捉は不可能だ。

「今日の捕捉は不可能か」

幸成は小さく呟くと畳に座る。

こうなると暇になる為、やることは無い。

夕食時まで寝てようか……

幸成が大きな欠伸をしたその時、携帯電話の着信が鳴り響いた。電話だ。

けだるそうに携帯電話を開いた幸成は眉を潜めて画面を見る。そこには沙耶那の名前があった。

「もしもし？」

（幸成君！！大変なんです！ナツが……ナツが！！）

「落ち着け、沙耶那！菜月がどうしたんだ！？」

（もうそちらに向かっています！準備をお願いします）

そう言うと、電話は唐突に切れた。

ただならぬ雰囲気準備と言っていたが……まさか！？

幸成は冷汗を流すと部屋から飛び出し、「101号室」の三村の部屋に飛び込むと、ブラックコーヒーを飲んでいた三村に怒鳴った。

「おっちゃん！ヤバイ事になった！」

「何だ？どうした？」

「分からない……分からないが……」

幸成が首を振ると、地面とゴムが擦れる悲鳴にも似た音が響き渡り、幸成は後ろを振り返る。

自転車が止まる事による慣性で前のめりになりながら踏ん張る沙耶那は頬を上気させながら息を切らしていた。

セーラー服にカップを着込んだ沙耶那は竹刀袋を肩に担ぎながら叫んだ。

「ナツが……菜月が監禁されました!!」

「どういう事だ!？」と幸成。

「私の携帯電話に留守電があつて……」

「とにかく、103号室に!! 幸成はロイを!!」

「了解!」

幸成は急いで二階への階段を駆け上がり、ロイの部屋に駆け込む。

「ロイ! 緊急召集!」

ドアを開けながら叫んだ幸成を驚きながら見たロイは眉を潜める。

「どうしてだ!? GARUDAは使える時刻でもないだろ?」

「いいから来い!」

幸成はロイに怒鳴ると一階に駆け降りて行き、沙耶那がいる103号室に飛び込み、備え付けられたロッカーからスコトスとフォースを掴む。

「幸成君……」

心配そうに呟く沙耶那を一瞥すると幸成は「大丈夫だ」と応える。

同時に四人が103号室に入り、ロイが「テストが終わったらこれかよ」と毒づく。

「沙耶那さん、例の留守電とやらを……」

三村の声に沙耶那はゆっくり頷くと携帯電話を開き、留守電を再生する。

携帯電話特有の電子音が鳴ると同時に何処か湿ったような菜月の声が聞こえてきた。

（サヤ、助けて!! 道を歩いていたら変な男達に捕まって……一回

来たから分かるけど、多分場所は元鉾山の事務所……お願い！！助け……）」

（何やってる、このガキ！！）
菜月の声は不意に割り込んできた男の声と重なり、鈍い音とともに消えた。

メッセージが終わったと教える女性の声が聞こえると、三村は腕を組んだ。

「男達、か……」

「敵は少なくとも二人でしょうねえ」

彩花は口元に手を当てながら呟くと目を閉じる。

「……今回は明らかにシユトレイゴイカバールの罠だな」

三村の呟きに沙耶那は「罠？」と問い掛ける。

「敵対者の親しい者を捕まえて誘い出す。典型的な罠だ」

「でも……だからと言ってナツを見捨てる訳には……」

「沙耶那さん。貴女は素人だから分からないだろうが、今回は不利な要素しか無い！」

三村は鋭い眼光で沙耶那を見た。

気圧された沙耶那を畳み掛けるように幸成は申し訳なさそうに呟く。

「菜月に正体を知られない為に装備は最低限。さらに服装も私服でなければならぬ。という事はその男達に俺達の姿を直に晒す事になる。そうなれば張り付かれて簡単に潜伏場所が露見する」

それを聞いていた三村はゆっくりと頷く。

「……今回は見過ごす」

「何ですか！？菜月は今も怯えているんですよ！？それを見過ごすなんて……」

「今回は賛成ですねえ。リスクが高すぎますう」

「ですが……」

「見捨てる事も勇気ですよお？」

彩花の残酷な呟きにいつもは穏やかな沙耶那が怒鳴った。

「菜月は親友なんですよ！！それを見捨てるなんて事が出来る訳な

「いじゃないですか!!」

「無理も無い。」

親友がそのような状況になっていたら誰だってそうなる。

だが、だからこそ、この状況で飛び出したら奴らの思う壺だ。

それが分かっているHAWK隊員は慎重であった。

「個人の感情で戦力を危険に晒す訳にはいかないんですよお?」

神経を逆なでするような彩花の口調に沙耶那はさらに語気を強くする。

「人の命を何だと思ってるんですか!?!」

「幸成や沙耶那も命ですよねえ? 私は貴女達の命を思ってるんですよお」

「ですが……」

そのやり取りを見ながら、幸成は思考を働かせていた。

確かに危険かもしれない。

だが、菜月はヘクセに両親を殺されたと言った。

そんな彼女が今、ヘクセに捕まっているんだ。

どうすりゃいい!?!

沙耶那と彩花が言い合う横で不意に優が口を開いた。

「あのさあ。事務所って事は監視カメラがあるよね?」

全員が優を見ると優は手を広げて見せた。

「恐らくシュトレイゴイカバルは資料映像として監視カメラで録画して本拠地に随時、送信するんじゃないかな? だったら監視カメラを見られないように破壊しちゃえばいいんじゃないかな?」

「さっきから思っていたが……」とロイ。

「鉦山なんてかなり昔だ。その時代のなんて旧式過ぎて逆にハッキングの余地は無いぞ? 恐らく奴らはそれも計算に入れて……」

「違うよ、ボクが言っているのは『直接』破壊するのさ」

「『直接?』」

五人が素っ頓狂な声で呟くと、優はほくそ笑んだ。

「新兵器の登場だ」

雨の音と車の音、雨を払うワイパーの音が混ざり合い、その音が車内を占領する。

幸成はキヤリコム900が取り付けられたラジコンを一瞥した。

優が開発したこの新兵器、通称「MK・2 走行自動機銃」が出撃を決定付けたのだ。

このMK・2は単純にラジコンカーにキヤリコム900とカメラを備え付けた物でオペレーターによる遠隔操作が可能となっている。対シユトレイゴイカバールのヘクセ戦において火力不足の可能性が出て来た為に開発された物だ。

機構は単純で単価も安い。

それでいて高い火力を誇るこのMK・2は多少の代替は利く。

ちなみに、何故「MK・2」なのかと言うと、当初開発していた「MK・1 飛行自動機銃」がお蔵入りとなったからだ。

MK・1はヘリコプターのラジコンにMK・2同様の装備の予定だったが、重いから飛ばない、煩い、室内戦は皆無等という理由で廃棄された。

「任務の概要を確認しよう」

三村は助手席の幸成と沙耶那をそれぞれ見遣る。

「まずはMK・2で敵情を偵察しつつ敵監視カメラを全無力化、言うてしまえば破壊する。見取り図を確認した限りは監視カメラの数は10。その監視カメラを破壊後に二人が突入する」

二人がゆっくり頷くのを見た三村は言葉を続ける。

「菜月を確認後、彩花の作った睡眠薬で眠らせて保護し、脱出する。仮にヘクセと交戦した場合は殲滅しろ。睡眠薬で眠らせるとしてもヘクセには睡眠薬が効かないからな。問答無用で殺害だ」

「了解」

幸成はスコトスとフォースに弾丸を装填すると弾倉を引き抜き、空

いた2発分の隙間に9mmシャルデンプファー亜音速弾を挿入する。勢いよくマガジン・ウェルに弾倉を滑り込ませると、幸成はブレザーの下に隠したシオルダーホルスターとヒップホルスターに入れた。幸成はゆっくりと目を閉じる。

今回の作戦においての幸成の装備は「スコトス&フォース」と「メツサードルヒ」のみ。

戦闘情報機器「フューラー」が無い以上はシュトレイゴイカバールのヘクセとは戦うのは得策ではない。

幸成は髪を掻き上げると沙耶那の言葉を思い出す。

（『剣』と『盾』。二丁拳銃が剣、ナイフが盾……どういう事だ？）
幸成は眉を潜めると大粒の雨が叩き付けるフロントガラスに目を向けるのだった……

ヴァインキリウスはワイングラスに入った赤い液体を飲むと頬を緩ませた。

書斎には青白い肌をした、かつては人であった少女達の剥製が鎮座している。

少女達は中世ヨーロッパの貴婦人が夜に着るドレス「イブニングドレス」を着せられ、人形のように無表情な顔で虚空を見つめていた。少女達はかつて生きていたとは思えない程に精巧であり、同時に狂気じみた美しさがある。

ヴァインキリウスはその剥製達を見つめると満足しながらワイングラスを傾けた。

その液体を飲み干すとヴァインキリウスは呟く。

「策士だな、ルーナ・ヴェルドウーラ……畏と分かっている奴らも動かすとはな」

彼らと親しい者を捕らえて、彼らを中心に引きずり込む。

既に多数の罫は仕掛けている為、準備は万端。

さらに監視カメラには本拠地へと映像を送っている為、シュトレイ
ゴイカバールは正確な素性を知る事が出来る。

ルーナ・ヴェルドウーラは慎重だ。

彼らが確実に敵対していると見極めたいのだから、ヴァインキリ
ウスに言わせれば甘いの一語であった。

シュトレイゴイカバールの三人のヘクセを倒している彼らは明らかに
敵対していると言えるが、それでも彼女は素性不明としている。

痛苦のミラルダに殺される危険性にあっても……

彼女は既に彼らの潜伏場所を知っているのだ。

それでも彼女はその場所を教えようとはしないのだから甘い以外に
言い表せない。

もつとも吸血鬼として血が嫌いという異端のルーナ・ヴェルドウー
ラはその残った人間としての感情を大切にしたいのだから、こと、
ヴァインキリウスにとっては嘲笑の対象だった。

痛苦のミラルダも利用価値があり、一応の実力のあるルーナ・ヴェ
ルドウーラは重宝し、同時に邪魔のようだ。

ミラルダは彼女を信用してはいないだろう。

(仮にルーナ・ヴェルドウーラがしくじったらならばその席には私
が行くだろう)

ヴァインキリウスは微かに哄笑するとワイングラスの持ち手を握り
潰した。

「その時は私が始末をつけようじゃないか。ルーナ・ヴェルドウー
ラを、な」

ヴァインキリウスは哄笑を大きくする。

その声は屋敷に響き渡り、反響した……

7-4：洋館前にて

深い森の中に黒塗りのバンが止まる。

三村は車のエンジンを止めて、アタッシュケースからホロサイトを装着したM4A1を取り出し、アクセサリ・ウェポンの最新型シヨットガン「XM26 LSS」を装着した。

XM26 LSSは弾倉を使用している為スムーズに装填出来、セミオートとフルオートに切り替える事が出来るシヨットガンだ。アフガニスタンでも小数ながら使われたこのシヨットガンは実験的に特殊作戦群にも配備され、三村が使用しているのもその一つである。

三村はそれぞれに弾倉を装填すると二人を見た。

「自分はここで車を守る。仮に不足の事態に陥ったら、ワンコールスリーセットだ」

ワンコールスリーセットとは簡単に言うと「ワン切り三回」という意味で、文字通りの事を行って緊急事態を教える事だ。

エシユロン対策として使用されるこれは比較的迅速に緊急事態を告げられる。

幸成と沙耶那は頷くとMK・2を掴み、洋館に向かった……

三人が出動してから約一時間、ロイは印刷用紙に刷られたMK・2の説明書を見ていた。

MK・2のコントローラーは有名なゲーム機のコントローラーを転用した物だ。

白い外観にトレードマークのXのボタンが付いたそのコントローラ

「は災害用の無人機にも使われている事で有名だ。」

「え〜っと……左スティックが移動で右スティックが銃を動かす……LBがズームでRBがその逆、RTが射撃でLTがセミとフルの切り替えっ……」

ロイは実際にボタンを押しながら説明書を確認していた。

パソコンと連動したテレビに映像が映し出されれば、向こうが電源を入れたという事だ。

ロイは時折、テレビを一瞥してその時を待っていた。

その隣で優もコントローラーを握っている。

「何かゲームするみたいだな」とロイ。

「でも、ゲームオーバーなんて物は無いんだからしっかりやってよ」
優は睨みながらロイに言う、ロイは鼻で笑った。

「初見殺しが必要じゃ大丈夫だ」

ロイが軽口を叩いたその時、テレビに洋館が映し出された。

「よし来た！どっちが多くカメラを壊せるか勝負だ、優！！」

「オーケー！」

優は白い歯を見せて満面の笑みで答えた……

広い洋館に響き渡るモーターの駆動音。

紅い布の上を銃を乗せたラジコンカーが走って行く。

目の前の扉の前にラジコンカーは止まるとそれぞれが扉の両側のヒンジに銃口を向けた。

同時に空気が擦れる音が響き渡り、金具が壊れる音が響く。

ヒンジの破壊、突入は特殊部隊の常套手段だ。

ドアはヒンジを破壊されれば仮にどのように精巧で頑丈な鍵を付けていても、木の板か鉄板でしかない。

数秒してヒンジの支えを失った扉はドアを開ける事なく倒れる。それと同時に片方の銃口がドアの近くの監視カメラに向けられた。再び空気が裂ける音が響き渡り、多数の9mmシヤルデンプファー亜音速弾がカメラに当たって火花を散らす。

9mmSD弾の空薬莖は排莖口に取り付けられた小袋に入る。ラジコンカーは銃口を正面に戻すとドアを無理矢理乗り上げて廊下に出た。

廊下は異様に長く、華やかな造形の照明は今は見える影が無く、蜘蛛の巣が掛かっていた。

二台のラジコンカーは埃まみれの絨毯の上を走ると、一台が監視カメラに銃口を向けて弾丸でそれを破壊する……

「やありいー！！2ポイント先取！！」

優は右手でガッツポーズをすると、ロイは髪をグシャグシャに掻き乱した。

「だーっ！クソッ！初心者には優しくしろ！！お前、優って名前なんだからよお！！」

「ふーんだ！！勝負は正々堂々だよ。チャンピオンはチャレンジジャーにも容赦はしないのだ」

二人は幸成の携帯電話を中継して送られる映像を、まるでゲームに興じるかのように楽しむのだった……

「監視カメラが破壊されているだと!？」

ヴァインキリウスは内線用の黒電話に怒鳴った。

(旦那!カメラが砂嵐に……最後の一台が……ラジコンに破壊された……)

それを聞いたヴァインキリウスは哄笑する。

「ククク……ハハハハ!そうか!!クククククク!」

(旦那?)

「奴らも馬鹿ではないらしい!!アーサー!盛大に歓迎するぞ!」

ロイからのワンコールワンセット、オールクリアの合図だ。

幸成はスコトスとフォースのグリップを掴み、沙耶那は神緋褪夜宵の柄を掴む。

お互いが目配せをすると同時に洋館に突入し、各々武器を構える。

扉を開けた音が響き渡るが、それもしばらくして静寂となった。

幸成は洋館の見取り図を頭の中に呼び出す。

階段を登れば広間、その奥の廊下を真っ直ぐ行けば書斎。

一階は正面の扉 - - M K . 2 が破壊した扉 - - を抜ければ廊下で、奥に行けば作業員の寝室、途中の曲がり角を曲がれば厨房とデイナールーム。

厨房の下には食料備蓄の地下室があり、家畜用の檻もある為、菜月はそこにいる可能性が高い。

二人は正面の扉に向かって歩きだしたが、すぐに幸成が沙耶那を制止する。

「どうしましたか？」

「足を……」

幸成の目線の先を見た沙耶那は見えるか見えないか程度の細さの線を見付けた。

それは壁に真っ直ぐと伸び、その先にある破片手榴弾の安全ピンに巻き付けられている。

「ブービートラップだ。これに引っ掛かれば手榴弾の爆発で撃ち出された破片で蜂の巣だ」

幸成はメツサードルヒを取り出すと慎重に線を切る。

「ご丁寧に罠を仕掛けるとは、それほどまでに俺達は恨まれているらしいな」

弛んだ線が地面に落ち、安全を確認した幸成はメツサードルヒを仕舞う。

手榴弾を鹵獲するという手段もあったが、爆発が伴うこれはこのよ
うな山の中でしか役に立たない。

その為、幸成は手榴弾に触れる事なく沙耶那の前を先行する。

幸成達がゆっくりと歩みを進めたその時、今度は鎖が激しく軋む音が頭上から聞こえてきた。

二人が天井を見上げると、凄まじい速度で落下してくるシャンデリアが目に入る。

「危ねえ!!!」

幸成は沙耶那を突き飛ばすと直ぐさま自分もそこから逃げる。

間一髪、落下するシャンデリアから逃れ、シャンデリアは凄まじい轟音とともに壊れた。

周囲にガラス片や錆びた鉄が飛び散って周囲を散らかし、さらに埃を巻き上げる。

幸成はシャンデリアを一瞥すると咳込みながら立ち上がった。

「大丈夫か？」

「はい……」

「何が何でも殺したいらしいな……」

幸成は沙耶那に手を差し出し、沙耶那はそれを掴む。再び歩みを進めるが、今度は何も無い。

埃が舞い散る廊下をゆっくりと歩き、厨房の角を曲がった瞬間、幸成の目の前に甲冑が立っていた。

胴、腕、脚を金属の板で防御し、間接部分をチェーンメールで覆った「プレートアーマー」と呼ばれる物だ。

幸成が眉を潜めたその時、甲冑がゆっくり動き、手に持ったハルベルトを振り上げた。

幸成が反応するより早く、沙耶那が前に飛び出し、神緋褪で甲冑を斜めに切り付ける。

古くなり劣化した金属なら易々と切断出来る神緋褪夜宵の刃は甲冑を両断した。

同時に甲冑は床に崩れ落ちて無造作に転がるが、その様子を見て二人は眉を潜める。

「空？ どういう事？」

沙耶那は刀を鞘に収めながら呟く。

「特殊能力特化系のヘクセだ。蛇のように甲冑を操ってたんだろう」

「操っていた？」

「俺達が吸血鬼を魔女と呼ぶ理由はそこにある。吸血鬼は催眠術や自然や動物を操る事が出来る。事実、有名な魔女裁判では吸血鬼も一緒にたにして殺害したからな」

「だからヘクセ？」

「ああ」

幸成が頷いたその時、厨房の隣の部屋であるダイナールームと作業員の寝室から鉄が軋む音が聞こえてきた。

「団体様のお出ましのようだ」

幸成は二丁拳銃を、沙耶那は刀を構えると多数の甲冑が二人を挟む形で現れる。

「行くぞ！」

「はい！！！」

幸成は寢室側から来た甲冑を沙耶那はダイナールームから来た甲冑に駆け出す。

二丁拳銃を構えた幸成は甲冑に接近するとスコトスとフォースを構え、フルオートで連射する。

多数の9mmシャルデンブプファー亜音速弾は甲冑に当たると火花を散らす。

通常の9mmパララム弾はボディ・アーマー・レベルのレベル？A以下を貫通する。

しかし、この9mmシャルデンブプファー亜音速弾は単体の貫通力はせいぜいレベル？が限度だ。

が、スコトスとフォースは続けざまに同じ箇所弾丸が直撃し、初弾を無理矢理押し込む。

その貫通力は最高レベルの手前、レベル？を貫通する。

その弾丸によって穴だらけになった甲冑に回し蹴りをし、吹き飛ばす。

甲冑は思った以上に軽く、容易に吹き飛ばすことが出来た。

もう一つの甲冑はハルベルトを幸成に振り上げるが、それより早く幸成の構えた二丁拳銃から弾丸が吐き出され、甲冑は激しくのけ反る。

「くたばりやがれ！！鉄屑！！」

そこに幸成は跳び蹴りをして、甲冑はハルベルトを落としながら壁に弾き飛ばされる。

幸成が地面に降りたその時甲冑が幸成の背後でハルベルトを構えていた。

しかし、幸成は先程の甲冑が落としたハルベルトを掴むと振り返った勢いのまま甲冑の脇腹にそれを叩き込んだ。

鈍い金属の音が響き渡り、甲冑は壁に叩き付けられた。

幸成は二丁拳銃を構えながら沙耶那を見ると、沙耶那も最後の一体を叩き切る。

「沙耶那、大丈夫か？」

「大丈夫です」

「とにかく、この大元を叩くしかない。沙耶那は菜月を頼む。俺はこのヘクセを叩く」

「しかし……」

「コイツを操るヘクセを放っておくのは後々面倒だ。倒せる時に殺る」

「……分かりました」

沙耶那はゆっくりと頷くと「気をつけて」と続けた。

「分かってる」と幸成。

「沙耶那も気をつける」

「はい」

沙耶那が答えると同時に、甲冑を使役しているヘクセは離れた位置にいと踏んだ幸成は二階に、沙耶那は厨房に入って行った……

ホールに出た幸成は階段に上がる前に先程のブービートラップとして仕掛けられていた二個の破片手榴弾を掴んだ。

破片手榴弾を掴んだ幸成は畏に警戒しながら慎重に階段を登る。

階段を軋む音が周囲に響き渡り、不気味な空間を一層引き立たせた。幸成は階段を登りきると目の前の大きな扉に駆け寄り、破片手榴弾の一つのピンを抜く。

しばらく持ち続け2秒数えると幸成は扉を開けて中に放り込む。

手榴弾は1秒程で中で爆発した。

その凄まじい轟音が腹を突き抜ける。

フラグクリア - - 特殊部隊が破片手榴弾を室内に投げ込み、征圧する突入方法 - - の後に幸成はまだ消えぬ耳鳴りを無視して、スコトスとフォースを持って中に突入する。

しかし、中は爆風で巻き上がった埃と破片で穴が開いた壁だけだ。

奥にはもう一つ扉があり、幸成は二丁拳銃を天井に向けながらゆっくりとした足取りでそのドアに向かう。ドアに辿り着いた幸成はドアノブに手を掛ける。

その時、向こう側で何かが落ちる音が聞こえてきた。

(まさか!?)

幸成は慌ててドアから離れると素早く地面に伏せた。

それと同時に爆発による風圧でドアが吹き飛び、幸成の体を衝撃が貫く。

その凄まじい衝撃は幸成の腸までもを揺さ振った。

バラバラになったドアが周囲に舞い、床に突き刺さる。

手榴弾の爆発のタイムラグに救われたと幸成は苦笑した。

手榴弾は安全ピンを抜き、レバーを握った手を離し、撃針が解放されて雷管を叩く。

その衝撃により、発火した雷管が時限装置に点火する事で約4秒前

後で爆発する。

兵士は手榴弾を投げ返されないように爆発時間や敵との距離を計算して投げ付けるのだ。

幸成がやったのがそれで、逆に助かったのもその御蔭だ。

幸成は先程以上に舞い上がる埃に咳込むと髪を掻き上げる。

スコトスとフォースを持ち直した幸成は先程、ドアがあつた所まで向かい、壁越しから様子を伺う。

そこはただの廊下で奥に扉があるだけだ。

ブービートラップも見当たらない。

幸成はゆっくりと歩みを進めるとドアに取り付く。

聞き耳を立てるが音は無い。

二階の部屋はここだけだ。

幸成は最後の破片手榴弾を掴むとカウントを開始した……

沙耶那は厨房の扉を開けると中を伺った。

燭台で照らされた厨房は壁一面に赤い液体が飛び散り、吐き気を催す程の腐臭と血生臭い匂いに包まれている。

沙耶那は顔を歪めるが気持ち落ち着けて、何とか堪えた。

ここで行われていた事を想像すると悪寒が走る。

床を歩く靴の音が壁に反響した。

思った以上大きな音に沙耶那は体を強張らせるが、止まる訳にもいかず歩みを進める。

厨房の下には指を引っ掛けて持ち上げる床があり、沙耶那はその床に歩み寄り、床を開けた。

床の下には梯子が立て掛けられており、その下は暗くて見えない。

沙耶那は梯子を一段一段ゆっくりと下りて行く。

梯子を半分程下りた辺りで腐臭は埃の匂いに変わった。

地下に下りた沙耶那はゆっくりと周囲を見渡す。

広さは縦横10mの地下室で壁には燭台が掛けられ、淡く周囲を照らしていた。

その壁の一カ所に高さが約1m程度の檻がある。

沙耶那はそこに歩み寄ると手足を縛られた菜月の姿が見えた。

菜月は目を閉じ動かない。

見たところ制服に乱れは無く、乱暴された様子は無かった。

「よかった……」

沙耶那は胸を撫で下ろすと菜月の捕まった檻に駆け寄った。

檻には南京錠が掛けられており、周囲には鍵らしい物は見当たらない。

檻は古い物で、やろうと思えば神緋褪夜宵で切れるかもしれないが、下手をすれば菜月に怪我をさせてしまうかもしれない。

沙耶那は膝に手をつけて立ち上がるうとしたその時、自分の影に掛かる別の影を見付けた……

7 - 7 : 激痛

破片手榴弾を部屋に投げ込む幸成。

すぐに体を突き抜ける轟音が辺りを揺るがし、幸成は中に突入する。スコトスとフォースを構えながらドアを蹴破り、中に突入するとドアを取り囲むように甲冑が散らばっていた。

その奥には椅子に座り、机に左の肘をつけてこちらに背を向けた男性が見える。

「成る程……特殊部隊だ」

男は小さく呟くと後ろを向きながらモーゼルC96を構えた。

あまりの咄嗟の出来事に反応出来なかった幸成の右肩を弾丸が抜けて行き、その衝撃で幸成の体は後ろに引っ張られる。

壁にぶつかり、頭を打った幸成は小さく呻き、癖で髪を掻き上げようと右手を持ち上げようとしたその時、肩から伝わる激痛が幸成の全身を貫いた。

「痛いかな？」

男はゆつくりと振り返ると不敵な笑みを見せ、床から何かを鷲掴みにして持ち上げる。

幸成は眉を潜めて凝視するとそれは顔が無惨に崩れた少女の剥製だった。

眼球が垂れ下がり、皮膚が引きちぎれ、筋肉を見せる死体だ。

「せつかくの私のコレクションを台なしにして……」

男が首を振ったその時、幸成はスコトスを構える。

しかし、男は幸成の左肩を撃ち抜き、少女の血で濡れた指を振った。

「甘い……甘過ぎる……」

男はC96をスーツの中に仕舞うと幸成に歩み寄り、幸成の肩を足で押さえ付ける。

鋭い激痛に幸成は絶叫をあげた。

男はその絶叫に心地良さそうに耳を傾けると、芝居掛かった口調で

嘯く。

「私の名前はヴァインキリウス・サンジェルマン。吸血鬼の中の吸血鬼とは私の事だ」

「へっ……どこのナルシストだ？……なんちゃって貴族とかそういう奴か……つうっつ！！」

幸成が軽口を叩いた瞬間、ヴァインキリウスは別の肩に一撃を叩き込む。

幸成が呻くとヴァインキリウスは哄笑する。

「いい悲鳴だ。劣等種が！」

「へへっ……このナルシストが……」

幸成はヴァインキリウスの顔に唾を吐く。

再び絶叫……

激痛に耐えながら幸成は反芻していた。

仮に傷さえ塞がってしまえば何とでもなる。

反撃のチャンスはそこからだ。

「君達が劣等種なのは明白だ。我々、吸血鬼は優れた身体能力と特殊能力を持った人間だ。人間の血液には嘔吐を促す成分がある為、

多量には飲めない。そう、我々は選ばれた人間なのだ！！」

「ふざけた事を言いやがって……」

「知っているだろう？コモドドラゴンや蛇は獲物を丸呑みする事で一ヶ月の間、何も食わずに過ごす事が出来る。私達は血を飲むことで一ヶ月以上も生きられる。実に効率的じゃないか？」

ヴァインキリウスがそう言うと、今度は幸成が笑った。

「やっぱりテメエはナルシストだぜ……何が選ばれた存在だ！ふざけた事を言ってるんじゃないよ！！」

幸成はヴァインキリウスの腹に蹴りを叩き込むと癒えた右手にフォースを持ち、ヴァインキリウスに弾丸を撃ち込んだ。

しかし、ヴァインキリウスは凄まじい速さで弾丸を避けきり、ヴァインキリウスはほくそ笑み、幸成の右手を足で押さえ付けた。

「甘い……実に甘い……」

ヴァインキリウスは笑った。

ただ笑った。

ヴァインキリウスの哄笑は周囲に響き渡る。

「ヘクセ以上の回復力を持つているとは驚きだ」

「ナルシストは俺のような物に興味ないと思っていたぜ」

「思い上がるな！劣等種があー！」

ヴァインキリウスは怒鳴ると幸成の眉間にC96の銃口を突き付けた。

「撃てよ……撃てばいいさ！」

幸成はヴァインキリウスに怒鳴ると、ヴァインキリウスは舌打ちをした。

憤怒の表情で見るヴァインキリウスは明らかかな殺意が伺える。

ヴァインキリウスは間違いなく引き金を引く。

間違いなく……

このナルシストの出鼻をくじくのは一瞬だけだ。

ナルシストは自分がけなされたと思うと周りが見えなくなる。

コイツの自信は自分がヘクセという事だ。

それをくじいてやれば……

幸成は突き付けられる銃口に一瞬のチャンスを求めるのだった……

刃が空を斬る音が地下室に響き渡る。

男は巨大な長剣「クレイモア」で地面を刳りながら横を一瞥した。

沙耶那は壁まで退き、鞘と柄をそれぞれ手にし、男を睨む。

一瞬漂ってきたハーブのような、爽やかで澄んだ匂い。

ヘクセの独特の匂い。

饅えた匂いとその澄んだ匂いが混ざり合い、吐き気を催す程の甘ったるい匂いが周囲を支配する。

常人には気付かないその匂いは沙耶那の嗅覚を激しく刺激した。

「避けるたあ、良い度胸だな！小娘！！」
間違いない。

沙耶那は息を深く吸い込み、目を閉じる。

心身を集中させて脳のリミッターを外す。

身体のリミッターを外すのは多大な体力を要する。

本来、脳は筋肉を破壊しないように常にリミッターを掛けている為、超人的な力を出せない。

その筋肉の瓦解の限界まで力を発揮するのだから、体力にも限界がある。

そのリミッターを外した沙耶那は目を見開いた。

限界は5分……

沙耶那は神緋褪夜宵を引き抜くと正眼に構えた。

「名前を聞いてもよろしいですか？」

「ああ！？アーサー・ウィーバーだが、なんだよ！？」

「今度から神緋褪夜宵の鎧に変わる人の名前を聞こうと思いましたが、
ので……」

「はっ！！小娘は俺様の剣で死ねよ！！」

アーサーは怒鳴ると地面を蹴り、クレイモアを振りかざしながら飛び掛かってくる。

アーサーの一撃が決まる瞬間、沙耶那は素早く横に避けて再び刀を正眼に構えた。

クレイモアで刳られた壁からは土煙が舞い上がり、周囲を黄土色に染める。

アーサーはすぐにクレイモアを引き抜く。

「成る程、防がなくて正解でした」

沙耶那はそう言うとクレイモアを一瞥する。

そもそも西洋の剣と日本の刀は違う。

西洋の戦争では重い甲冑を着込んだ騎士が戦うが、その重装備の甲冑を破壊するには剣で「切る」のではなく、重さに任せて「叩く」。刀身が長く、厚い、力任せに振った大型の剣を細身に耐久性の低い刀で受け止めたなら折れるのは必至。

沙耶那は八双の構えでアーサーを見る。

アーサーが動くより早く、沙耶那はアーサーに切り掛かった。

刀が横に空を切る。

剣と刀がぶつかり合い、火花が周囲に散った……

耳に残る残響。

目の前には傾くヴァインキリウスとその手に握る銃口から硝煙を漏らす銃。

幸成は体を捻ってヴァインキリウスの足を払っていた。

幸成のすぐ横には銃痕。

宙に浮くヴァインキリウスに幸成は素早く蹴りを叩き込んだ。

ヴァインキリウスは凄まじい勢いで向こう側の壁に衝突する。

壁に支えにしながら立ち上がった幸成は素早く近くの倒れた机の後ろに飛び込む。

後ろでは弾丸が抜けて行く。

(クソツタレ……)

痛覚が残る右手で左肩を押さえる。

この机が鉄製で良かったと思うが、武器はナイフだけ。

銃を取るにも机から出なければならぬ。

幸成は左目のカラーコンタクトを取ると、それを床に投げ捨てる。

彼我の距離から考えるに被弾は免れないだろう。

飛び出そうとしたその時、幸成が隠れていた机を弾丸が叩く。

先端が潰れた弾丸が鉄製の机から僅かに顔を覗かせ、その威力を物語る。

先程、それに射抜かれたと思うと傷が疼いて仕方ない。

下手に動いて流体性力学的シヨックを引き起こしたら即死だ。

(良くもまあ、大丈夫だったもんだ)

幸成は苦笑すると弾丸が落ちた事により生じた隙間から向こう側を伺う。

モーゼルC96の装弾数は10発。

両肩を撃って2発、頭を狙って1発、幸成を追撃して3発、先程1発、計7発の弾丸を撃っている。

モーゼルC96は構造の都合上、弾丸を撃ち付くさなければクリップで纏められた弾丸を装填出来ない――ただし、片方の手でスライドを押さえながら無理矢理装填する事は可能――為、逆に隙は無い。

タクテイカルリロードが出来ないのはある意味でデメリットだが、ある意味でメリットだ。

(どうする?)

幸成は目を閉じるとナイフの柄に触れた。

盾と言っていたが、これで弾丸を防げとでも言うのか?

幸成は沙耶那の言葉を思い出し、苦笑したその時、幸成はハツとした。

盾は必ずしも防ぐ物ではないと沙耶那は言っていた。

それはそのままの意味じゃないのか？

だとしたら、沙耶那の言っていた意味は……

幸成はナイフ「メツサードルヒ」を引き抜くと深く息を吸い込む。

不快とも言える埃の匂いが、幸成の鼻腔を通って肺に達した。

「It is a bet (賭けだ)」

幸成は小さく呟くとメツサードルヒの切っ先を見つめたのだった…

…

神緋褪夜宵とクレイモアが激しくぶつかり合い、金属の澄んだ音が響く。

力押しではヘクセには勝てない。

勝てる可能性があるのは動態視力と速さ。

沙耶那は素早く跳び退くと脇構えに構えつつ、右から横に切り掛かる。

アーサーはクレイモアの鎬で刀を防ぐと沙耶那の腹に蹴りを叩き込む。

間一髪、その蹴りを左手に掴んだ鞘で受け止める。

が、やはり受け止めるには些か頼りない。

沙耶那は直撃こそ免れるが、その勢いでよろめく。

その隙を狙ってアーサーのクレイモアの沙耶那の頭に振り上げられる。

クレイモアは沙耶那の頭に力任せに振り下ろされるが、目標を捉え損ねて地面を刳った。

壁際に逃げた沙耶那に再び一撃が叩き込まれる。

鞘で防御した沙耶那は壁に押さえ付けられた。

「あぐう……」

沙耶那は背中全体を襲った激痛に呻くと押さえ付ける力に抵抗した。しかし、その力は抵抗しても抗えない程強く、沙耶那は顔を歪める。アーサーがニヤリと笑ったと同時に沙耶那は鞘の反りで力を逃がしながら壁から逃れた。

沙耶那は正眼に刀を構えると右手に刀を、左手に鞘を持ち、切っ先を向ける。

剣と盾……

久しぶりに使う時が来た。

沙耶那はそれぞれの手首の甲を地面に向けながら両手を広げてアー

サーに駆け寄る。

アーサーは迎え撃つかの如くクレイモアを脇構えで構えると、横に閃した。

沙耶那は鞘の反りでクレイモアを受け止めつつ、クレイモアの上で刀を滑らせる。

神緋褪夜宵はクレイモアの上を滑ると同時に周囲を火花を散らす。火花を散らしながらアーサーの首元に向かう刃からは澄んだ音とは違う、包丁を研ぐときのざらついた音が響く。

沙耶那は素早くアーサーの後ろに抜けると、神緋褪夜宵から一滴の血が滴り落ちた。

(やり損ねたようですね……)

沙耶那が内心呟くとアーサーが振り返る。

頬の肉は刎れてめくれ、そこから歯茎が見えた。

ハッキリ言って悍ましい姿だが、沙耶那は動じずに刀を構える。

「この女があ!!!」

アーサーが怒鳴り、クレイモアを振り上げたその時、アーサーの手ががら空きとなった。

この瞬間を狙っていた沙耶那は素早く鞘でアーサーの手に鋭い一撃を叩き込む。

その一撃はアーサーの右手首をへし折り、クレイモアは壁に突き刺さる。

アーサーがしまったと思うよりも速く、沙耶那は右手に持った刀を水平にし、アーサーの横を抜けた。

その刹那、僅か一秒足らず。

その僅かの間に決着は付いた。

沙耶那は低い姿勢から立ち上がると刀に付いた血を払い、鞘にゆっくりと収める。

鞘に鏝止めが収まる独特の音が響き渡ったと同時にアーサーの上半身と下半身が離れた。

下半身からは両断された臓物が周囲に散らばり、クレイモアを持つ

たままそこにぶら下がる上半身からは同じく臓物が零れ落ちてくる。柔らかい物が地面に叩き付けられる嫌な音が止んだかと思うと酢の、正確には酢酸の刺激臭が甘ったるい匂いに変わって室内に広がった。環境の悪化によって起こる、壊死「ネクロシス」。

それにより発生する細胞の融解こそがヘクセの特徴だ。

沙耶那は熔けきり、跡形も無くなったが、染みだけは残ったその場所に歩み寄ると近くに落ちていた鍵を掴む。

これこそが菜月を捕らえている檻の鍵のようだ。

沙耶那はゆつくりと歩み寄ると檻の南京錠を開けて中の気絶している菜月を抱き抱える。

そして懐から小さな錠剤――睡眠薬を取り出すと、菜月の口に入れて、200ml程度のペットボトルの蓋を開ける。

菜月が窒息しない程度の水を口に流し込む。

「任務は成功……だけど、幸成君は？」

沙耶那が小さく呟いたその時、足の力が抜けて地面に座り込む。

酷い倦怠感に襲われた沙耶那は深く息を吸い込むと震える足で立ち上がった。

「少し倒すのが遅かったら危なかった……」

沙耶那は小さく呟くと、汗で前髪が張り付いた額をハンカチで拭いたのだった……

幸成は鉄の机に隠れながらメツサードルヒの電流を入れる。そして鉄の机に擦ると激しい火花が散った。

電源は入っている。

タイミングは一瞬だ。

幸成は身構えると軽く体を後ろに退くと勢いを付けてスライディングを行った。

ヴァインキリウスは待つていましたと言わんばかりにスライディング中の幸成に三発の弾丸を放つ。

その弾丸は幸成の頭に向かうがそれを見越していた幸成は体を後ろにのけ反る。

スライディングをしながら銃に辿り付いた幸成は賭けに勝ったと悟った。

ヴァインキリウスは素早くクリップに挟んだ弾丸を弾倉に滑り込ませる。

だが、銃を取るとヴァインキリウスが予想していた動きとは違う動きを幸成は取って見せた。

幸成は右手に持ったメツサードルヒを逆手に持ち変えると、ヴァインキリウスに投げ付ける。

完全に一步遅れたヴァインキリウスは投げられたナイフを銃で弾いた。

その時だ。

凄まじい轟音と閃光、硝煙が部屋に広がった。

誘爆……

火薬は静電気でも爆発するのは周知の事実。

幸成はモーゼルの弾丸に使われた火薬をメツサードルヒの電撃で誘爆したのだ。

弾倉の中で爆発した火薬は圧力とともに弾丸を発射して、銃本体を

破壊する。

その威力は小さな手榴弾と言っても過言ではない。

ヴァインキリウスの腕は吹き飛び、銃の爆発で縦に回転しながら向かってくるメツサードルヒの柄を器用に掴んだ幸成は電源を切ると地面に落ちた二丁拳銃を掴み、ヴァインキリウスに駆け寄る。

幸成は今までの恨みを晴らすかの如く、体を捻って跳び上がると、その勢いを乗せたまま絶叫するヴァインキリウスの顔面に跳び蹴りを叩き込んだ。

鼻血を出しながら吹き飛ぶヴァインキリウスはそのまま、手榴弾でめちやくちゃになった本棚に突っ込む。

幸成が歩み寄るとヴァインキリウスは鼻血を垂らし、歯が折れた口から出す血で真っ赤に染まった顔を彼に向ける。

「チエツクメイトだ!!!」

皮肉にも相手の血では無く自分の血で濡れたヴァインキリウスは哄笑した。

「クク……ハハ……クハハハハ!!!」

「何が可笑しい?」

幸成の問い掛けを無視したヴァインキリウスは屋敷に響き渡る大声で叫んだ。

「見ているんだろ!? ルーナ・ヴェルドウーラ!!! 邪魔物の私が死ぬぞ!!! 満足か!? ハハハハハ!!!」

「ルーナ・ヴェルドウーラ? まだ他に仲間がいるのか!? 答える!」
幸成がスコトスとフォースを構えたその時だった。

幸成の隣の窓から枝が伸びてきて窓を突き破り、幸成を弾く。

その光景はあまりにも非現実的で、まるでお伽話かファンタジーに
いるような錯覚に幸成は陥る。

雨の降る窓から入って来たのは松の木の枝で、その針のように尖った葉と逆立った表皮の枝をヴァインキリウスの首に巻き付け、それを締め上げていく。

ヴァインキリウスの顔はみるみるトマトのように腫れ上がり、その

攻撃的な枝と葉により肉が削られる。

呆然としている幸成を尻目にヴァインキリウスの股間に染みが出来てきた。

刹那、骨が砕け散る音が響き渡り、遂にヴァインキリウスは動かなくなる。

それに合わせてその松も動かなくなった。

幸成はゆっくりと立ち上がるとヴァインキリウスを絞め上げていた雨に濡れた松に触れる。

先程の様子から察するにヘクセが操っていたようだ。

幸成は銃を仕舞うと書斎を飛び出し、一階に向かって階段を下りる。

幸成が階段を半分程下りた辺りで、菜月を背負った沙耶那の姿が目に入り、幸成は口を開く。

「沙耶那。無事だったか？」

「はい。そちらも無事……という訳ではなさそうですね」

沙耶那のその声に幸成は苦笑しながら血まみれの服を一瞥する。

「沙耶那はヘクセと交戦したか？」

「はい」

「そいつの名前は分かるか？」

「アーサー……確かそう言っていました」

「アーサー、ルーナ・ヴェルドウーラじゃない？」

この屋敷には他にヘクセがいた？

仮に居るとしたら、作業員の寝室か？

だが、任務に支障があるヘクセとも言えない。

幸成は階段を駆け降りると口を開いた。

「撤退する」と……

8 - 1 : 編入（前書き）

第8話

学校のチャイムが八時半を告げた。

外は朝にも関わらず、暗く酷い雨が降っている。

梅雨独特の雨が、空気を湿らせていた。

窓際の席に座っていた幸成は外を眺めながら深い溜息を漏らす。

一ヶ月前の戦闘で出てきた新たな単語「ルーナ・ヴェルドウーラ」。

恐らくは人名だろうが、何の手掛かりにもならないのが現状だ。

あくまで目的は菜月の救出、ヘクセの殲滅が目的ではない。

ヴァインキリウスもアーサーも菜月を救出していたら避けていただろう。

だが、仮にその「ルーナ・ヴェルドウーラ」と交戦したとしたらかなり危なかった。

ルーナ・ヴェルドウーラが植物を操れると仮定した場合、森の中の戦闘は死を意味していただろう。

幸成が拳を握りしめると同時に本鈴のチャイムが鳴る。

隣の席に沙耶那が座ると小声で囁く。

「一ヶ月前の……」

そこまで言った沙耶那を幸成は「ここは学校だ」と遮る。

その時、担任の教師が入って来た。

「朝のホームルームを始める……前に！編入生を紹介する」

編入生の一言に教室がざわつく。

が、幸成と沙耶那、ロイはさして驚かなかった。

誰が編入してきたか知っていたからだ。

鳳寿は扉を開けて教壇の前に立つと眼鏡を上げた。

「神宮寺鳳寿さんです。皆さん、仲良くして下さいね」

「……よろしく」

鳳寿はポーカーフェイスのまま呟くと教室が色めき立った。

男子にとっては美少女の編入は嬉しく、女子にとっては新たな恋敵

の登場で、あらゆる意味で盛り上がっている。

「神宮寺さんの席は……直江君の後ろが空いているからそこに座って下さい」

「……分かりました」

鳳寿が頷くとロイを筆頭に男子が囁し立てる。

「おい！幸成！！これ以上女の子を侍らせてどうするつもりだ！」

「この色男！！」

うるせえ……

幸成は苦笑したが、これで監視がやりやすくなったとどこか思っていた……

じめじめした湿気が暗い部屋の中を占領する。

彩花は黒く染まり、乾燥した紙に一滴の水を垂らし、プレパラートを作った。

この紙、正確にはティッシュは幸成の服から一ヶ月前に回収した物だ唯一出来る家事である洗濯をしようとした所を見付けたのである。

誰の血であっても、このように観察するのはある意味では彩花の趣味だ。

血液嗜好というよりは、相手の弱みを握れる可能性がある物は徹底的に調べるといのが彼女の趣味。

「さてさてえ？誰の血なんでしょうかねえ？」

彩花は電子顕微鏡を覗き込むとすぐに眉を潜めた。

「これはあ……」

乾燥仕切った血液の中に混じる、微生物がプランクトンに似た生物アピコンプレクサ門、孢子虫類、コクシジウム目に属する「マラリア原虫」に似ていた。

マラリア原虫は蚊等を媒介に寄生し、熱病を引き起こす原虫だ。

日本にもかつてはマラリアがいたが、それは既に絶滅し、発症例の大半は海外から帰国した人だけ、日本では有り得ない。

さらに一ヶ月前となれば沙耶那の家に泊まった人の誰かが熱病を発症しているはずだ。

それが無いという事は……

「再び私の罪に巡り会えましたねえ」

彩花はどこか自嘲的に呟くと笑う。

それと同時にこれが誰の血かが想像が出来た。

「神宮寺鳳寿ですねえ……彼女の人生を狂わせたと言っても過言ではないかもしれませんねえ」

彩花はすぐにプレパラートを外すと三村が使っている灰皿にそのティッシュと他のティッシュを詰め、マッチで火を付けた。

投げ込んだマッチから広がる火は暗い部屋を明るく照らす。

今回の任務が恐らく最後の任務になるだろう。

シュトレイゴイカバルと繋がりのある神宮寺財閥、そして今回の原虫。

自分の罪を清算出来たなら、自分で命を断つだろう。

彩花はゆっくりと燃える火を見つめるのだった……

8 - 2 : ジンクス

雨が天井を叩き、ノイズにも似た音を響かせる。
屋上に通じる階段に五人は座る。

幸成は購買で買ってきたヤキソバパンの包みを開けながら菜月に素
つ頓狂な声で問い掛けた。

「体育祭？」

「そう！ やつとこの時期が来たね」

菜月は弁当箱の蓋を開けながら楽しそうに笑う。

それに同調するように沙耶那も弁当箱の蓋を開けた。

「それも単なる体育祭じゃありません。ジンクスのある体育祭なん
ですよ？」

「ジンクスねえ……」

幸成は小さく呟くとヤキソバパンを咀嚼しながら、冷や汗を流す。
ジンクスと言えば思い出されるのが、HAWK隊員達の間で伝説と
なった「幸成・沙耶那許婚事件」だ。

へクセが操る蛇に丸呑みにされた沙耶那を救出し、「白狐」の伝説
を謀らずも再現してしまった事は記憶に新しい。

「そのジンクスって？」

「体育祭の後夜祭のダンスと一緒に踊ったカップルは結婚するって
いうジンクスですよ」

「やっぱりそういう系のジンクスか……」

幸成は髪を掻き上げるとロイを見遣る。

ロイはニヤニヤしながら何か考えているようだが、何を考えている
かは大方の検討がつく。

「去年、二人は誰と踊ったんですか？」

二人は首を振る。

鳳寿も実質一年生の為、体育祭は皆無だ。

しかし、鳳寿を監視するという名目が気が付いたら学校生活を享受

している。

幸成は苦笑すると本来の任務を思い出す。

今回の任務においては分からない事が多過ぎる。

まずはシュトレイゴイカバール。

奴らは何かの形で神宮寺財閥を必要としている。

そして神宮寺財閥。

彼らは何らかの特殊な形でシュトレイゴイカバールと取引を行い、民間軍事企業（PMC）を護衛に雇っている。

ややこしい話だが現状を整理するとこのような形だ。

幸成はパンを飲み込むと思考を止めた。

「……その体育祭は楽しい？」

サンドイッチを食べていた鳳寿は聞こえるか聞こえないかの声で咳くと、菜月は「勿論」と笑って見せた。

「皆でワイワイ騒いで汗を流す。楽しいよ」

菜月はタコさんウインナーを頬張る。

その姿はやはり幼い子供にしか見えない。

本当に彼女は高校生なのかと幸成は苦笑いを浮かべた。

「んっ？どうしたの、ユキ君？」

「いや、何か可愛いなあと思って……」

その一言にその場にいた全員が硬直した。

沙耶那に至っては箸で挟んでいた唐揚げが真っ二つに切断する程に力が入っている。

「お前は何を言っているんだ？とうとうそっちの道に走ったか？ま

あ、女の子の可愛いは罪だからな……仕方ないだろうなあ」

ロイは何を勘違いしたか頷いている。

いや、ロイに限らず全員が誤解しているだろう。

「いやあ、そういう意味じゃなくて……単に仕草が可愛いと言うか。

何と言うか……ハムスター？」

「あゝ、確かに小動物的な可愛さは有りますからね」

沙耶那は何度も頷きながら安堵の表情を浮かべて先程真っ二つにし

た唐揚げを口に運ぶ。

「ナツはハムスターでも小動物でもないよ！」

じたばたと足を動かす彼女の動作は可愛らしく弄りたくなる愛らしさがある。

「まあ、話を戻すと体育祭があるのな」

ロイはヤキソバパンの最後の一口を食べる。

「そのダンスつてのは強制参加？」

「ううん。参加したい人がそれに集まるんだよ。大半がカップルだから変態さんみたいなりア充じゃない人には無縁だよ」

菜月の一言に「ほつとけ」とロイ。

「だったら髪を解けば良いんじゃないか？少なくともリア充には成れるぜ」

幸成は笑いを噛み殺しながら言うとロイは髪をグシャグシャに掻き乱す。

「男と結ばれると言うか貴様は！？笑えない！俺は女が好きだあ！」

ロイが心の底から叫び、その声が学校中に響き渡る。

その残響と同時にチャイムが鳴り響く。

幸成は手早くヤキソバパンの包みを結ぶとロイを見て苦笑するのだ
った……

昼休み終了後の五校時はロングホームルーム、つまりはクラスの間であつた。

議題は次の体育祭の種目割り当て。

様々な種目を男子生徒が雑な字で書いていき、それを見た沙耶那はクラス全体を見渡し、口を開いた。

「それでは今週の日曜日の体育祭の割り当てを決めたいと思います」
種目は一般的な体育祭に良くある物だ。

二人三脚や綱引き、リレー等だ。

が……

(何やら殺気じみているのは俺の気のせい?)

幸成は妙な殺気を感じて顔を引き攣らせた。

男女共に目を血走らせている。

獲物を狙っている狼のような様子は空気を強張らせた。

「まずは二人三脚に出場する人を決めたいと思います。今年は男女ペアを組みますので各一人を選びます。参加したい人は手を挙げて下さい」

沙耶那のその声にクラスの、幸成と鳳寿、司会の沙耶那を除く全員が手を挙げた。

(成程、これが原因か)

幸成は苦笑いを浮かべ、髪を掻き上げる。

あわよくばリア充になろうという魂胆のようだが、幸成が手を挙げていないと見るや女子が次々手を下ろしていく。

クラスの半分の女子約15人が手を挙げていたが、もはや三分の一も挙げていない。

その様子を見ていた沙耶那は手元の資料を読み直すと笑みを浮かべた。

「それでは男子は直江幸成君が出場という事で決まります」

「は!?!」

沙耶那の突然の発表に幸成やロイ、その他男子が素っ頓狂な声を漏らした。

ロイは立ち上がり、机に手を着きながら声を上擦らせる。

「沙耶那さん?聞き間違いかと思いますが、何で手を挙げていないリア充ハーレム野郎何ですか?陰謀ですか?」

その声に全男子が同調する。

返答次第では血祭りにされ兼ねない。

幸成は戦々恐々になる。

さらに天然の沙耶那が何か仕出かさないと心配になってきた幸成は髪を掻き上げた。

沙耶那はそれを予想していたかのように笑ってみせる。

「生徒会の通達で手を挙げていない人を選ぶようにと言われていきます。勿論、セクハラ防止の為です。やる気が無い人ならその心配は無いですからね」

まんまとしてやられた男子は口を開けてキョトンとしている。

「沙耶那さん!お言葉ですがロイツは狼です!ドSの狼です!女の子にあんな事やこんな事をする本をベッドの下に隠し持っている変態です!」

「持つてねえよ!」

あらぬ疑いをかけられた幸成は頬を紅潮させながら立ち上がる。

同時に男子から囁し立てる声が聞こえてきた。

「じゃあどんな本なら持つてるんだ、直江!」

「おいおい白状してしまえよ」

「違……」

「それともあれかB Lか?」

「違っつてえの!」

幸成は怒鳴ると不意にある事を思い出し、ニヤリと笑った。

「そういえばロイ。そのヘアゴムを買ってきたのは誰だったかな?どうして、男なのにヘアゴムが必要なんだっけなあ?」

その声にロイは生唾を飲み込む。

ロイがゆっくり座ると、幸成が畳み掛ける。

「たまには髪を解いても良いんじゃないか？」

「確かに！」

「カブラギー！髪を解け！」

男子の声に合わせてクラス全体が髪を解けと音頭をとる。

話術に長けた幸成が標的をロイに変えさせるのは造作もない事だ。

出過ぎた真似をしてからの後悔は遅く、ロイは「うわあー！！」と叫びながら髪を解いた。

同時に男女共に歓声をあげる。

理由は言うまでもない。

男子は実はロイは女じゃないかと口に出している。

(自業自得だ、地獄に堕ちろ)

幸成は鼻で笑うと左手の親指を立てると首を切るように動かし、下に親指を向けた。

足早に席に戻った幸成を見た沙耶那は手を叩き、場を収めると口を開く。

「それでは女子の代表を決めたいと思いますが、誰か立候補をする人はいませんか？」

その声に女子が手を挙げる。

その中には先程手を挙げなかった鳳寿も混ざっていた。

「それでは幸成君、指名して下さい」

「「はあ！？」」

その声に男子だけでなく女子も口を開く。

セクハラ防止で選んで、男子に指名させるのだから無理も無い。

クラスがざわめく中、幸成はそのざわめきに負けない程の大声で鳳寿の名前を呼んだ。

「このクラスに馴染んでないんだから、良い機会じゃないですか？」

「鳳寿さんはそれで宜しいですか」と沙耶那。

鳳寿はゆっくりと頷くと、黒板に幸成の名前の横に鳳寿の名前が書

か
れ
た
…
…

学校のカバンを肩に担いだ幸成とロイが栗荘に歩いていると栗荘の方向が騒がしい事に気付いた。

二人が眉を潜め、栗荘に向かうと荘の前にいるHAWK隊員三人が目に入る。

「何やってんだ、おっちゃん？」

「おお、良い所に来たな」

三村は二人に歩み寄ると二人の肩を力強く掴み、ほくそ笑む。

嫌な予感を感じ取った幸成とロイは冷や汗を流す。

「いやあ、彩花の飼っていたオオスズメバチが一齐に逃げ出してな」

「さ、さいですか」

幸成は苦笑いを浮かべると「殺虫剤使えよ」とロイ。

「生き物は皆友達ですよ？ミミズだってえ、オケラ螻蛄だってえ、アメンボだってえ、皆生きている友達なんですよ？」

「どっかの有名な歌を持つてくるなよ……」

幸成は呆れながら髪を掻き上げるとロイが口を開いた。

「ミミズも螻蛄もアメンボもかなり気持ち悪いぜ」

「何を言っているんですかあ。とても可愛いじゃないですかあ」

「彩花さんの感性って残念だな」

「ああ」

ロイと幸成が苦笑いを浮かべると三村に肩を押さえられた二人の頭を握る。

「何か言いましたかあ？」

「何も言っていません」

二人は声を揃えながら言うと、優が「MK・2 走行自動機銃」を手に持ちながら口を開く。

「これで中の様子を偵察しようよ。と、言つか彩花さんは何でスズメバチを飼ってるの？ボクだったらハムスターとか飼うよ？」

「正確にはペットじゃなくて実験動物ですねえ」

「実験動物ねえ」

幸成は呆れたように呟くと、「とにかく中に入れようぜ」と続け、優からMK・2を受け取る。

そして彩花の部屋の扉を開けた。

オオスズメバチが飛んでいるなら普通目視で見えるはずだが、それらしい物が見えない。

幸成は首を傾げると何気なく扉を見遣る。

その瞬間、体を強張らせた。

何故ならその扉に5匹のオオスズメバチが張り付いていたのだ。

大きな顎を鳴らし、羽を時折震わせているオオスズメバチを一瞥しながら幸成はゆっくりと扉を閉める。

扉が閉まり切ったその瞬間、オオスズメバチの羽音が扉越しに聞こえてきた。

「死ぬかと思った……」

幸成は息を切らしながら呟く。

「何で自動機銃を置かないんだ！中の様子を探れないだろうが！！」
と三村。

「じゃあ、おっちゃんが中に入れば良いだろう！！」

「自分は……勘弁だ」

「取り敢えずどうするんだよ、これ？」

幸成はドアを指差すと彩花は「一つ策は有るんですがねえ」と口を開く。

「中に虫の神経を麻痺させるガスが有るんですがあ、それを取る余裕なんて有りませんでしたからねえ」

「……言いたい事が分かりましたが、俺は嫌です」

幸成はきっぱりハツキリと言うが、それを無視して幸成に笑いかける。

「行ってくれないとお、後で恐ろしいですよあ？」

彩花が唇が触れる距離まで顔を近付けるが、陰影により恐ろしい様

子が醸し出される。

人を殺しかねない顔に幸成は恐怖し、仕方なく頷く。

半ば脅されながら中に入った幸成は身を屈めながら奥に向かう。

その時、後ろからオオスズメバチの羽音が響き渡ってきた。

幸成は慌てて伏せると頭上をオオスズメバチが通過していく。

オオスズメバチの目の構造では下が見えない。

それを何かで聞いた事がある幸成は咄嗟に伏せたのだ。

「危な……」

しかし、何でまたこんな危ないオオスズメバチを飼っているんだ？

幸成はそんな疑問を内心呟くと匍匐ほふくでその神経ガスを探す。

「神経ガスと言っても多分……」

幸成はゆっくりと進むと右腕の甲にオオスズメバチが止まった。

木を削る程の強靱な顎を鳴らす。

体を強張らせた幸成は生唾を飲み込む。

オオスズメバチの毒はヒスタミン、神経毒、ペプチド、タンパク質を混ぜ合わせた「毒のカクテル」とも評される毒だ。

刺されたら重症は免れない。

幸成は深く息を吸い込むと一か八か左手を横に一閃した。

凄まじい勢いで放たれた手刀がオオスズメバチを弾き、床に弾き飛ばす。

それと同時に手が机の脚にぶつかる。

その瞬間、幸成の頭の上に缶が落ちてきた。

缶は市販の部屋に充滿するタイプの殺虫剤に酷似している。

幸成はその缶を掴みプルタブ式の蓋を開けると同時に白い煙が噴き上がった。

薬品の独特の果物系の匂いが部屋に充滿し、幸成は急いで部屋から飛び出す。

煙に撒かれ、興奮するオオスズメバチの羽音が後ろから響き渡るが、幸成は無視して外に転がり出た。

同時に彩花が部屋の扉を閉めながら微笑んだ。

「お疲れ様ですう」

「……何に使うんですか？このスズメバチは……」

「内緒ですう」

彩花は悪戯な笑みを見せて、唇に人差し指を当てながらウインクをしてみせた……

暗黒に包まれた教会。

そこに二人の女性が話をしていた。

片方は紺碧の瞳に金髪のロングヘア、モデルのようなスタイルの女性、片方は少女だ。

女性は顔に怒りを浮かべながら問い掛ける。

「ルーナ・ヴェルドウーラ？何故、ヴァインキリウス・サンジエルマンとアーサー・ウィーバーが死んだか教えてもらえますか？」

「それは……」

「私が虫で探りを入れた所、ヴァインキリウス・サンジエルマンを殺したのは貴女じゃないのかしら？違う？」

「その通りです。ミラルダ様……」

少女が静かに答えるとミラルダは少女の耳元で囁く。

「今すぐ殺してあげてもいいのよ？ルーナ・ヴェルドウーラ？」

「どうかお許し下さい……」

「どうしようかしら？私の虫達もお腹が空いてるって言ってますからね」

ミラルダが呟くと、少女の肩に多数の幼虫が登ってくる。

虫独特の噓せるような酸っぱい匂いが少女の鼻を突き抜けた。

「貴女は非常に良い娘よ？だけど使えない娘はシュトレイゴイカバールに要らないのよ」

「それだけは……それだけは……！」

少女はミラルダに縋ると、ミラルダが少女の腹を蹴り飛ばした。

少女が低く呻くとミラルダは口に手を当てながらせせら笑いを浮かべる。

続いて少女の首を掴むと締め上げた。

「うっ……くぁ……あう……」

「ああ……良い声よ？やっぱり貴女は可愛いわ」

ミラルダは口から涎れを垂れ流し、呻き声を漏らす少女をうつとりと眺めると床に放り出した。

少女が激しく咳込むとミラルダは少女の髪を掴み、無理矢理立たせる。

「最後のチャンスを与えるわ。貴女自ら二人を殺しなさい」

「そんな……」

「まさか出来ない、とは言わないわよね？」

少女は唇を噛むと床を見る。

その様子を見たミラルダは「まさか出来ないの？」と問い掛けた。無言の少女にミラルダは続ける。

「まさか奴らに情でも湧いたの？」

「違う！」

「もし、そうだとしたら貴女はカズイクル様に殺されるわよ？今、私が殺しても良いんだけど？」

「どうかお許し下さい！！必ず奴らを殺します！だから……」

「そうよね？身寄りがいなくて路頭を迷っていた所を拾ったのはシユトレイゴイカバルだからね」

「勿論です。私はシユトレイゴイカバルに忠誠を誓いました。だから私の居場所はシユトレイゴイカバルだけ……」

「分かっていればいいのよ。シユトレイゴイカバルに居続けたかったらあの二人を殺しなさい？」

「分かりました」

「貴女がちゃんとやるように作戦開始時刻を決めるわ。時間は今週の日曜日の18時から19時の間。それを過ぎれば……そうね……神宮寺財閥、そこにいる民間軍事企業の男達の慰み物になってもらうわ」

「慰み物？」

「そうよ。男達に愛撫されて、快楽に溺れて狂い死にするまで玩具にされるのよ。虫の餌が嫌ならそちらしか道は無いでしょう？」
「どちらに転んでも死しか無い。」

生き残るには狼と狐を殺すしか……

「分かりました。必ず二人を殺してみせます」

少女は小さく、囁くように答えるとミラルダは彼女の薄い茶髪のサイドテールを撫でた。

少女はその優しい手つきに心地良さを覚えるが、引導を渡そうと考えているのは彼女だ。

殺されると分かっているにもかかわらず愛情に飢えている彼女には最大の愛情であった。

ミラルダを母親と重ね合わせ見ている彼女は、家族の愛情という物を知らない。

愛情も温もりも全てを知らない彼女を言いくるめるのはミラルダにとって容易であった。

そして少女もまたミラルダに言いくるめられていると分かっているも、その中毒のように欲する愛情からは逃れられなかったのだ。

ミラルダは少女の髪から手を放すと不敵な笑みを漏らす。

その不気味な笑みは少女にはどう見えたのだろうか？

それは少女にしか分からない……

昼と夕が混ざった微妙な時間帯。

グラウンドを駆け回る生徒達が明後日に控えた運動会に精を出す。

その中に幸成と鳳寿の姿もある。

二人は息の合ったフットワークで学年どころか学校一の速さを誇っていた。

大方、全てのペアが覚束ない足取りの為というのもあるがそれでも彼らの速さは異常とも言える程速い。

その状況を見ていた沙耶那は何処か感心しながらも嫉妬しつつ彼らを見ていた。

許婚というのもあったが、司会という理由で手を挙げられず、指名せざるを得なかった自分を恨む。

とは言ってもクラス代表のリレーでは第三走者とアンカーをそれぞれ担っていた。

アンカーに繋ぐ第三走者が沙耶那、アンカーは幸成と登録されている。

体力と足の速さでは幸成が勝っているからだ。

レンジャー徽章と体力徽章を持つ幸成はある意味でこの運動会は遊びでしかない。

あの横が自分だったらと我ながら嫉妬深さに苦笑した。

「おーおー、新妻さんは夫の不倫でご機嫌ななめですかい？」

髪を解きながらタオルで拭いている可愛い時のロイは沙耶那に笑い掛ける。

幸成の策略の後に、急激に「腐」女子の人気が増えた為、彼は時折髪を下ろす事にしたのだ。

無論、彼に至ってはその事実は知らない為、女子にモテたと勘違いしている。

そんなロイがグラウンドに設置された野球部のベンチに座る沙耶那

の隣に座った。

「私って嫉妬深いですかね？」

沙耶那は太股に肘を付くと立てた腕の掌で顎を支える。

珍しく露骨に不機嫌な様子を見せている沙耶那を一瞥するとロイは

口を開く。

「普通だろ？だってアニメのヒロインとかは主人公が他のヒロインと仲良くしているとそんな風に嫉妬するからさ」

「私はアニメや小説のヒロインじゃないですよ？」

沙耶那が苦笑すると「いや」とロイは答えた。

「考えてもみな？誰がこの世はアニメや小説じゃないと決め付けたんだ？」

「それは……」

「現実世界なんて誰が作ったか分からない。二次元にいるキャラクターだって、実は意識があって自分の世界があると信じているかもしれない。俺達のこの世界も実はそんな世界かもしれない。そしてら命の概念って話になるが、な」

「随分と哲学的な事を言うんですね」と沙耶那。

「実は俺は秀才なんだぜ？」

「全教科赤点ギリギリだったのに可笑しいですね」

「それを言われると……」

ロイは苦笑いを浮かべると沙耶那は掌から顎を離した。

「幸成君は私の事が嫌いなんでしょうか？許婚が決まってからは、彼が私を避けているようにも思えるんです」

「いいや、嫌いじゃない。不器用なだけだ。あいつの過去は知っているよな？」

「ええ。一度聞きました」

「俺もそれを知っているから言えるんだが……あいつは大切な人を巻き込みたくないんだよ」

「えっ？」

沙耶那が素っ頓狂な声を漏らすと、ロイは続ける。

「あいつはせつかく出来た繋がりも一定で保つ癖がある。ヘクセの報復も有り得るこの仕事にその人を巻き込んで死なせた時の耐えられない程の悲しみをあいつは恐れている。だからこそ……」

「優しい狼ですね」

沙耶那は優しい笑みを漏らすと、その笑いを見たロイが髪を結びながら言う。

「せつかく可愛い女の子の許婚になったんだ。嫌いになる道理なんてあるはずが無いだろ？」

「可愛いなんて……そんな」

沙耶那は頬を朱に染めながら、そこに手を当てながら言うと、調子に乗ったロイが、調子の良い表情で笑ってみせた。

「何なら俺が幸成の代わりに許婚になってやるうか？」

その一言に沙耶那は「お断りします」と答えるとロイも「俺もだ」と答えて続ける。

「俺にも許婚がいるんだからな」

その予想外の答えに沙耶那は驚きの表情で「嘘!？」と大声で言う。

「嘘じゃないぜ。まあ、ガキの時の約束なんだけどな」

「ロマンチックですね」

沙耶那はロイに微笑むとロイは自嘲しながら呟いた。

「実現出来るか分からないんだけどな」

「どういう……」

「さて、そろそろ練習に行きますか」

ロイは沙耶那の言葉を遮り、去って行った。

日に照らされて出来た木の影で黒く染まるロイの背中を見送った沙耶那は彼が何かを背負っているようにも見えたのだった……

沙耶那とロイが話している頃、幸成と鳳寿は息を合わせて走っていた。

身長約15cm差の幸成と鳳寿は少しアンバランスで微笑ましい。そしてそんな状況を良しとしない女子は鳳寿を「私の王子様を取りやがってこの野郎!!」と怒気と殺気が混ざった睨みを利かせている。

ポーカーフェイスの鳳寿は何を考えているか分からないとして、鈍感、朴念仁、唐変木の三拍子が揃った幸成はそんな事に気付いていないのは言うまでもない。

その状況で走っていた幸成が隣を一瞥すると鳳寿は軽く息を切らし、少し苦しそうだ。

「少し休むか？」

「……うん」

鳳寿の答えを聞いた幸成は「少しずつペースを落とすから」と言い、掛け声をゆつくりとスローペースにしていく。

殆ど歩く速度までスピードを落とした二人はゆつくりと止まる。そして幸成は身を屈めると二人の足を結んだ手ぬぐいを解く。土煙で土色に染まった白い手ぬぐいを持つと幸成は微笑む。

「良いぞ」

「……ん」

鳳寿はゆつくり頷くと近くのベンチに歩いて行く。

鳳寿がベンチに座ると深く息を吸い込み、深呼吸をする。

「何か飲み物でも買ってくるぞ？」

「……お金」

「良いよ、奢るから」

幸成が微笑むと鳳寿は一瞬素っ頓狂な顔になり小首を傾げた。

「……でも」

「良いって。それに鳳寿が辛そうなのに頑張り過ぎた俺の落ち度もあるんだから」

幸成は笑って見せると、鳳寿は頬を赤らめた。それに気付いた幸成は眉を潜める。

「どうした？どっか悪いのか？」

「……別に……あの、先輩？」

「うん？どうした？」

「一緒に行つていいですか？」

珍しく途切れ途切れじゃない声を聞いた幸成は先程の鳳寿のように驚いたような表情になるが、すぐに笑って見せた。

鳳寿も笑みを返すと、鳳寿はゆっくりと幸成の横に並ぶ。

幸成と鳳寿は校舎に向かって歩き出す。

「……先輩は優しいです」

鳳寿は俯きながら呟くと、幸成は照れながら後ろ髪を搔く。

「そんな事は無いさ」

実際は「任務」なのだから……

とは言つても、彼にも鳳寿はどこか放っておけない存在となつていた。

恋愛感情とは違う何かだ。

彼女の暗い影を取り払ってやりたいという使命感も先立っているのだろう。

「先輩はイジメられていた時もアタシを助けた……」

「あれは……たまたまだよ」

幸成は自嘲しながら笑うと、鳳寿はゆっくりと首を振った。

「だとしても、先輩は優しいとアタシは信じたい」

その言葉を聞いた幸成は急にいたたまれない気持ちになった。

（俺は優しくはない……）

人間と同じ姿をしたヘクセを問答無用で殺害してきた幸成は彼女が思っている存在ではないと感じていた。

血を吸うのは彼らにとっての生理現象であり、我々の欲求と同じだ。

ただ人間の血を吸うという理由で殺害している。

それがもし人間の血ではなかったらどうだっただろう。

答えは簡単に共存の道はあったと答えられる。

かつて幸成は小学生のヘクセの少女を手に掛けた事があった。

少女はただ生きたかっただけだ。

クラスメイトを血を吸う事で殺したその少女は勿論、HAWKの殺害対象とされた。

その少女は戦うでもなく、ただ「逃げた」。

生きる為に逃げたのだ。

だが、ヘクセを殺すことを任務とする幸成は容赦無く彼女の足を撃ち抜き、眉間に弾丸を撃ち込んだ。

その時、彼女は泣いていた。

自分が吸血鬼である運命を呪う言葉を吐き捨てながら……

HAWK隊員達に与えられた答えは「YES or YES」、つまりは拒否不可能であった。

だが、その時の幸成には可哀相という感情は一切無かった。

ただ、自分の居場所を存続し続ける為の物でしかなかったのだ。

幸成が思考を巡らせていたその時、鼻に突き抜ける激痛が幸成を襲う。

「……………先輩？」

鳳寿が素っ頓狂な声で幸成を見下ろしている。

どうやら無意識で歩いているうちに校舎の入口の扉に特攻していたようだ。

(だせえ)

幸成は自嘲的な笑みを浮かべるとゆっくり立ち上がるのだった……

8 - 8 : 幸成と鳳寿

学校の入口近くにあるピロティに置かれた自動販売機に小銭を入れた幸成は生理食塩水（リンゲル液）を飲みやすいように工夫した有名な清涼飲用水を二本を買い、一本を鳳寿に手渡した。

鳳寿は幸成からそのペットボトルを受け取るとキャップを開ける。幸成も同じようにペットボトルのキャップを開けると一気に飲み干す。

予想以上に汗をかいていたらしく、500mlを楽々飲み干した。鳳寿もそれに習い、恐る恐るそれを飲むと顔色を変えて一気に飲み干す。

鳳寿は「美味しい」と呟くと幸成に笑みを見せる。

「捨てるから」と幸成は鳳寿からペットボトルを受け取り、ごみ箱にバスケットボールのシュートのようにペットボトルを投げ入れた。交互に入ったペットボトルを見た幸成は「行こうか」と続ける。

いつもなら頷くだろう返答に答えるでもなく、鳳寿は幸成を呼んだ。

「先輩は人と違う人間をどう思う？」

不意の問い掛けに幸成は一瞬困惑した。

それこそ今考えていた事だ。

それにこの問いは人と違うという意味で自分にも当て嵌まる。

どのような傷を受けても回復し、左目がオッドアイの自分にもヘクセにも当て嵌まり、幸成は困惑してしまう。

「……分からない、と答えるしかないな」

「……分からない？なら、もし私が化け物だったら？」

その問い掛けに幸成は難しい顔で鳳寿を見る。

彼女がヘクセであるという自己主張というのなら、容赦せずに抹殺

するべきか、それとも見過ごすべきか……

だが、彼女がヘクセではなかったら交戦規約に違反する。

それに、鳳寿と始めて出掛けた時に語った「死神」という単語。

それには何か意味が有るのではないか？

どちらにせよ、答えは一つだ。

「お前が化け物の訳が無い。お前は人間だろ？」

幸成は優しく笑うと、鳳寿に歩み寄る。

そして彼女の頭を優しく撫でると鳳寿は「ありがとう」と微笑んで見せた。

その時だ。

「何やってるの〜？」と、ニヤニヤ笑いながら菜月が歩いてきた。

「二人して嫌らしい事でも？キヤ〜！！」

菜月は頬に手を当てながら身をよじると幸成は否定する。

「違うに決まってるでしょう！！」

「またまたあ〜！ユキ君って実は女の子馴れしてるんじゃない？」

「馴れてませんから」

幸成は髪を掻き上げると弁明するが、彼女は信じないだろう。

菜月の無邪気に笑う顔を見れば良く分かる。

「で、何やってたの？」

「休憩ですよ」

「ふ〜ん？」

菜月は疑いのある目で幸成を見る。

その視線が非常に痛い。

「そういえば」と菜月。

「ユキ君ってリレーのアンカーなんだよね？」

「はい」

「ナツもアンカーなんだ」

「そうなんですか？」

「何か感心なさそうだなあ！ナツは体力は無いけどクラスで一番足が速いんだよ？」

菜月は自慢するように片目を閉じて親指を立てる。

意外にもといった風に幸成は菜月を見た。

「意外……」

「そつでしょ？」と、自慢話をする為に来たんじゃなかった。今から学年ごとにリレーの予行練習をするらしいから集まらってさ」
運動会のリレーで練習をして意味なんてあるだろうか？

それこそ敵に手の内を曝すような事だ。

幸成はどうしても戦略的に考えてしまふ自分に苦笑しつつ「分かりました」と答える。

そして鳳寿に一瞥すると「行こうか」と問い掛けるが、先程とは打って変わって静かだ。

鳳寿はただ頷くと幸成とは離れて付いて行く。

先程の問いの答えは何だったのだろうか？と幸成は思うが、恐らく触れられたくない話題だったのだろう。

だからこそ、人目が無い状況で問いを投げ掛けたのかもしれない。彼女は自分に何か気付いて欲しかったのかもしれないが……

幸成は俯き歩く鳳寿を一瞥すると目線を前に戻し、空を見上げた。

いずれ分かる事だと自分に言い聞かせながら……

9 - 1 : 監視 (前書き)

第9話

沢山の観客達のざわめき。

白いビニールの幕を張ったテントが多数並び、華景高校の生徒達の親達がその下にいた。

それを遠くで眺めていたロイは隣で苦笑を浮かべていた幸成に言う。

「体育祭の観客って凄い人数だな」

「言えてる……」

思った以上の人数に戦々恐々となっていた二人は頭を叩かれ、後ろによるめくと沙耶那が腰に手を当てながら「しゃんとしなさい」と叱咤する。

その口元には笑みが浮かび、沙耶那は続けた。

「全くいつもはしっかりしているのに馴れない事はからつきし駄目なんですね」

「違うよ」と幸成は弁明し、観客席の一角を指差す。

沙耶那は目を細めるとその先には観客席で馬鹿騒ぎしている三村と翼がいた。

大口を開けて笑う二人はだらし無い風にも見える。

「お父様……」

沙耶那は恥ずかしそうに掌で顔を覆うと同時にスピーカーから声が聞こえてきた。

(第64回華景高等学校体育祭を開催します。生徒が入場します。

拍手でお迎え下さい)

生徒のアナウンスと同時に大音量で音楽が再生させられる。

「あそこに行くのが億劫です……」

「同じく」

二人は同時に深いため息をつくると列が動き出す。

自衛隊の観閲式のようにも見えるが、きびきびとした動きではなく非常にだらし無い。

幸成はその様子を内心、死人の群れと表現した。飯にこのようならし無い行進をしたならば、常識的に考えて上官の鉄拳制裁が待っている。

その列が400メートルで一周のグラウンドを半分程まで歩き、グラウンドの中央に列を作った。

生徒全員がグラウンドに並び終えたと行進曲が止まる。

幸成は後ろに手を組んだ姿勢で立つ。

彼に取ってのこの姿勢はある意味で癖だ。

その後、彼らは長い長い校長の話聞くこととなった……

「ビクター1・2、配置に付いた、オーバー」

ターミナル・ベロシティを着用した黒服の男は数百メートル先を見下ろしながら無線に吹き込む。

手にはロシアのイズマツシュ社製ボルトアクション式スナイパーライフル「SV-98」が握られていた。

「Snayperskaya Vintovka Dragunovo (ドラグノフ式狙撃銃)」、通称「SVD」の精度向上が難しいとして開発されたこの狙撃銃は1000メートル級の狙撃が可能な代物だ。

さらに、これにサブレッサーも装着出来、故にロシアの法執行機関や対テロ部隊に広く使用されている。

(ウイスキー1・3、こちらもスタンバイ完了、オーバー)

遠くのビルを見た男の目に太陽の反射で光るスコープが映る。

他のビルにもスコープの反射が見え、多数の狙撃銃がグラウンドを監視しているのが伺えた。

「わざわざ俺達がやることでもないだろう?」

NATOフォネティックコードの「V」^{ビクター}のコードネームを与えられたPMCの男性が口元に笑みを浮かべながら無線に吹き込む。

(どうした、ビクター?)

「いや、わざわざ鳳寿を監視する必要が有るのかとな?」

(ふん……親バカなんだろう?ヘクセに奴を取られないようにとでも考えているんだろうよ)

(違うだろ、エックスレイ。あいつは金の成る木だ。金づるのシュトレイゴイカバルに奪われる事だけは避けたいんだろうよ)

「どちらにせよくだらない任務だぜ」

男性はそう言つとSV-98にサプレッサーを嵌めてスコープを覗き込む。

ヘクセを一斉射撃で仕留めればネクロシスで一瞬で消滅する事となる。

その為、この任務での発砲は一切躊躇されず、証拠も残らない。ヘクセと思われる者を確認すれば射殺する。

彼らの任務は単純であり、明解だが、同時に有り得ない程大胆だ。男性は鳳寿をスコープの真ん中に捉えるとほくそ笑む。

「コイツを殺しちまえば、吸血鬼みてえな化け物を相手にしなくて済むんだがなあ……ククク……」

男は絞り切らない程度に引き金に指を掛ける。

今にも引き金を引きそうな男性は眉を潜めて鳳寿の監視を開始した……

(二人三脚に出る生徒は準備をして下さい)
生徒のアナウンスが響き渡り、待機していた幸成は鳳寿に語りかける。

「行こうか」

「……ん」

鳳寿はいつも通り素っ気なく答えると幸成の手を掴み立ち上がる。その様子はお伽話にある、王子様がお姫様にする「御手をどうぞ」だ。

無論、女生徒達は有り得ない程殺気立っている。
放っておけば爪で襲ってきそうだ。

幸成は自分の額に巻かれた白い鉢巻きを解くと寸法を合わせる……

「何だ、家の娘とじゃないのか？」と翼。
てつきり自分の娘と出る物だと思っていた翼は心底がっかりした様子だ。

その様子を見ていた三村は微笑みを浮かべながら「落ち着いて聞いて下さいね」と口を開く。

「どうしたんです？まさかあの小僧、結婚相手をあの神宮寺財閥のお嬢に変えるとも言い出したか！？金に目が眩みおって！！神緋褪夜宵の錆にしてやるうか？」

「落ち着いて下さいって……まあ、確かにこの話題だったら尚更です……」

三村は落ち着くように促すと視線だけを動かすと口を開く。

「1時の方向、ビルの屋上に狙撃手です」

「何だつて!？」

血相を変えた翼に三村は紙コップに入ったお茶を手渡す。

「これでも飲んで落ち着いて下さい。目立つような行動は避けて下さい」

「わ、分かりました……しかし、何故狙撃手が？」

「最近、神宮寺財閥で民間軍事会社が雇われた形跡がありました。恐らくそいつらでしょうね」

「しかし何でまた？」

翼は三村から手渡されたお茶を啜ると視線だけをビルに向けた。

確かに時折その方向で光る物が見える。

「神宮寺財閥に介入されては困るからでしょう。状況から考えて我々への攻撃は無いでしょうが、目を付けられると厄介ですので目立つ行動は避けて下さい」

「分かりました。ところで沙耶那と小僧に伝えなくても？」

「恐らく幸成が伝えるでしょう」

三村はそう言うと、スタート地点に立った幸成と鳳寿を見遣った。

もし、子供がいたなら今頃はこうやっていたんだろうな、と想像しながら……

幸成は屈みながら鳳寿の足首に巻きながら視線だけで様子を確認する。

(2時の方向……5時の方向……7時の方向……10時の方向……11時の方向か……完全に包囲してやがる。迂闊に動いたらへクセでも蜂の巣だな)

幸成は鉢巻きを結び終わると再び思考を反芻させる。

(仮に威嚇だったら存在をアピールすれば良いが、やる気満々だな。少なくとも状況から考えてパワーロスの少ないボルトアクションかアンチマテリアルだろうがマズルフラッシュが凄まじいアンチマテリアルは無い……この群集の中で発砲したら大混乱だぞ?)

アンチマテリアルライフル
幸成は対物狙撃銃の脅威を身を持って体験している。
かつて、ヘクセが使用していたからだ。

12.7×99mmという大口径の弾丸を使用する対物狙撃銃はヘリコプターや装甲車、ライフルでは狙撃出来ない目標に使用される狙撃銃である。

射程が1800メートル以上もある物さえ存在するこの対物狙撃銃の逸話には「2000メートル先の装甲車を破壊し、人間なら2500メートル先でも射殺可能」という物さえあるのだ。

腕に当たればそこが吹っ飛び、頭に当たればスイカを撃ち抜いたように粉碎するその威力は絶大で国際条約で戦争での使用の自粛が求められている程……もっともいざ戦争となればお構い無しに使われ、犯罪者やテロリストの鎮圧では国際条約の規定外の為、問答無用に使われている……の狙撃銃だ。

それで狙われていないだけマシとも言えるが、やはり「one shot one kill(一撃必殺)」を金言とする狙撃手が持つボルトアクションライフルは危険な代物である事には変わりはない。

「……先輩？」

鳳寿の問い掛けに幸成は髪を掻き上げながら笑う。

「ん？悪い、ちょっと考え事をしていた。さ、頑張ろうぜ」

「うん」

鳳寿が笑うとピストルを持った教員がそれを青空に向けた。

「用意！！」

幸成が鳳寿の肩に、鳳寿が幸成の腰に手を回すとゆっくりと頷く。

同時に銃声とは違う、軽い音が響き渡った……

土煙りで薄茶色に染まった鉢巻きを締め、幸成は一等賞の賞状を持ちながら鳳寿と控えのテントに歩いてくる。

幸成達のクラスの生徒達はまるで英雄の御帰還か王の凱旋のように賑やかだ。

「逆転してやったぜ」

幸成は親指を立てながら右腕を空に掲げる。

「良くやった色男」とロイ。

先程まで菜月のクラスに負けていた幸成達のクラスは二人の御蔭で見事大逆転したのだ。

とは言ってもまだまだ体育祭は序盤、油断は出来ない。

鳳寿がビニールシートに座るのを見た幸成は沙耶那を呼んだ。

「どうしたんですか？」

「ちよつと話が……」

「うおおおおおおおっ！！何だ！？幸成、沙耶那さんに愛の告白か！？」

「この野郎！一位になったら告白するぜ、とかそういう奴か！？」

騒ぎまくる男子に幸成は「うっせえ、黙っとけ！」と一喝する。

不意に幸成の目に映った鳳寿は俯き、面白くなさそうに目を細めていた。

幸成は首を傾げたが特に意に介さず、沙耶那を連れてテントを離れる。

沙耶那を引き連れた幸成はテントの後ろで沙耶那の顔に、幸成は顔を近付けた。

「ちよつ、えっ！？いきなりですか！？私、初めてで……」

「狙撃手がいる」

てつきり別の事をされると思っていた沙耶那は拍子抜けした表情だ。

「狙撃手？」

「グラウンドを囲むように五人、ボルトアクション式ライフルを持った野郎がいる。恐らく神宮寺財閥の雇われ傭兵だろう」

「どうしてそんな大胆な……撃つたら混乱するはず」

「撃つ気は無いだろう。が、仮にヘクセと判断した者が人目に付かない所に出たら分からないぞ？ヘクセは死ぬ時にネクローシスで消滅するからな。人目に付かなければ問題は無い」

「でもそれが人間だったら……」

「いや、死体処理班とかがいれば白昼堂々やりかねない。ましてや大元は権力者だ」

「揉み消す、という訳ですか」

沙耶那の問い掛けに幸成はゆっくりと頷く。

現状は最悪だが、神宮寺財閥に真の正体が割れてないという事だけが強みだ。

それを二人は理解していたが、何時弾丸が飛んでくるか分からない状況では迂闊に動けない。

「目立つ行動はするな」

「了解です」

沙耶那は小声で答えると「ところで」と続ける。

「先程の事ですが……あの……初めてですが……幸成君がしたいなら……その……」

「どうした？」

幸成が目を数回しばたかせるのを見た沙耶那は幸成が理解していない事を悟ると口を尖らせた。

「何でもありません」と……

SV-98のスコープからグラウンドを覗いていた男性は舌打ちを

した。

自衛隊のある部隊がヘクセを視認出来る装置を開発しているそうだが、それさえあればこの雑踏に紛れているヘクセをピンポイントで捕捉出来るのだが……

「チツ！ガキがイチャイチャしゃがって……」

男性の目には二人の男女の生徒がテントの後ろで話をしている姿が映っている。

男は先程鳳寿と二人三脚に出ていた奴だ。

仮にここが戦場なら間違いなく引き金を引いていただろう。

（どうしたビクター？嫉妬か？）

「黙れ、ヤンキー！！撃ち殺すぞ！？」

ビクターは不愉快な声に怒鳴るとNATOフォネティックコードで「Y」を意味するヤンキーと呼ばれた男をスコープに捉える。

（おいおい、落ち着けよビクター！冗談だ）

ヤンキーの慌てる声に舌打ちをしたビクターは再び男を見た。

しかし気になるのはあの男だ。

鳳寿と二人三脚に出る前に仕切に視線を動かしていたが……

囀捜査官が周囲に紛れ込んだ犯人を注意深く探す時の様子にも似ていたようにも感じた。

しかし、あくまでコイツは高校生だ。

そのような事は有り得ないはずだが、油断はならない。

ビクターは鳳寿の他にも鳳寿とペアを組んだ男のマークも念頭に入れて、再び監視を開始した……

9 - 4 : 吐き気

青いビニルシートに座りながら競技を見ていた幸成は菜月が出場する障害物競争を見て思わず「すげえ」と漏らした。

小柄な身体だからなのか、凄まじい速さでグラウンドを駆け抜け、彼女の腰程もあるハードルをプロさながらのフォームで飛び越えて行く。

後続をぐいぐい引き離し、あっという間にゴールした菜月はそのまま膝に手を付き、激しく息を切らす。

顔を紅潮させた菜月は一度体を起こすとゆっくりと控えのテントに歩いて行く。

そのまま家に入るかの如く、適当に靴を脱ぎ捨てるとビニルシートに崩れ落ち、大の字に俯せとなる。

彼女は足は早いが体力は無いと言っていた為、この様子から相当頑張ったようだ。

幸成は手に膝を付いて立ち上がり、靴を履くと菜月達のクラスのテントに行き、倒れている菜月に「大丈夫か？」と問い掛ける。

菜月は赤い顔で息を切らし、頷く事で答えた。そしていつも持参している水筒を指差す。

その水筒を幸成は掴み、蓋をコップ代わりにして中の飲み物を手渡した。

薄く濁ったような水のような飲み物を一気に飲み干すと「助かったよ」と菜月が呟く。

「運動神経は良いんだな、体力は無いけどな」「うるさいなあ、もう」

菜月は頬を丸々と膨らませると急に元気になる。どうやら彼女の元気の源はこの飲み物らしい。

興味が湧いた幸成は「一口貰って良い？」と問い掛けると、紙コップが無い事に気付く。

「やっぱり紙コップ無いから……」

「いいじゃん！間接キスしちゃうよ」

今時の女子高生が同性にするような屈託が無く、無邪気な様子で幸成に笑う。

狼狽した幸成は両手を振り「いや、いいよ！」と言つがそれより早く菜月は水筒の蓋にその飲み物を盛る。

「ささっ！ぐいぐいっつと！」

差し出されたそれを無下にも出来ず、幸成はそれを一気に飲み干すが吐きそうな味に幸成は噎せてしまった。

水に少しの塩と砂糖を混ぜたような味だが、後味が鉄臭い。

その生臭い味と匂いの飲み物を飲み干した幸成は胃液が逆流するような胸やけに顔を歪める。

（何だよ……これ……）

幸成は吐きそうな衝動を押しっていると菜月は無邪気な笑みを浮かべながら「美味しい？」と問い掛ける。

「あ、ああ……」

不味いとも言えず幸成は頷くと、それを見た菜月が「嘘つき」と呟く。

「は？」

幸成が素っ頓狂な声を漏らすと、菜月は笑みを浮かべた。

「ちよっとお手洗いに行つてくるね？」

「あ、ああ……」

幸成は首を傾げると、菜月の背中を見送る。

その背中を見つつ、幸成は自分のポケットティッシュで幸成は飲み口を拭く。

あの飲み物は今まで飲んだ事が無い味だった。

水に塩を少し入れるのは水分補給に良いとされているが、鉄臭い味にはならない。

幸成は酸っぱい味のする唾液を飲み込むと、自分の控のテントに歩くとスポーツドリンクを一気飲みにする。

胃液が溜まったような腹に冷たいスポーツドリンクを流し込んだせいでさらに吐き気が強くなってしまふ。
流石にこれは耐えられないと幸成は急いでトイレに駆けた……

「何だ？」

男性は学校に走っていく少年をスコープで眺めながら小さく呟く。
テントで顔が見えなかったが、少女から水筒の飲み物を貰ってからあんな風になった。

「何を飲んだんだ？」

男性が呟いたその時、無線から呻き声が聞こえてきた。

（助けてくれ……植物が……植物があ……）

（クソッ！！巻き付くな……がああ……）

（だからこんな日付きの財閥の警備なんか……ゲエ……）

（助けてくれ！！死にたくな……あ、ああああ……）

「どうした！？ヤンキー、エックスレイ、オスカー、ユニフォーム！！どうした！？」

「皆死んだよ？」

その声にビクターはSV-98を後ろに向けた……

ビクターと呼ばれた男性はSV-98を個人防衛火器として知られる「MP-7A1」に持ち替えた。

小型で尚且つマガジンを含めて1.8kgと軽いこの短機関銃サブマシンガンはライフル弾を使用し、精度が良く、サブマシンガンとしてのジャンルを二分したと評される「MP-5」よりも精度が良いとされている。目の前にいる少女は自分よりも遥かに小柄で幼い。

だが、音も無く現れたこの少女は間違いなくヘクセだ。

屋上には鍵を掛けていたはずだが、それに変わりが無いということ、人間離れの身体能力を持つヘクセしか有り得ないからだ。

「貴方、凄く幸運だよ？ここに鉢植えが無いんだから……もし鉢植えが有ったら他の人みたいに殺していたもの」

少女は微笑むと手に持っていた豆をばらまく。

それと同時にその豆が早送りを見ているかの如く発芽し、一瞬で彼女の身の丈程までに成長する。

「今から殺してあげるから覚悟してね？」

「殺されるかよ、化け物があー！」

男性はMP-7A1の安全装置を外すとフルオートで連射した。

サブレッサーにより音が抑えられているが、近距離でのその威力は圧倒的だ。

近年のボディアーマーの発達で9mm弾では致命傷を与えられないとして作られたこのPDWは言ってしまうえばアサルトライフルをサブマシンガンにした物である。

そのサブマシンガンから放たれる4.62×30mm弾は少女に真っ直ぐ向かうが、それより早く沢山の植物が束となり、弾丸を防ぐ。周囲に青臭い匂いが充満し、コンクリートを緑色に染める。

しかし、所詮は植物、遂に弾丸は貫通した。

が、それより早く少女は左に跳び、弾丸を避ける。

貫通したライフル弾は壁に弾着し、穴を開けた。

男性は弾が切れたMP-7A1を床に投げ捨てる。ホルスターのSIG P226を構える。

弾薬を装填するよりは速いと見た男性の咄嗟の判断であったが、9mmパラベラム弾ではヘクセに対して圧倒的に不利だ。

それを知っていながら男性は敢えてハンドガンを選択した。

素早くデコッキングレバーを押し下げた男性はダブルアクションで引き金を引く。

重い引き金のダブルアクションで放たれた9mmパラベラム弾は少女に易々と避けられる。

しかし、二発目からはシングルアクションとなる引き金は非常に軽く、馴れない人なら当然戸惑う。

しかし、男性は意にも介さず、引き金を引いていく。

が、やはり少女は軽やかな動きで9mmパラベラム弾を避ける。

人間には有り得ないその拳動は四肢を地面に付き、猫をも彷彿とさせた。

跳躍しながら素早く弾丸を避けながらポケットからバタフライナイフを取り出す。

先程まで長い金属の棒が一秒も掛からずにナイフに早変わりする様は鮮やかだった。

少女は男性が15発撃つたのを見越して飛び掛かるが、スライドが後退しない。

つまり、薬室に弾丸が残っていたのだ。

初弾を手動で薬室に送り、弾倉の隙間に1発を挿入すると弾薬は通常に1発分足される。

元々はこの男性の癖なのだが、彼女が15発だと思い込んで飛び掛かってきたのは彼女にとっては幸運だった。

身を低くしてバタフライナイフを構える少女の眉間を狙って9mmパラベラム弾を放った男性の持つSIG P226のスライドは後退する。

(勝った……)

男性が内心ほくそ笑んだその瞬間、周囲に火花が飛び散る。ナイフの両鎧には黒い跡が付いていた。

そう、彼女は気付いていたのだ。

薬室に弾丸が残っている事に……

少女は9mmパラベラム弾をナイフで両断し、そのまま男性に突進していく。

刹那、男性は背負っていたSV-98を少女の眉間に突き付けた。

狙撃銃は近距離で使う物ではない。

だが、この場では最善の手段であった。

7.62×54R弾が放たれると同時に少女は空中に吹き飛ばされる。

数秒して少女はコンクリートに転がった。

男性はボルトアクションで弾薬を薬室に装填すると、仰向けで倒れる少女に銃口を向ける。

その瞬間、植物がSV-98に絡まった。

少女も素早く顔を上げると不敵な笑みを浮かべる。

「はい、負けた」

刹那、SV-98の銃口や廃莖口、さらには木製の部品から植物が飛び出して男性の腕や体に巻き付き、男性を拘束する。

「種を残して良かったよ。瞬間的にそれで盾を作ったからこそ助かったの。甘かったね？」

少女がそう呟いたその瞬間、植物が男性を覆っていく。

それはあつという間に男性を包み込み、悲鳴すら聞こえない厚さになる。

次の瞬間、リンゴを片手で潰したような音が響き渡り、植物から血が滲み出てきた……

9 - 6 : 消失

学校のトイレの個室から出た幸成は流し台の蛇口を上に向けて、水を流し込むと口を濯いでその水を吐き出した。

再び水を含むとそれを飲み込む。

もう二度と飲みたくないと内心呟いたその時、「ユキ君もトイレ？」と菜月が歩いてきた。

「あゝ、ちよつとな」

幸成は苦笑いを浮かべると菜月から視線を逸らし、玄関に向かう。

その後ろをひよこひよここと小学生のようについて来る菜月は相変わらず可愛い。

「そろそろお昼休みに入るね」と菜月。

「なんだかんだで体育祭って楽しいでしょ？」

「ああ」

廊下の角を曲がり、自分の下駄箱から靴を取った幸成が答えると、菜月は微笑んで見せた……

異変に気付いたのは三村だった。

先程まで確認出来た狙撃手の持つ、狙撃銃のスコープの反射が確認出来ない。

それもこの数分間に……

「翼さん！ちよつと外します」

「えっ？ええ……」

その声を聞かずに三村はシートから立ち上がると靴を履き駐車場まで全力で駆けて行く。

何かがおかしい……

普通ならこの程度の事で動かないのだが、何の兆候もなく消えるのがおかしい上に、神宮寺鳳寿の監視と護衛なら最後まで残るはずだ。それが突然消えたのだから無理も無い。

車に乗り込んだ三村はアタッシュケースのM4A1に弾倉取り付け、リアサイトの下にあるチャージングハンドルを引き、初弾を装填する。

続いて銃身下のピカティニーレールにショットガン「XM26 LSS」を装着し、EO Tech社のホロサイトを装着した後三村は車のキーを回す。

アタッシュケースにM4A1を仕舞い、車を発進させた三村は正面に見えていた狙撃手のビルに向かって車を発進させた……

「おっちゃん？」

幸成は車を走らせる三村の姿を見付けて素っ頓狂な声を漏らした。何かあったのか血相を変えている。

「あれ、幸成君のお父さんだよね？どうしたのかな？」
菜月も気付いたらしく、幸成に問い掛けた。

しかし、理由が分からない幸成は「さあ」とだけ答える。
が、すぐにその理由が理解出来た。

先程までであった、張り詰めた殺気が無い。
命を狙われている時の独特の殺気だ。

分かる者にしか分からないその肌を刺すような殺気がまるで嘘のように消えているのだから無理は無い。

(どついう事だ?)

幸成は視線を動かすと三村が気付いた、同じ事に気付く。

狙撃手がいないという事に……

数分が経った頃、三村は狙撃手がいたと思われるビルにたどり着いた。

そこは古い無人のビルであり、路地には人通りは一切無い。言うならゴーストタウンだ。

三村は周囲に人がいない事を確認し、M4A1が入ったアタッシュケースを掴み、ビルの中に入る。

鍵が壊された形跡が有り、三村は息を呑む。

アタッシュケースからM4A1を取り出すと勢い良く中に飛び込む。しかし、意に反して待ち伏せという事も無く扉を勢い良く開けた音だけが響き渡る。

周囲を確認した三村はアタッシュケースを入口に置くと、XM26 LSSのフォアエンドとM4A1のグリップを握り、階段を駆け上がって行く。

床は埃で真っ白に染まり、自分の足跡以外にももう一つ足跡がある。狙撃手の足跡だろう。

三村は慎重に登って行く。

中は上に行く事に暗くなる。

だが、最上階の屋上にたどり着くと今度は隙間から漏れ出る光で周囲は明るく染まった。

三村はゆっくりとドアノブに手をかけるが、鍵が掛かっているらしく開かない。

三村はXM26 LSSの銃口をドアのヒンジに向けて引き金を引く。

12ゲージから放たれた鹿撃ち用の号数00の散弾がヒンジを破壊

し、三村はもう一つのヒンジを撃ち抜き、ドアを蹴り飛ばす。

三村は突入すると屋上は血で濡れていた。

血と枯れた植物と緑の植物が生えたSV-98がそこにある。

「ヘクセ、か？」

三村は銃口を下げると屈み込み枯れた植物を手を取った……

体育祭も佳境になり、最終種目のクラス対抗リレーとなった。

幸成はアンカーの待機場所でストレッツチをしているとA組アンカーの菜月が無邪気な表情で幸成に笑いかける。

「緊張してきたね」

「まあ、そうだな」

幸成は素っ気なく答えると、菜月はつまらなそうに口を尖らせる。

「何で素っ気ないの？」

「勝負の世界なんだからな……今はお互い敵同士」

幸成が言い放ったその時、空中にピストルが掲げられた。

同時に火薬が弾ける音が響き渡り、一斉に駆け出す。

生徒たちが一斉に駆け出し、靴が地面を叩く音が響き渡る。

クラス代表者は4人。

それぞれがトラック半周、つまり200mを走る。

現在、菜月のA組と幸成達のB組が同点でこのリレーで勝った方が優勝となるのだ。

第一走者が第二走者にバトンを渡す。

A組の代表者の足は凄まじく、幸成達のB組は一步遅れていた。

さらに第二走者もA組リードのまま、さらにE組、C組とB組は離されて行く。

A組が第三走者にバトンを渡し、さらに少し遅れてE、Cと第三走者に渡され、沙耶那にバトンが手渡されたのはA組が50m程に行つてからだつた。

沙耶那はバトンを受け取ると綺麗なフォームで一気にグラウンドを駆け抜ける。

電光石火とも言える追い上げに、意気消沈だったB組が一気に沸き立った。

「行けえ!!!委員長!!!」

「突っ切れえ!!!」

「沙耶那、頑張つて!!!」

B組の男女生徒はシートから身を乗り出し、大声で叫ぶ。

沙耶那もその声援に応えるかの如く一気に駆け抜け、A組との差を10mにまで縮める。

菜月がバトンを貰って次にバトンを手に取ったのは幸成だった。

「最後……お願い!!!」

「分かつてるさ!!!」

幸成はバトンを受け取るとバトンを強く握り締めて力強くグラウンドを駆ける。

「幸成!!!絶対勝てよ!!!」

「おい!!!負けたらアレをバラすから覚悟しろ!!!」とロイ。

「アレって何だ!!!アレって!!!」

幸成はロイの声援(?)に怒鳴り返しながら大地を蹴った。

菜月の小柄な背中がぐいぐいと近くなる。

コーナーを体を傾けながら曲がり、さらに速度を増す。

ヘクセを相手にする事で鍛えた足は並ではない。

幸成はすぐに菜月の後ろに追い縋ると横に並んだ。

菜月は視線だけをこちらに向けると歯を食いしばり、力一杯足に力を込める。

幸成も負けじと走り、ゴールが手前となったその時だった。

幸成の右足に何かが絡まり、足を前に引っ張る。

(えっ?)

幸成が思うより早く彼の体は空中を舞い、ゴールテープに突っ込んだ。

幸成の体は地面を転がり、数回地面をバウンドし、無造作に幸成の体は地面に放り出される。

湿っていないグラウンドの土は固く、幸成の体はそれに擦れて擦り傷だらけとなっていた。

B組の生徒がグラウンドに駆け寄ろうとするが、教員がそれを制止

し、僅差で敗れた菜月は地面に倒れる幸成に駆け寄る。

「ユキ君？ユキ君！？」

幸成はピクリとも動かず、ただ目を閉じている。

「幸成君！！」

沙耶那も急いで幸成を抱き抱えるが、幸成はやはり動かない。

慌てた教員は担架を持って来ると幸成を持ち上げてそれに乗せる。

沙耶那が幸成の担架に縋ろうとしたが、やはり教員に止められた。

「三神、直江は大丈夫だから……」

「でも……」

「いいから！」

教員は強い口調で言うと幸成を乗せた担架が学校に向かっていく。

純粹に喜べないB組の生徒の一部の声に沙耶那は耳を疑った。

「さつき、植物みたいなのが絡まらなかった？」

「えっ？見えなかったけど？気のせいじゃないの？」

その声に沙耶那は一ヶ月前の任務で幸成が報告した事を思い出した。

ルーナ・ヴェルドウーラ。

植物を操るヘクセがこの中に紛れている？

沙耶那は周囲を見渡すが、体力を使い、力を発揮出来ない状況に歯
軋りした……

10 - 1 : 開戦(前書き)

第10話

「そうですか、すみません」

保健室の職員が出て行ったのを確認した三村はベッドに寝かされた幸成は顔や腕に大量の絆創膏が張り付けられている。

三村はまじまじと幸成を見るとチューブタイプのわさびを彼の鼻に塗り付けた。

「うおおおおおおおおおつ！！鼻があ！！鼻が燃えるように熱いい！！」

「起きるもんだな」

「ふざけんな！！このクソオヤジ！！」

幸成は鼻を押さえながらその下に付いたわさびを拭くと三村は口を開いた。

「スナイパーは全滅だ。現場には枯れた植物もあり、ヘクセがやった物と思われる。恐らく、お前が報告したルーナ・ヴェルドウーラだ」

「奴か……」

幸成は目から涙を流しながら呟く。

わさびが相当利いて鼻腔がやたらスースーする。

それを堪えながら幸成は口を開く。

「奴は何者だ。何故スナイパーを殺したんだ？シユトレイゴイカバルと神宮寺財閥は仲間だろう？」

「今回はルーナ・ヴェルドウーラとか言うヘクセの単独行動と見ていいだろう。そもそも、そうでなければつじつまが合わない。例えばその場にいた為、ヘクセと気付かれた時の対処を先んじて行ったとかだな」

「……その場にいた？」

幸成が小さく呟くと転んだ瞬間を思い出した。

何かに足を引っ張られたその瞬間を……

「とにかく、帰るぞ」

「分かった」

幸成は答えると何気なく時計を見た。

時計はあと10分で短針が6時を差す……

セーラー服を着た菜月と沙耶那は夕焼けの中を歩いていた。

道に人はいなく、今日はやけに静かだ。

「ユキ君、大丈夫かな？」

「きつと大丈夫ですよ」

菜月の問いに沙耶那は笑って答えた。

幸成の回復能力は人並み以上だ。

勿論、それを知っているのは沙耶那とHAWK隊員だけであり、何も知らない人なら心配する程の怪我なのだから……

沙耶那は自分の家の神社までたどり着くと菜月に言う。

「明日、幸成君のお見舞いに行きましょう？体育祭の振り替え休日なんですから」

「そうだね」

菜月が答えたその時、遠くの寺で6時を告げる鐘が鳴った。

重々しい金属の音が響き渡った瞬間、近くにあった街路樹の枝が動き出し、菜月の体を捕らえる。

「な、何!？」

菜月が驚き、暴れた瞬間、街路樹はバケツリレーのように菜月の体を運んで行く。

植物を操るヘクセ?

沙耶那の脳裏に「ルーナ・ヴェルドウーラ」の名前が浮かび、沙耶那は急いで神社の石段を駆け上がる。

菜月の助けを求める悲鳴を聞きつつ本殿に飛び込んだ沙耶那は神緋褪夜宵を手に取り、階段を飛び降りた。

凄まじいまでに高い石段を飛び降りるのは気が引けたが、ぼんやりしていれば見逃してしまつたためやむを得ない。

前に身を乗り出す姿勢で飛び降りた沙耶那の耳に風を切る音が響く。高い石段を飛び降りた感覚はまるでフリーフォールかバンジーをやっているかのような快感があつたが、着地の衝撃が足に直に伝わってくる。

痺れに似たようなその痛みに耐えた沙耶那は遠くに見える菜月の姿を捉えつつ、刀を持っていない右手で幸成の携帯電話にかけた。

規約違反なのは分かつていたが、仕方のない選択だ。

「出て……幸成君!!」

数回のコールの後に（沙耶那さん？）と幸成から返ってくる。

「幸成君!! ナツが目の前で植物にさらわれて……規約違反つて分かつてたけど……」

（……仕方ない。手短に頼む）

「多分、幸成君が報告したルーナ・ヴェルドウーラだと思うの」

（姿は？）

「まだ……今追跡してる」

沙耶那が短く答えたその時、植物はガラス張りの施設に菜月を引きずり込んだ。

沙耶那は速度を早めると、そのガラス張りの施設に止まった。

そこは植物園で天井はガラス張りとなり、壁の一部もガラス張りとなつている。

だが、鬱蒼と繁る植物によって中は見えない。

既に植物園は閉館でルーナ・ヴェルドウーラなるヘクセが植物を使つて内側から鍵を開けたようだ。

「潜伏場所が分かりました。華景植物園です。今から中に入ります」（分かつた。装備を整え次第そちらに向かう。気をつける。そこは奴にとってホームグラウンドとも言える環境だからな）

「分かっていきます」

沙耶那は神緋褪夜宵を携えると中に入った……

10 - 2 : 猛攻

黒のボディアーマーと戦力情報機器「HAWK-EYE フューラー」を装着した幸成は素早く身支度を整える。

「スコトス&フォース」をホルスターに仕舞い、「HAWK-BILL ドルヒボーレン」もホルスターに仕舞う。

最後に「HAWK-NAIL メッサードルヒ」を鞘に納めた。久しぶりの完全武装。

完全武装となった瞬間から幸成は対ヘクセの「武器」となる。

幸成がドアに歩み寄った瞬間、彩花が顔を覗かせた。

「はいはい、ちよつと待って下さいねえ」と彩花は三個のガスグレネードを手渡す。

目鼻を刺激し、経度の呼吸障害を起こすクロルベンジルマロノニトリルを噴射するガスグレネードに酷似した手榴弾を受け取った幸成は「これは？」と問い掛ける。

「これはですねえ。例のスズメバチから造った新兵器ですよお？」

彩花はにんまりと笑うと新兵器「HSG」の説明を開始した……

温室の中に入った沙耶那の鼻を、心地の良い香りがくすぐる。

監視カメラは全て破壊され、温室への扉は開け放たれていたせいか、空気が温い。

沙耶那は温室の扉に入るとジャングルのように鬱蒼と繁る植物と両腕を支えるように植物に拘束され、気絶する菜月の姿があった。

菜月は温室の一番奥の蔦が垂れた高さ三メートル程の木の、その蔦に吊り下げられるように捕らえられている。

沙耶那はゆっくりと息を吸い込み、吐き出すと神経を集中させ、体のリミッターを外す。

体の身体能力を最大限に高める能力ではあるのだが、体力も激しく消耗する。

元々抑えられている物を外すのだから無理はないが、それはその日にどの位動いたかも関係し、たいして動かなければ5分が最高であり、激しく動いたならもって3分が限界だ。

ルーナ・ヴェルドウーラがそれを狙ったのは明白で、仮にルーナ・ヴェルドウーラがいたなら幸成を転倒するように仕向けたのは間違いない。

さらに分断したうえで自分に有利な場所と状況に誘い込まれたという訳だ。

ここで下手に戦うという事は死を意味する。

沙耶那は目的を菜月の救出のみとすると神緋褪夜宵を鞘から引き抜いた。

緋褪色の刃が抜かれると同時に沙耶那は神緋褪夜宵を脇構えに構え、一気に駆け出す。

それと同時に周囲の植物の蔓が蛇のように向かってくる。

日常では絶対に有り得ないその様子に狼狽する事もなく、沙耶那は刀を横に振り、それらを薙ぎ払う。

周囲に青臭い匂いが漂い、ただでさえ植物の匂いで分からないヘクセの匂いを掻き消していく。

どこからルーナ・ヴェルドウーラが飛び出すか分からないが、それを構っていられる状態ではない。

四方八方から植物が沙耶那に殺到し、沙耶那はそれを薙ぎ払うというイタチごっこにも似た図式となっていたのだ。

地面に伸びた根や蔓、植物の葉、花粉に至るまでルーナ・ヴェルドウーラの支配下に入っていた。

蔓は鞭のようにしなり、葉は投げナイフのように鋭利で、花粉は煙幕のように、もはやここは植物の要塞である。

しかし、沙耶那も持ち前の動態視力で植物を薙ぎ払い、避ける事で菜月の距離を縮めていく。

神緋褪夜宵の刃も植物の汁で青く染まり、地面には無数の植物の破片が散乱していた。

しかし、植物は数を減らすどころか、切断された箇所から再び新しい植物がはえてくる始末だ。

非常に分が悪く、さらに植物は確実に沙耶那の体力を削っていく。

神緋褪夜宵が沙耶那の武器である事がさらにその体力を削る要因にもなっていたのだ。

刀は純粹に重い。

西洋の剣より軽いにしても長時間が振り回すのには向かないのもまた事実。

ましてやこの熾烈な攻撃の中、刀を女性が振り回していれば嫌でも体力はなくなる。

沙耶那は息を切らすと首に植物の蔓が巻き付くが、刀を切り上げる事で逃れた。

このままでは負けると悟った沙耶那は刀を仕舞うと一気に駆け出す。振り下ろされる植物を横に避ける事で躲し、横に薙ぎ払われた植物は身を屈める事で避け、木までたどり着いた沙耶那は跳躍すると菜月を拘束している所まで跳んだ。

菜月を拘束している蔦を切ろうと神緋褪夜宵の柄を掴んだその瞬間、菜月の拘束が解かれ、気絶していたと思われていた菜月が微笑みを浮かべて耳元で囁いた。

「残念だったね、沙耶那」

「えっ？」

沙耶那が訳が分からずに動きを止めたその瞬間、沙耶那の体に蔓や蔦が群がり、凄まじい力で締め上げる。

「なん……で……」

沙耶那は力無く呟くと菜月の笑みが目に映ったのを最後に、彼女の視界は闇に包まれた……

三村の車に付けられたデジタル時計が6時30分を示した。幸成は荒々しくドアを閉める。

沙耶那からの連絡が無いという事は、恐らくは……

最悪の予想をした幸成は二丁拳銃をホルスターから抜くと植物園の中に向かう。

青臭い匂いが充満した植物園の中に入った幸成は拳銃の安全装置を外し、フューラーをヘクセサーチビジョン「HSV」に切り替える。植物園の入口を蹴破り、中に入ると聞き知った声が出迎えた。

「いらつしゃい、ユキ君」

「菜月……さん……？」

ブランコのように植物の蔓に腰掛けた菜月と多数の植物に拘束され、気を失っている沙耶那の姿が映った。

状況が飲み込めない幸成に菜月はからかうような笑みを見せる。

「あゝあ……ユキ君も鈍いよね？」

「どうして……」

幸成とともに無線の向こうからも驚きの声が聞こえてくる。

「私は……ナツはシュトレイゴイカバールのヘクセ。本当は沙耶那の動向の監視を命じられてただけど、ユキ君が仲間を殺害しちゃったからナツが出なきゃならなくなっちゃったって事だよ」

いつもなら可愛いと思えるその笑みが、今は狂気じみた表情にさえも見える。

彼女がヘクセだとは到底思えないし、思いたくない幸成だが、フューラーのHSVでは彼女をヘクセと認識していた。

思えば気付ける兆候はいくらでも有ったはずだ。

鳳寿を助けた後に出会った時の苦しいごまかしを鵜呑みにした時や彼女が捕らえられた時だって……

それにあの飲み物は今思えば生理食塩水に血液を混ぜた物だろう。

独特の生臭さと鉄臭さはそれに該当するし、彼女がへクセならそれを欲するのも分かる。

「どうして……あんなんだ」

幸成は俯くと歯ぎしりをし、スコトスとフォースの銃口を向ける。

「ユキ君にナツは殺せない。だってユキ君は甘いんだもん」

菜月が笑うと幸成は引き金に指を掛けたが、指が石のように固く硬直してしまっている。

「どうしたの？引き金を引けないの？」

「くっ……」

「ナツはここで二人を処刑する。それで終わり。ユキ君の仲間もナツが皆殺しにしてあげるから！」

菜月が指を鳴らしたその時、幸成に向かって多数の植物が殺到する。

幸成は二丁拳銃で向かってくる植物に9mmシャルデンプファー亜音速弾を浴びせ掛けた。

同時に二発放たれる弾丸は植物に当たると同時に瞬間空洞という現象を引き起こして、それを引きちぎる。

「消耗品の武器でいつまで持つかな？ユキ君！！」

菜月は怒鳴ると蔓から飛び降りた。

事実、スコトスとフォースでこの攻撃を永久に耐えるというのは不可能だ。

ましてやここは植物園、彼女にとってここは間違いなくキルゾーン。地の利は彼女にある。

幸成は素早く二丁拳銃に弾倉を交換すると、ロイの声が耳元で聞こえてきた。

（今からMK・2を投入する！！持ちこたえろ！！）

「了解！！」

幸成は植物を撃ち抜きながら怒鳴ると、すぐにMK・2が到着し、キヤリコによる掃射を開始した。

「うざい……」

菜月は怒鳴るとバタフライナイフを取り出し、体育祭で見た時より

も俊敏な動きで幸成の間合いに迫る。

植物に気を取られていた幸成は接近する菜月に気が付くのが遅れ、スコトスの銃口を向けるが菜月の回し蹴りで銃口を逸らされた。

続いて繰り出されたバタフライナイフが幸成の腹部に突き刺さるが、これはボディーマーに遮られる。

しかし、菜月は幸成の反撃の隙を与えないように間髪入れずに、今度は喉元を狙ってきた。が、MK・2から放たれた弾丸が菜月の頬を掠め、菜月は後ろに跳躍して距離を離す。

彼女の小柄な体と俊敏さ、さらに植物を操る能力は厄介窮まりない。体が小柄で俊敏であるなら接近する時や白兵戦に有利であり、植物での全距離からの攻撃も考えられる。

さらに幸成の情と甘さにも訴える事で動揺を誘っている。

加えて幸成の装備は消耗品、弾薬が無くなればそれまでであり、沙耶那という人質も切り札に使えるからこの勝負は分が悪い。

フューラーの「Lock & amp; Load」機能は同時戦闘を想定していない事がさらに戦闘を不利にしていた。

幸成は撃つ度にどんどん軽くなる拳銃に舌打ちをする。

菜月を殺さなければこちらが殺されるが、殺したくないというジレンマを抱えた幸成の右肩に植物の蔓が突き刺さった。

中でのたうちまわり、傷を広げようとする植物をナイフで切断した幸成だが、その隙を狙って菜月が再び突進してくる。

幸成がナイフを構えるより早く、菜月のバタフライナイフが左の太股に突き刺さり、幸成は膝を付いた。

菜月はバタフライナイフを太股から引き抜くとナイフを振り上げ、顔を苦痛で歪める幸成に囁く。

「じゃあね、ユキ君」と……

MK・2 走行自動機銃から送られてくる映像を見ながらロイは怒鳴った。

「クソツタレ！どうしろってんだよ！！菜月を撃てても言うつのかよ！！」

「それを見越しての判断でしょ！？外道にも程がある！！」
優も勘弁しないと机を叩く。

それを聞いていた彩花は「青いですねえ」と呟いた。

「戦いにおいて敵の嫌がる事をするのは当然のことですよねえ？勝つためなら何でもするのは卑怯と言うかも知れませんが、勝負に過程は関係ありませんよお？それは歴史が証明しているじゃないですかあ」

彩花は笑うと優が切り返す。

「何言ってるの！？幸成にこのまま死ぬても言うつもの！？そんな事……」

「そんな事は一言もいってませんよお？私が言いたいののはあ、こちらにも彼女が嫌がる事をしてやればいいということですよお？彼には新兵器を持たせていますからねえ」

彩花はそう言うともモニターに目を見遣る。

そこには幸成とバタフライナイフを振りかぶっている菜月の姿があったが、彩花は誰よりも冷静であった……

菜月の振りかぶったバタフライナイフが振り下ろされた瞬間、幸成は渾身の力で菜月の頭に頭突きを叩き込んだ。

意表を突かれた菜月は頭から血を流し、一瞬怯む。

その隙に幸成は切り付けられていない足で菜月を蹴り飛ばした。

菜月は地面を転がるがすぐに植物が彼女の体を支えるように受け止める。

「やつとやる気を出したんだ？」

菜月は頭から垂れてきた鮮やかな赤を舌先で舐め取ると微笑みを浮かべる。

そんな菜月を見て幸成は囁くように言った。

「菜月……お前は親をへクセに殺されたんじゃないのか？何でそんな奴らと一緒にいるんだ？」

「情に訴えるつもり？でも全然駄目。ナツの両親を殺したのはナツだもん。血を吸うから吸血鬼？植物を操れるから魔女？違う！！私は菜月という一人の人間！！どうして人と違うと迫害されなきゃいけないの！？ナツはただ普通に生きてかっただけなのにつ！！」

菜月の本音を聞いた瞬間、菜月の姿がかつて抹殺した少女と重なった。

人間として生きるには不便な体質を、人間達は断固として許さない。自分と同じ者しか認めたくない人間の醜さがシュトレイゴイカバルというのを造ったのではないのか？

生きる為に迫害された者達が反旗を翻すという事は歴史から考えても十分に考えられる事だ。

菜月のその言葉が幸成の心に重くのしかかった瞬間、幸成の腕が震え出した。

それは恐怖か、あるいは悔恨か、幸成の両手は有り得ない程小刻みに震える。

それを見た菜月は八重歯を見せながら微笑むと「やつぱり甘いね」と笑う。

「……そんなユキ君、好きだよ？でも、ユキ君達を殺さなきゃナツが殺されるんだから、許してね」

菜月が笑うとバタフライナイフを構え直し、突っ込んでくる。

戦わないで済むなら喜ぼう。

自分が死ぬ事で済むなら甘んじて受け入れよう。

だが、沙耶那まで殺させる訳にはいかないし、菜月も殺したくない。他人に甘いと言われようともこれが幸成の本音だった。

幸成は二丁拳銃をホルスターに仕舞うと懐から両手にガスグレネードを持つ。

それぞれの親指でピンを外した幸成を見た菜月は笑う。

「一緒に心中するつもり？悪いけど断るよ？ナツはまだ生きたいから」

菜月が言い終わるより早く幸成の手からガスグレネードが投げられ、

一個は菜月の足元にもう一個は二人の中央に落ちた。

コンクリートと金属がぶつかる音が周囲に響き渡ったかと思うと、

今度はスプレーを噴射する時の音に似た音が響き渡る。

ガスグレネードから漏れ出て来た物はピンク色の煙だった。

火災の訓練に用いられる無害なガスにも似た色のその煙は周囲を瞬く間に覆い尽くし、植物園をガスで充満させたのだった……

周囲に充満したピンク色の煙は香辛料にも似た香りを撒き散らす。菜月はそのガスを吸い、咳込む。

「見えない！何も見えない！フェロモンで捉えていたのに、匂いも姿もなにもかも分からない！！」

菜月は喚き散らす。

それもそのはずなのだ。

ヘクセは戦闘時、敵にフェロモンでマーキングする事で居場所を特定する。

その為、スモークグレネードやヘクセには効果が低いガスグレネードは効かないのだ。が、現に菜月は幸成の姿を失った。

「これは対ヘクセ煙幕手榴弾だ」

煙の中から幸成の声が響く。

「スズメバチのリリーサーフェロモンを利用して作られた物だ。これで終わりだ！！」

その声とともに幸成は煙から拳を振り上げて飛び出す。

狼狽した菜月の鳩尾に幸成の拳が決まり、菜月は崩れ落ちる。

同時に菜月の眉間に銃口が突き付けられた。

「チエックメイトだ」

「……」

菜月は諦めたように顔を背けると「殺して」と呟く。

「何だと？」

「殺して……殺してえ！！」

「どうした！？」

「虫の餌にされるか、男達の慰み物にされるかならユキ君に殺された方がマシ……」

菜月が小さく呟いたその時、晴れてきた煙に浮かぶ幸成の額に赤いレーザーの跡が付いている事に気付き、叫んだ。

「ユキ君、上!!」

その声に幸成が見上げると凄まじい轟音とマズルフラッシュが周囲を支配した。

幸成は素早く退くとそこに第2、第3の弾丸が弾着する。

幸成が菜月から離れると彼女のすぐ近くに大男が下りてきた。

両手にはS & amp; W社の大口徑リボルバー「M500」が二丁握られている。

500口径の弾薬を使用するこのリボルバーは「ハンドキャノン」

や「モンスター」とも言われるこの銃は普通の人間なら両手で数発撃つただけで手が痺れる、実戦ではさほど実用性の無い銃だ。

それを軽々と操るのがヘクセという存在だ。

スキンヘッドにサングラス、筋骨隆々のその姿は一見するとギャングである。

「時間だ。この小娘は頂く」

「させるかよ!!」

幸成は二丁拳銃を構えると男もハンドキャノンを構えた。

フルオートで放たれた無数の9mmシャルデンプファー亜音速弾だが、男が放った500S & amp; Wマグナム弾で弾き飛ばされ、

マグナム弾が幸成の肩を掠める。

掠めただけでも絶大な威力を誇るその弾丸は幸成を弾き飛ばすには十分だった。

その絶大な威力に幸成が吹き飛ばされたのを見た大男は倒れている菜月を無理矢理抱え上げると言う。

「時間だ。ミラルダからお前を連れ帰れと言われているんだよ」

「嫌!!」

菜月は叫ぶと植物を大男に絡ませるが、大男は絡まってきた蔓をM500を操れる怪力で断ち切る。

そして菜月を抱えると大男はその体に似合わぬ跳躍力でガラス張りの天井を突き破って出て行った……

フューラーから送られてきた映像に映る大男。

弾丸は・44マグナム弾の3倍の威力を評され、手の中で爆発したような反動とも言われているこの銃を片手で、二丁を扱えるという事がそもそも有り得ない。

次の瞬間、幸成の体が吹き飛ばされたのか映像が天井を映し出した。同時に三村の声が聞こえてくる。

(時間だ。GARUDAの監視を行え!!)

「了解!! 優、準備を……」

「あいつが……嘘だ……有り得ない……」

「優? 優!??」

「えっ!?! な、何?」

「どうしたんですかあ?」

彩花とロイは心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「大丈夫、なんでもない」と優は弁明するが、その表情には明らかに動揺が滲み出ていた。

優は震える手でちゃぶ台に乗っていたノートパソコンのキーボードを叩く。が、しかし、震える手で何度もタイプミスをしている。

(いつもならこんなミスをする奴じゃねえぞ?)

ロイは訝しい表情で優を見ていたが、すぐに衛星からの映像がパソコンに映し出された……

倒れていた幸成はゆっくりと体を起こすと傷を押さえた。

500S&Wマガナム弾で刳られた傷は相当に酷い裂傷となっていた。

その弾丸と銃は、銃の威力を調べる方法でよく知られる松板を等間隔に並べる方法において、17枚という記録を打ち出しているものだ。

それを対人に使う物なら肉は刳れるのは必然だった。

幸成は被弾箇所を押さえながら立ち上がると沙耶那を捕らえている植物を見る。

痛む腕に叱咤した幸成はスコトスを構えて、沙耶那を捕らえている植物を撃ち抜く。

それと同時に幸成は自分の腕が使えない事に気付き、素早く彼女の真下に滑り込む。

自由落下で落ちてくる沙耶那を幸成は受け止める。

傷付いた体で受け止めるには非常に激痛となった。

沙耶那の体は非常に柔らかく、優しい匂いが幸成の鼻を付く。

さらに幸成の手が彼女の大振り胸に当たっていた。

柔らかく温もりのある胸に触れた幸成は頬を紅潮させる。

何とか逃れようとするが逆にくんずほぐれずの体勢となってしまう。制服のスカートから沙耶那のなまめかしい肢体が露となり、さらに

上半身までも解れだし、幸成は口をぱくぱく動かす。

(やべえ、やべえ、やべえ！)

逃れようとすればするほど悲惨な状況になっていく。

よく「底無し沼に嵌まったら動かないで助けを待った方が生存出来る可能性が高い」と言うが、今がその状況なのかもしれない。

だが、この状況は「動けば沙耶那の制服が大変な事に、沙耶那が起きるのを待っていれば社会的な地位が生存出来ない」という残念な

事態になるのは明白、どっちを取っても残念ながら間接的に死に至る道しか残っていない。

一応、先程の衝撃で偶然にもフューラーの電源が切れた事が幸いした。が、それはすぐに不幸となった。

「何やってんだ、お前？」

その声に顔を上げると三村が「作戦中に何やってんだ」と言わんばかりにこちらを見下ろしている。

「いや、その……」

「アホな事をやってんじゃねえ！！」

「す、スイマセン……」

幸成は冷や汗を流しながら弁明するが、三村はそれを無視して幸成の上に乗っている沙耶那を持ち上げて背負う。

「今、ロイに野郎を追跡させている」

「……菜月を殺すのか、おっちゃん」

幸成は体を起こしながら問い掛けると、三村はゆっくり頷く。

「殺さない手は無いのか？」

「……」

「おっちゃん……俺は菜月を助けたい」

「彼女はヘクセだぞ」

「彼女は菜月っていう一人の少女だ！！」

「私も……同じ意見です」と沙耶那はゆっくりと体を起こした。

「彼女は運命の巡り合わせが悪かつたんです……それを私達が変わえないでどうするんですか？」

「今まで……華景市に来るまで俺はヘクセを絶対悪だと見てた。確かに奴らの中には最低な野郎がいるが、菜月みたいなヘクセだっているんだ。彼女は親に虐待されて社会から見捨てられて……彼女を救うのはシュトレイゴイカバルじゃないはずだ！！」

「お前……」

「甘いつてのは分かってる。だけど……」

「三村さん……」

幸成と沙耶那が三村を見る。

三村はゆっくりと目を閉じると「交戦規約に違反している!!」と怒鳴るがすぐに片目を開けて呟いた。

「だが非正規部隊だからな。交戦規約なんて糞食らえ!!」

「おっちゃん!」

「ありがとうございます!」

「ただし、条件がある!!」

その声により二人は生唾を飲み込む。

「一週間の間、炊事、洗濯、掃除をお前達が責任を持ってやること!! 相違無いな?」

「了解!!」

二人が答えるのを聞いた三村は続ける。

「人質救出は自分達の十八番だ。幸成、今回は自分も参加する」

「了解。足は引つ張らないでくれよ、ご老体?」

「おい、まだそんな歳じゃねえよ!!」

「それでは行きましょう!」

沙耶那の声により二人は頷くと三人は植物園を後にした。

衛星から送られてきた映像で菜月ともう一体のヘクセを補足していたロイは不意に繋がったヘッドセットに声を吹き込む。

「こちらスカイアイ。ヘクセはポイントM2ノーベンバー、山の中だ!!!」

(了解!!!)

三村の野太い声が聞こえてくる。

「おっちゃん！幸成に代わってくれないか？」

(ん？ああ……)

数秒して(どうした、ロイ)と聞こえてきた。

それに合わせてロイが怒鳴る。

「おい、馬鹿野郎！！絶対菜月を助けるよ！？憎かるうがなんだろ
うが女の子は絶対に助ける!!!」

(つつ〜……耳いてえだろ、馬鹿野郎！！菜月は助ける、だろ?)

「ああ」

「……つてえ……」

幸成は耳を押さえると大きめのアタッシュケースを掴み、膝に抱える。

その中には大量の9mmシャルデンブファー亜音速弾が入っていた。
幸成は素早く手際の良い動きで弾薬を弾倉に挿入していく。

「おっちゃん」

「ん？」

「我が儘を聞いてくれてありがとう」

「ありがとうございます」

幸成の声に沙耶那も頭を下げるが、三村はハンドルを切りながら笑みを浮かべた。

「全く、困った子供達だよ！」

三村はそう言っただけ笑う。

彼自身、満更でもない様子だ。

「幸成、M4の装備を整えてくれ」

「注文は？」

「XM26 LSSとレッドドットサイトだ」

「分かった」

幸成はそう言うと、別のアタッシュケースを開いた……

埃の匂いと、むっとする生臭い異臭が菜月の鼻を付いた。

手足はX字の十字架に拘束され、口には猿轡がされている。

ここに運び込んだ男に変わり、ミラルダが菜月を見ていた。

その目は奴隷を見るような目で、哀れみと悪意に満ちている。

ミラルダは白魚のような細くて柔らかい指で菜月の頬を撫でた。

「やっぱり失敗したわね？ 貴女じゃ荷が重過ぎたのね」

「んー！んー！んー！」

菜月は猿轡が付けられた口で必死に訴え、首を振るがミラルダには通じない。

それどころか彼女はそんな様子を楽しむかの如く愉悦の表情で彼女を見る。

「ああ、可愛いわ。ぞくぞくしちゃうー！」

ミラルダは両手で両腕を摩ると菜月の頬から悔しさか、はたまた悲しみからなのか垂れてきた涙を舐め取る。

「ふふ、貴女……やっぱり可愛いわ。私のヘクセの中では一番。カズイクル様の所有物ではミスティアに並ぶ程、可愛い……その可愛い顔が苦悶と絶望に変わる姿を見たいわ」

「んっ！んんー！！」

「何言ってるか分からないわよ？貴女的能力も使えないから逃げる事も出来ないわね？ふふふ……ああ！何も出来ない女の子は何時見ても可愛いわ」

菜月が拘束から逃れようと必死に暴れ、両手足を拘束した鎖が空しく音を鳴らす様子を満足げに眺めながらミラルダは指を鳴らした。同時に正面にある木の扉から数人の男達が入ってくる。

男達の嫌らしく下卑た目が菜月を舐めた。

「貴女は今から民間軍事企業の男達に犯されるの？殺してと懇願しても殺さず、精神が壊れて自分から犯してと懇願して狂い死ぬまでね？」

「んん！！っん！！」

菜月は涙を目から溢れさせ、嫌々と首を振るがその様子を見た男達の欲望とミラルダの愉悦を沸き立てるだけだった。

「ずっと見ていたいけど、私には仕事があるから好きにしてね」

「OK」

一人の男が口元に笑みを浮かべて答えたのを見たミラルダは笑み見せながら退室していった。

「このガキが吸血鬼だとよ？」

「はっ！！ガキだから良いんじゃないかねえのか？」

「ロリコンが……」

「俺は女だったらそれでいいぜ」

男達は菜月を見ながら口々に呟くが菜月には聞こえていなかった。ただ、自分が殺そうとしていた少年の助けを待っていたが、有り得ない事だとも思っていたのだ。

彼女は彼らに酷い事をしたが、非情には成り切れなかった。

沙耶那は殺す事は出来たし、幸成だっただけだ。

殺そうとしても殺せなかった。

シュトレイゴイカバールのヘクセとして命令を実行出来なかった自分は死ねしか無い。

菜月はうなだれるとコンクリートの床に涙を流す。

同時に男達が菜月を取り囲み、衣服を剥ぎ取るうと手を伸ばした次の瞬間、凄まじい轟音と振動が小屋を揺るがした……

10 - 8 : 突入

「ブリーチクリア!!」

幸成は古い小屋の入口に爆薬を張り付け、素早く扉の横に隠れる。同時に凄まじい爆発で扉が木っ端微塵に吹き飛び、幸成は二丁拳銃を持って中に突入した。

正面には先程の爆発で宙に浮いている者や何が起きたか分からず狼狽している者、反射的に銃を向けるが安全装置を解除し忘れて慌てて解除する者達の姿がある。

幸成は素早く二丁拳銃を向けると9mmシャルデンプファー亜音速弾が音も無く吐き出され、瞬時に彼等の命を奪っていく。

「こちら、ロメオ！正面確保!!」

(「こちら、ロメオ！正面確保!!」)

「了解!!」

敵が幸成に気を取られ、裏口から注意が逸れたその隙を狙った三村は爆薬をドアに仕掛け、中に突入する。

案の定、敵である神宮寺財閥の民間軍事企業の兵士は後ろを向き、正面口に向かう途中であった。

三村は素早くM4A1を構えるとセミオートで彼らの後頭部を打ち抜いて行く。

脳と骨を砕いたライフル弾は頭から抜けると同時にそれらも頭から吐き出す。

刹那、三村が突入したドアの横から民間軍事企業の兵士がナイフを振りかざしながら迫るが、三村は冷静にXM26 LSSを構える

と男の腹に叩き込んだ。

ハーグ陸戦条約で禁止されている兵器が男の腹に風穴を開ける。

00弾が腹部を粉碎し、三村はその死体を蹴り飛ばすと一言「元特殊作戦群を嘗めるな!!」と怒鳴った……

幸成が入口を開けて階段を上ろうとしたその瞬間、上からG36Cによる射撃が行われた。

男は鉄の机を盾にし、ブラインドファイアで応戦する。

手だけ遮蔽物から出して射撃を行うブラインドファイアは狙うというよりは牽制の意味合いが強い。

こんな所で時間を食っていたら菜月が何をされるか分からない。

そこで幸成は先程打ち倒した死体の一つの首を掴み、死体を羽交い締めにする形で階段に立った。

そして一気に駆け上がる。

5.56mm NATO弾はボディアーマーを付けた死体に阻まれ、階段を上り切った幸成は死体を机の方に投げ捨てると即座にナイフを構え、男の脳髓に突き立てた。

首元からは赤い鮮血が噴き出し、男は目から光を無くして行く。

同時に階段の近くにあった扉からSIG P226を構えた男が飛び出し、幸成に銃口を向けるが、幸成は鉄の机を蹴る事で床を滑らせた。

鉄の机が男の両足に当たり、男は前のめりになりながら空中に投げ出され、俯せのまま床に倒れ込む。

刹那、三村が階段を駆け上がり、その男を射殺した。

「ワンキル、頂くぜ?」

「チッ!横取りしやがって!……奥だな?」

「そつだろつな。ブリーチは危険だな」

「構わないさ。一気に片付ける!!」

幸成はスコトスとフォースの弾倉を取り替えるとニツと笑って見せた。

「ヒンジを撃ち抜いてお前が突入で良いか？」

「ああ」と幸成は答えて扉に取り付く。

それに続いて三村が扉に付く。

「スリーカウントだ!!」

「OK!!」

「3……2……1!!」

三村は言うと同時にヒンジをショットガンで撃ち抜き、幸成はドアを蹴り倒した。

目の前には拘束された菜月と数名の男達。

幸成は一瞬で敵を打ち倒し、ナイフを手に迫ってくる男に銃口を向けたが、次の瞬間、排莢口から鈍い音が聞こえてきた。

「弾詰まり（ジャム）やがった!!」

男はすぐ目の前。

白兵戦ではハンドガンよりもナイフが速い。だが……

幸成は素早くナイフを持っている男の手を蹴り上げるとよろめいた男の後ろに回り込み、メッサードルヒを男の胸に突き立て、肋骨ごと首まで切り上げた。

生々しいその死体を床に投げ捨てた幸成は涙を流し、唸っている菜月の口から猿轡を取り、拘束具を外す。

同時に菜月は幸成に抱き着いた。

ただ彼女は「ごめんなさい」と泣いて謝る。

彼女は、彼女が傷付けた少年に抱き着き、ただ泣いた。

幸成は彼女を抱きしめると菜月の頭を優しく撫でる。

「お前はヘクセじゃない。菜月だ」

「ごめんなさい……ユキ君……ごめんなさい!!」

菜月はただただ目を腫らし、大声で泣くのだった……

11-1: 回想(前書き)

第11話

時計の針が21時を回り、目を赤く腫らした菜月を一瞥した幸成はちやぶ台に暖かいミルクを置き、床に座る。

「飲みな」

「……………」

菜月は小さな声で呟くとマグカップに入ったミルクを口に運ぶ。

「菜月ちゃんがシュトレイゴイカバールの一員とは思ってもみなかつたよ」

三村はコーヒーを啜りながら壁に寄り掛かる。

彼女の抵抗も十分に考えられるという事でこの場にいる全員が武装をしていた。

とは言っても拳銃程度……ヘクセ相手には十分な威力ではない……であり、彼女にある程度の信用をしている証拠だ。

「ある程度の尋問は容赦して下さい」

「……………」

菜月が頷いたのを確認した幸成はルーズリーフとシャープペンを掴み、菜月を真つ直ぐ見た。

「まずはシュトレイゴイカバールの幹部の名前を教えてください」

「……………」ナツの上司のサリー・ミラルダ。私を捕まえたあの男はゲイリー・セガール。あと知っているのはミステリア・ミュイ・シーライト

同時に最後の名前を聞いたロイは「ミステリア!？」と聞き返す。

その表情はかなり鬼気迫っている。

「ミステリア・ミュイ・シーライトだなんだな？」

「うん……………」

「俺が、ヘクセに関わる事になった、俺の幼馴染みで……………許婚だ」「嘘!？」と幸成と優が食いつく。

というのも動揺を隠せないのは菜月も同じのようだ。

「嘘じゃねえよ……」

「その話も後だ」と三村は呟き、「幸成、続けてくれ」と言う。その声に幸成は頷くと続ける。

「シュトレイゴイカバールの目的について教えて下さい」

「ナツが知ってるのは人類を滅ぼそうとしている事だけだよ」

「人類を滅ぼそうとしているってどういう事だよ？」

その時、彩花がニヤリと笑って口を開いた。

「これでえ、全員がHAWKに入った理由が繋がるんじゃないですかあ？」

「どういう……」と幸成が呟いたのを彩花が遮った。

「ロイはミステリアと繋がりがいい、優はゲイリーと繋がりがあろう。違いますかあ？」

その声に優は言葉を失ったが、彩花は言葉を続けた。

「そしてウチも繋がりましたあ。シュトレイゴイカバールの目的に、元シュトレイゴイカバールの一員だったウチが関わった研究があ」

「元シュトレイゴイカバールだど！？」

幸成が思わず怒鳴りながら言うと、彩花は微笑みを浮かべた。

「これには三村も関わっているからあ、黙っているつもりなんですがあ、良いですよねえ？」

「構わない。幸成、それに皆。これは全員に言うべき事だ。自分がまだ特殊作戦群にいた頃の話だ」

三村はそこまで言うところをコーヒーを一気に飲み干す。

「自分が特殊作戦群だった頃に、ある任務が行われた。それはシュトレイゴイカバールのカズイクル・ベイ・ツエペシユの暗殺とシュトレイゴイカバールから亡命しようとしている研究員の救助だった」

「そう。その研究員はある研究をしていましたあ。人間をへくせにする、という研究でしたあ」

「人間をへくせにする！？」

「はい。ゾンビに噛まれればその被害者もゾンビになりますよねえ？伝承の吸血鬼も血を全て吸われたら被害者は吸血鬼になりますよ

ねえ？そこでシュトレイゴイカバルはあ、噛まれた被害者が吸血鬼になるようにウィルスの開発を行いますう。しかし、そのウィルスが完成した途端、シュトレイゴイカバルはあその研究員を殺そうと企みましたあ。そこでその研究員はあ特殊作戦群に助けを求め、事にしたのですう。それはあ、そう、このHAWKが結成される前になりますねえ」

「ああ……頼まれたって思い出したくないが、条件が揃ったんだ。言うしかないだろう」と三村。

三村はその場にいた全員を見渡すとゆっくりと口を開いた。いつもの様子からは考えられない程、重い口が開かれた……

数年前。

絶海の孤島に向かう黒いウェットスーツの男達。

腹には閉回路式潜水具を装着している。

排気を放出せず、二酸化炭素を吸着剤で減らし、さらに酸素ボンベの酸素を補充してリサイクルする潜水具だ。

これは排気を行わない為、海面からは気付かれない。

しかし、操作が難しい為、事故を起こしやすい。が、彼等は相当な訓練を受けた事でそれが起こる事は禁忌^{タブー}、あるいは死語とした。

(こちらスティック。数m先の岩場に心音感知。ソード、片付ける)
「了解……」

籠った声が無線に響き、ソード――直江三村はナイフを抜いた。

慎重に水中から近付いた三村は素早く海面から顔を上げると目の前にいた男の足を掴み、水の中に引きずり込んだ。

男はその表情を驚きと恐怖で歪ませて抵抗するが、ヘクセと言えども水中での抵抗は皆無であった。

三村はナイフを男の眉間に突き立て、さらにSIG P226を首元に突き付ける。

どす黒い血が濁った海に広がり、さらに三村は両肩にそれぞれ3発の9mmパラベラム弾を撃ち込み、男を離れた。

神経を切断されて両腕が動かなくなつた男は足をばたつかせて浮かび上がるうとするが海の底に沈んでいく。

出血多量で死ぬのが早いか、溺れて死ぬのが早いか、どちらにせよ生命力が強いヘクセに生まれた事を後悔しながら死んでいくのは間違いないだろう。

(良くやったソード。総員浮上)

コードネーム「スティック」の指示とともに三人の特殊作戦群の隊員は浮上する。

タロットの小アルカナにおける「棒」、「剣」、「杯」、「硬貨」を元にコードネームを与えられた四人はある命令を帯びていた。テロ組織「シュトレイゴイカバール」のリーダー「カズイクル・ベイ・ツエペシユ」の暗殺とシュトレイゴイカバールに所属する研究員の保護だ。

その研究員の情報で政府はシュトレイゴイカバールのアジトの一つを突き止める事が出来た。

さらに米軍も今作戦の協力を申し出て、高高度では対戦車誘導弾「AGM-114 ヘルファイア」を搭載した無人航空機「MQ-1 プレデター」が二機待機し、さらに対地攻撃機「AC-130U スプリーキー？」まで待機している。

研究員を確保の後、脱出に際して攻撃する手筈だ。

三村は岩影の砂浜に閉回路式潜水具を脱ぎ捨てるとAVON社のガスマスクを装着した。

独特の呼吸音が聞こえ、三村はサプレッサーを装着したM4A1に「M26 MASS」通称「マスターキー」を取り付け、上部にはホロサイトと倍率を変更するブラスターを装着する。

他にも「MP-5SD6」や「M4A1」を取り出した。

遠くの、目測で約300メートルの位置にシュトレイゴイカバールのアジトが見える。

邸宅と言える程、大きな屋敷をコードネーム「コイン」が「SR-25」のスコープを覗き込む。

「バルコニーにタンゴが3、正面にタンゴが4」

「全てヘクセだろうな」とコードネーム「カップ」が呟く。

「正面からの突撃は無謀か……どうする？」

三村はステイックに問い掛けるとステイックはGPSを取り出した。「ここから海岸沿いに歩けば下水道がある。そこから中に侵入するという訳か？」

「ああ」

「チッ！！ヘクセの香しいフレーバーを嗅げつてのか……」とコイ

ンは呟く。

「仕方ないだろう、コイン。奴らに悟られたら研究員が殺されるかもしれないだろう？かと言って、ヘルファイアで邸宅を吹き飛ばす訳にもいかないからな」

ステイックはMP・5SD6の安全装置を外しながら先行し、その後ろに三村、カップ、コインと続く。

砂浜は純白で美しくその砂浜に彼等の足跡が付く。

しばらく歩くとむせ返るような匂いが漂う汚水が流れた大きな下水道があった。

「ここだ」

ステイックは呟くとGPSを仕舞うと三村に言う。

「ソード、先行しろ」

「了解」

三村は銃身の横に取り付けられたライトを付け、下水道の中に入った……

暗い下水道の中を進む四人の足元をドブネズミが通り過ぎて行く。先行する三村のライトが下水道と汚水を照らす。

「止まれ」とステイックが指示を出すと四人が歩みを止める。

「ここから侵入する。紐状爆薬、用意」

そのステイックの指示とともにカップが紐状爆薬を天井に仕掛ける。カップが爆薬をセットし終え、信管をセットした。

「やれ！」

ステイックの指示と同時に爆薬が起爆し、天井に四角い穴が開く。そこからステイックが侵入し、三村、カップ、コインが登る。

そこは広い大聖堂のような場所でステンドグラスからは日が差し込んでいる。

四人が登り切った瞬間、一人のヘクセが物音に気付いて姿を見せる。突如の出来事で狼狽したヘクセは四人の放った弾丸で蜂の巣へと変えられ、悲鳴をあげる間もなく、細胞破壊「ネクローシス」を引き起こし、消滅した。

それぞれが新しい弾倉に取り替えると、ステイックは五指を伸ばし、正面に数回振り「進め」のハンドシグナルを出す。

全員が木彫りの装飾が成された扉に進むとステイックはコインを向き、V字に作った人差し指を目に当て、「偵察」のハンドシグナルを出すとコインも親指を立てる「了解」のハンドシグナルを出して先行する。

素早く壁まで駆け寄り、そこに張り付いたコインは足音を立てないように曲がり角まで曲がると、「集合」のハンドシグナルを出す。すぐに止まれと指示を出す。

同時に三人程の話声が聞こえ、ステイックが自分と三村、カップを指差し、親指を立てると首を切るように動かした。

それに三村とカップはハンドシグナルで答えるとナイフを取り出し、

慎重に歩みを進める。

三人はヘクセ三人の背後に回り込むと脳髓にナイフを突き立て、一瞬で息の根を止め、さらに頭にSIG P226で9mmパラベラム弾を数発撃ち込む。

スティックがハンドシグナルを出そうとしたその時だった。

「敵だ！」

背後の階段から男の怒鳴り声が轟き、スティックは素早くナイフを男の喉に投げる事で声を消すが、警報がそれは無意味な事だと告げた。

「気付かれたか……総員、派手に行くぞ！！」

「了解」

三村はM4A1のサプレッサーを外し、カップは200発入り弾倉付きのMINIMI軽機関銃のデコッキングレバーを引き、初弾を装填する。

「ソード、研究員を確保しろ。発信機が着いているから分かるはずだ」とスティックはGPSを三村に投げた。

「俺達はシュトレイゴイカバールのリーダーをぶち殺す」

「了解！！」

刹那、上からヘクセが二体飛び降りてきた。

彼らに振り返ったヘクセはヘクセ独特の素早い動きで特殊作戦群の四人に迫るが、彼らも特殊作戦群だ。

飛び掛かってきた一体のヘクセはカップの使うMINIMI軽機関銃で空中で弄ばれる。

発射速度最大約750〜1000発/分で射撃するMINIMI軽機関銃から放たれる5.56mm弾は空中でヘクセを揉み、穴だらけにしていく。

さらに三村に飛び掛かってきたヘクセも空中でマスターキーによって放たれた12ゲージ弾から吐き出される00バクシヨットがヘクセの腹に風穴を開けて床に叩き付ける。

ヘクセは床に内臓をばらまき、悶え苦しむ。

そこでポンプ・アクションで排莢した三村が歩み寄り、胸元を足で押さえ付けるとマスターキーの銃口をヘクセに突き付ける。

同時にミンチが床にばらまかれ、先程までであった顔が崩れた。

視神経が繋がった二つの眼球がカタツムリかナメクジのように上を向き、グロテスクな様子を見せる。

三村は押さえていた足を、ボールを蹴るように動かすと、死体は床を回転しながら滑り、その血を周囲にばらまきながら壁に激突した。それを見た三村はマスターキーに12ゲージ00バツクショットシエルを二発挿入する。

その様子を見たステイックは「総員、テロリストに目に物を見せてやるぞ！」と怒鳴った。

11-4：瞬殺

階段を駆け上がった四人は銃を構えながら周囲を見渡す。

「右クリア」

「左クリア」

コインとカップが同時に怒鳴るとスティックは三村に言う。

「ソード、お宝を頼む!!」

「了解!!」

三村は頷きながら答えると左の廊下を駆け、三人は右の廊下を駆けて行った……

慌てた様子の男が部屋の中に飛び込んで来た。

「カズイクル様!! 自衛隊です!! 恐らく特殊作戦群!!」

「ほう?」

暗闇の中で光る紅い瞳がウィンググラスを傾けると白い歯を見せた。

「成る程……彩花が漏らしたのか……」

「あの女、始末しますか?」

「構わん。放つておけ……」

「しかし……」

「そんな暇は無いからなあ」

「は?がっ……」

不意に男は血を吐き出すと床に崩れ落ち、その後ろから三人の隊員が姿を見せた。

「貴様がカズイクル・ベイ・ツエペシュだな!?!」

スティックはMP-5SD6の銃口を向ける。

暗闇で姿が見えないその男の両の瞳は爛々と紅の光を見せていた。

「だとしたらどうするんだ、人間？」

その声と同時に男の持っていたワイングラスが粉碎し、男の手が赤に染まる。

「貴様の頭がこうなる」

「面白い。やってみろ」

男が立ち上がるとその紅い瞳が暗闇で残光となり、糸を引く。

不意にライトアップされた部屋で浮かび上がった男性は銀色の長い髪を靡かせると座っていた椅子に立て掛けられていた「パルチザン」を掴む。

「私に盾突いた事を後悔しろ、人間」

「嘗めるな」

コインはM4A1を構えるとカップもMINIMI軽機関銃を構えた。

「つてえ!!」

ステイックが怒鳴ると同時に一斉にマズルフラッシュが周囲を照らした。

入り乱れる5.56mm弾と9mmパラベラム弾が男性に向かう。

しかし、男性は一気に跳び上がる事で避け、三人の背後に回った。

三人は素早く後ろを振り返るが、そこに男の姿は無い。

「何処を見ている？」

カップのすぐ横で吹き声が聞こえ、ステイックとコインがカップを見るとカップの姿は無く、代わりに血溜まりだけがそこにあった。

「カップ!？」とステイックが怒鳴った時、最初に男がいた位置から声が聞こえてきた。

「私はここだ」

二人がその方向を見ると胸にパルチザンが刺さり、壁に礫けにされたカップの姿と、そのパルチザンの上に立ち、カップのMINIMI軽機関銃を持つ男の姿があった。

10秒にも満たない出来事だ。

彼らに何があつたかは分からない内に、仲間が一人殺されている。

「次だ」

男は呟くと7キロもあるMINIMI軽機関銃を片手で二人に銃口を向けた。

刹那、5.56mm弾が二人に襲い掛かる。

ステイツクは素早く逃げるがコインがその5.56mm弾に揉まれてミンチにされていく。

背中からは弾が抜けるとともに紅い花が咲き、コインは床に倒れる。その姿は元が人間だとは想像もつかない程に醜い姿となった。

ステイツクが物陰に隠れると同時にMINIMI軽機関銃の弾薬が無くなり、男はそれを床に投げ捨てる。

「さて、あとは一人……」

男は後ろ向きのままパルチザンを抜くと、ほくそ笑む。

一分も経たない間に殺害された二人の隊員の死体を物影から一瞥すると深く息を吸った。

化け物に勝てる訳が無い。

「畜生……畜生、畜生チクショウ!!」

ステイツクはMP-5SD6をセミオートからフルオートに切り換えると、壁から飛び出し、乱射した。

MP-5はその精度の良さからフルオートで使う物では無い。

だが、如何なる時でも冷静であるように訓練された隊員とは言え、この狂気には耐えられなかった。

ステイツクはサブマシンガンを乱射しながらミンチになったコインに駆け寄り、傍らに落ちていたM4A1を掴み上げると再び乱射する。

ばらまかれる弾丸は男に当たる事が無く、仮に向かつてくる弾丸があつてもパルチザンで叩き切られた。

「くそつたれええっ!!」

ステイツクが怒鳴り、弾が切れた銃を投げ捨てると自分とカップのSIG P226を構えて連射したがすぐにそれは止まった。

男がスティックの額に自分の人差し指を向けると、スティックの額には綺麗な空洞が開き、スティックは床に崩れ落ちるのだった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280x/>

赤眼の狼

2012年1月2日07時49分発行